

和歌山市内遺跡発掘調査概報

— 平成21年度 —

2011

和歌山市教育委員会

序 文

本書は、平成21年度に国庫補助金・県費補助金を得て、和歌山市教育委員会と財団法人和歌山市都市整備公社が実施した発掘調査の概要をまとめたものです。

六十谷遺跡では、はじめて本格的な発掘調査が実施され、弥生時代、古墳時代、鎌倉時代の遺構が確認されました。田屋遺跡では、古墳時代の竪穴住居をはじめ、平安時代の柱穴など比較的遺構が密集した状況で確認されました。今まで実態が不明であった関戸遺跡では、平安時代から鎌倉時代の柱穴・溝などが確認され、遺跡の様相が明らかになりました。雑賀崎台場跡では、一昨年引き続き、江戸時代末期の台場跡の発掘調査を実施し、土塁・石垣で囲まれた防御施設について調査を行い、石垣の構造や防御施設内の敷地の様相が明らかになりました。

ここに報告する調査概要は、地域の歴史を語る上で重要な成果が含まれています。本書が、地域の歴史を広く理解するための一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査にあたりご指導・ご協力いただきました地権者の皆様及び関係者各位に深く感謝いたします。

平成23年 3月18日

和歌山市教育委員会

教育長 大江 嘉 幸

例 言

- 1 本書は、平成21年度国庫補助事業として和歌山市教育委員会が計画・実施するとともに財団法人和歌山市都市整備公社に事業の委託を行った埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
- 2 調査対象経費の総額は5,200,000円である。
- 3 本年度の機械掘削及び埋め戻し等委託事業は以下のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
朝日石槍出土地確認調査	和歌山市朝日11-1	20091005	25.75㎡	大木 要
鳴神V遺跡第10次確認調査	和歌山市秋月304-1	20091221~1224	45.61㎡	大木 要

- 4 本年度の財団法人和歌山市都市整備公社委託事業は以下のとおりである。

事業名	調査地	調査期間	調査面積	調査担当
六十谷遺跡発掘調査	和歌山市六十谷357-3	20090416~0511	43㎡	藤藪勝則
出土遺物整理（第1次）		20090706~0730		井馬好英
川辺遺跡第14次確認調査	和歌山市中筋日延112-2	20091019~1120	50㎡	井馬好英
田屋遺跡第3次確認調査	和歌山市直川377	20091119~1222	100㎡	藤藪勝則
雑賀崎台場跡第2次確認調査	和歌山市雑賀崎地内	20100113~0205	39.3㎡	藤藪勝則
出土遺物整理（第2次）		20100217~0223		藤藪勝則

- 5 発掘調査に係る事務局は下記のとおりである。

埋蔵文化財発掘調査（平成21年度）

【和歌山市教育委員会 文化振興課】

文化財班長 額田雅裕
 学芸員 益田雅司
 学芸員 大木 要

【財団法人和歌山市都市整備公社 埋蔵文化財班】

埋蔵文化財班長 北野隆亮
 学芸員 井馬好英
 学芸員 奥村 薫
 学芸員 藤藪勝則

報告書作成（平成22年度）

【和歌山市教育委員会 文化振興課】

文化財班長 額田雅裕
 学芸員 益田雅司
 学芸員 大木 要

【財団法人和歌山市都市整備公社 埋蔵文化財班】

埋蔵文化財班長 北野隆亮
 学芸員 井馬好英
 学芸員 奥村 薫
 学芸員 藤藪勝則

- 6 本書のうち1、2-(1)、(2)、(3)の執筆は大木要、2-(4)については文末に執筆担当者名を記載している。本書の編集は大木が行った。
- 7 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
- 8 遺物整理事業については、六十谷遺跡発掘調査、雑賀崎台場跡第2次確認調査、田屋遺跡第3次確認調査、川辺遺跡第14次確認調査、神前遺跡立会調査等を対象として実施した。
- 9 本書作成にあたり、関係諸機関の方々に様々なご協力を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1	位置と環境	1
2	埋蔵文化財発掘調査事業	
(1)	平成21年度の概要	5
(2)	平成21年度和歌山市調査一覧	5
(3)	市教育委員会実施確認・立会調査等概要	
①	神前遺跡	9
②	木ノ本Ⅰ遺跡	10
③	府中Ⅳ遺跡	11
④	川辺遺跡	12
⑤	西田井遺跡	13
⑥	鳴神Ⅴ遺跡	14
⑦	岩橋遺跡	16
⑧	朝日石槍出土地	19
⑨	木ノ本Ⅰ遺跡	21
⑩	井辺遺跡	22
⑪	木ノ本Ⅱ遺跡	23
⑫	関戸遺跡	25
⑬	神前Ⅱ遺跡	28
⑭	磯脇遺跡	29
⑮	鳴神Ⅴ遺跡	30
⑯	木ノ本Ⅱ遺跡	34
⑰	西田井遺跡	35
⑱	岩橋千塚古墳群	38
⑲	井ノ口遺跡	39
⑳	西田井遺跡	40
㉑	直川廃寺跡	41
㉒	鳴神Ⅱ遺跡	42
㉓	吉田遺跡	44
㉔	神前遺跡	45
㉕	木ノ本Ⅰ遺跡	46
㉖	立会・不時発見等出土遺物	47
(4)	財団法人和歌山市都市整備公社実施の発掘調査概要	
①	六十谷遺跡発掘調査	48
②	川辺遺跡第14次確認調査	60
③	田屋遺跡第3次確認調査	68
④	雑賀崎台場跡第2次確認調査	78

図版目次

- 図版 1 六十谷遺跡発掘調査 調査前の状況、第 1 区全景、第 2 区全景、第 1 区 SD-1・2、第 2 区 SD-3・SX-1、第 2 区 SD-3 土層堆積状況、調査区西壁土層堆積状況、調査区北壁土層堆積状況
- 図版 2 六十谷遺跡発掘調査 出土遺物
- 図版 3 六十谷遺跡発掘調査 出土遺物
- 図版 4 六十谷遺跡発掘調査 出土遺物
- 図版 5 川辺遺跡第 14 次確認調査 調査前の状況、第 1 区全景
- 図版 6 川辺遺跡第 14 次確認調査 第 2 区全景、第 3 区全景
- 図版 7 川辺遺跡第 14 次確認調査 第 4 区全景、第 5 区全景
- 図版 8 川辺遺跡第 14 次確認調査 第 1 区西壁土層堆積状況、第 1 区北壁中央部土層堆積状況、第 2 区北壁中央部土層堆積状況、第 3 区北壁東端部土層堆積状況、第 3 区北壁中央部土層堆積状況、第 4 区東壁北端部土層堆積状況、第 4 区東壁南端部土層堆積状況、第 5 区北壁中央部土層堆積状況
- 図版 9 川辺遺跡第 14 次確認調査 出土遺物
- 図版 10 田屋遺跡第 3 次確認調査 調査前の状況、第 1 区全景、第 2 区全景、第 4 区全景、第 6 区全景、第 7 区全景、第 8 区全景
- 図版 11 田屋遺跡第 3 次確認調査 第 9 区全景、第 10 区全景、第 1 区東壁土層堆積状況、第 3 区東壁土層堆積状況、第 5 区東壁土層堆積状況、第 6 区西壁土層堆積状況、第 8 区西壁土層堆積状況、第 10 区西壁土層堆積状況
- 図版 12 田屋遺跡第 3 次確認調査 出土遺物
- 図版 13 雑賀崎台場跡第 2 次確認調査 調査地遠景、調査前の状況
- 図版 14 雑賀崎台場跡第 2 次確認調査 第 1 区全景、第 2 区全景、第 3 区全景、第 4 区全景
- 図版 15 雑賀崎台場跡第 2 次確認調査 第 5 区全景、SV-1 西面石垣・SV-2 土塁、SV-1 裏込め検出状況、SV-1 南面石垣南西隅角部、SV-1 南西隅角部、SV-1 西面石垣南西隅角部
- 図版 16 雑賀崎台場跡第 2 次確認調査 SV-2 東面石垣・土塁、SV-2 東面石垣、SV-2 南東隅角部、SV-2 南面石垣・SV-1 南西隅角部、SV-2 北面石垣・土塁
- 図版 17 雑賀崎台場跡第 2 次確認調査 第 3 区 P-1、第 3 区 P-2、第 5 区 SD-1、第 5 区西壁 SD-1 土層堆積状況、第 5 区土塁、第 5 区西壁土塁付近土層堆積状況、第 1 区東端部岩盤成形状況、第 3 区東端部岩盤成形状況
- 図版 18 雑賀崎台場跡第 2 次確認調査 第 1 区サブトレンチ南壁土層堆積状況、第 1 区南壁土層堆積状況、第 2 区西壁土層堆積状況、第 3 区南壁土層堆積状況、第 4 区北壁土層堆積状況
- 図版 19 雑賀崎台場跡第 2 次確認調査 出土遺物

1 位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市、東は和歌山県岩出市及び紀の川市、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県と三重県との県境にある大台ヶ原を源流とする紀ノ川は、中央構造線の南側をほぼ真直ぐ西流し、紀伊水道に注いでいる。和歌山市の地形は、紀ノ川の北岸と南岸でその様相が異なる。北岸では、和泉山脈と紀ノ川の間約3kmの幅で段丘及び扇状地が形成される。南岸では紀ノ川の堆積作用によって形成された沖積平野が広がり、平野の南端を竜門山系から派生した丘陵が断続的に取り囲んでいる。

旧石器時代の遺跡としてはナイフ形石器の出土がある。紀ノ川北岸の西庄Ⅱ遺跡や園部遺跡、鳴滝遺跡など和泉山脈の山間部や山麓部で点々と出土するほか、市域南東部の山東地区の大池遺跡では50点に近いナイフ形石器に加え、各種の石器が多数採集されている。

縄文時代の遺跡には、鳴神貝塚、禰宜貝塚、吉礼貝塚、川辺遺跡、岡崎縄文遺跡などがある。鳴神貝塚は明治28年(1895)にはじめて報告され、昭和6年(1931)に近畿地方で最初に発見された縄文時代の貝塚として国史跡に指定された。その後の発掘調査により、猿の撓骨製の耳飾をつけ、上顎の犬歯2本を抜歯した女性人骨(推定18歳)が発見された。近年実施した発掘調査でも晩期の縄文人骨が多数埋葬された状況が確認されている。晩期を中心とする川辺遺跡では、竪穴建物とともに多数の土器棺が発掘され、東北地方に起源をもつ亀ヶ岡系土器や遮光器土偶の腕の先端部分が出土している。また、土器棺に副葬された小形定角式磨製石斧は、北陸地方から搬入された可能性が指摘されている。禰宜貝塚・吉礼貝塚では、遺構は不明確だが前期以降の土器・石器が多数出土している。

弥生時代の遺跡は、紀ノ川北岸では六十谷遺跡、府中Ⅳ遺跡、西田井遺跡、宇田森遺跡、川辺遺跡、橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡、山口遺跡、吉田遺跡、南岸では太田・黒田遺跡や神前遺跡、井辺遺跡、滝ヶ峰遺跡、奥山田遺跡などがある。太田・黒田遺跡は前期に環濠を伴う集落が形成され、中期には多数の竪穴建物や独立棟持柱建物からなる居住域、土器棺を中心とする墓域、水田域が形成される。また、石舌が内蔵された袈裟襷文銅鐸に加え、多量の土器・石器類が出土するなど、和歌山県を代表する大規模集落として著名である。市内の銅鐸出土地には太田・黒田遺跡のほか、橘谷Ⅰ～Ⅲ遺跡、宇田森遺跡、有本銅鐸出土地、砂山銅鐸(紀ノ川銅鐸)出土地、吉里銅鐸出土地などがあり、外縁付紐式・扁平紐式・突線紐式銅鐸が出土している。

古墳時代の遺跡は、紀ノ川北岸西部において国内唯一の金製勾玉が出土した前方後円墳の車駕之古址古墳、それに先行する帆立貝式と考えられる茶臼山古墳、現状で約40mの大形円墳である釜山古墳、馬冑や馬甲が出土した大谷古墳など渡来系遺物を有する中期の有力古墳や県内では数少ない巨石を用いた横穴式石室をもつ園部円山古墳などの後期古墳も形成される。南岸では和歌山平野南東部の岩橋丘陵に700基を超える岩橋千塚古墳群が形成され、前期末から後期にかけて多数の古墳が築造される。特に後期には玄門部を狭く造る岩橋型横穴式石室を構築し、周辺地域にも影響を与えている。これらは紀ノ川河口の平野部を支配した紀氏集団の奥津城と考えられている。近年調査された大日山35号墳の造り出しからは、翼を広げた鳥形埴輪、両面人物埴輪、胡籙形埴輪など全国的にも類をみない特徴的な形象埴輪が出土している。集落遺跡には西庄遺跡、田屋遺跡、西田井遺跡、鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡、音浦遺跡、大日山Ⅰ遺跡、秋月遺跡などがある。西庄遺跡は竪穴建物とともに多数の石敷製塩炉が検出され、中期から後期の大规模製塩遺跡として著名である。田屋遺跡では

5世紀中頃の初期カマドをもつ堅穴建物や陶質土器が出土し、集落内に渡来系の人々が存在したと考えられる。鳴神Ⅳ・Ⅴ遺跡、音浦遺跡では堅穴建物や掘立柱建物が検出され、岩橋千塚古墳群が存在する岩橋丘陵の西部に位置することから、紀氏集団の居住域の可能性が指摘されている。紀ノ川北岸の和泉山脈南麓の低位段丘上には、高井遺跡、烏井遺跡、府中遺跡、上黒谷遺跡など広い面積をもつ遺物散布地が多数存在する。高井遺跡からは堅穴建物が2棟検出されているものの、その他の遺跡からは須恵器・土師器などが出土するのみで、実態は不明である。

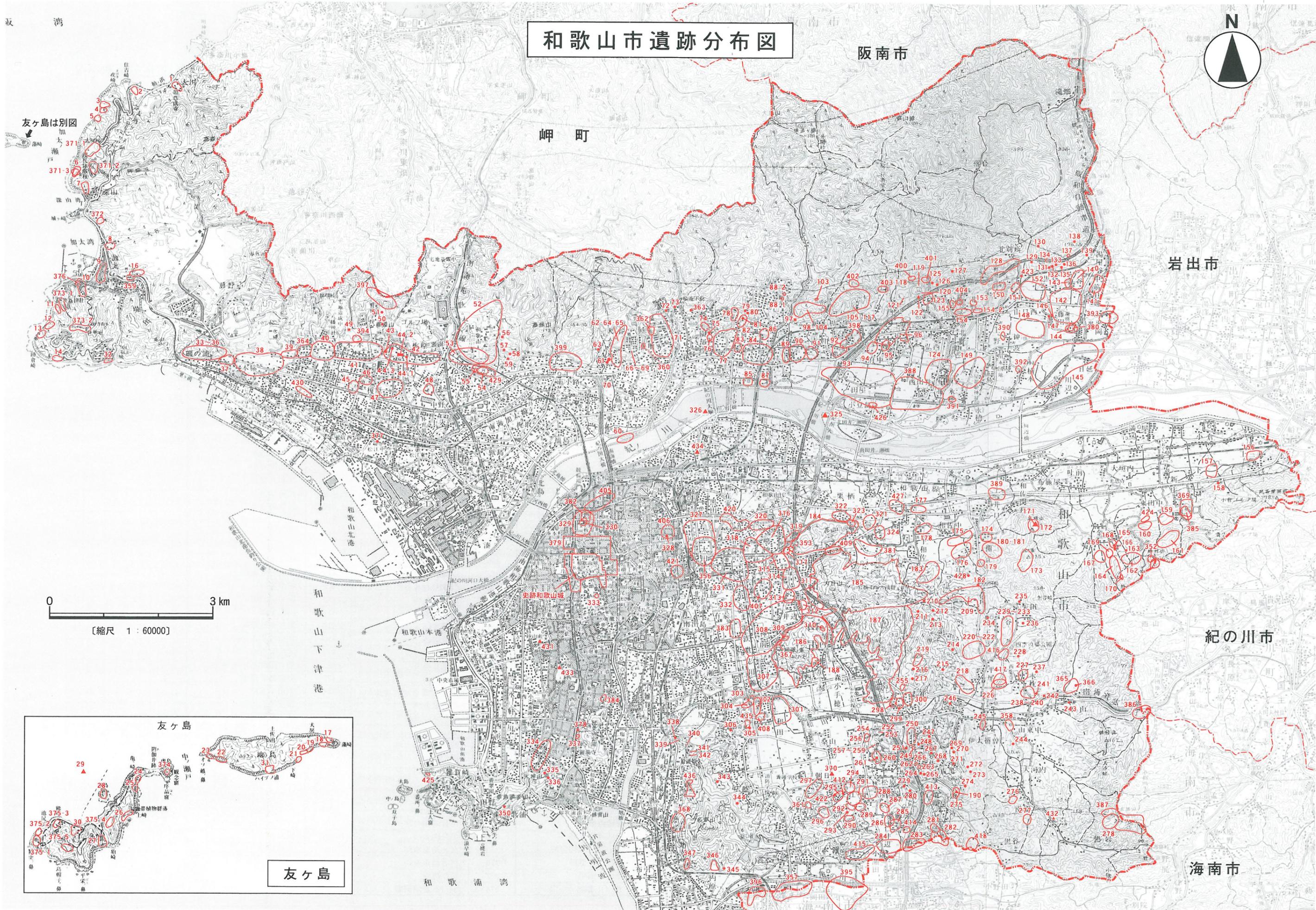
飛鳥から奈良時代の古代寺院跡には山口廃寺跡、上野廃寺跡、薬勝寺廃寺跡がある。その他、古代瓦出土地に秋月遺跡、太田・黒田遺跡、関戸遺跡がある。上野廃寺跡は発掘調査が行われ、薬師寺式の伽藍配置をもつことが確認されている。上野廃寺跡出土の隅木蓋瓦はパルメット文様を施した類例の少ない優品である。山口廃寺跡は、緑色片岩製塔心礎が残されているが、伽藍配置などは不明である。律令期の遺構が確認された遺跡には、高井遺跡、川辺遺跡、山口遺跡、秋月遺跡、岩橋高柳遺跡、奥山田遺跡などがある。太田・黒田遺跡や鳴神遺跡群からは和同開珎・万年通宝などの古代銭貨や陶硯・土馬といった官衙や古代寺院を想定できる遺物が多く出土している。また、紀ノ川北岸の府中遺跡は調査例は少ないが、8～9世紀の多量の須恵器とともに平・軒丸瓦、須恵器硯などが採集されており、文献史学の成果もあわせて紀伊国府の可能性が指摘されている。

中世の遺跡としては、紀ノ川北岸に鎌倉時代の館跡が検出された西庄Ⅱ遺跡、多数の石積み井戸が発見された木ノ本Ⅲ遺跡、平安時代から室町時代の集落が確認された西田井遺跡、南岸では鎌倉時代から室町時代の多数の遺構・遺物が確認された太田・黒田遺跡や秋月遺跡、鎌倉時代の建物遺構が検出された奥山田遺跡、多数の漁網用の土錘類に加え、国産陶器・中国産陶磁器などが出土し、紀ノ川河口付近の外港的性格を併せもつ集落であった可能性も指摘される関戸遺跡などが挙げられる。当地域は中世末に織田信長・豊臣秀吉の侵攻を受ける。天正5年(1577)の信長の紀州攻めに関係する遺跡と考えられているのが城山遺跡・中野遺跡で、城山遺跡は陣城跡、中野遺跡は『信長公記』に記載のある中野城跡と推定されている。天正13年(1585)秀吉は根来を焼き討ちにし、雑賀を攻め、紀州を平定する。秀吉が水攻めした太田城は、太田・黒田遺跡内の南半部に存在した中世の環濠集落と推定され、出水に太田城水攻めに関係する堤の残存部分が存在する。

紀州を平定した秀吉は、岡山に和歌山城の築城を命じ、弟秀長を藩主としたとされる。慶長5年(1600)には関ヶ原の戦いで功のあった浅野幸長が藩主となり、近世の城下町として出発する。元和5年(1619)には徳川家康の十男頼宣が転封、55万5千石の御三家紀州藩が成立し、城・城下町の整備・拡張が行われた。国史跡である和歌山城跡では、修復工事や整備工事など様々な要因で発掘調査が実施され、徳川時代の二の丸、三の丸に相当する部分では建物、排水施設、坪庭にあった漆喰池、石垣構造などが確認されるなど当時の状況が解明されつつある。近年では、堀内で御橋廊下の基礎構造を解明し、文献資料、絵図資料と発掘調査成果の検討により、かつて二の丸と西の丸を繋いでいた御橋廊下の復元工事が実施された。また、鷺ノ森遺跡で城下町の発掘調査が行われ、武家屋敷地、町屋の様相が一部判明している。

幕末には紀淡海峡周辺に海防のための施設(台場)が多数築かれた。近年調査で石垣や土塁、V字状の石積遺構が確認された雑賀崎台場跡もその一つである。昭和20年(1945)7月9日には和歌山大空襲を受け、旧国宝の和歌山城天守閣を失い、市街地をはじめ中心部は焼野原となった。和歌山城跡や市街地中心部を発掘すると、戦災時の焦土層が厚さ数10cmも遺存しているのが確認され、その被害の大きさを物語っている。

和歌山市遺跡分布図



阪南市

岬町

岩出市

紀の川市

海南市

和歌山下津港

和歌浦湾

友ヶ島は別図

友ヶ島

0 3 km
[縮尺 1 : 60000]

遺 跡 名 一 覧

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	報恩講寺遺跡	70	楠見遺跡	154	北野遺跡	245	伊太祈曾神社古墳群	314	鳴神II遺跡	379	和歌山城跡
2	大川西方遺跡	71	鳴滝古墳群	154-2	北野II遺跡	246	チンヨ古墳	315	鳴神III遺跡	380	山口御殿跡
3	藻江遺跡	72	奥出古墳	155	若宮池遺跡	247~249	城ヶ森古墳群	316	鳴神IV遺跡	381	岩橋II遺跡
4	しょうぶ谷遺跡	73	有功経塚	156	上三毛遺跡	250	城ヶ森遺跡	317	鳴神貝塚	382	本願寺跡
5	水谷遺跡	74	園部I遺跡	157	下三毛遺跡	251	相坂古墳	318	鳴神V遺跡	383	神前II遺跡
6	男良の谷遺跡	75	園部古墳	158	小山古墳	252・253	千石山古墳群	319	音浦遺跡	384	高松焼窯跡
7	深山遺跡	76	園部II遺跡	159	寺山古墳群	254	菖蒲谷遺跡	320	鳴神VI遺跡	385	奥山田古墳群
8	大谷川遺跡	77	有功遺跡	160	東国山古墳群	255	吉礼III遺跡	321	岩橋遺跡	386	大池遺跡
9	加太遺跡	78	池田遺跡	161	宮山古墳群	256	千石山遺跡	322	栗栖I遺跡	387	大旗山城跡
10	加太南遺跡	79	有功古墳	162	小倉古墳群	257~259	井戸古墳群	323	栗栖II遺跡	388	西田井遺跡
11	平の谷遺跡	80	大同寺墳墓	163	小倉9号墳	260	馬場古墳	324	高橋神社遺跡	389	井ノ口遺跡
12	田倉崎I遺跡	81	大同寺古墳	164	明楽古墳群	261	馬場遺跡	325	紀の川銅鐸出土地	390	神波遺跡
13	田倉崎II遺跡	82	大同寺遺跡	165	小倉神社1号墳	262~265	東池古墳群	326	有本銅鐸出土地	391	永穂遺跡
14	船出遺跡	83	法然寺遺跡	166	小倉神社2号墳	266	吉里銅鐸出土地	327	太田・黒田遺跡	392	楠本遺跡
16	加太駅北方遺跡	84	六十谷遺跡	167	モント古墳群	267	小山古墳	328	吉田窯跡	393	吉田遺跡
17	藻崎北浜遺跡	85	和田遺跡	168	小倉神社境内遺跡	268	奥須佐窯跡	329	鷺ノ森遺跡	394	城山遺跡
18	藻崎南浜遺跡	86	西辻遺跡	169	金谷遺跡	269	円満寺古墳	330	鷺ノ森窯跡	395	岡村遺跡
19	藻崎西浜遺跡	87	川口遺跡	170	奥池遺跡	270	峯古墳	331	秋月遺跡	396	室山古墳群
20	神前東浜遺跡	88	六十谷古墳群	171	高積山遺跡	271	西光寺窯跡	332	津秦遺跡	397	木ノ本IV遺跡
21	神前西浜遺跡	89	直川遺跡	172	薬徳寺跡	272	吉里1号窯跡	333	岡の里古墳	398	府中IV遺跡
22	屋敷浜遺跡	90	直川廃寺跡(明光寺跡)	173	城ヶ峯城跡	273	吉里2号窯跡	334	関戸遺跡	399	平井遺跡
23	おそ越の鼻遺跡	91	高井遺跡	174	裾宜I遺跡	274	頭陀寺古墳	335	関戸古墳	400	深谷池北遺跡
24	一谷色遺跡	92	鳥井遺跡	175	裾宜II遺跡	275	頭陀寺遺跡	336	天神山古墳	401	名草池北遺跡
25	柏の浜遺跡	93	田屋遺跡	176	裾宜貝塚	276	大將軍窯跡	337	秋葉山貝塚	402	湯谷池西遺跡
26	深蛇池遺跡	94	府中II遺跡	177	河南中学校北方遺跡	277	有ノ木窯跡	338	アンドの鼻古墳	403	平野池南遺跡
27	垂水遺跡	95	府中III遺跡	178	和佐中遺跡	278	宝光寺跡	339~342	三田古墳群	404	北野池北遺跡
28	神島遺跡	96	府中遺跡	179	和佐寺跡	279~280	松原古墳群	343	吉原古墳	405	山吹丁遺跡
29	沖の島北方海底遺跡	97	北山I遺跡	180・181	裾宜古墳群	281	滝ヶ峯古墳群	344	広原古墳	406	友田町遺跡
30	野奈浦遺跡	98	北山1号墳	182	和坂古墳	282	滝ヶ峯遺跡	345	内原古墳	407	津秦II遺跡
31	ハイブの浦遺跡	99	北山2号墳	183	和佐古墳群	283	薬勝寺南山古墳群	346	内原遺跡	408	和田II遺跡
32	浜遺跡	100	北山3号墳	184	花山古墳群	284	仁井辺遺跡	347	名草貝塚	409	岩橋III遺跡
33~35	磯の浦古墳群	101	北山4号墳	185	岩橋千塚古墳群	285	薬勝寺跡	350	高津子山古墳	410	前山B226号墳
37	磯脇遺跡	102	北山5号墳	186	井辺前山古墳群	286	薬勝寺遺跡	352	金谷廃寺跡	411	前山B227号墳
38	西庄遺跡	103	北山II遺跡	187	寺内古墳群	287	松原I遺跡	353	興徳寺跡	412	城ノ前1号墳
39	平の下遺跡	104	北山6号墳	188	森小手穂遺跡	288	松原II遺跡	356	太田城跡	413	境原遺跡
40	木ノ本I遺跡	105~117	直川八幡山古墳群	189	寺内ナイフ形石器出土地	289	薬師谷遺跡	357	山崎山古墳群	414	薬勝寺II遺跡
41	木ノ本II遺跡	118	八王寺山古墳群	190	頭陀寺ナイフ形石器出土地	290	江南遺跡	358	山東中遺跡	415	本渡遺跡
42	木ノ本III遺跡	119	橘谷I遺跡	209	山東古墳群	291	曾垣田遺跡	359	加太II遺跡	416	明王寺遺跡
43	木ノ本経塚	120	橘谷II遺跡	210	山東16号墳	292	曾垣田II遺跡	360	雨が谷遺跡	417	平尾遺跡
44-1	釜山古墳	121	橘谷III遺跡	211	山東17号墳	293	曾垣田古墳	361	冬野遺跡	418	滝ヶ峯II遺跡
44-2	車駕之古址古墳	122	橘谷銅鐸出土地	212	山東18号墳	294	城の前II遺跡	362	鳴滝遺跡	420	太田城水攻め堤跡
44-3	茶臼山古墳	123	弘西遺跡	213	山東19号墳	295	城の前I遺跡	363	園部円山古墳	421	木広町遺跡
45	木本小学校I遺跡	124	北田井遺跡	214	山東20号墳	296	大池遺跡	364	西庄II遺跡	422	朝日蔵骨器出土地
46	木本小学校II遺跡	125~127	別所古墳群	215	山東21号墳	297	赤津古墳群	365	永山遺跡	423	上黒谷II遺跡
47	榎原遺跡	128	上野古墳群	218	若林古墳群	298	吉礼貝塚	366	永山古墳	424	東田中遺跡
48	中野遺跡	129~139	山口古墳群	219	吉礼砂羅谷窯跡	299	西吉礼遺跡	367	井辺III遺跡	425	雑賀崎台場跡
49	城山古墳	140	山口廃寺跡	220~222	平尾古墳群	300	東吉礼遺跡	368	紀三井寺遺跡	426	小豆島西遺跡
50	権現山1号墳	141	中筋日延遺跡	226	楠古墳群	301	和田遺跡	369	奥山田遺跡	427	岩橋高柳遺跡
51	権現山2号墳	142	山口遺跡	227	足守神社古墳群	302	和田岩坪遺跡	370	朝日石槍出土地	428	和坂南垣内古墳群
52	高芝遺跡	143	谷遺跡	228	赤山古墳	303	和田古墳群	371	深山要塞跡	429	栄谷遺跡
53	高芝古墳群	144	里遺跡	229~233	塩谷古墳群	304	和田4号墳	371-1	深山第1砲台跡	430	西庄III遺跡
54	栄谷貝塚	145	川辺遺跡	234	新出古墳	305	竈山神社古墳	371-2	深山第2砲台跡	431	砂山南土師器出土地
55	貴志古墳	146	藤田古墳	235	明王寺経塚	306	坂田地蔵山古墳	371-3	男良砲台跡	432	旧聖社境内和鏡出土地
56	川原崎遺跡	147	碓古墳	236	矢田古墳	307	神前遺跡	372	加太砲台跡	433	今福尖頭器出土地
57~59	川原崎古墳群	148	藤田遺跡	237	北池古墳	308	井辺遺跡	373-1・2	田倉崎砲台跡	434	有本土器出土地
60	国一本遺跡	149	宇田森遺跡	238~240	殿山古墳群	309	岡崎縄文遺跡	374	虎島砲台跡	435	坂田遺跡
61	大谷古墳	150	上野廃寺跡	241	土井山古墳	310	森小手穂埴輪窯跡	375	友ヶ島要塞跡	436	三葛遺跡
62・64・65	晒山古墳群	151	上野遺跡	242	丸山古墳	311	大日山I遺跡	376	行者堂東遺跡		
63	慶円寺裏山古墳	152	上黒谷遺跡	243	高岡古墳	312	井辺I遺跡	377	松江経塚		
66~69	雨が谷古墳群	153	北野窯跡	244	桜山古墳	313	井辺II遺跡	378	狛口石岩陰遺跡		

2 埋蔵文化財発掘調査事業

(1) 平成21年度の概要

平成21年度の文化財保護法第93・94条に基づく発掘の届出件数は147件、通知件数は11件で、紀ノ川北岸では、木ノ本Ⅰ遺跡（6件）、高井遺跡（7件）、西田井遺跡（5件）、川辺遺跡（12件）、南岸では井辺遺跡（7件）、岩橋遺跡（8件）、和歌山城跡（7件）、関戸遺跡（9件）などである。

平成21年度に実施した確認調査・立会調査・発掘調査は、以下の（2）の項の一覧に示した通り124件である。紀ノ川北岸では、高井遺跡（4件）、川辺遺跡（11件）、南岸では井辺遺跡（6件）、岩橋遺跡（7件）、関戸遺跡（7件）などが多い。これらのうち確認調査を中心に、立会調査で遺構・遺物を確認した調査等についての概要を（3）の項で記述する。また、財団法人和歌山市都市整備公社に委託して実施した4件の発掘調査事業（六十谷遺跡発掘調査、川辺遺跡第14次確認調査、田屋遺跡第3次確認調査、雑賀崎台場跡第2次確認調査）の概要については（4）の項に記載する。なお、川辺遺跡、鳴神Ⅴ遺跡については、事業者負担による本発掘調査（川辺遺跡第13次調査、鳴神Ⅴ遺跡第11次調査）を実施した。

(2) 平成21年度和歌山市調査一覧

実施機関の欄の（財）和公社は財団法人和歌山市都市整備公社、和市教委は和歌山市教育委員会を指す。また、和歌山市教育委員会関係の確認調査・立会調査記録は1件ごとに「発掘調査・立会調査カード」を作成し、和歌山市教育委員会生涯学習部文化振興課に備え、一覧表とともに和歌山県教育委員会にも同じものを提出している。

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号 内 容	調査期間 調査面積(m ²)	実施機関	調査内容	備考
1	関 戸 遺 跡	関戸776-13	宅地造成	文第47号(363) 確認調査	090401 22.50	和市教委	遺構・遺物なし。	
2	岩橋千塚古墳群	岩橋1464-1	宅地造成	文第47号(390) 確認調査	090403 14.00	和市教委	遺構・遺物なし。	
3	上野古墳群	北野744-3	携帯基地局	文第47号(398) 確認調査	090406 7.40	和市教委	遺構・遺物なし。	
4	岩橋高柳遺跡	岩橋282-3	集合住宅	文第5号(005) 確認調査	090409 10.00	和市教委	遺構なし。土師器等微片少量出土。	
5	加 太 遺 跡	加太1574	個人住宅	文第47号(232) 浄化槽立会	090409 2.30	和市教委	遺構・遺物なし。	
6	曾 垣 田 遺 跡	曾垣田947-6	個人住宅	文第47号(387) 浄化槽立会	090415 2.20	和市教委	遺構なし。土師器等微片少量出土。	
7	六 十 谷 遺 跡	六十谷357-3	個人車庫	文第5号(003) 本発掘調査	090416-0511 43.00	(財)和公社	弥生時代のビット、古墳時代の溝・ビット、鎌倉時代の溝等を検出。	本書(4)に掲載
8	薬 師 谷 遺 跡	曾垣田929-8	個人住宅	文第24号(314) 浄化槽立会	090417 1.36	和市教委	遺構なし。中世土師器・馬歯等出土。	
9	鳴 神 Ⅱ 遺 跡	鳴神111	宿舎	文第47号(348) 確認調査	090424 10.00	和市教委	遺構なし。土師器等微片少量出土。	
10	川 辺 遺 跡	川辺33-7	個人住宅	文第47号(408) 浄化槽立会	090427 2.64	和市教委	遺構なし。土師器等微片少量出土。	
11	山 口 遺 跡	藤田116-6	ガス管理設	文第47号(399) 工事立会	090501 2.80	和市教委	遺構・遺物なし。	
12	城ヶ森遺跡	吉礼608-1	宅地造成	文第47号(271) 確認調査	090507 37.00	和市教委	遺構・遺物なし。	
13	薬 師 谷 遺 跡	朝日947-5	個人住宅	文第47号(336) 浄化槽立会	090508 1.36	和市教委	遺構・遺物なし。	
14	榎 原 遺 跡	榎原地内	公共下水管	文第56号(046) 工事立会	090512 8.00	和市教委	遺構・遺物なし。	
15	曾 垣 田 遺 跡	曾垣田929-10	個人住宅	文第47号(388) 浄化槽立会	090518 1.20	和市教委	遺構・遺物なし。	
16	神 前 遺 跡	神前67-9	宅地造成	文第5号(034) 確認調査	090518 48.00	和市教委	遺構なし。須恵器小片出土。	

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号	調査期間	実施機関	調査内容	備考
				内 容	調査面積(m ²)			
17	川 辺 遺 跡	里9-1	店舗建設	文第47号(349) 本発掘調査	090520-0616 139.30	和和公社	中世以前の遺構面、弥生時代中期の遺構面を確認。(第13次調査)	
18	曾 垣 田 遺 跡	曾垣田945-5	個人住宅	文第47号(407) 浄化槽立会	090520 2.64	和市教委	遺構・遺物なし。	
19	高 井 遺 跡	直川1218	宅地造成	文第47号(284) 工事立会	090526 44.40	和市教委	ビット3基検出。土師器・須恵器小片出土。	
20	府 中 遺 跡	府中799	集合住宅	文第5号(036) 確認調査	090601 8.51	和市教委	遺構・遺物なし。	
21	宇 田 森 遺 跡	宇田森13	宅地造成	文第47号(189) 工事立会	090601 15.00	和市教委	遺構なし。土師器等微片少量出土。	
22	榎 原 遺 跡	木ノ本470-26	ガス管理設	文第5号(045) 工事立会	090602 1.10	和市教委	遺構・遺物なし。	
23	曾 垣 田 遺 跡	曾垣田955-6	個人住宅	文第47号(395) 浄化槽立会	090604 1.28	和市教委	落ち込み1基検出。土師器小片出土。	
24	神 前 遺 跡	神前580-1	農業用倉庫	文第5号(022) 工事立会	090608 51.45	和市教委	弥生時代中期後半の落ち込み1基検出。弥生時代前期～中期後半の弥生土器出土。	本書(3)に掲載
25	神 前 遺 跡	神前588-1	集合住宅	文第47号(298) 確認調査	090609 32.48	和市教委	遺構なし。土師器小片出土。	
26	和 歌 山 城 跡	八番丁31	ガス管理設	文第47号(396) 工事立会	090613 1.80	和市教委	遺構・遺物なし。	
27	西 庄 遺 跡	本脇58-1	個人住宅	文第5号(051) 確認調査	090619 0.50	和市教委	遺構・遺物なし。	
28	北 野 遺 跡	北野399	宅地造成	文第5号(024) 確認調査	090623 108.00	和市教委	遺構なし。奈良時代須恵器壺、土師器出土。	本書(3)に掲載
29	井 辺 遺 跡	神前119-7	個人住宅	文第5号(083) 工事立会	090624 124.49	和市教委	遺構・遺物なし。	
30	川 辺 遺 跡	里5-1	店舗建設	文第5号(085) 確認調査	090629 18.00	和市教委	遺構なし。中世土師器小片出土。	
31	木ノ本Ⅰ遺跡	西庄228-36	個人住宅	文第5号(077) 確認調査	090704 3.00	和市教委	遺構なし。中世土師器小片出土。	本書(3)に掲載
32	府 中 Ⅳ 遺 跡	府中318-1	個人住宅	文第5号(020) 浄化槽立会	090709 2.20	和市教委	ビット3基、落ち込み1基検出。土師器小片出土。	本書(3)に掲載
33	山 口 遺 跡	谷145-1	宅地造成	文第5号(001) 工事立会	090711 32.00	和市教委	遺構・遺物なし。	
34	上 黒 谷 遺 跡	上黒谷385-2	個人住宅	文第47号(364) 浄化槽立会	090715 2.20	和市教委	遺構・遺物なし。	
35	榎 原 遺 跡	木ノ本地内	公共下水管	文第80号(002) 工事立会	090715 0.50	和市教委	遺構・遺物なし。	
36	鷺ノ森遺跡	橋丁24	店舗建設	文第5号(074) 確認調査	090722 27.00	和市教委	遺構・遺物なし。	
37	城ヶ森遺跡	吉礼596	電話線理設	文第5号(076) 工事立会	090728 9.44	和市教委	遺構・遺物なし。	
38	岩 橋 Ⅱ 遺 跡	岩橋1338-1	携帯基地局	文第5号(065) 確認調査	090806 4.00	和市教委	遺構・遺物なし。	
39	三 田 古 墳 群	三葛544-1	宅地造成	文第5号(129) 工事立会	090821 10.00	和市教委	遺構・遺物なし。	
40	川 辺 遺 跡	川辺277-8	個人住宅	文第5号(032) 浄化槽立会	090824 3.90	和市教委	遺構なし。中世土師器小片出土。	
41	井 辺 遺 跡	神前317	ガス管理設	文第5号(093) 工事立会	090824 9.44	和市教委	遺構なし。須恵器、中世土師器、瓦器小片出土。	
42	川 辺 遺 跡	川辺33-8	個人住宅	文第5号(060) 確認調査	090825 8.75	和市教委	遺構なし。中世土師器、瓦器出土。	本書(3)に掲載
43	西 田 井 遺 跡	西田井353-3	集合住宅	文第5号(068) 確認調査	090914 21.20	和市教委	落ち込み1基(自然流路の肩か)検出。中世土師器、瓦器小片出土。	本書(3)に掲載
44	川 辺 遺 跡	川辺220	ガス管理設	文第5号(050) 工事立会	090916 2.00	和市教委	遺構・遺物なし。	
45	岩 橋 遺 跡	岩橋1034-10	個人住宅	文第5号(110) 浄化槽立会	090916 1.40	和市教委	遺構なし。土師器小片出土。	
46	鳴 神 Ⅴ 遺 跡	秋月162-1	集合住宅	文第5号(120) 確認調査	090917 24.51	和市教委	鎌倉時代～近世の上土1基検出。土師器、中世土師器、瓦器等出土。	本書(3)に掲載
47	秋 月 遺 跡	太田127	電柱移設	文第5号(075) 工事立会	090918 0.30	和市教委	幅狭なため遺構・遺物確認できず。	
48	磯 脇 遺 跡	本脇309-7	個人住宅	文第5号(227) 工事立会	090925 9.00	和市教委	遺構・遺物なし。	
49	岩 橋 遺 跡	岩橋1034-11	個人住宅	文第5号(127) 確認調査	090928 7.78	和市教委	遺構なし。平安時代の包含層、古墳時代初頭の包含層を確認した。	本書(3)に掲載
50	朝日石榿出土地	朝日11-1	個人住宅	文第5号(132) 確認調査	091005 25.75	和市教委	遺構なし。中世土師器出土。石榿は、他地点からの混入と判明。	本書(3)に掲載
51	井 辺 遺 跡	神前9-5	個人住宅	文第5号(090) 浄化槽立会	091009 3.00	和市教委	遺構なし。土師器(弥生土器か)小片出土。湿地状の堆積。	
52	和 歌 山 城 跡	十二番丁88	ガス管理設	文第5号(151) 工事立会	091010 6.70	和市教委	遺構・遺物なし。	

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指示文書番号		実施機関	調査内容	備考
				内 容	調査面積(m ²)			
53	直川遺跡	直川1884-3	個人住宅	文第5号(017)	091013	和市委	遺構・遺物なし。	
				確認調査	2.60			
54	木ノ本I遺跡	西庄79	宅地造成	文第5号(109)	091013	和市委	杭跡1基検出、奈良～平安時代須恵器、中世土師器、瓦器等出土。	本書(3)に掲載
				確認調査	30.00			
55	太田城水攻め堤跡	出水地内	公共下水管	文第80号(040)	091013～1117	和市委	遺構なし。中世平瓦、近世陶磁器出土。	
				工事立会	13.37			
56	川辺遺跡	中筋日延112-2	宅地造成	文第5号(152)	091019～1120	和公社	古墳～奈良時代の遺構面において、溝、ピットを検出。	本書(4)に掲載
				確認調査	50.00			
57	井辺遺跡	神前266-18	集合住宅	文第5号(177)	091028	和市委	奈良時代の南北溝1条検出。	本書(3)に掲載
				確認調査	24.30			
58	岩橋遺跡	岩橋1034-7	個人住宅	文第5号(102)	091030	和市委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
				浄化槽立会	4.50			
59	木ノ本II遺跡	木ノ本1162	宅地造成	文第5号(205)	091102	和市委	中世の溝1条、落ち込み1基確認。溝内より中世平・丸瓦出土。	本書(3)に掲載
				確認調査	27.47			
60	川辺遺跡	川辺33-6	個人住宅	文第5号(169)	091104	和市委	遺構なし。瓦器椀1点出土。	本書(3)に掲載
				確認調査	10.00			
61	関戸遺跡	関戸4-685-1	集合住宅	文第5号(175)	091105・06	和市委	奈良～室町時代のピット、溝、土坑等検出。	本書(3)に掲載
				確認調査	14.40			
62	西庄遺跡	本脇38-2	個人住宅	文第5号(204)	091110	和市委	遺構なし。土師器小片出土。	
				工事立会	3.00			
63	神前II遺跡	有家371-3	携帯基地局	文第5号(148)	091112	和市委	弥生時代中期後半の土坑1基検出。弥生土器、瓦器小片出土。	本書(3)に掲載
				工事立会	15.75			
64	田屋遺跡	直川377	道路建設	文第78号(013)	091119～1222	和公社	古墳時代前期の竪穴建物、溝、土坑、平安時代のピット等検出。	本書(4)に掲載
				確認調査	100.00			
65	神前遺跡	神前67-12	個人住宅	文第5号(141)	091124	和市委	遺構なし。古墳時代初頭土師器、中世土師器小片出土。湿地状堆積。	
				浄化槽立会	3.78			
66	榎原遺跡	木ノ本453	宅地造成	文第47号(406)	091124	和市委	遺構なし。土師器小片出土。	
				確認調査	55.00			
67	関戸遺跡	関戸3-776-273	個人住宅	文第5号(159)	091127	和市委	遺構・遺物なし。	
				浄化槽立会	4.32			
68	岩橋遺跡	岩橋1034-5	個人住宅	文第5号(134)	091201	和市委	遺構・遺物なし。現代耕作土内施工。	
				浄化槽立会	3.36			
69	磯脇遺跡	本脇309-2	個人住宅	文第5号(210)	091202	和市委	遺構なし。須恵器、黒色土器、中世土師器、近世陶磁器出土。	本書(3)に掲載
				確認調査	9.24			
70	岩橋遺跡	岩橋1034-6	個人住宅	文第5号(206)	091204	和市委	遺構なし。奈良～平安時代の包含層、古墳時代初頭の包含層を確認。	本書(3)に掲載
				工事立会	10.00			
71	和歌山城跡	九番丁20-26	ガス管理設	文第5号(242)	091204	和市委	遺構なし。中世備前焼瓦、近世土師器、近世陶磁器出土。	
				工事立会	2.00			
72	鳴神II遺跡	鳴神41-4	寄宿舎	文第5号(244)	091208	和市委	遺構なし。土師器小片出土。	
				確認調査	12.00			
73	鳴神II遺跡	鳴神1087-1	個人住宅	文第5号(118)	091214	和市委	遺構なし。土師器小片出土。	
				浄化槽立会	3.36			
74	山口遺跡	谷145-2	個人住宅	文第5号(176)	091216	和市委	遺構なし。土師器小片出土。	
				確認調査	4.05			
75	関戸遺跡	関戸3-776-277	個人住宅	文第5号(155)	091218	和市委	遺構・遺物なし。	
				浄化槽立会	3.75			
76	高井遺跡	直川1219-10	個人住宅	文第5号(173)	091218	和市委	遺構なし。土師器小片出土。	
				工事立会	8.82			
77	太田・黒田遺跡	太田3-10-6	事務所	文第5号(234)	091221	和市委	遺構なし。土師器小片出土。	
				工事立会	30.00			
78	有功遺跡	六十谷1054-1	個人住宅	文第5号(159)	091221	和市委	遺構なし。土師器小片出土。	
				浄化槽立会	3.75			
79	鳴神V遺跡	秋月304-1	店舗建設	文第5号(213)	091221～1224	和市委	奈良～鎌倉時代の遺構面を確認。ピット、土坑、溝、落ち込み検出。	本書(3)に掲載
				確認調査	45.61			
80	津秦II遺跡	津秦3-2	個人住宅	文第5号(178)	091224	和市委	遺構・遺物なし。	
				浄化槽立会	2.88			
81	関戸遺跡	関戸3-776-275	個人住宅	文第5号(153)	091225	和市委	遺構なし。土師器小片出土。	
				浄化槽立会	3.75			
82	木ノ本II遺跡	木ノ本7-7	個人住宅	文第5号(221)	100104	和市委	中世の落ち込み1基検出。中世土師器・瓦器小片出土。	本書(3)に掲載
				確認調査	4.00			
83	西田井遺跡	西田井256-2	店舗建設	文第5号(268)	100107・0108	和市委	古墳～中世の遺構面を確認。ピット、溝、土坑、落ち込み検出。	本書(3)に掲載
				確認調査	47.73			
84	雑賀崎台場跡	雑賀崎地内	遺跡確認	文第78号(015)	100113～0205	和公社	台場跡に伴う防御施設の内容を確認。	本書(4)に掲載
				確認調査	39.30			
85	秋月・津秦遺跡	太田308他	電柱設置	文第5号(192)	100112	和市委	遺構なし。土師器小片出土。	
				工事立会	13.35			
86	秋月遺跡	太田127	電柱設置	文第5号(243)	100115	和市委	遺構なし。土師器小片出土。	
				工事立会	1.10			
87	曾垣田遺跡	朝日906-5・6	個人住宅	文第5号(144)	100120	和市委	遺構なし。中世土師器、黒色土器、瓦器出土。	
				工事立会	40.50			
88	岩橋千塚古墳群	岩橋1494	駐車場	文第5号(171)	100122	和市委	削平を受け、遺構・遺物なし。	本書(3)に掲載
				確認調査	15.12			

No.	遺跡名	所在地	調査経緯	県指図書番号	調査期間	実施機関	調査内容	備考
				内 容	調査面積 (㎡)			
89	宇田森遺跡	宇田森13-12	個人住宅	文第5号(226) 浄化槽立会	100125 4.20	和市政教委	遺構・遺物なし。	
90	西庄遺跡	西庄514-2	集合住宅	文第5号(278) 工事立会	100125 127.80	和市政教委	遺構なし。鎌倉時代～近世の包含層を確認。中世土師器、瓦器等出土。	
91	木ノ本Ⅰ遺跡	西庄79	ガス管理設	文第5号(166) 工事立会	100126 42.75	和市政教委	遺構・遺物なし。	
92	川辺遺跡	中筋日延112-2	宅地造成	文第5号(152) 工事立会	100126 30.00	和市政教委	土坑状の落ち込み1基検出。弥生土器、土師器、須恵器小片出土。	
93	井ノ口遺跡	和佐関戸294-1	個人住宅	文第5号(272) 確認調査	100127 9.98	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。対象地は旧河道に含まれる可能性を想定。	本書(3)に掲載
94	井辺遺跡	神前37-40	個人住宅	文第5号(013) 浄化槽立会	100128 2.75	和市政教委	落ち込み1基検出。遺物なし。	
95	岩橋遺跡	岩橋1034-8	個人住宅	文第5号(267) 確認調査	100129 7.35	和市政教委	弥生時代後期後半～古墳初頭の自然流路検出。	本書(3)に掲載
96	直川遺跡	直川1817-1	個人住宅	文第5号(137) 浄化槽立会	100208 3.45	和市政教委	落ち込み2基検出。土師器小片出土。	
97	六十谷遺跡	六十谷374	個人住宅	文第5号(294) 浄化槽立会	100208 1.80	和市政教委	落ち込み1基検出。遺物なし。	
98	高井遺跡	直川1218-10	個人住宅	文第5号(240) 工事立会	100209 3.90	和市政教委	削平を受け、遺構・遺物なし。	
99	西田井遺跡	西田井391	老人ホーム	文第5号(250) 確認調査	100210 26.70	和市政教委	自然流路2条確認。土師器小片出土。	本書(3)に掲載
100	木ノ本Ⅲ遺跡	木ノ本552-1	店舗建設	文第5号(248) 工事立会	100212 4.00	和市政教委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
101	木ノ本Ⅲ遺跡	木ノ本552-1	店舗建設	文第5号(249) 工事立会	100212 0.00	和市政教委	同敷地内の立会調査により盛土内施工であることを確認。	
102	鳴神Ⅴ遺跡	秋月304-5	店舗建設	文第5号(213) 本発掘調査	100216～0222 21.00	和公和社	古墳時代前期のピット・溝検出。鎌倉時代の遺物包含層を確認。	
103	直川遺跡	直川1817-2	個人住宅	文第5号(199) 工事立会	100216 3.25	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。	
104	川辺遺跡	里38-1	店舗建設	文第5号(224) 工事立会	100216 0.49	和市政教委	遺構・遺物なし。盛土内施工。	
105	高芝遺跡	栄谷974-3	携帯基地局	文第5号(088) 確認調査	100223 3.14	和市政教委	削平を受け、遺構・遺物なし。	
106	高芝遺跡	栄谷974-3	携帯基地局	文第5号(087) 工事立会	100223 0.00	和市政教委	同敷地内の確認調査により削平を受けている状況を確認。	
107	高芝遺跡	栄谷974-3	携帯基地局	文第5号(270) 工事立会	100223 0.00	和市政教委	同敷地内の確認調査により削平を受けている状況を確認。	
108	田屋遺跡	田屋21-2	個人住宅	文第5号(136) 確認調査	100224 7.00	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。	
109	直川廃寺跡	直川1665-1	集合住宅	文第5号(289) 確認調査	100224 6.11	和市政教委	削平を受け、遺構・遺物なし。	本書(3)に掲載
110	岩橋遺跡	岩橋1034-10	個人住宅	文第5号(207) 浄化槽立会	100225 4.93	和市政教委	遺構・遺物なし。床土の層までしか掘削及ばず。	
111	関戸遺跡	関戸3-8-6	ガス管理設	文第5号(283) 工事立会	100225 1.10	和市政教委	遺構・遺物なし。	
112	直川遺跡	直川1884-1	個人住宅	文第5号(224) 工事立会	100301 4.05	和市政教委	遺構・遺物なし。	
113	川辺遺跡	川辺33-10	個人住宅	文第5号(218) 浄化槽立会	100308 3.75	和市政教委	遺構なし。須恵器、中世土師器、瓦器出土。	
114	鳴神Ⅱ遺跡	鳴神90-19	個人住宅	文第5号(012) 浄化槽立会	100308 4.48	和市政教委	飛鳥時代の溝1条検出。土師器甕・高杯、カマド出土。	本書(3)に掲載
115	吉田遺跡	平岡5	個人住宅	文第5号(287) 確認調査	100310 9.68	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。対象地は旧河道に含まれる可能性を想定。	本書(3)に掲載
116	神前遺跡	神前67-11	個人住宅	文第5号(318) 確認調査	100311 8.40	和市政教委	遺構なし。土師器小片出土。湿地状の堆積。	本書(3)に掲載
117	和歌山城跡	八番丁40	ガス管理設	文第5号(307) 工事立会	100313 3.00	和市政教委	遺構・遺物なし。	
118	木ノ本Ⅱ遺跡	木ノ本632-15	個人住宅	文第5号(296) 工事立会	100315 10.00	和市政教委	遺構・遺物なし。	
119	高井遺跡	直川1219-14	個人住宅	文第5号(298) 浄化槽立会	100315 3.69	和市政教委	遺構・遺物なし。	
120	鷺ノ森遺跡	九家ノ丁	ガス管理設	文第5号(295) 工事立会	100318 3.69	和市政教委	遺構・遺物なし。	
121	榎原遺跡	榎原24-9	ガス管理設	文第5号(145) 工事立会	100318 8.00	和市政教委	遺構・遺物なし。	
122	関戸遺跡	関戸4-21	ガス管理設	文第5号(248) 工事立会	100326 5.50	和市政教委	遺構・遺物なし。	
123	木ノ本Ⅰ遺跡	西庄82	宅地造成	文第5号(212) 確認調査	100329 14.50	和市政教委	遺構なし。中世土師器、瓦器出土。湿地状堆積。	本書(3)に掲載
124	鳴神Ⅳ遺跡	秋月地内	公共下水管	文第80号(063) 工事立会	100330 5.30	和市政教委	遺構・遺物なし。河川氾濫現の堆積を確認。	

(3) 市教育委員会実施確認・立会調査等概要

① 神前遺跡 (調査一覧24)

〔経緯〕 農業用倉庫建設に伴う立会調査

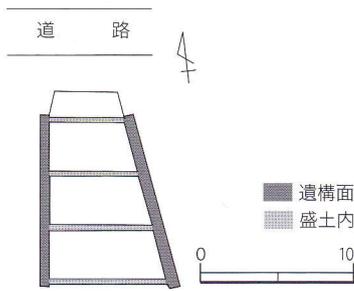
〔場所〕 和歌山市神前字馬乗免580-1、586-2

〔面積〕 51.45㎡ (敷地面積170.81㎡)

〔概要〕 神前遺跡 (遺跡番号307) は、標高1~2mの沖積低地に立地する。遺跡は東西約500m、南北約600mの規模をもつ集落遺跡である (第1・2図)。遺跡中央南の位置において、農業用倉庫建設に伴う建物基礎部分の立会調査を実施した (第3図)。

現況地盤の下、約50cmが造成土で、その下に約10cmの現代耕作土 (第1層)、10cm以上の黄褐色シルト

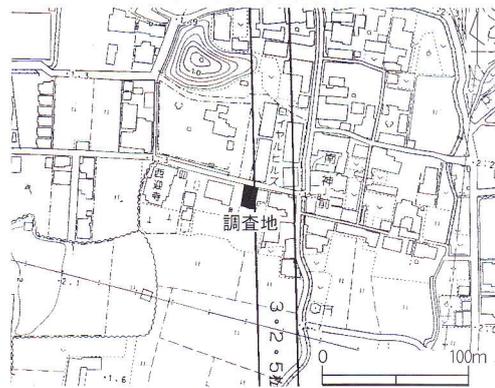
(第2層)が堆積する (第4図)。遺構は第2層上面で、平面が隅丸方形を呈する南北約2.5m、東西約0.7m以上の落ち込み



第3図 調査場所



第1図 位置図

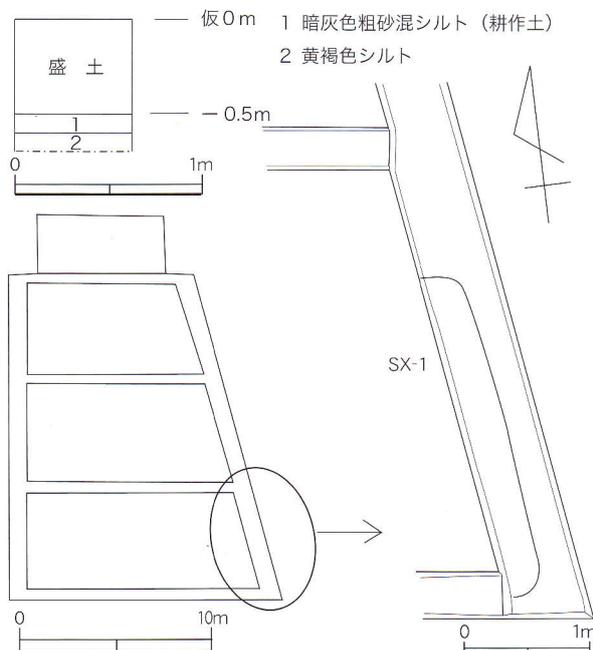


第2図 調査対象地

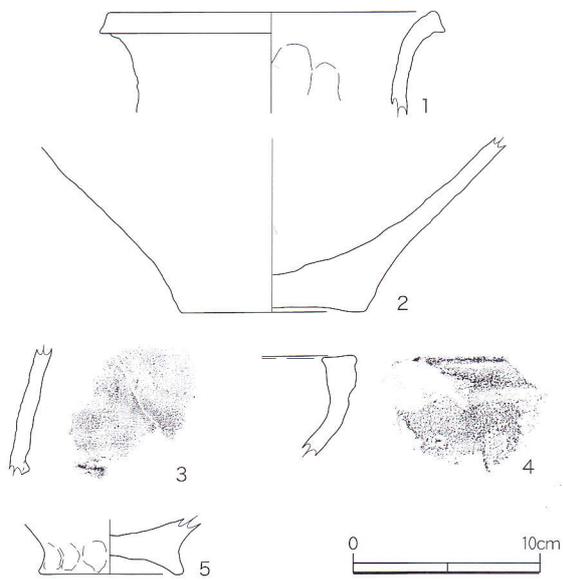
(SX-1) を検出した (第4図)。落ち込みからは弥生土器壺・甕・高杯が出土した (第5図)。

1は広口壺の口縁部で、口縁端下部を肥厚させる。内面にユビナデ調整を施す。2は壺の底部で外側に張り出すように立ち上がる。3は直口壺の頸部で、櫛描き直線文の下位に貼付突帯を施す。4は高杯の口縁部で1条の幅広の凹線文を施す。5は甕の底部で上底状を呈する。2は前期、1・5は中期前葉、3は中期中葉、4は中期後半に位置づけられる。

上記のように、弥生時代の落ち込みを検出した。工事掘削深度の関係から、遺構掘削は行わなかったが遺物量も多く、周辺に当該期の遺構が展開している可能性は高いと考える。



第4図 遺構平面図・土層断面図



第5図 遺物実測図

②木ノ本Ⅰ遺跡（調査一覧31）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市西庄字芝前228番36

〔面積〕 3㎡（敷地面積165.94㎡）

〔概要〕 木ノ本Ⅰ遺跡（遺跡番号40）は、和泉山脈南麓の扇状地及び沖積低地に立地する。遺跡は東西約450m、南北約350mの規模をもつ遺物散布地として周知されている（第1図）。今回の調査は、遺跡の南端の位置において、個人住宅建設が計画されたため、事前の確認調査を実施した（第2・3図）。

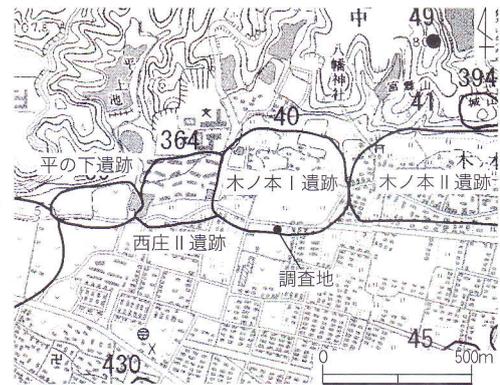
現況地盤の下、約150cmが造成土で、その下に約20cmの現代耕作土（第1層）、約15cmの青灰色シルト混粘土（第2層）、約15cmの褐灰色粘土混シルト（第3層）、約15cmの褐灰色粘土（第4層）、約20cmの茶褐灰色粘土（第5層）、約20cm以上の灰色粘土（第6層）が堆積する（第4図）。第3・4層は、摩滅の著しい豆粒状の土師器の小破片を含む希薄な遺物包含層である。第5層以下には、遺物は含まれないことから、自然堆積層であると考えられる。

確認調査の結果、第3・4層においてきわめて希薄な遺物包含層を確認したが、摩滅も著しく、本来の使用地からは離れていると考えられる。

対象地周辺はラグーン地帯であり、古代まで完全には陸化していなかった地域にあたる。奈良時代の天平19年（747）2月11日付「大安寺伽藍縁起并流記資材帳」によると、当時の木ノ本郷に170町の墾田地があったとされるが、現在の木ノ本集落から南側は低湿地部で、「塩入常荒田」であった。そのため、実際には開墾されず、そのうち108町7歩が11世紀以降に東大寺の末寺崇敬寺によって開発されたとされている。今回の調査結果と対応させると、第5層以下が、「塩入常荒田」のため土地開発が行われなかった時期の堆積、第4層以上が中世初頭に荒地のため放棄された土地を再開発した時期の堆積であると想定できる。

【参考文献】

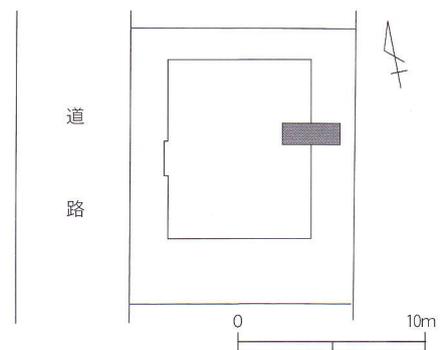
額田雅裕 1990「和歌山市木ノ本付近における微地形と遺跡の立地」『和歌山市立博物館 研究紀要』5 和歌山市教育委員会



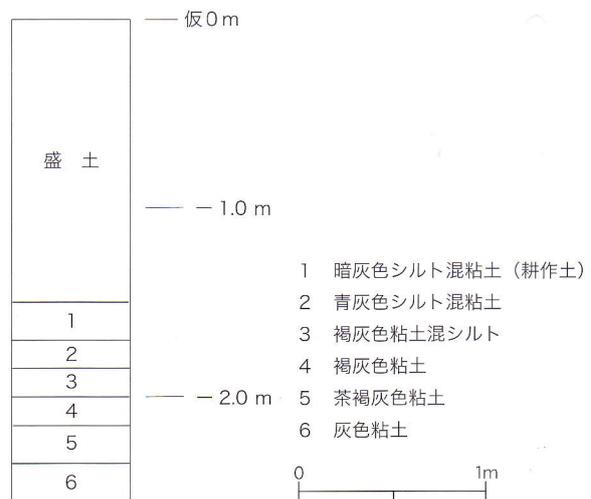
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図

③府中IV遺跡（調査一覧32）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う浄化槽部分の立会調査

〔場所〕 和歌山市府中字長通り318番1

〔面積〕 2.2㎡（敷地面積181.82㎡）

〔概要〕 府中IV遺跡（遺跡番号398）は、標高約25mの丘陵地に立地する。遺跡は東西約350m、南北約200mの規模をもつ集落遺跡である（第1図）。今回の調査は、遺跡の中央北よりの位置において、個人住宅建設が計画されたため、浄化槽部分について立会調査を実施した（第2・3図）。

現況地盤の下、約35cmが造成土で、その下に約5cmの現代耕作土（第1層）、約15cmの黄灰色シルト（第2層）、約18cmの黄褐色シルト（第3層）、約10cmの明黄褐色シルト（第4層）、約10cm以上の黄色シルト（第5層）が堆積する（第4図）。第4層以下には遺物を含まなかったことから、自然堆積層であると考えられる。

遺構は第4層上面において、0.1~0.2mの平面円形のピット3基、南北0.4m、東西0.3mの落ち込み1基を検出した（第4図）。落ち込みから土師器が出土したが、小片のため時期の特定は難しい。

今回の調査地の隣接地において府中IV遺跡第2・3・4次調査が行われており（第2図）、同一の遺構面において、弥生時代後期から古墳時代初頭、奈良時代、鎌倉時代、江戸時代の遺構が検出されている。それらの調査成果から、今回検出された遺構は古墳時代前期、奈良時代、鎌倉時代のいずれかの時期の遺構であると考えられる。

【参考文献】

財団法人和歌山市文化体育振興事業団 1996『府中IV遺跡第2次発掘調査概報』

財団法人和歌山市都市整備公社 2010「Ⅱ. 11. 府中IV遺跡第4次調査」『和歌山市埋蔵文化財調査年報 - (平成19年度 (2007年度) -)』

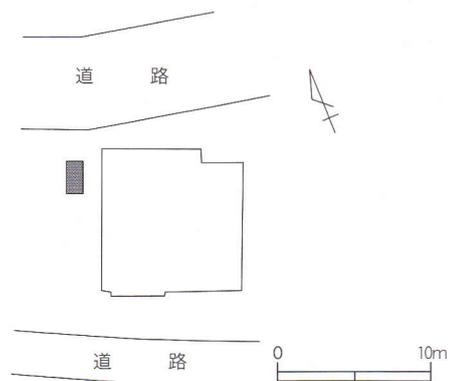
和歌山市教育委員会 2009「(4) ⑤府中IV遺跡第3次確認調査」『和歌山市内遺跡発掘調査概報』



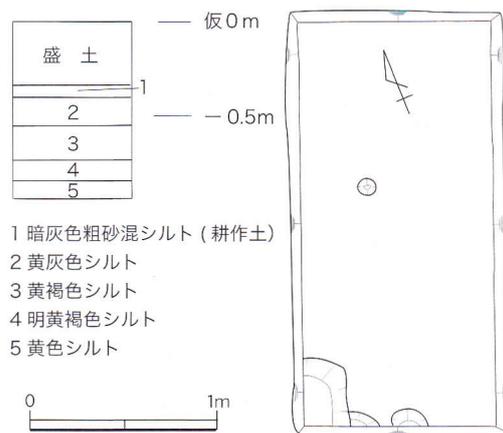
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 遺構平面図・土層断面図

④川辺遺跡（調査一覧42・60）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前の確認調査

〔場所〕 和歌山市川辺字宮西33番6・8

〔面積〕 第1区 10m²（敷地面積276.74m²）

第2区 8.75m²（敷地面積352.19m²）

〔概要〕 川辺遺跡（遺跡番号145）は東西約1km、南北約650mの規模をもつ縄文時代から中世の集落遺跡で、標高11.5m前後の沖積低地に立地する（第1図）。今回の調査は、遺跡の西端部で、個人住宅建設が計画されたため、事前の確認調査を実施した。便宜上、近接地のため2地点で別々に行った調査地を第1区、第2区とし、まとめて報告する（第2・3図）。

現況地盤の下、約100cmが造成土で、その下に約10～15cmの現代耕作土（第1層）、約5cmの床土と考えられる青灰黄色粗砂混シルト（第2層）、約4cmの黄青灰色粗砂混シルト（第3層）、約5～13cmの鉄分を含む灰黄色粗砂混シルト（第4層）、約5～10cmの灰黄褐色シルト（第5層）、約10cmの灰褐色粗砂混シルト（第6層）、約20cmの暗黄褐色粗砂混シルト（第7層）、約15cmの灰褐色シルト（第8層）、約10～15cmの暗灰褐色シルト（第9層）、約15cmの黄灰褐色シルト（第10層）、約10cmの灰黄褐色シルト（第11層）、約5cm以上の茶灰色シルト（第12層）が堆積する（第4図）。第4～8層において希薄な遺物包含層を確認した。第9層以下は遺物を含まず、自然堆積層であると考えられる。

確認調査の結果、第4～8層で希薄な遺物包含層を確認した。川辺遺跡第6次調査で平安時代から鎌倉時代の遺構が確認されており、対象地周辺においても同時期の遺構が展開している可能性が想定されたが、対象地は第6次調査地と比較すると標高がやや低い。また、力侍神社内の擁壁工事に伴う立会調査で須恵器を含む土坑が検出されている。さらに力侍神社の東西で堆積状況が異なる状況が確認されており、力侍神社かその東側に遺構が展開する可能性が想定できる。今後、周辺で明確な遺構面が形成されるかどうか、注意する必要がある。



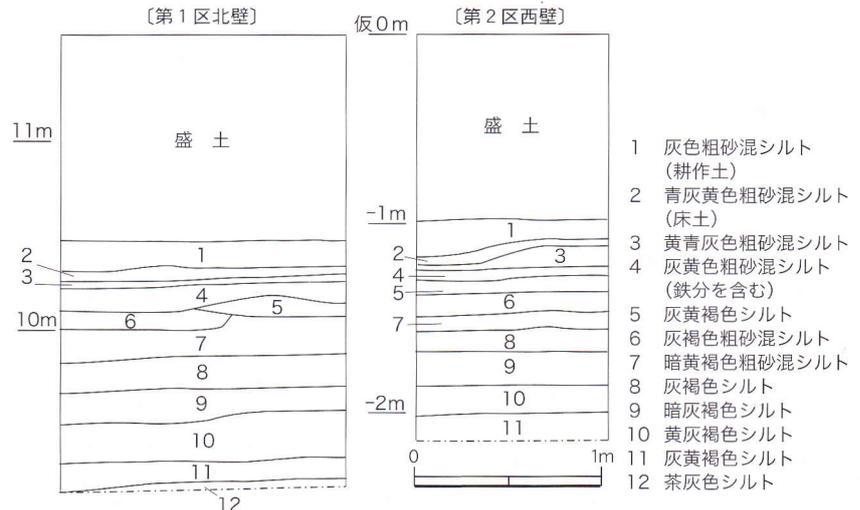
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図

⑤西田井遺跡 (調査一覧43)

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市西田井字前田353番 3、353番 6

〔面積〕 21.2m² (敷地面積434.56m²)

〔概要〕 西田井遺跡 (遺跡番号388) は、紀ノ川北岸の標高7.0m前後の沖積低地に立地する。遺跡は東西約1km、南北約0.7kmの規模をもつ弥生時代から中世の集落遺跡である (第1図)。今回の調査は、中央東寄りの位置で、集合住宅建設が計画されたため、確認調査を実施したものである (第2・3図)。なお、第1区は工事掘削深度の関係で現地表面の50cm下まで調査を実施した。

現況地盤の下、約25~30cmが現代耕作土 (第1層)、約10cmの黄褐色シルト (第2層)、約10cmの茶灰色シルト (第3層)、約10cmの鉄分を含む茶灰色シルト (第4層)、約15cmの灰褐色シルト (第5層)、約15cmの鉄分を含む灰色シルト (第6層)、約20~25cmの黄灰色シルト (第7層)、約5~15cmの鉄分を含む淡黄褐色シルト (第8層)、約20cm以上の黄茶色シルト (第9層) が堆積する (第4図)。第2~7層は希薄な包含層で第3層からは瓦器碗が出土した。第9層以下には、遺物は含まないことから、自然堆積層であると考ええる。

遺構は第9層上面で落ち込み (SX-1) を検出した。東西1.1m、南北0.6m、最深部で30cmを測り、東に向かってさらに深くなる。24号線建設に伴い県文化財センターが行った調査で自然河道が4条確認された。自然河道からは弥生時代後期から古墳時代後期の遺物が出土しており、SX-1からも同じ時期の可能性のある土器小片が出土した。出土遺物や検出位置などを検討すると、SX-1は自然河道3の西肩部分に対応する可能性が考えられる (第5図)。

【参考文献】

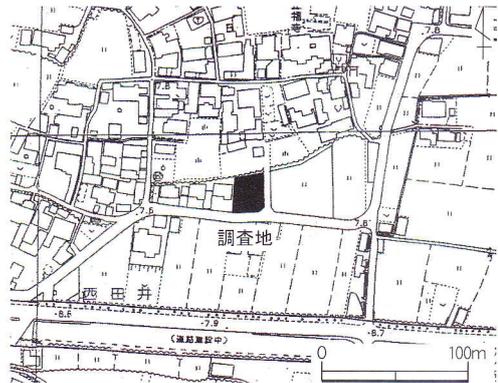
(財)和歌山県文化財センター 1991『西田井遺跡発掘調査報告書』



第5図 自然流路想定図



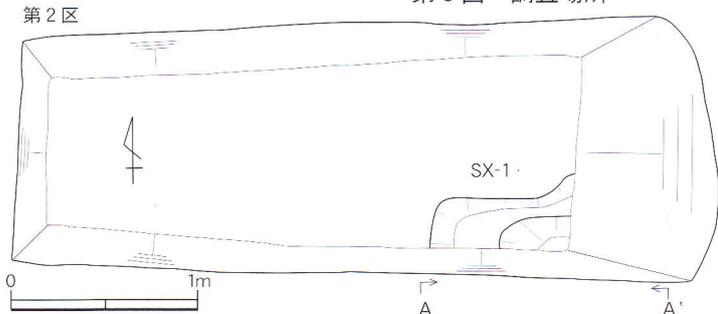
第1図 位置図



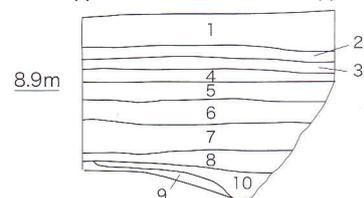
第2図 調査対象地



第3図 調査場所



- 1 暗灰色粗砂混シルト (耕作土)
- 2 黄褐色シルト
- 3 茶灰色シルト
- 4 茶灰色シルト (鉄分を含む)
- 5 灰褐色シルト
- 6 灰色シルト (鉄分を含む)
- 7 黄灰色シルト
- 8 淡黄褐色シルト (鉄分を含む)
- 9 黄茶色シルト
- 10 淡黄褐色シルト (SX-1埋土)



第4図 第2区遺構平面図・土層断面図

⑥鳴神V遺跡（調査一覧46）

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市秋月字中瀬162番1

〔面積〕 24.51㎡（敷地面積2786.98㎡）

〔概要〕 鳴神V遺跡（遺跡番号318）は東西約500m、南北400mの規模をもつ弥生時代から鎌倉時代の遺跡である（第1図）。今回の調査は、遺跡の北端の位置で、集合住宅建設が計画されたため、事前の確認調査を実施したものである（第2・3図）。

調査区の基本層序については、第1・2区と第3区が異なっているため、第1・2区と第3区を分けて記述する。

〔第1・2区〕 現況地盤の下、約40cmが現代耕作土（第1層）、約10cmの灰褐色粗砂混シルト（第2層）、約5～10cmの鉄分を含む灰褐色粗砂混シルト（第3層）、約15～20cmの暗灰褐色粗砂混シルト（第4層）、約20cmの鉄分を含む暗灰褐色粗砂混シルト（第5層）、約20～25cmの灰色粘土混シルト（第6層）、約20～30cmのにおい黄灰色シルト混粘土（第7層）、約10～20cmのにおい黄灰色粘土（第8層）、約20cm以上の青灰色粘土（第9層）が堆積する（第4図）。第4層から堺焼播鉢、土師器小片、第5～7層から中世土師器や瓦器碗小片、第8層から土師器高杯脚部、瓦器碗などが出土した。第4層は19世紀代の遺物包含層、第5～7層は中世の遺物包含層、第8層は古墳時代から中世まで時期幅のある遺物包含層となっている。第9層は遺物を含まず、自然堆積層であると考えられる。

〔第3区〕 現況地盤の下、約30～40cmが現代耕作土（第1層）、約10～15cmの床土と考えられる黄灰色粗砂混粘土（第2層）、約15cmの暗灰褐色粗砂混シルト（第3層）で第1・2区の第4層と対応する。その下に、約30cmの黄灰色粗砂混シルト（第4層）、約50cmの淡茶褐色粗砂（第5層）、約30cmの暗茶褐色粗砂（第6層）、約40cm以上の黄灰色粗砂（第7層）が堆積する（第4図）。第5層以下は均質な粗砂で、後背湿地状の堆積を呈する。

遺構は、第3区の第4層上面で東西1.4m以上、深さ1mの規模をもつ、土坑（SK-1）を検出した。第4層上面における遺構検出段階では存在を把握できず、第7層まで掘削し、壁を精査した段階で確認した。第1・2区第4層（第3区第3層に対応）で堺焼播鉢が出土し、鳴神VI遺跡の調査



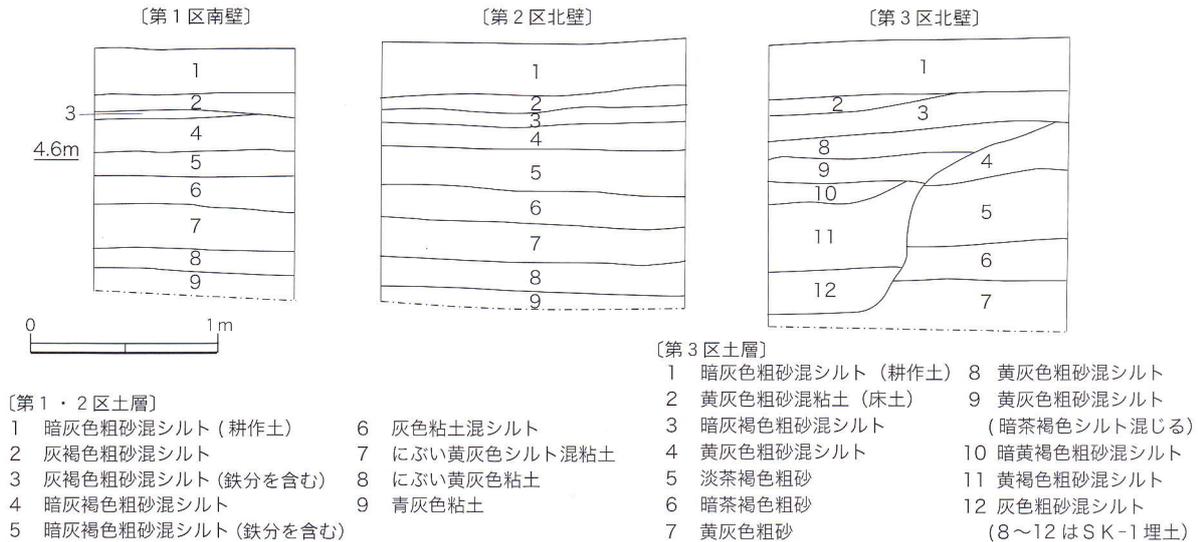
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 遺構平面図・土層断面図

成果から後背湿地の最終堆積（本調査地第3区第5層に対応）が鎌倉時代であることが判明している。そうした状況から、SK-1の時期は19世紀以前、鎌倉時代以降のものであると考えられる。

確認調査の結果、第1・2区はシルト～粘土層の堆積、第3区の第5層以下は均質な粗砂層が堆積し、調査地内で様相が異なる状況が判明した。鳴神VI遺跡の調査成果において旧河道の後背湿地の堆積状況が確認されており、今回の第3区が鳴神VI遺跡第5次調査において想定されている礫や粗砂が堆積する範囲と一致する。第3区は旧河道に近かったために、粗砂が堆積し、少し離れる第1・2区ではシルト層が堆積したものと考えられる。

対象地は後背湿地の堆積が終わった鎌倉時代以降に耕作地などとして開発されたものとする。それ以前の時期については、対象地の南側の道路沿いの鳴神V遺跡第5次調査で古墳時代の溝、奈良時代の柱穴が検出されていること、調査地南側の道路を境に地形が急に高くなっていることなどから、対象地周辺は低地のため遺構は存在せず、道路より南に展開していた可能性が高いと考える。

【参考文献】

- 額田雅裕 1994「第6章3. (1) 鳴神V遺跡の地形環境」『鳴神V発掘調査報告書』(財)和歌山市文化体育振興事業団
財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2001『鳴神VI遺跡発掘調査報告書』

⑦岩橋遺跡（調査一覧49・70・95）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市岩橋字小路1034-6、8、11

〔面積〕 第1区 7.35㎡（敷地面積198.37㎡）

第2区 10.0㎡（敷地面積155.64㎡）

第3区 7.78㎡（敷地面積135.2㎡）

〔概要〕 岩橋遺跡（遺跡番号321）は東西約200m、南北250mの規模をもつ遺跡である（第1図）。今回の調査は、遺跡の南東端の位置で、個人住宅建設が計画されたため、事前の確認調査を実施した（第2・3図）。便宜上、近接地のため3地点で別々に行った調査地をそれぞれ第1～3区とし、まとめて報告する。

現況地盤の下、約130～170cmが造成土で、その下に約10～15cmの現代耕作土（第1層）、約5～15cmの床土と考えられる暗灰褐色細砂混シルト（第2層）、約10～15cmの灰褐色細砂混シルト（第3層）、約10～15cmの灰黄褐色細砂混シルト（第4層）、約10～30cmの褐色粒を含む茶灰色細砂混シルト（第5層）、約15～25cmの灰黄褐色細砂混シルト（第6層）、約20cm以上の黄褐色細砂混シルト（第7層）が堆積する（第4図）。

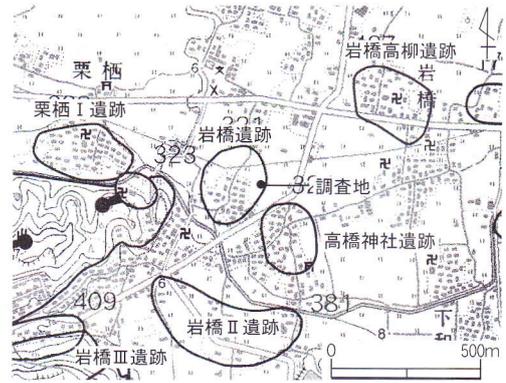
第3・4層は土師器・中世土師器の小破片を含む遺物包含層、第5・6層は奈良時代から平安時代の土師器・須恵器を含む遺物包含層である。第7層以下は、遺物を含まず自然堆積層であると考えられる。

遺構は第1区第7層上面で南北方向にやや蛇行しながら流れる自然流路の東肩を検出した（第4図）。幅1.0m以上、深さ0.6m以上を測る。第1区の自然流路の堆積と第2・3区で確認した第6層以下の堆積が類似していること、第7層に対応する堆積が他の調査区では確認できなかったことから、第2・3区は自然流路内に含まれているものと考えられる。そのため、かなり幅のある自然流路であった可能性が想定できる。流路からは弥生時代後期後半から庄内式期古段階の遺物が出土した。

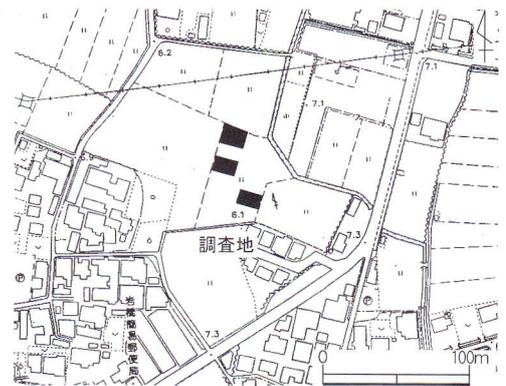
遺物は、弥生土器、土師器、須恵器、中世土師器などコンテナ1箱が出土したが、ほとんどが第2区の自然流路の堆積から出土したものである。そのうち、器種判定が可能なものを中心に一部図化を行った（第5図）。

1・2は広口壺である。1は口縁端部を下に拡張する。2は垂下口縁をもつもので、口縁端部外面に3条の擬凹線文を施す。

3は二重口縁壺である。口径16.6cm、底径4.3cm、器高25.2cmを測る。口縁部は外反し、口縁端部を



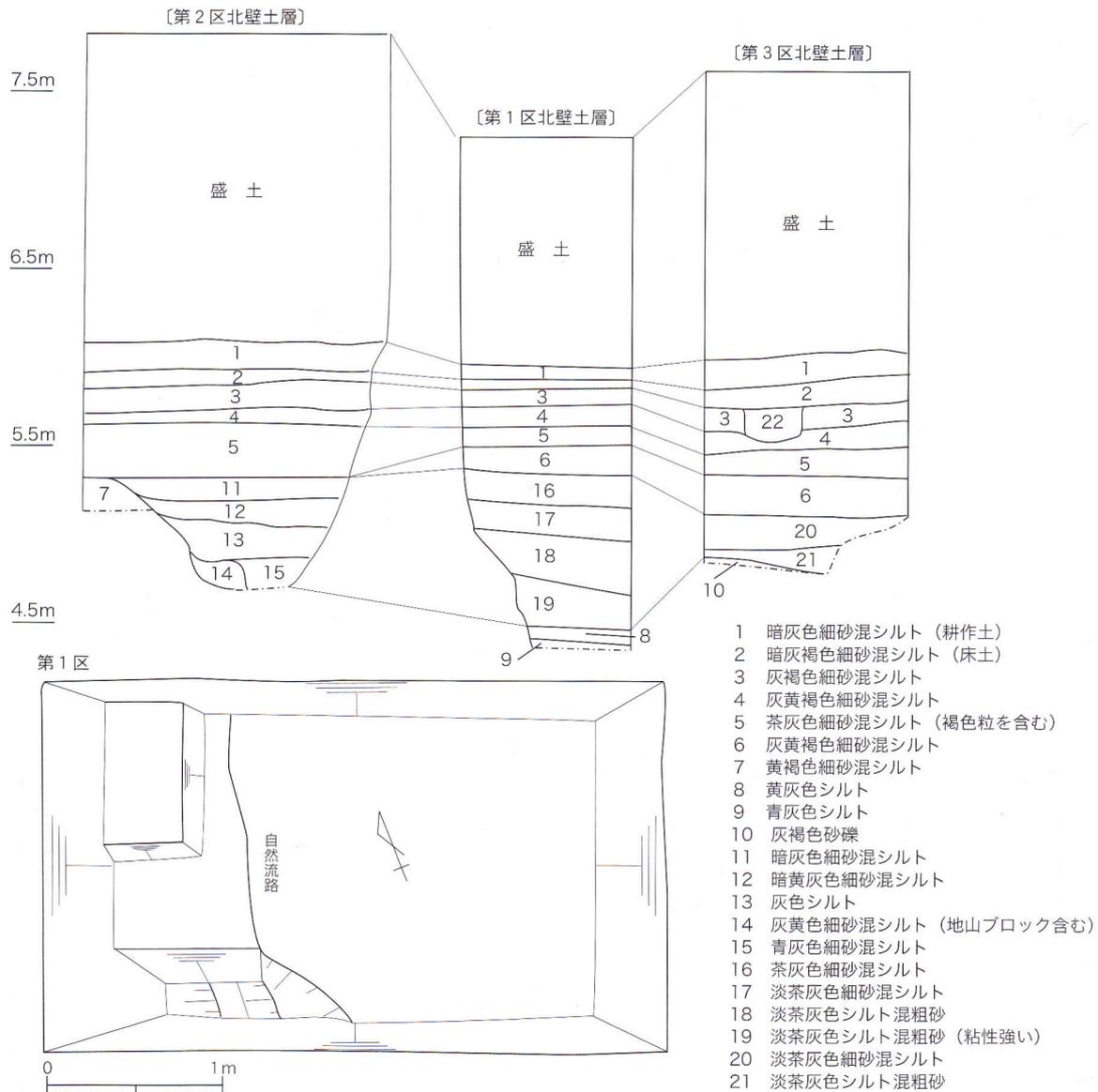
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図・第1区遺構平面図

丸く収める。屈曲部外面に刻み目、頸部外面に長方形刺突文を施す。口縁部から頸部の内外面にミガキ調整、体部外面上半に横方向のハケ調整、内面をユビオサエ、下半部外面にタタキ調整、内面にハケ調整を施す。内面には明瞭な粘土接合痕が確認できる。

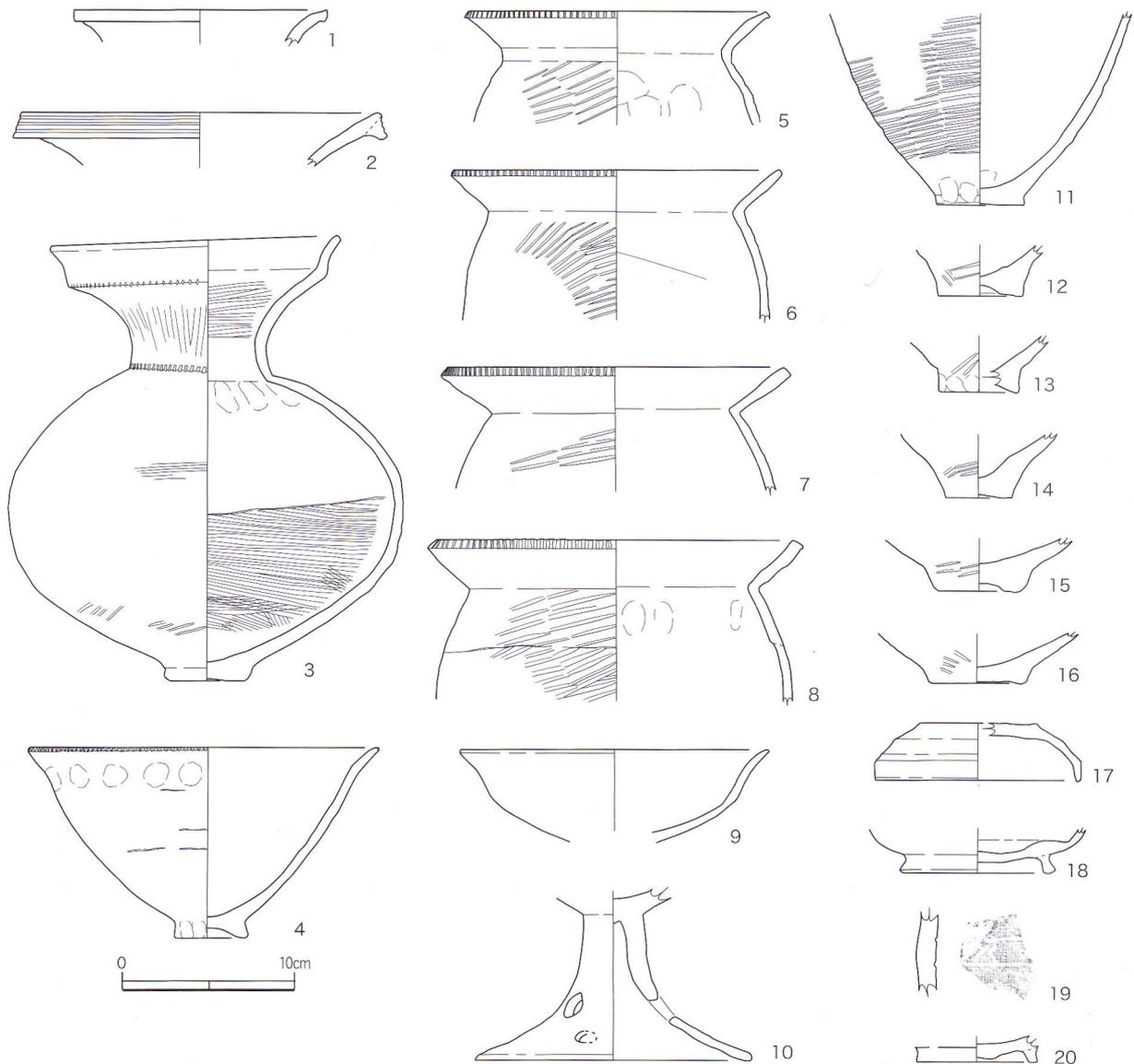
4は鉢である。口径20.1cm、底径4.1cm、器高11.0cmを測る。ユビオサエにより外反させた口縁部をもち、口縁端部に刻み目を施す。底部は上げ底状を呈する。

5～8は甕である。いずれも体部外面にタタキ調整を施し、体部上半部内面にユビオサエ及び板状工具によるナデ調整を行う。また、口縁端部外面に刻み目を施す。5は口径16.4cm、6は口径19.2cm、7は口径19.4cm、8は20.6cmを測る。

9・10は高杯である。9は杯部が皿形で外反する口縁部をもつ。口径17.8cmを測る。10は脚部で残存した脚部に2ヶ所の透かしが穿孔されている。脚部径15.6cmを測る。

11～16は甕底部である。いずれも体部外面にタタキ調整を施す。11は底径5.2cm、12は5.0cm、13は4.8cm、14は3.8cm、15は5.0cm、16は5.6cmを測る。

17は須恵器杯蓋である。口径12.0cmを測り、肩部に緩やかな稜をもち、やや外開きにのび、口縁部



1：第1区第5層、2：第3区第20層、3・4・6～9・11・15・16：第1区第18層、5・12～14：第1区第17層、10：第1区第16層、17：第1区第2層、18：第1区第4層、19：第2区第6層

第5図 遺物実測図

は丸く収める。天蓋部はヘラケズリを施す。

18は須恵器壺の底部である。貼付高台をもち高台径8.0cmを測る。焼成があまく、色調は黄褐色を呈する。

19は須恵器体部片である。器種は不明だが、外面に横方向のヘラ描き沈線を2条施す。

20は土師器椀の底部である。貼付高台をもち高台径7.0cmを測る。

1～16は弥生時代後期後半から庄内式期古段階、17は飛鳥Ⅱ～Ⅲ期、18は奈良時代、20は平安時代に位置づけられる。

確認調査の結果、第3・4層が中世、第5・6層が奈良・平安時代の遺物包含層で、第7層上面が弥生時代後期後半から庄内式期古段階の遺構面であることが判明した。第1区で自然流路の東肩、第2・3区では自然流路の堆積を確認しており、特に第2区では、自然流路の堆積からほぼ完形の二重口縁壺・鉢のほか、甕・高杯などまとまった遺物が出土している。その結果から、自然流路の東あるいは西側の近接地に当該期の集落が存在する可能性が想定できる。

⑧朝日石槍出土地（調査一覧50）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市朝日字荒毛11-1

〔面積〕 25.75㎡（敷地面積330.59㎡）

〔概要〕 朝日石槍出土地（遺跡番号370）は、和田川の南岸、名草山の北東山麓にある朝日集落から北に約200mの水田域に位置し、標高2.4m前後の沖積低地に立地する（第1・2図）。

朝日出土の石槍は、昭和55年（1980）の2月に行われた電柱設置工事の際に、弥生時代中期と考えられる石槍が出土し、採集されたもので、現在の地番で和歌山市朝日11-1、今回の調査区のすぐ東側に位置する。工事に伴う掘削は小規模なもので、地表面から約20～30cmが旧水田層、その下約30cmが赤土、さらに黒っぽい粘土であったとされている。石槍は、旧水田層の下の赤土層上面で横になった状態で出土し、その赤土は、今回の調査地の東側を流れる用水路の擁壁を設置する際、埋め戻しに使った山土で、他の地点より運び込まれた可能性が指摘されている。

今回の調査は、石槍出土地の隣接地において個人住宅建設が計画されたため、遺跡の内容確認のために事前の確認調査を実施した（第3図）。

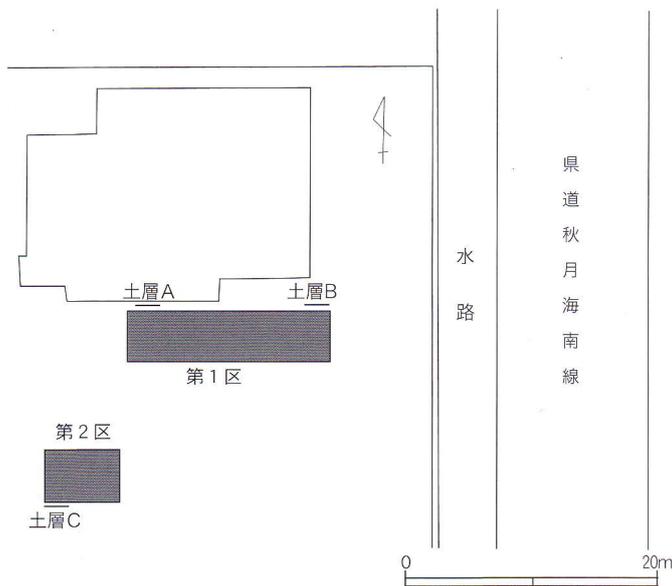
現況地盤の下、約15～20cmが現代耕作土（第1層）、約5～10cmの床土と考えられる灰褐色の粗砂混シルト（第2層）、約5～15cmの黄灰色のシルト（第3層）、約10～20cm灰黄色のシルト混粘土（第4層）、約10～15cmの灰黄色粘土（第5層）、約10～15cmの黄褐色粘土（第6層）、約15cmの灰色粘土（第7層）、約8cmの暗灰色粘土（第8層）、約5cm以上の灰色粘土



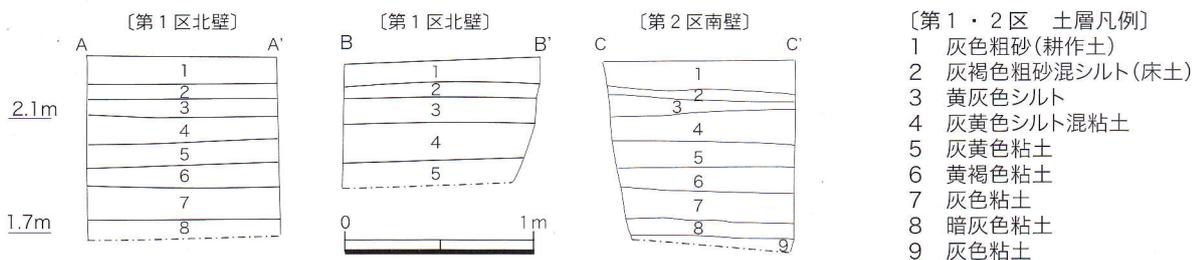
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図

〔第1・2区 土層凡例〕

- 1 灰色粗砂(耕作土)
- 2 灰褐色粗砂混シルト(床土)
- 3 黄灰色シルト
- 4 灰黄色シルト混粘土
- 5 灰黄色粘土
- 6 黄褐色粘土
- 7 灰色粘土
- 8 暗灰色粘土
- 9 灰色粘土

(第9層)が堆積する(第4図)。第3・4層は中世遺物(土師器皿・鍋等)を含む希薄な包含層で、土質や堆積状況から、水田耕作土の可能性が想定できる。第5層以下は、遺物を含まず湿地状の堆積を呈しており、自然堆積層と考えられる。

確認調査の結果、第5層以下は湿地状の堆積を呈しており、中世以降に水田耕作地(第3・4層)として利用されていた状況が確認できた。大治2年(1127)の「紀伊国在庁官人等解案」によると、和田川河口付近において、日前宮が「塩入常荒地」を開発して荘園化したとしており、今回の調査結果とも符合する。つまり、第5層以下が「塩入常荒地」の状況、第4層以上が日前宮が開発し荘園化した状況を示していると考えられる。第3・4層で出土した遺物は、小破片で摩滅しており使用地が調査地周辺にあった可能性は低く、可能性としては調査地の南に位置する丘陵部付近の集落から流入したものであると考えられる。

以前に出土した弥生時代の石槍については、水田耕作土の下の赤土層上面(山土か)から出土しており、他の地点から混入した可能性が指摘されている。出土した石槍と出土地との関連性について検討を行うと、以下の3点が指摘できる。

- ① 今回の調査では、耕作土の下から赤土層は確認できず、指摘されている通り昭和55年の電柱設置工事の際に確認された赤土層は他の地点より運ばれてきた可能性は高い。また、黒っぽい粘土とされたものについては第7層以下の粘土層が対応する可能性がある。
- ② 遺構・遺物に関しては、弥生時代にさかのぼるものはなかった。
- ③ 調査地周辺の開発は中世以降にさかのぼらず、それ以前は湿地であった。

以上のことから、出土した石槍は赤土とともに、他地点から運ばれて混入した可能性が高い。そのため、出土した石槍に関連する遺構・遺物が出土地周辺で今後確認される可能性は低いものと考えられる。

【参考文献】

- 大野左千夫・長谷川俊幸 1981「和歌山市朝日出土の石槍」『古代学研究』96 古代学研究会
額田雅裕 1995「中世頃の地形環境復原図」『和歌山市立博物館 研究紀要』10 和歌山市教育委員会

⑨木ノ本Ⅰ遺跡（調査一覧54）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市西庄字東池ノ内79他

〔面積〕 30.00㎡（敷地面積3177.77㎡）

〔概要〕 木ノ本Ⅰ遺跡（遺跡番号40）は、和泉山脈南麓の扇状地及び沖積低地に立地する。遺跡は東西約450m、南北約350mの規模をもつ遺跡である（第1図）。今回の調査は、遺跡の南端の位置において、宅地造成が計画されたため、事前の確認調査を実施した（第2・3図）。

調査区の基本層序については、第1・2・3区が異なっているため、それぞれ分けて記述する（第4図）。

第1区 現代耕作土下に青灰色シルト（第2層）、青灰色粘土混シルト（第3層）、暗灰色粗砂（第4・6層）、暗灰色粘土混シルト（第5層）、黄灰色粗砂（第7層）。

第2区 現代耕作土下、黄灰色シルト混粗砂（第2層）、青灰色粘土混シルト（第3層）、黄灰色粘土混シルト（第4層）、黄色粘土混シルト（第5層）、暗灰色シルト混粘土（第6層）、灰黄色シルト混粘土（第7層）、灰色シルト混粘土（第8層）、暗灰色シルト混粘砂（第9層）。

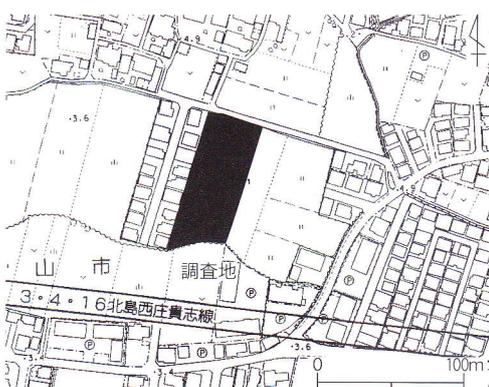
第3区 現代耕作土の下に、黄褐色粗砂混シルト（第2層）、黄灰色粘土混シルト（第3層）、灰色粗砂（第4層）、黄褐色灰色粘土混シルト（第5層）、暗灰色粗砂（第6層）となる。

遺構は第1区第3層上面で杭跡を1基検出した。時期は不明である。遺物は第1区第3・5層で土師器小片、第2区第3層で土師器・瓦器小片、近世初頭徳利破片、第4層で奈良～平安時代の須恵器壺が出土した。

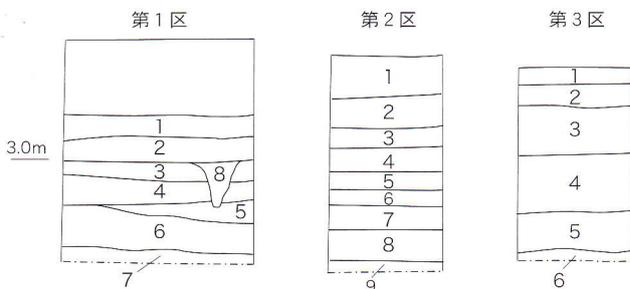
確認調査の結果、第1区で杭跡を1基検出した。第1・2区の第3・4層において希薄な遺物包含層を確認したが、摩滅も著しく本来の使用地からは離れていると考えられる。なお、奈良～平安時代の須恵器が出土しており、周辺に当該期の遺構が展開する可能性がある。



第1図 位置図

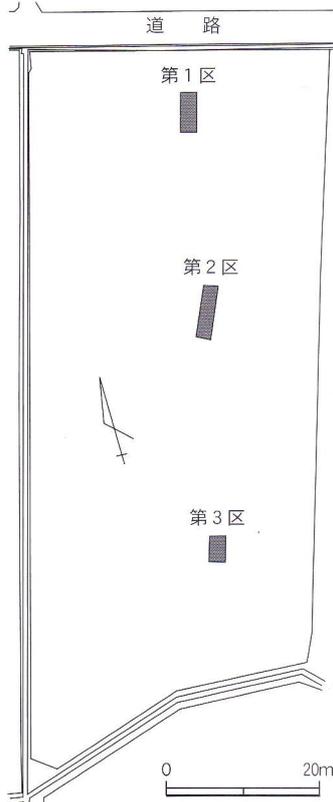


第2図 調査対象地



- | | | |
|--|--|--|
| <p>〔第1区〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 灰色粗砂（耕作土） 2 青灰色シルト 3 青灰色粘土混シルト 4 暗灰色粗砂 5 暗灰色粘土混シルト 6 暗灰色粗砂 7 黄灰色粗砂（礫混じる） 8 黄灰色シルト（杭埋土） | <p>〔第2区〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 灰色粗砂混シルト（耕作土） 2 黄灰色シルト混粗砂 3 青灰色粘土混シルト 4 黄灰色粘土混シルト 5 黄色粘土混シルト 6 暗灰色シルト混粘土 7 灰黄色シルト混粘土 8 灰色シルト混粘土 9 暗灰色シルト混粘砂 | <p>〔第3区〕</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 灰色粗砂混シルト（耕作土） 2 黄褐色粗砂混シルト 3 黄灰色粘土混シルト 4 灰色粗砂 5 黄褐色灰色粘土混シルト 6 暗灰色粗砂 |
|--|--|--|

第4図 土層断面図



第3図 調査場所

⑩井辺遺跡 (調査一覧57)

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前の確認調査

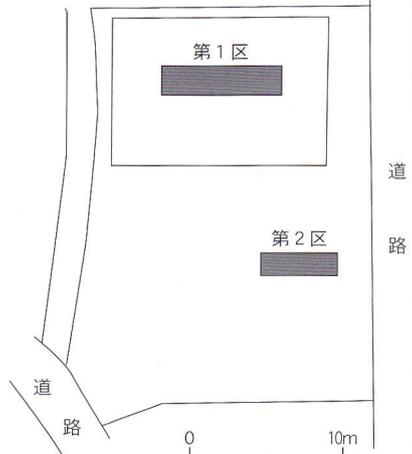
〔場所〕 和歌山市神前字松ノ本266番18

〔面積〕 24.3㎡ (敷地面積491.25㎡)

〔概要〕 井辺遺跡 (遺跡番号308) は東西約1.2km、南北500mの規模をもつ弥生時代から古墳時代を中心とする遺跡で福飯ヶ峰山麓部から平野部に立地する (第1図)。

遺跡南東隅の位置で集合住宅建設が計画されたため、事前の確認調査を実施した (第2・3図)。

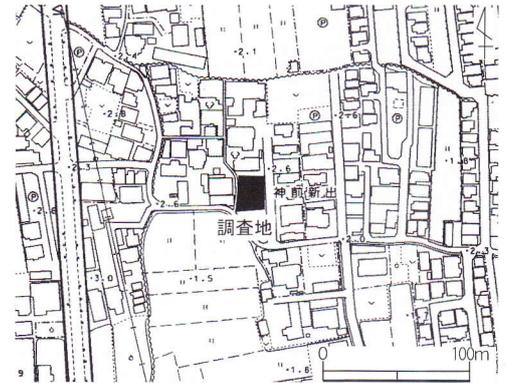
現況地盤の下、約65~75cmが造成土で、その下に約10~20cmの現代耕作土 (第1層)、約5cmのその床土と考えら



第3図 調査場所



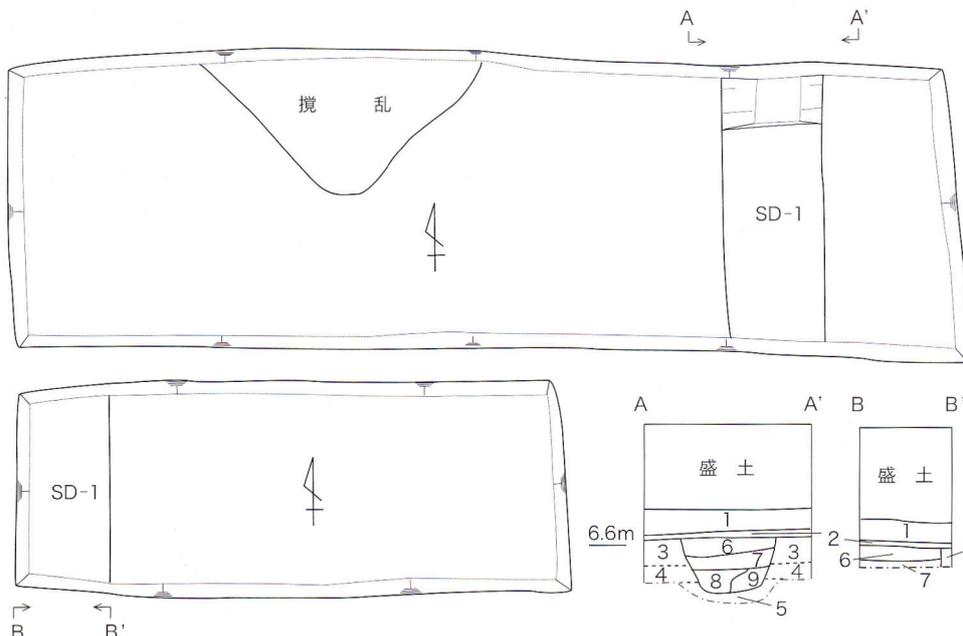
第1図 位置図



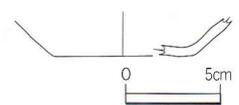
第2図 調査対象地

れる灰褐色シルト (第2層)、約20cmの灰色粗砂混シルト (第3層)、約15cmの灰褐色シルト (第4層)、約15cm以上の褐灰色シルト (第5層) が堆積する (第4図)。第3層以下に遺物は含まず、自然堆積層であると考え。遺構は第3層上面で南北溝 (SD-1) を検出した。溝は長さ14m以上、幅約80cm、深さ約40cmを測る。溝の検出時に土師器杯が出土した (第5図)。底径7.2cmを測り、奈良時代に位置づけられる。

確認調査の結果、第3層上面において奈良時代の南北溝を検出した。溝は宅地の区画溝の可能性も考えられ、溝の周囲に建物跡などが展開している可能性が想定できる。



第4図 土層断面図



第5図 出土遺物実測図

- 1 暗灰色粗砂混シルト (耕作土)
- 2 灰褐色シルト (床土)
- 3 灰色粗砂混シルト
- 4 灰褐色シルト
- 5 褐灰色シルト
- 6 灰色シルト
- 7 褐灰色シルト
- 8 灰色粗砂混シルト
- 9 灰褐色シルト (7のブロック含む)



①木ノ本Ⅱ遺跡（調査一覧59）

〔経緯〕 宅地造成工事に伴う事前確認調査、立会調査

〔場所〕 和歌山市木ノ本字村ノ西1162、1163、字梶垣内
1168-1、1168-2

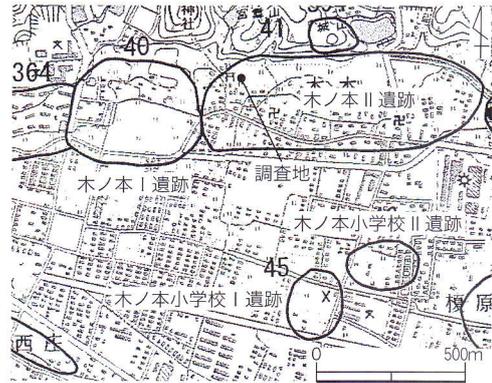
〔面積〕 27.47㎡（敷地面積1274㎡）

〔概要〕 木ノ本Ⅱ遺跡（遺跡番号41）は東西約450m、南北300mの規模をもち、中世の集落が確認されている（第1図）。今回の調査は、遺跡の北西隅の位置で、宅地造成工事が計画されたため、事前の確認調査を実施した（第2・3図）。第2区で中世の遺構を確認したため、汚水・雨水管の掘削部分についても立会調査を行った。

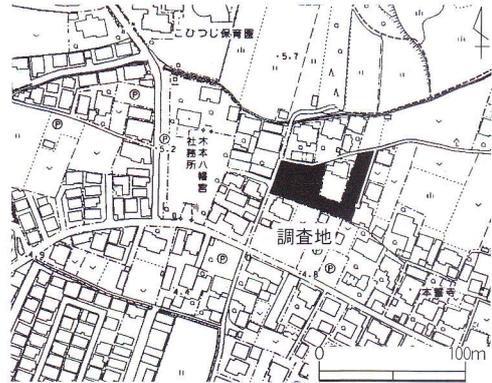
現況地盤の下、約10～20cmが造



第3図 調査場所

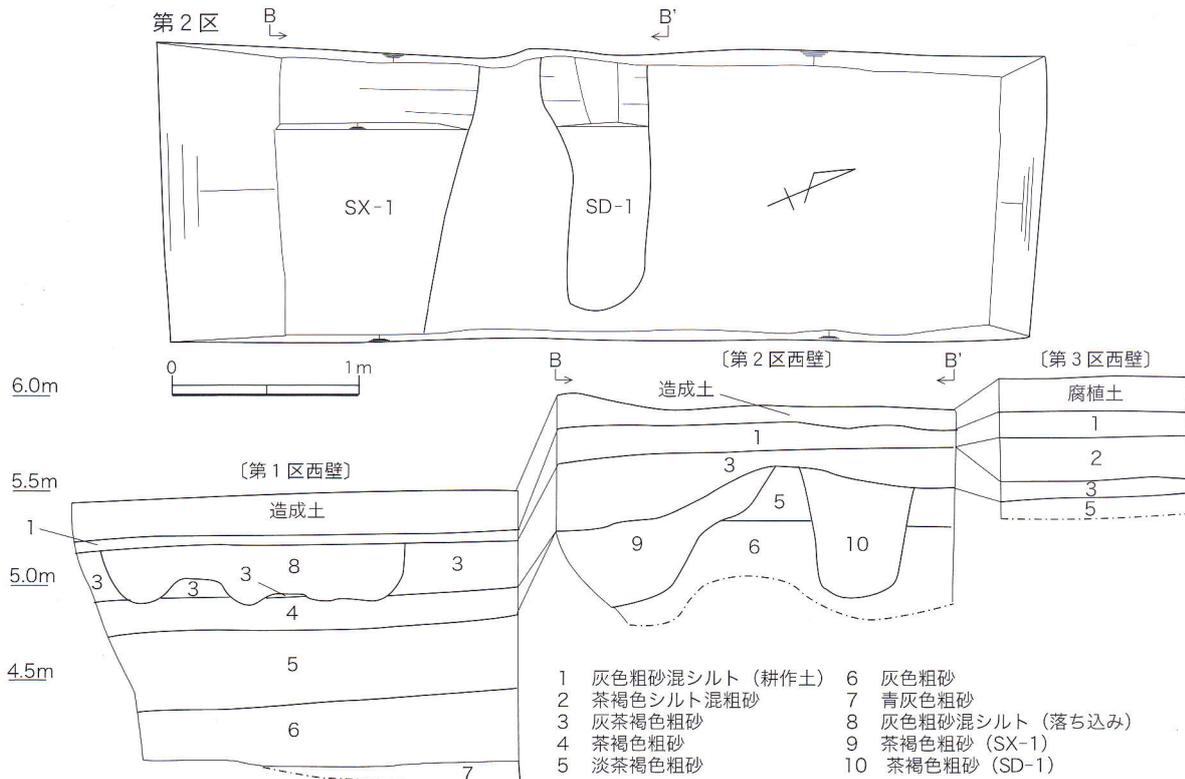


第1図 位置図

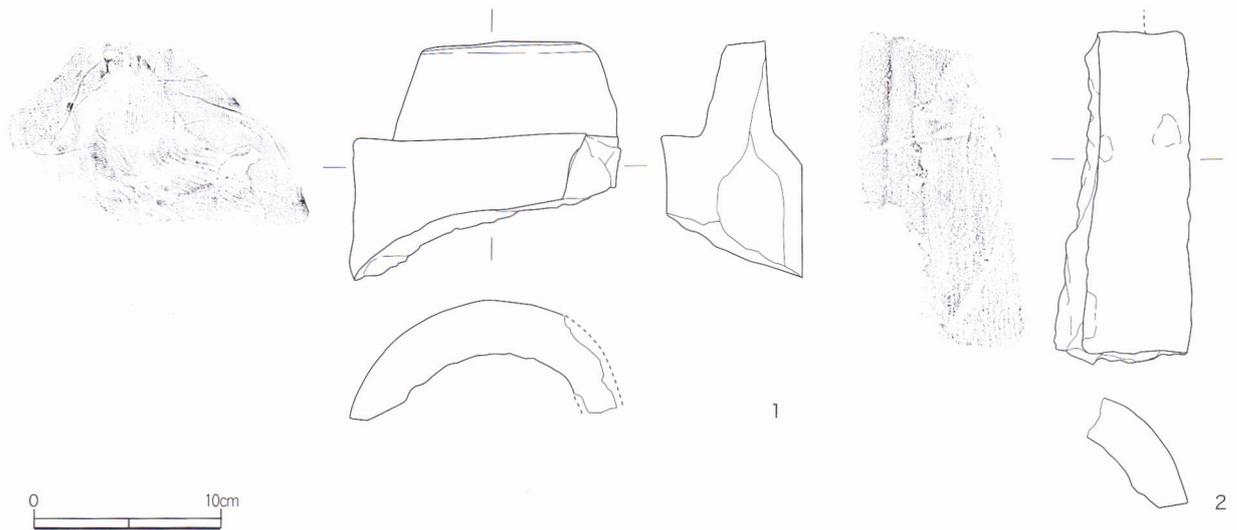


第2図 調査対象地

成土で、その下に約5～15cmの現代耕作土（第1層）、約20cmの茶褐色シルト混粗砂（第2層）、約10～30cmの灰茶褐色粗砂（第3層）、約15cmの茶褐色粗砂（第4層）、約30～40cmの淡茶褐色粗砂（第5層）、約35cmの灰色粗砂（第6層）、約10cm以上の青灰色粗砂（第7層）が堆積する（第4図）。



第4図 遺構平面図・土層断面図



第5図 遺物実測図

第4層以下は遺物を含まず、自然堆積層であると考えられる。

遺構は第1区・第3区の第2層上面、第2区の第4層上面において落ち込み、溝等を検出した(第4図)。第2層上面で検出した遺構は、いずれも現代耕作土(第1層)の下面から掘り込まれ、近世の瓦などが多く含まれる。包含する遺物、堆積土から近世以降の時期の遺構である可能性が高い。第4層上面の遺構は、落ち込み1基(SX-1)、溝1条(SD-1)を検出した。SX-1は東西約1.5m以上、南北約1.0m以上、最深部0.7mを測る。SD-1は幅0.5m、長さ1.3m、深さ0.7mを測る。SX-1からは鎌倉時代から室町時代の丸瓦が2点出土した(第5図)。1・2は丸瓦である。凸面は縄タタキ後、ナデを施し、凹面には布目痕がある。2には吊り紐の痕跡が認められる。

確認調査の結果、第2区の第4層上面において落ち込み1基、溝1条を検出した。落ち込みからは鎌倉時代から室町時代の丸瓦が出土しており、溝に関しても同様の時期の遺構である可能性が想定される。また、立会調査時にも廃土から丸瓦・平瓦がそれぞれ1点出土している。調査区において中世の柱穴などは確認できなかったが、今回の調査地の東に位置する隣接地において確認調査が実施されており、この調査では、第2区で検出した落ち込みや溝と類似する遺構が検出されている。これらの遺構の検出面は、堆積状況を検討すると、今回確認した中世の遺構面と同一面から掘削されている可能性が高い。そのため、対象地周辺に中世の遺構が展開しているものと考えられる。

⑫ 関戸遺跡〔第1次調査〕（調査一覧61）

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前の確認調査

〔場所〕 和歌山市関戸4丁目685番1

〔面積〕 14.4㎡（敷地面積439.72㎡）

〔概要〕 関戸遺跡（遺跡番号334）は東西約200m、南北約580mの規模をもつ遺跡で海岸砂丘上に立地する。（第1図）。本格的な発掘調査歴はないものの、古墳時代、奈良時代、鎌倉から室町時代の遺物が比較的多く採集されている。漁網用の土錘類も多く出土し、漁村集落遺跡としての性格が強いが、律令期には和同開珎・神功開宝・唐草文軒丸瓦、中世では国産陶器・中国産陶磁器などが出土し、紀ノ川河口付近の外港的性格を併せもつ集落であった可能性も指摘されている。

今回の調査は、遺跡のほぼ中央部で集合住宅建設が計画されたため、浄化槽部分について確認調

査を実施し、遺構が確認されたため、記録保存を行った（第2・3図）。

現況地盤の下、約5cmが造成土で、その下に約15cmの暗茶色粗砂（第1層）、約20cmの茶色粗砂（第2層）、約15～20cmの茶灰色粗砂（第3層）、約15～25cmの暗茶灰色粗砂（第4層）、約10cm以上の暗黄灰色粗砂（第5層）が堆積する（第4図）。第3・4層は平安時代から鎌倉時代の遺物を含む包含層である。第5層以下に遺物は含まず、自然堆積層であると考えられる。

第5層上面において奈良時代から室町時代の遺構面を確認した。

〔奈良時代の遺構〕

落ち込みを1基（SX-2）検出した。SX-2は南北0.8m、東西0.3m、深さ0.1mの不整形な落ち込みで、須恵器蓋（3）が出土した。

〔平安時代～鎌倉時代の遺構〕

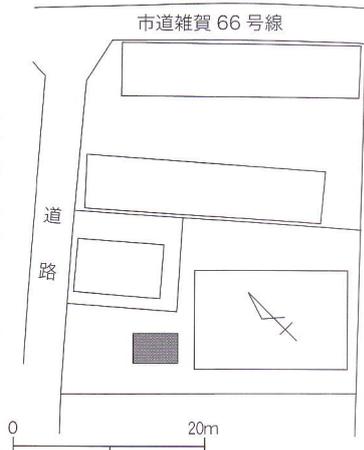
ピット11基（P-1～4・6～12）、溝1条（SD-1）、土坑1基（SK-1）、落ち込み1基（SX-1）を検出した。



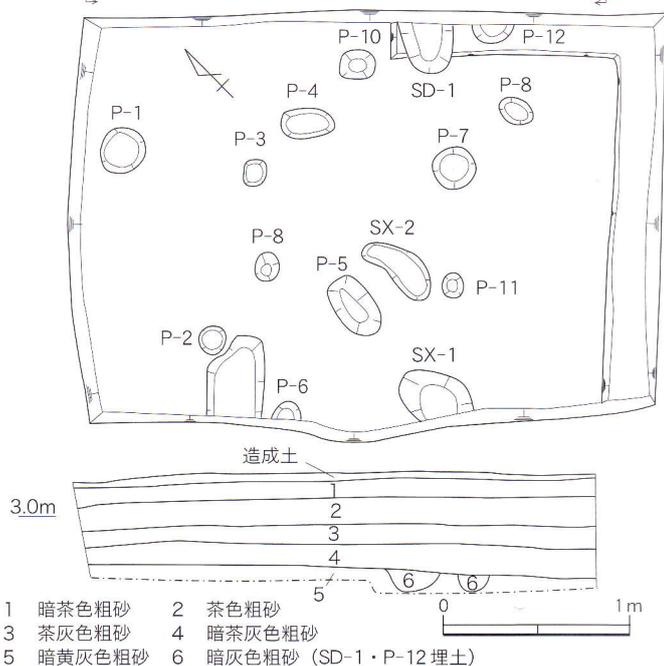
第1図 位置図



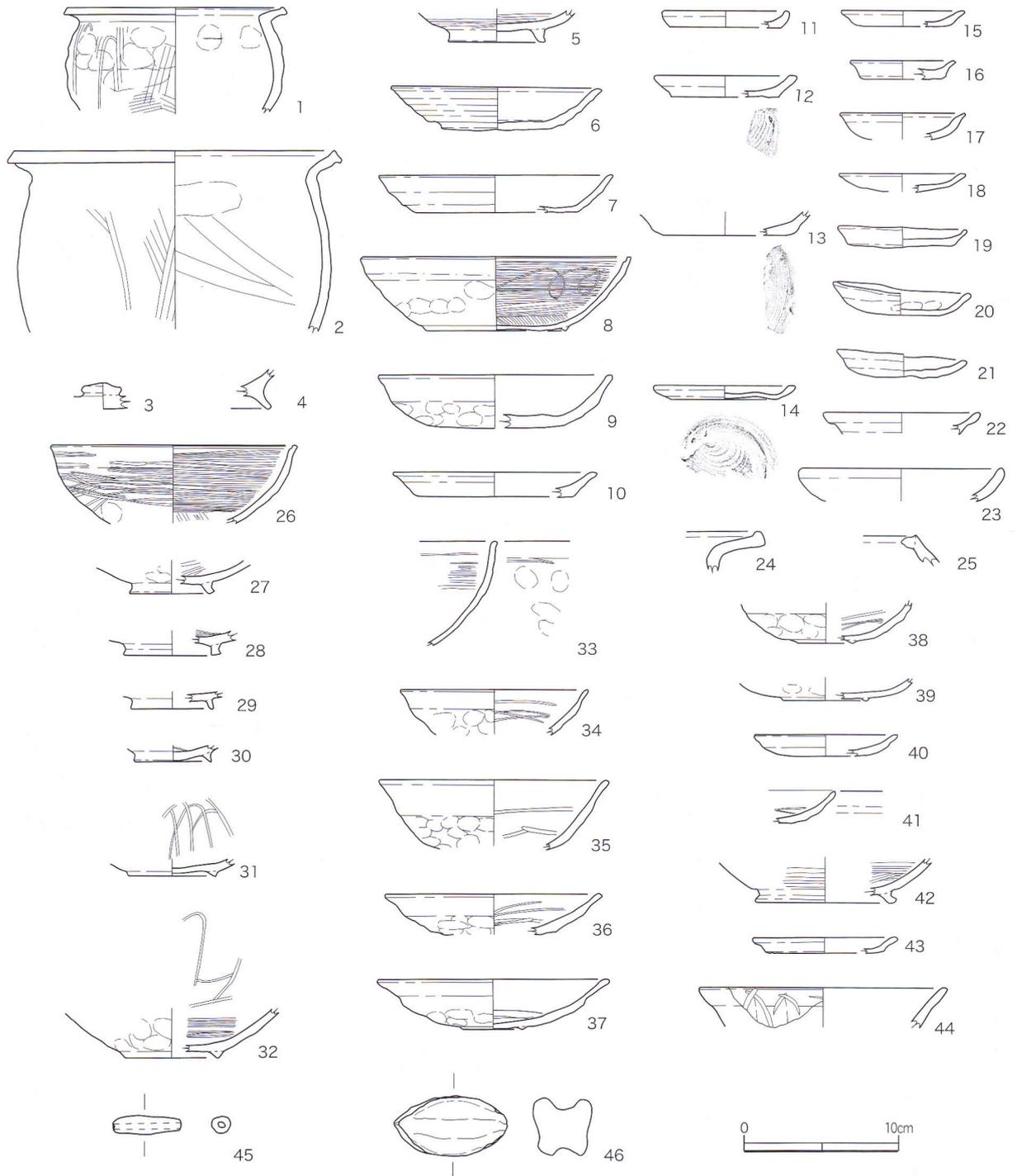
第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 遺構平面図・土層断面図



1・2・6・7・16・34・40:SK-1, 3: SX-2, 4・27・33:SD-1, 5:P-8, 8・11・12・15・17・18・22・23・30・38・43
 ・45・46:第4層, 9・10・14・26:P-1, 13・31・35・39: SX-1, 19・20・21・24: 廃土, 25:P-1, 28:P-6, 29・32・36
 ・37・42・44: 第3層, 41:P-7

第5図 遺物実測図

ピットはP-4をのぞき平面形が円形を呈し、直径0.2~0.4m、深さ0.2~0.3mを測る。P-4は長円形で、長軸0.4m、東西0.3mを測る。SD-1は幅0.4m、長さ0.4m以上、深さ0.2mを測る。SK-1は直径0.6mの不整円形を呈する。SX-1は幅0.45m、長さ0.65m、最深部が0.2mを測る。

〔室町時代の遺構〕

ピットを1基(P-5)検出した。P-5は平面形が長円形を呈し、南北0.5m、東西0.3mを測る。

遺物は、弥生土器、須恵器、中世土師器、黒色土器、瓦器などコンテナ1箱が出土した。そのうち、器種判定が可能なものについて一部図化を行った（第5図）。

1・2は弥生土器甕である。1は外面にユビオサエを施した後、粗いハケ調整を行う。2は外面に粗いハケ調整、内面にユビオサエ及び板状工具によるナデ調整を行う。3は須恵器杯蓋である。4は脚台をもつ土師器皿、5は土師器椀で内外面にミガキ調整を施す。6・7は回転台成形の土師器皿である。8は黒色土器椀で外面下半部にユビオサエ、内面にヘラミガキ調整を施す。内面には暗文が認められる。9は土師器杯で外面下半部にユビオサエを施す。10～22は土師器皿である。10～14は底部回転糸切のものである。24・25は土師器釜である。26～39は瓦器椀である。26は大和型瓦器椀で内面に沈線をもち、内外面にミガキ調整、見込み部に連結輪状文を施す。27～39は外面下半をユビオサエ、上半部にナデ調整を施す。36・37など和泉型瓦器椀の可能性のある資料もあるものの、紀伊型瓦器椀が主体を占める。27～32は見込み部に連結輪状文を施す。27～29は高く外に開く高台、30～32は断面が逆三角形の高台をもつ。33は内面に密なミガキ調整を施す。34～39は内面に螺旋状暗文を施す。37～39は断面が逆三角形の細く、低い高台をもつ。40・41は瓦器皿で内面にミガキ調整を施さないもの（40）と施すもの（41）がある。42は瓦器鉢で内外面にミガキ調整を施す。43は山皿の特徴をもち、東海地方からの搬入品の可能性がある。44は龍泉窯系青磁椀で鎬蓮弁文を施す。45・46は土錘で45が管状のもの、46が両溝式のものである。

1・2が弥生時代中期後半、3が奈良時代、4～8が平安時代、9が11世紀後半、10～25は平安時代末から鎌倉時代、26～29は11世紀後半、30～33、41・42は12世紀、34・35・40は12世紀～13世紀、36～39は13世紀、44は13世紀後半に位置づけられる。

発掘調査の結果、奈良時代、平安時代から鎌倉時代、室町時代の遺構を確認した。なかでも平安時代から鎌倉時代の遺構・遺物が多い。遺物には、管状土錘、両溝式土錘といった漁撈具のほか、大和型瓦器椀や和泉型瓦器椀の可能性のあるもの、東海地方からの搬入品の可能性のある山皿や龍泉窯系の中国産青磁が出土するなど搬入品の占める割合も高いという特徴をもつ。したがって今回の調査成果からも、従来指摘されているように、漁村的集落と海上交通を利用する物資流通の拠点集落としての性格を併せもつ遺跡として把握できる。

⑬神前Ⅱ遺跡（調査一覧63）

〔経緯〕 電気通信の中継施設建設に伴う立会調査

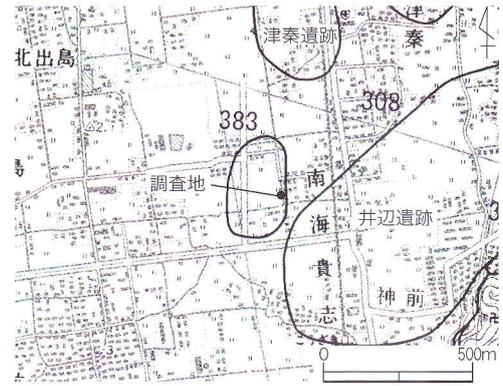
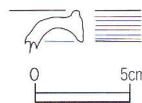
〔場所〕 和歌山市有家字ヒサゲ371-3、371-4

〔面積〕 15.75㎡（敷地面積1036㎡）

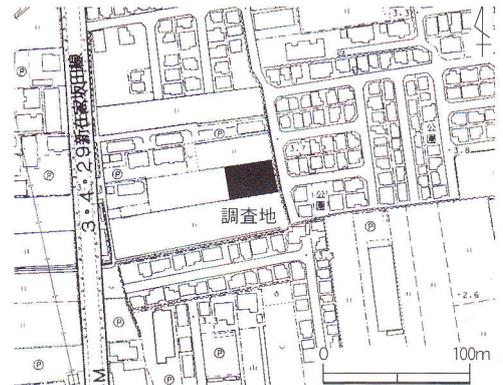
〔概要〕 神前Ⅱ遺跡（遺跡番号383）は、標高約2.6m前後の沖積低地に立地する。遺跡は東西約200m、南北約350mの規模をもつ遺跡である（第1図）。今回の調査は、遺跡の東端の位置において、電気通信の中継施設建設が計画されたため、埋設配管部分について立会調査を実施した（第2・3図）。

現況地盤の下、約65cmが造成土で、その下に約25cmの現代耕作土（第1層）、約5cmの床土と考えられる灰黄色粗砂混シルト（第2層）、約10cmの灰黄褐色粗砂混シルト（第3層）、約20cmの黄褐色粗砂混シルト（第4層）、約20cm以上の灰黄褐色シルト混粗砂（第5層）が堆積する（第4図）。第3層は、弥生土器、瓦器の小片を含む遺物包含層である。第4層以下には、遺物は含まないことから、自然堆積層であると考えられる。

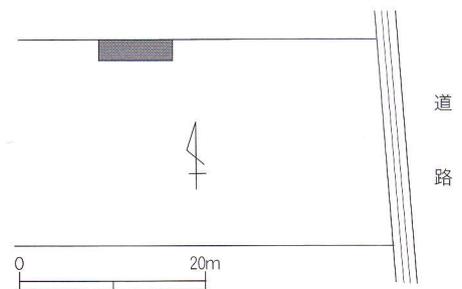
遺構は第4層上面で弥生時代中期後半の土坑（SK-1）を検出した（第4図）。平面形は円形を呈し、直径約1m、深さ0.3mの規模をもつ。埋土の上層より広口壺の口縁部などが出土した（第5図）。壺は口縁部上端と下端を拡張させ、外面に凹線文を施すもので、紀伊Ⅳ-1・2様式に位置づけられる。周辺に弥生時代の遺構が展開している可能性が想定でき（第5図）出土遺物実測図



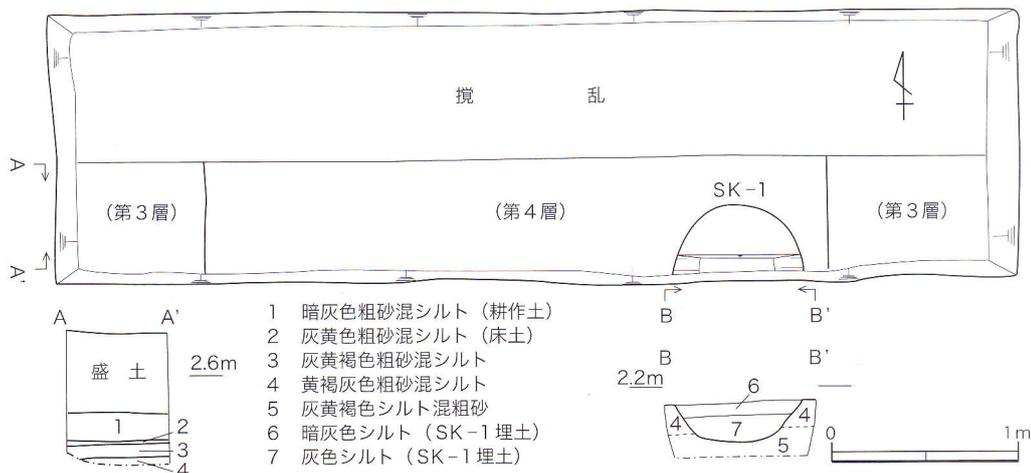
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図

- 1 暗灰色粗砂混シルト（耕作土）
- 2 灰黄色粗砂混シルト（床土）
- 3 灰黄褐色粗砂混シルト
- 4 黄褐色粗砂混シルト
- 5 灰黄褐色シルト混粗砂
- 6 暗灰色シルト（SK-1埋土）
- 7 灰色シルト（SK-1埋土）

⑭磯脇遺跡（調査一覧69）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前の確認調査

〔場所〕 和歌山市本脇字西畑坪309-2

〔面積〕 9.24㎡（敷地面積439.72㎡）

〔概要〕 磯脇遺跡（遺跡番号37）は東西約120m、南北80mの規模をもつ遺跡で、砂州帯に立地する（第1・2図）。今回の調査は、遺跡の中央北寄りの位置で、個人住宅建設が計画されたため、事前の確認調査を実施した（第3図）。

現況地盤の下、約45cmが造成土で、その下に約40cmの灰黄褐色粗砂（第1層）、約40cmの暗灰黄褐色粗砂（第2層）、約5cm以上の灰褐色粗砂（第3層）が堆積する（第4図）。第1層で土師器小片、第2層で須恵器・黒色土器・中世土師器・近世陶磁器が出土した。出土した黒色土器はA類碗の底部片で逆台形の貼付高台を有する。10世紀（平安時代）に位置づけられる。第3層は遺物を含まず、自然堆積層であると考えられる。

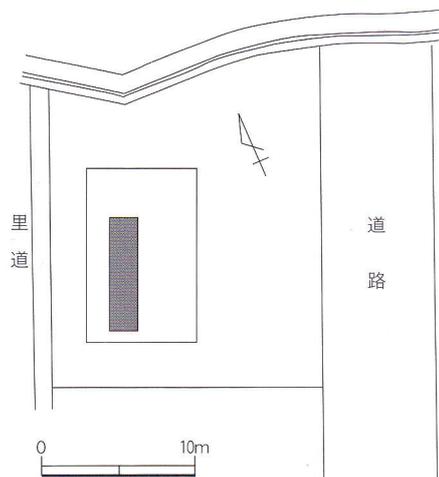
確認調査の結果、遺構はなかったが、第1層で土師器小片を含む希薄な包含層、第2層で古代・中世・近世の遺物を含む包含層を確認した。遺物は少量で摩滅しているものも多いことから、調査地周辺に遺構が展開している可能性は低いと考える。また、第2層から出土した遺物の時期は、磯脇遺跡に隣接する西庄遺跡の遺跡内容と類似することから、磯脇遺跡自体は西庄遺跡に含まれる可能性もあり、今後周辺の調査例が増えてきた段階で検討する必要があると考える。



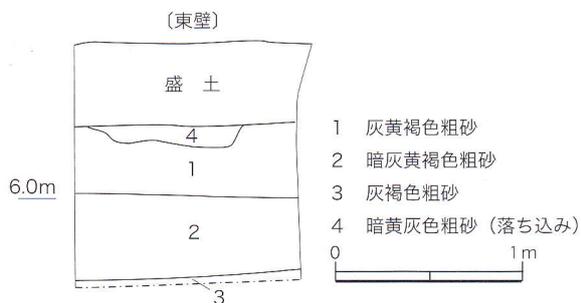
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図

⑮ 鳴神V遺跡〔第10次確認調査〕（調査一覧79）

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市秋月304-1

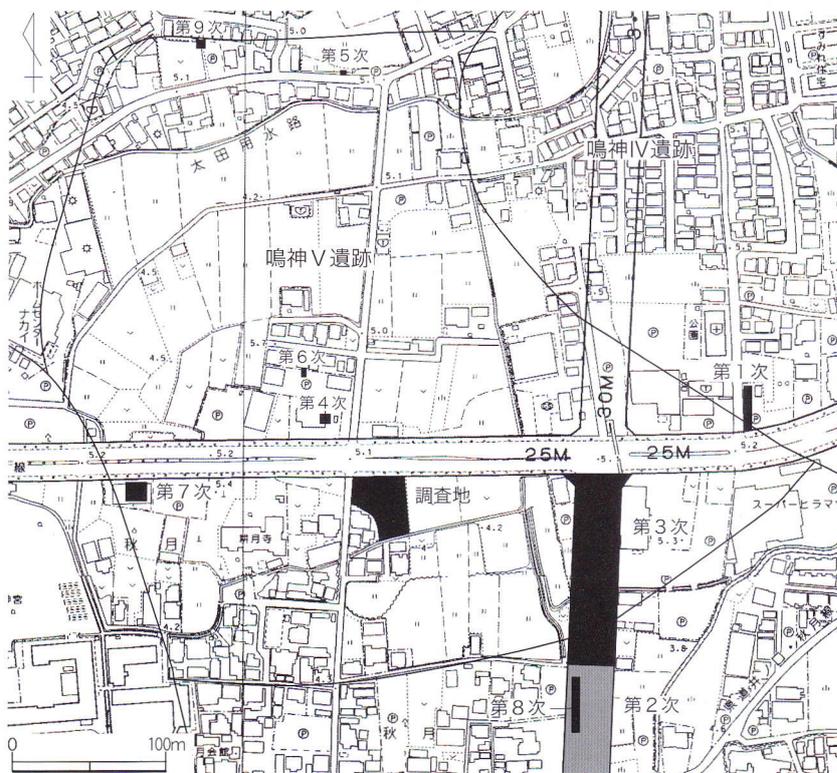
〔面積〕 45.61m²（敷地面積2786.98m²）

〔概要〕 鳴神V遺跡（遺跡番号318）は東西約500m、南北400mの規模をもつ弥生時代から平安時代の遺跡である（第1図）。今回の調査地は、遺跡中央部から南寄りの位置で店舗建設が計画されたため、事前の確認調査を実施したものである（第2図）。

基本層序は、現代水田耕作土（第1層）が約15～20cm堆積しており、その床土（第2層）と考えられる灰褐色粗砂混シルトが約5～10cm堆積する。その下に、約10～15cmの灰色粗砂混シルト（第3層）、約10～20cmの灰黄色粗砂混シルト（第4層）、約15～35cmの暗灰色粗砂混シルト（第5層）、約15～20cmの灰色粗砂混シルト（第6層）、約20～30cmの灰色シルト（第7層）、約15cmの暗灰色粗砂混シルト（第8層）、約20cmの灰色シルト（第9層）、約25～35cmの灰黄色粗砂混シルト（第10層）、約20cm以上の黄褐色シルト混粗砂（第11層）が堆積する。第3～9層は遺物を含む。第10層以下は自然堆積層であると考えられる。第5～7層に関しては、第4区のみ、第8・9層は第5区のみで確認しており、現状では遺物包含層として扱っているが、第1～3区で検出した遺構から出土する遺物と同様の時期の遺物を含むことから、遺構埋土の可能性も想定できる。

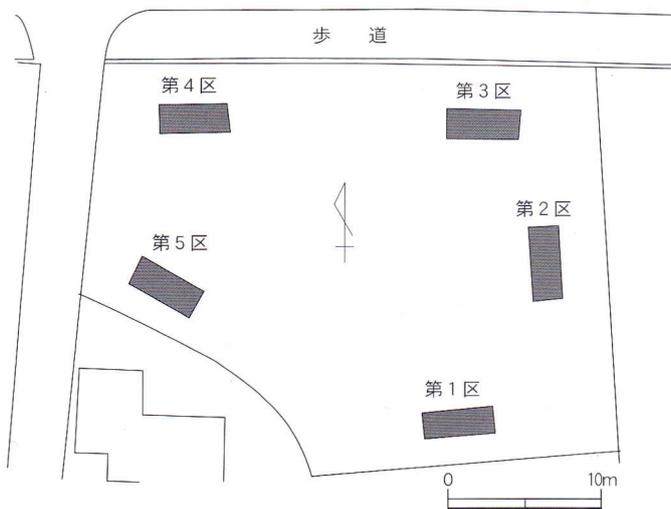
遺構は、第2～4区の第4層上面において中・近世の素掘小溝、第1～3・5区の第10層上面において奈良時代から鎌倉時代の遺構面を検出した（第3・4図）。

第1区 第10a層上面において、落ち込みを2基（SX-1・2）確認した。SX



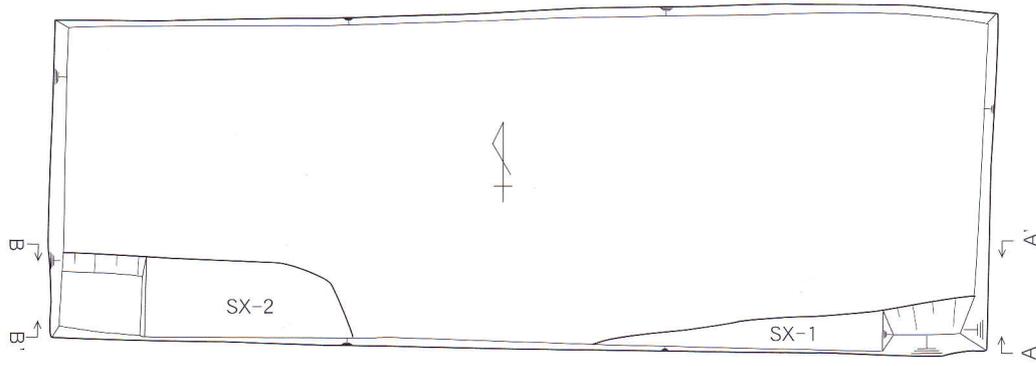
第1図 位置図

国道24号線

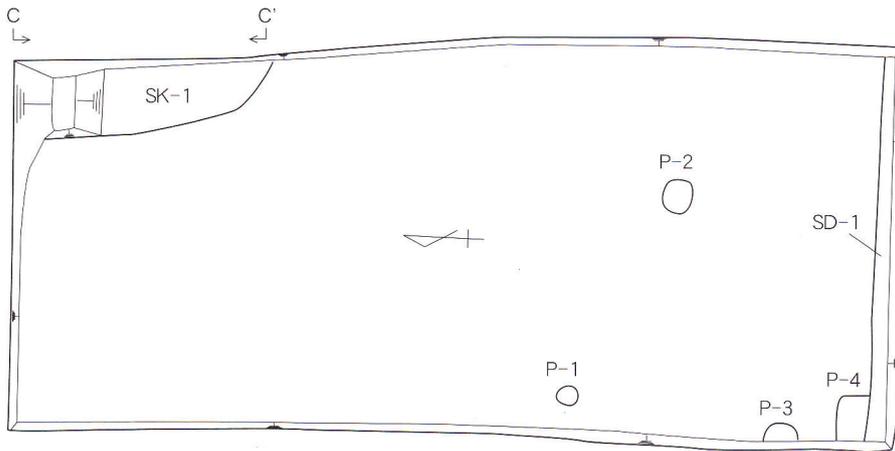


第2図 調査場所

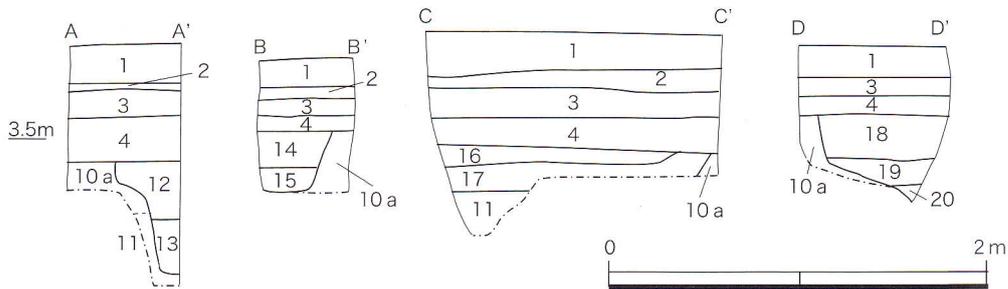
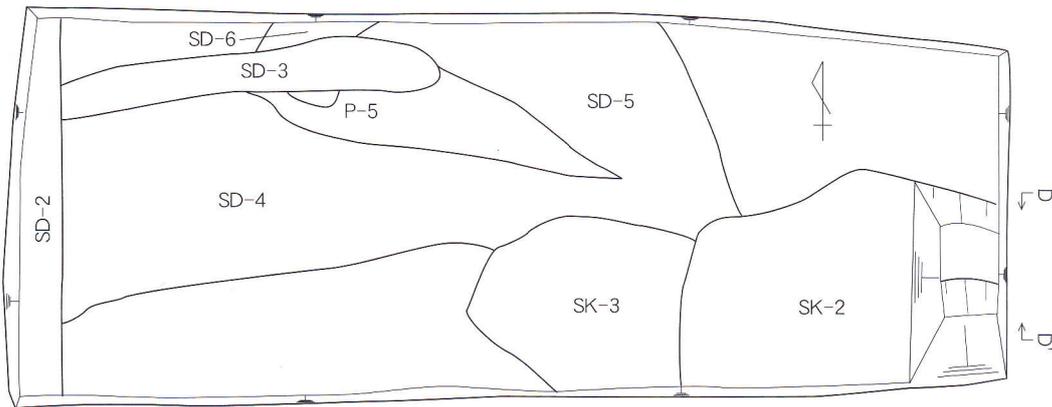
第1区



第2区

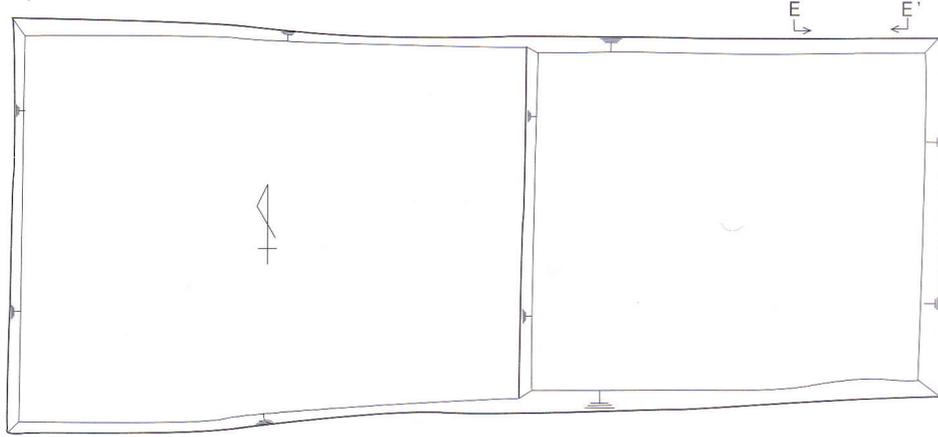


第3区

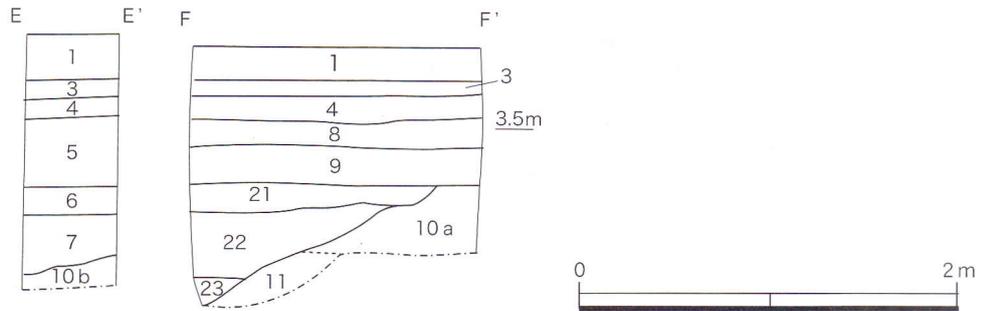
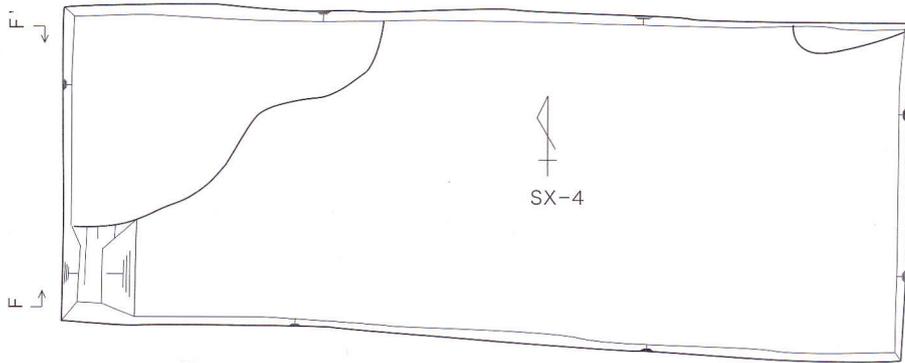


第3区 第1~3区 遺構平面図・土層断面図

第4区



第5区

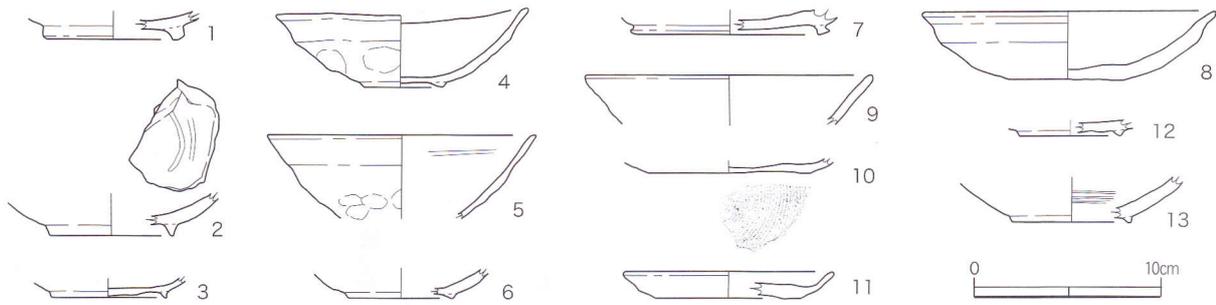


[第1～5区土層凡例]

- | | |
|------------------|----------------------------------|
| 1 灰色粗砂混シルト (耕作土) | 12 灰褐色粗砂混シルト (SX-1埋土) |
| 2 灰褐色粗砂混シルト (床土) | 13 灰褐色シルト (SX-1埋土) |
| 3 灰色粗砂混シルト | 14 灰褐色粗砂混シルト (SX-2埋土) |
| 4 灰黄色粗砂混シルト | 15 灰褐色粗砂混シルト (10aの土混じる) (SX-2埋土) |
| 5 暗灰色粗砂混シルト | 16 灰褐色粗砂混シルト (SK-1埋土) |
| 6 灰色粗砂混シルト | 17 灰褐色粗砂混シルト (11の土混じる) (SK-1埋土) |
| 7 灰色シルト | 18 暗灰色粗砂混シルト (SK-2埋土) |
| 8 暗灰色粗砂混シルト | 19 暗灰色シルト混粗砂 (SK-2埋土) |
| 9 灰色シルト | 20 茶褐色シルト混粗砂 (礫含む) (SK-2埋土) |
| 10a 灰黄色粗砂混シルト | 21 暗灰色シルト (SX-3埋土) |
| 10b 灰黄色シルト | 22 灰褐色シルト (SX-3埋土) |
| 11 黄褐色シルト混粗砂 | 23 灰色シルト (SX-3埋土) |

第4図 第4・5区 遺構平面図・土層断面図

- 1は東西2m以上、深さ0.55mを測る。SX-2は東西1.5m以上、南北0.4m以上、深さ0.3mを測る。
第2区 第4層上面において東西方向の素掘小溝(SD-1)を1条検出した。第10層上面では土坑1基(SK-1)、ピット4基(P-1～4)検出した。SK-1は東西0.4m以上、南北1.3m以上、深さ0.2mを測る。P-1～3は直径0.1～0.15mを測る。P-4は方形の掘方をもつピットである。



(1～5：第4区第5・6層、第4区第7層、7～12：第3区SX-3、13：第5区SX-4)

第5図 出土遺物実測図

第3区 第4層上面において、南北方向の素掘小溝（SD-2）を1条検出した。第10層上面では多くの遺構が重複しており、平面観察で確認できた限り、土坑2基（SK-2・3）、溝4条（SD-3～6）、ピット（P-5）などが確認できた。遺構検出時には正確に個々の遺構が認識できなかったため、まとめてSX-3として遺物を取り上げている。SK-2は東西1.6m以上、南北1.1m以上、深さ約0.45mを測り、さらに南側に向かって落ち込んでいる。SK-3は東西1.1m以上、南北0.9m以上を測る。SD-3は幅約0.2m、長さ2.0mを測る。SD-4は幅約0.5～1.0m、長さ3.0m以上、SD-5は幅約0.5～1.0m、長さ0.8m以上を測り、SD-4との前後関係は平面観察では判断できなかった。SD-6は幅約0.5m、長さ0.1m以上を測る。P-5は直径約0.4mを測る。

第4区 第4層上面において、南北方向の素掘小溝（SD-7）を1条検出した。

第5区 第10a層上面において、溝状遺構（SX-4）を検出した。断面がV字状を呈し、南北約1.3m以上、東西4.5m以上、深さ0.65mを測る規模の大きなものである。現状では第8・9層のみを遺物包含層として扱っているが、堆積状況が第4区と類似することから、第4区から第5区にかけて谷状の落ち込みが展開していた可能性も想定できる。

遺物は、須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、中世土師器などコンテナ1/2箱が出土した。そのうち、器種判定が可能なものについて一部図化を行った（第5図）。

1は黒色土器碗の底部である。内面に炭素を吸着させたA類である。2～6は瓦器碗である。2は高くしっかりとした断面三角形の高台をもち、内面にミガキが施される。3は断面三角形で低い高台をもつ。4は口径13.4cm、器高3.8cm、高台径4.1cmを測り、紐状の退化した高台をもつもので、外面下半部にユビオサエを施す。5は口径14.2cmを測り、外面下半部にユビオサエ、内面にミガキを施す。6は断面三角形の退化した低い高台をもつ。7は須恵器の坏で、外側に向けて開く高台をもつ。8は土師器坏で口縁部がナデにより外反する。9は土師器碗の口縁部で、口径15.0cmを測る。10・11は土師器皿で底部に糸切り痕がみられる。11は口径11.0cm、器高2.4cm、底径3.8cmを測る。12・13は瓦器碗で、断面三角形の低い高台をもつ。以上の遺物の時期は、1・8～10が平安時代中頃、2が11世紀後半、3が12世紀、4・5が13世紀後半、6が12世紀後半から13世紀前半、7が奈良時代、12・13が12世紀後半に位置づけられる。

確認調査の結果、第1～3区で奈良時代から鎌倉時代の遺構面を確認した。第1・2区に比べると第3区では土坑・溝・ピットなどがかなり重複した状態で確認されており、遺構が展開する中心は第3区周辺あるいはそれよりも北側が想定される。第4・5区に関しては、大規模な溝状遺構あるいは谷状の落ち込みの可能性を想定しており、第4・5区の西側とは大溝あるいは自然の落ち込みによりさえぎられる状況が認められる。そのため、第1～3区で検出した遺構は、第4・6・7次調査で確認した遺構とは異なる遺構群である可能性も想定できる。

⑩木ノ本Ⅱ遺跡（調査一覧82）

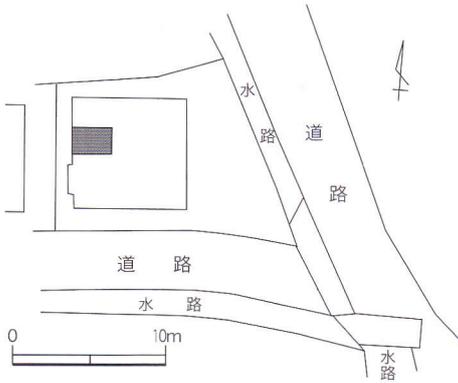
〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市木ノ本字宮ノ前7番7

〔面積〕 4㎡（敷地面積140.87㎡）

〔概要〕 木ノ本Ⅱ遺跡（遺跡番号41）は東西約950m、南北300mの規模をもつ遺跡で、近年、和歌山市教育委員会による確認調査等により鎌倉時代を中心とする遺構や縄文時代中～後期の縄文土器が出土する状況が確認されている（第1図）。

今回の調査は、遺跡の中央東側で、個人住宅建設が計画されたため、事前の確認調査を実施したものである（第2・3図）。



第3図 調査場所

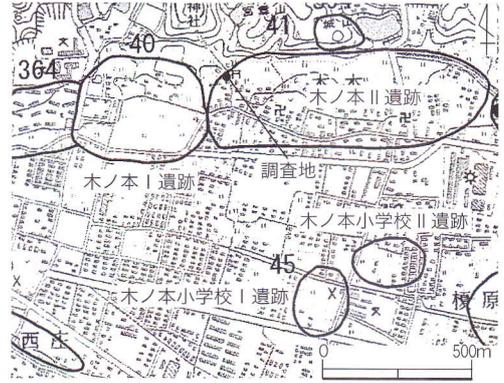
現地表面下、約65～80cmの造

成土で、その下に約15cmの灰色粗砂混シルト（第1層）、約15cmの黄灰色粗砂混シルト（第2層）、約20cmの青灰色シルト混粗砂（第3層）、約50cmの茶褐色シルト混粗砂（第4層）が堆積する（第4図）。第4層以下は遺物を含まず、自然堆積層であると考えられる。

遺構は第4層上面において中世の落ち込み（SX-1）を確認した。SX-1は幅1m、深さ30cmを測り、瓦器、中世土師器小片を含む。周辺への遺構の展開に関しては、落ち込みから出土した遺物はいずれも少量で摩滅している。そのため、周辺への遺構の展開に関しては遺物量も少なく不明である。今後、周辺において明確な遺構面が形成されるかどうか、注意する必要がある。

【参考文献】

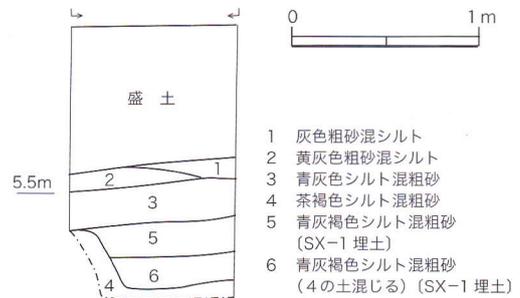
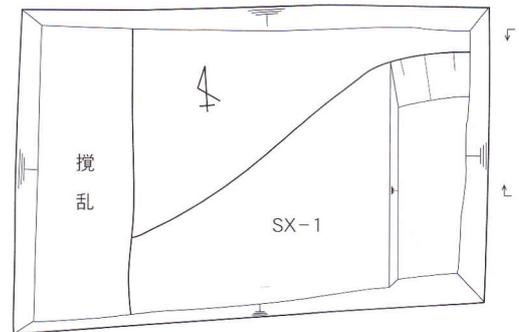
和歌山市教育委員会 2009「2.（3）④木ノ本Ⅱ遺跡」『和歌山市内遺跡発掘調査概報—平成19年度—』



第1図 位置図



第2図 調査対象地



第4図 遺構平面図・土層断面図

⑰西田井遺跡 (調査一覧83)

〔経緯〕 店舗建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市西田井字森ノ前256番2、265番1、266番1

〔面積〕 47.73㎡ (敷地面積3042.73㎡)

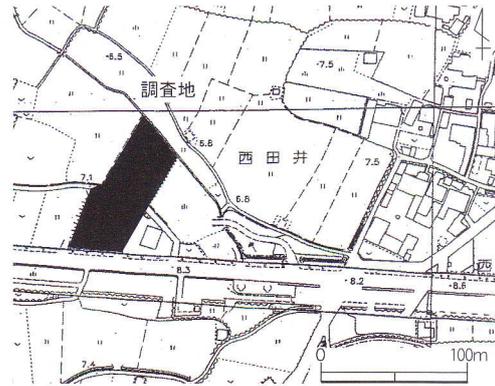
〔概要〕 西田井遺跡 (遺跡番号388) は、紀ノ川北岸の標高7.0m前後の沖積低地に立地する。遺跡は東西約1km、南北約0.7kmの規模をもつ弥生時代から中世の集落遺跡である (第1図)。今回の調査は、財団法人和歌山県文化財センターが行った一般国道24号バイパス建設に伴う事前調査の第ⅡA区の北側で店舗建設が計画されたため、確認調査を実施した (第2・3図)。

調査区の基本層序については、第1～3区と第4・5区で堆積が異なる。よって、第1～3区と第4・5区に分けて記述する (第4図)。

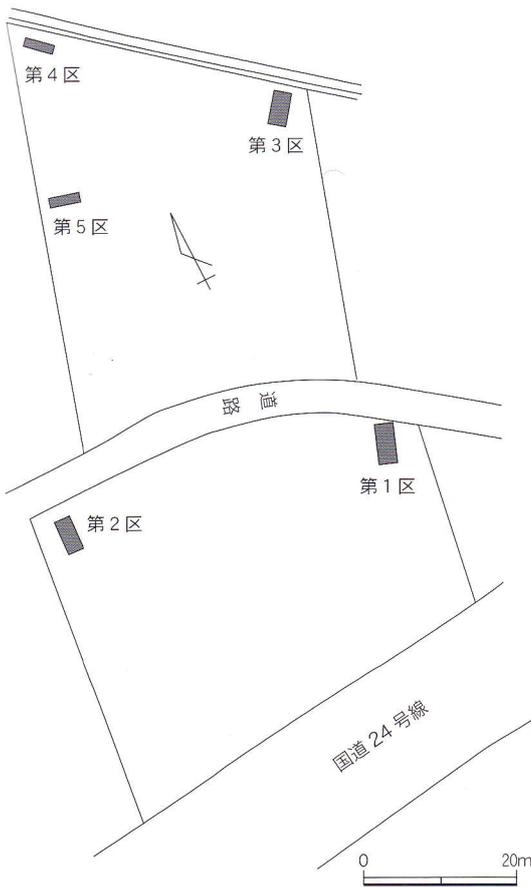
〔第1～3区〕 厚い部分では約160cmの造成土あり、その下に約20～50cmの現代耕作土 (第1層)、その床土と考えられる約5～10cmの暗灰色粗砂混シルト (第2層)、約



第1図 位置図

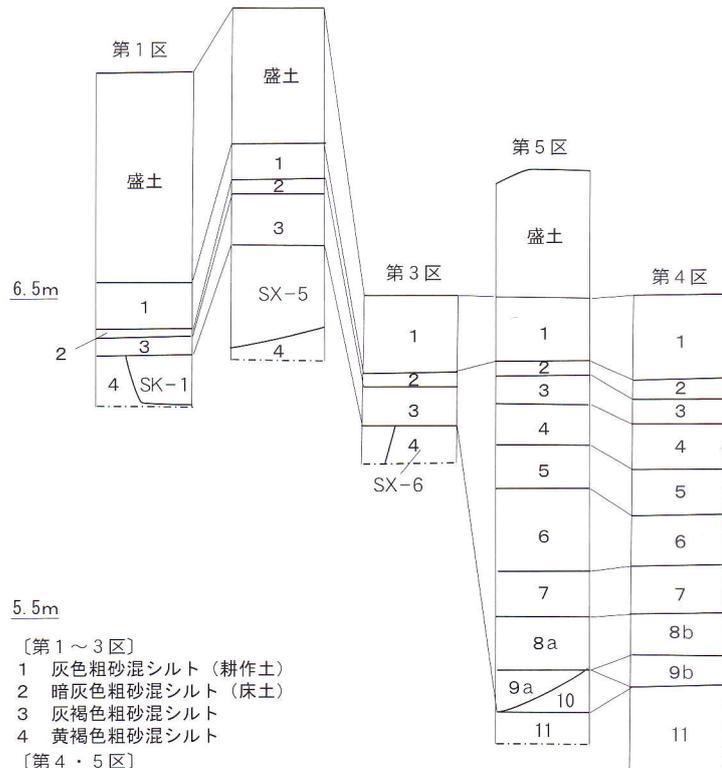


第2図 調査対象地



第3図 調査場所

7.5m



5.5m

〔第1～3区〕

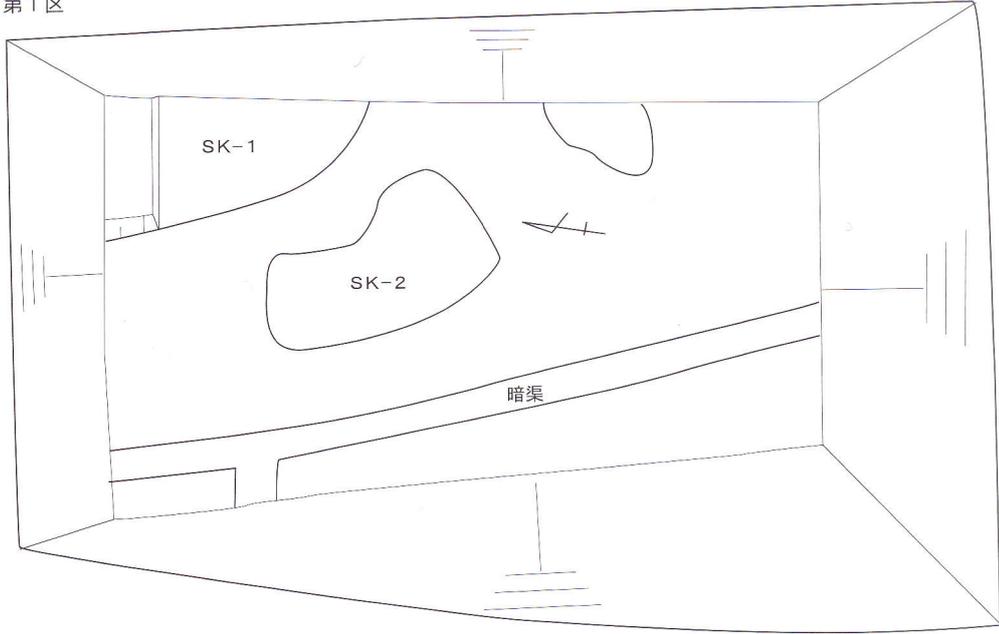
- 1 灰色粗砂混シルト (耕作土)
- 2 暗灰色粗砂混シルト (床土)
- 3 灰褐色粗砂混シルト
- 4 黄褐色粗砂混シルト

〔第4・5区〕

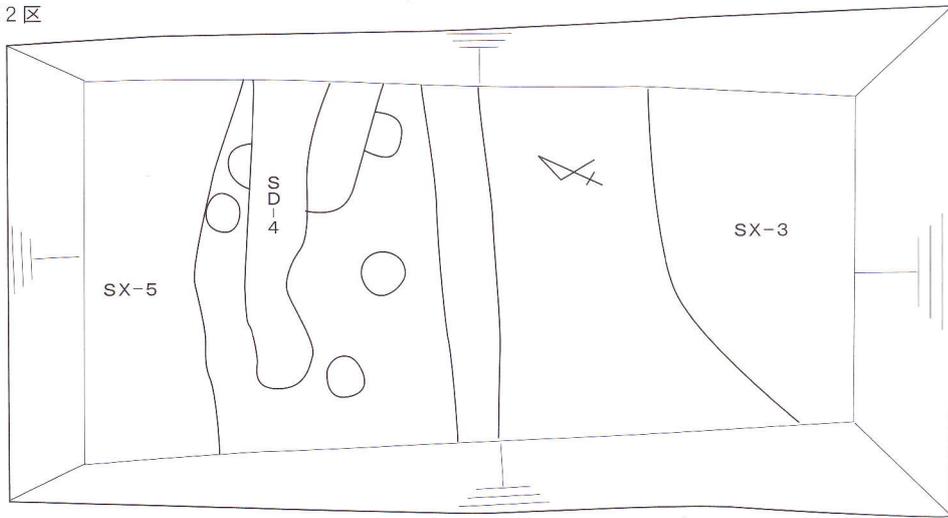
- 1 灰色粗砂混シルト (耕作土)
- 2 黄褐色粗砂混シルト (床土)
- 3 黄褐色粗砂混シルト (鉄分を含む)
- 4 黄灰色粗砂混シルト
- 5 淡灰褐色粗砂混シルト
- 6 暗灰黄色粗砂混シルト
- 7 灰褐色粗砂混シルト (鉄分を含む)
- 8 a 暗灰褐色粗砂混シルト
- 8 b 灰黄褐色粗砂混シルト
- 9 a 暗灰褐色シルト
- 9 b 灰黄褐色シルト
- 10 黄褐色粗砂混シルト
- 11 青灰色粘土

第4図 遺構平面図・土層断面図

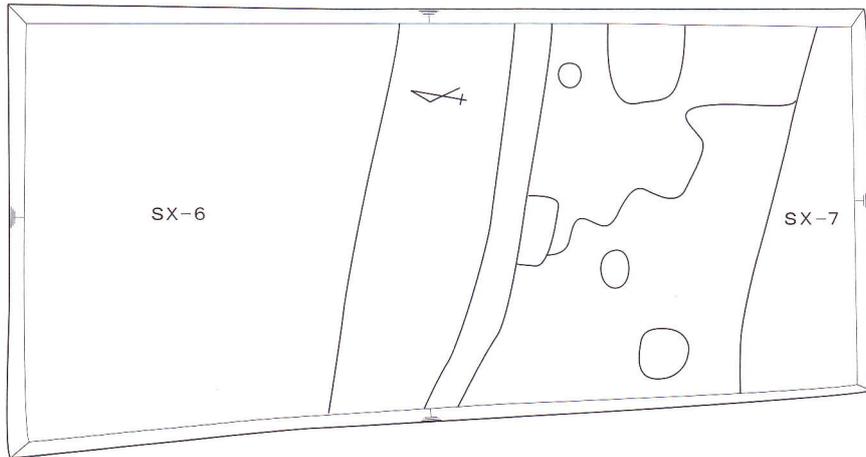
第1区



第2区



第3区



第5图 第1~3区平面图



10～30cmの灰褐色粗砂混シルト（第3層）、約70cm以上の黄褐色粗砂混シルト（第4層）が堆積する。第4層以下は、遺物を含まず自然堆積層であると考ええる。

〔第4・5区〕 約20～30cmの現代耕作土（第1層）、その床土と考えられる約10cmの黄褐色粗砂混シルト（第2層）、約15cmの鉄分を含む黄褐色粗砂混シルト（第3層）、約20cmの黄灰色粗砂混シルト（第4層）、約30cmの淡灰褐色粗砂混シルト（第5層）、約30～50cmの暗灰黄色粗砂混シルト（第6層）、約30cmの鉄分を含む灰褐色粗砂混シルト（第7層）、その下は第4・5区で若干色合いが異なるが、約20cmの暗灰褐色粗砂混シルト（第8a層）、約30cmの灰黄褐色粗砂混シルト（第8b層）、約10cmの暗灰褐色シルト（第9a層）、灰黄褐色シルト（第9b層）、第5区で確認した西に向かって低くなる黄褐色粗砂混シルト（第10層）、約30cm以上の青灰色粘土（第11層）が堆積する。第10層は第1・2区の第4層に対応する。第10層以下に遺物を含まないことから、自然堆積層であると考ええる。

遺構は第1～3区で中世を中心とする溝・ピット・土坑・落ち込みを検出した（第5図）。

第1区 3基の土坑を検出した。一部掘削を行ったSK-1は南北1.4m、東西0.8m、深さ0.15mを測る。

第2区 幅約0.3mの溝2条、直径約0.2mのピット4基、落ち込み2基を検出した。

第3区 幅約0.2mの溝1条、直径約0.1～0.4mのピット5基、落ち込み2基を検出した。

確認調査の結果、遺構からの遺物は少なく時期を特定することは困難であったが、いずれも土師器小片が出土していることから、古墳時代から中世の遺構の可能性が高い。調査区の南側では和歌山県文化財センターによる発掘調査が実施されており、2面の遺構面を確認している。第1遺構面では平安時代～江戸時代の遺構、第2遺構面では弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴建物が多数検出されている。今回の調査でも同様の時期の遺構が第1～3区に展開している状況が把握できた。遺構がなかった第4・5区に関しては、現況でも第1・2区北側の道路を境に標高が低くなっている。また、中世遺物の小片を含む水平堆積層を確認しており、道路を境に南側は集落域、北側は生産域として利用されていた可能性が想定できる。

⑱ 岩橋千塚古墳群 (調査一覧88)

〔経緯〕 駐車場建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市岩橋字長尾1494番、1495番

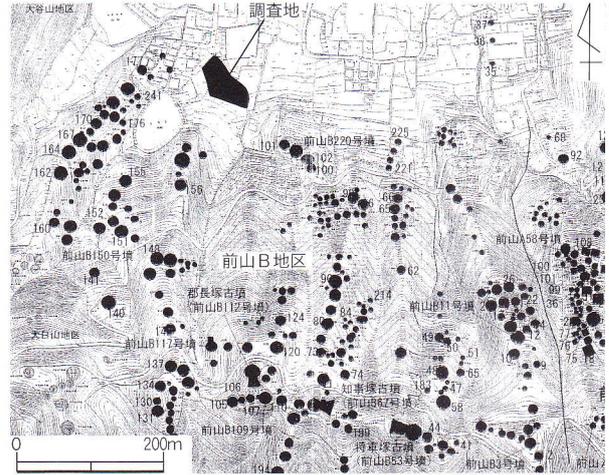
〔面積〕 15.12㎡ (敷地面積1397㎡)

〔概要〕 岩橋千塚古墳群 (遺跡番号185) は、和歌山市東部の岩橋山塊に所在する。東西約3km、南北約2.5kmの範囲をもち、5世紀中頃から7世紀の前方後円墳・円墳・方墳など700基を超える古墳で構成される大規模古墳群である (第1図)。

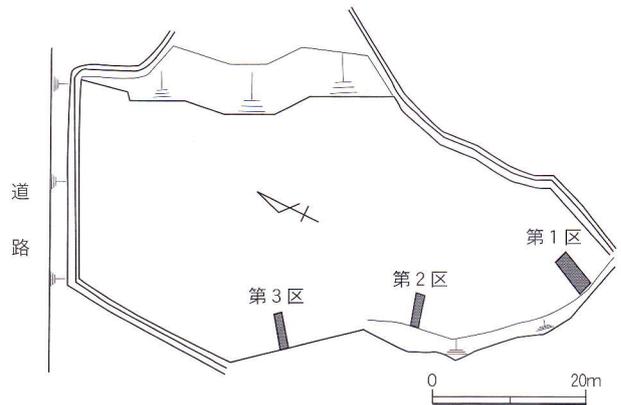
今回の調査は、範囲としては前山B地区にあたる。丘陵から平地へとなだらかに傾斜する地形変換点にあたる場所で駐車場建設が計画された。古墳が存在する可能性が想定されたため開発予定地内のうち比較的削平を受けていないと想定された部分を中心に3カ所の調査区を設定し、確認調査を実施した (第2図)。

基本層序は、水田としての利用が行われなくなった後に、10~70cmほど土が堆積している。その下に約20~30cmの現代耕作土 (第1層)、約50cmの礫を多く含む灰黄褐色土 (第2層)、約15cm以上の黄褐色粗砂混シルト (第3層) が堆積する (第3図)。第2・3層に遺物は含まず、現代耕作土を取りのぞくと、削られた岩盤が露出している状況である (第3図)。

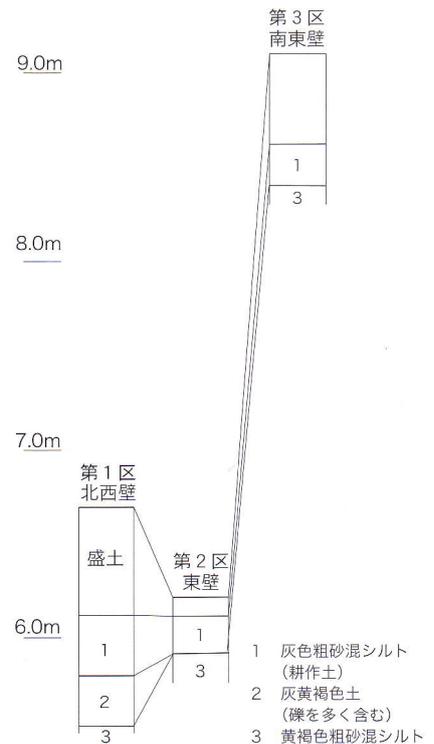
確認調査の結果、丘陵部の縁辺部という立地から古墳が存在している可能性も考えられたが遺物・遺構はなく、耕作土の下はすぐ岩盤といった状況であった。対象地の範囲内で一部高く残っている部分の調査区 (第3区) とそのほかの調査区の標高を比較すると、2.5mほどの比高差があり、丘陵側ではかなり削平されている可能性が高いと考えられる。そのため、古墳が存在していたとしても、既に削られ消滅しているものと考えられる。



第1図 位置図



第2図 調査場所



第3図 土層柱状模式図

第3区
南東壁

第1区
北西壁

第2区
東壁

- 1 灰色粗砂混シルト (耕作土)
- 2 灰黄褐色土 (礫を多く含む)
- 3 黄褐色粗砂混シルト

⑨井ノ口遺跡（調査一覧93）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市和佐関戸字中嶋294-1

〔面積〕 9.98m²（敷地面積140.87m²）

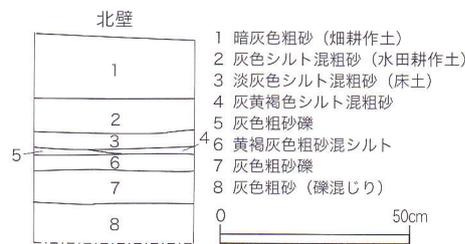
〔概要〕 井ノ口遺跡（遺跡番号389）は、和歌山市東部の紀ノ川南岸の平野部に位置する東西約300m、南北約200mの規模をもつ古墳時代から中世の遺物散布地である（第1図）。今回の調査は遺跡中央南端で個人住宅建設が計画されたため、事前の確認調査を実施した（第2・3図）。

基本層序は、約35cmの畑耕作土（第1層）があり、その下に約20cmの水田耕作土（第2層）、その床土と考えられる約10cmの淡灰色シルト混粗砂（第3層）、約5cmの灰黄褐色シルト混粗砂（第4層）があり、部分的に約5cmの灰色粗砂礫（第5層）が入る。その下に、約10cmの黄褐灰色粗砂混シルト（第6層）、約15cmの灰色粗砂礫（第7層）、約20cm以上の礫が少量混じる灰色粗砂（第8層）が堆積する（第4図）。第6層中に土師器が微量に含む。第7層以下は旧河道の堆積の可能性がある。

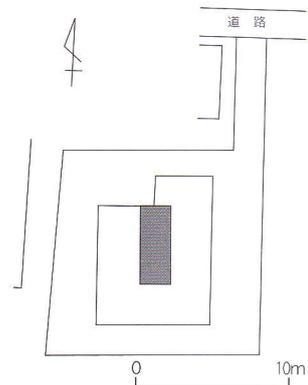
確認調査の結果、第6層中には土師器細片が微量に入る希薄な包含層が存在し、第7層以下は旧河道の堆積を確認した。対象地のすぐ南を流れる小倉川がほぼ旧河道に沿った位置を流れており、対象地周辺は旧河道の中に入っている可能性が高い（第2図）。遺構が展開しているとすれば、主要県道岩出海南線を中心とした位置が想定できる。



第1図 位置図



第4図 土層断面図



第3図 調査場所



第2図 調査対象地

②西田井遺跡（調査一覧99）

〔経緯〕 有料老人ホーム建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市西田井字若嶋391他

〔面積〕 26.7㎡（敷地面積10450.40㎡）

〔概要〕 西田井遺跡（遺跡番号388）は、紀ノ川北岸の標高7.0m前後の沖積低地に立地する。遺跡は東西約1km、南北約0.7kmの規模をもつ弥生時代から中世の集落遺跡である（第1図）。今回の調査は、遺跡南端で老人ホーム建設が計画されたため、確認調査を実施した（第2・3図）。

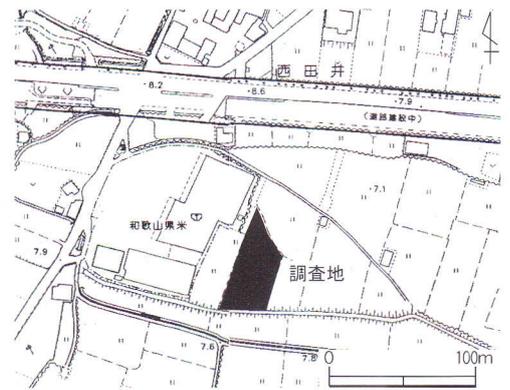
現地表面の下、約160cmが造成土で、その下に約10cmの耕作土（第1層）、その床土と考えられる約10cmの灰褐色粗砂混シルト（第2層）、第2区のみ約20cmの暗黄灰色粗砂混シルト（第3層）が堆積する（第4図）。第3層は土師器小片を微量含む希薄な包含層である。第4層は黄褐色粗砂で、これ以下は遺物を含まず自然堆積層であると考えられる。第3区では自然流路の堆積が70cm以上堆積する。これ以下は危険と判断し、掘削はしなかった。

遺構は第4層上面において第1区で幅1.5m以上、深さ約45cmの自然流路1、第2・3区で平成15年度の駐車場建設

の際の立会で確認した幅27m以上の自然流路2の堆積を確認した。和歌山県文化財センターによる昭和60年度の試掘調査のB区で自然河道が2条（自然河道2、自然河道3）確認されており（⑤西田井遺跡第5図参照）、第2・3区で確認した自然流路は、自然河道2、自然河道3のいずれかに対応すると考える。



第1図 位置図

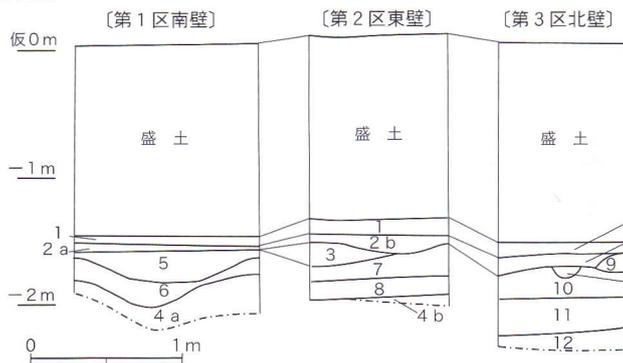
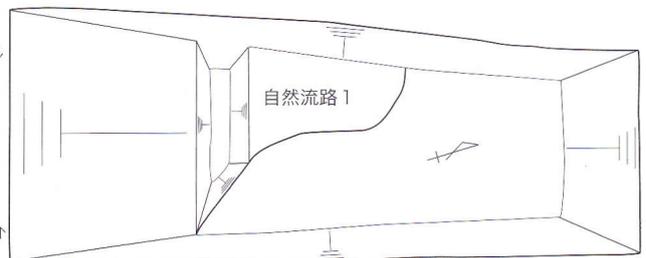


第2図 調査対象地



第3図 調査場所

第1区



- 1 暗灰色粗砂混シルト（耕作土）
- 2 a 灰褐色粗砂混シルト（床土）
- 2 b 灰黄色粗砂混シルト（床土）
- 3 暗黄灰色粗砂混シルト
- 4 a 黄褐色粗砂
- 4 b 黄褐色粗砂（礫混じる）
- 5 黄褐色粗砂（自然流路1埋土）
- 6 灰黄褐色粗砂（自然流路1埋土）
- 7 灰色粗砂礫（自然流路2埋土）
- 8 灰色粗砂（自然流路2埋土）
- 9 灰色礫
- 10 灰黄色シルト混粗砂（自然流路2埋土）
- 11 灰黄褐色シルト混粗砂（自然流路2埋土）
- 12 灰色シルト混粗砂（自然流路2埋土）
- 13 黄色粗砂混シルト

第4図 遺構平面図・土層断面図

②直川廃寺跡（調査一覧109）

〔経緯〕 集合住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市直川字大小路1665番1

〔面積〕 6.11m²（敷地面積376.39m²）

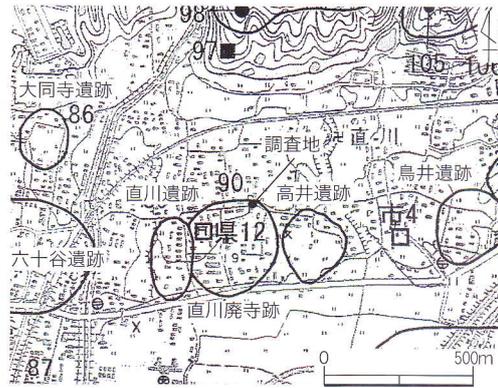
〔概要〕 直川廃寺跡（遺跡番号90）は、扇状地に立地し、東西約300m、南北約300mの規模をもつ遺跡で、平安時代中期の唐草文軒丸瓦が出土している（第1図）。今回の調査は、遺跡の北東隅で集合住宅建設が計画されたため、確認調査を実施した（第2・3図）。

現地表面下、造成土が約30cmあり、その下に約10cmの現代耕作土（第1層）、その床土と考えられる約5cmの灰褐色シルト混粗砂（第2層）が堆積する。その下に耕作地として利用する際の盛土の可能性のある約75

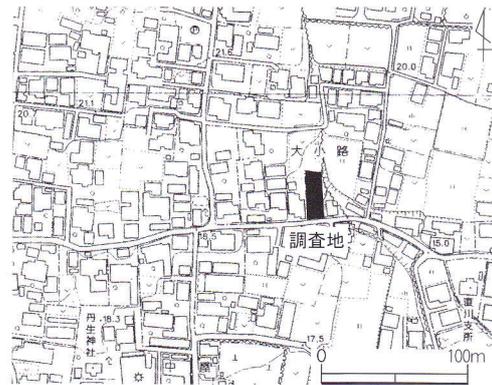
cmの造成土があり、礫混じり黄色粗砂混シルト（第4層）になる。土層観察から、対象地は、耕作地として利用される際にかなり削平を受けている状況が判明した。トレンチの西端部に削平を受けていない部分があり、その部分では、現地表面

下、約64cmの造成土があり、約30cmの黄色粗砂混シルト（第3層）が堆積する。その下は、礫混じり黄色粗砂混シルト（第4層）になる（第4図）。遺構が存在するとすれば第3層上面が想定されるが、遺構は確認できなかった。

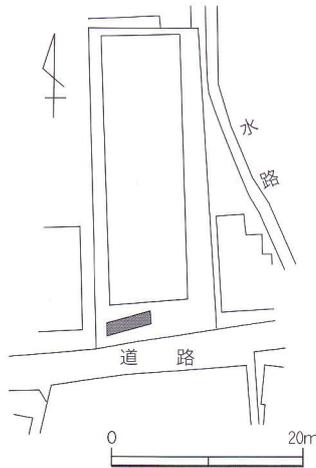
確認調査の結果、対象地は斜面地であった部分を削平し、土を盛って均し、耕作地として利用していた状況が判明した。そのため、旧地面は削平を受け、ほとんど存在せず、遺構・遺物もなかった。



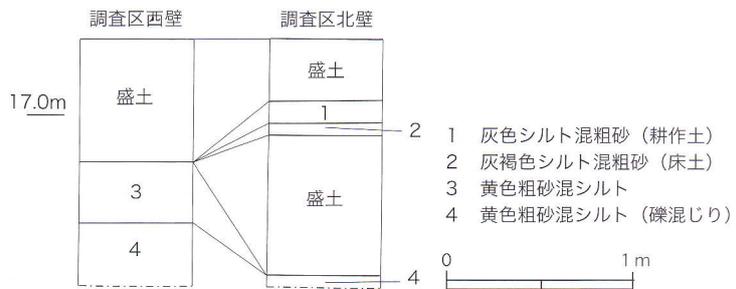
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図

②鳴神Ⅱ遺跡（調査一覧114）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う浄化槽部分の立会調査

〔場所〕 和歌山市鳴神字四面田90番19、90番22

〔面積〕 4.48㎡（敷地面積114.73㎡）

〔概要〕 鳴神Ⅱ遺跡（遺跡番号314）は、東西300m、南北400mの規模をもつ扇状地上に立地する遺跡で、古墳時代の杭列を伴った溝が検出されている（第1図）。今回の調査は、遺跡の中央北寄りの位置において、個人住宅建設が計画されたため、浄化槽部分について立会調査を実施した（第2・3図）。

現地表面下、約90cmが造成土で、その下に、約20cmの現代耕作土（第1層）、約30cmの青灰色粗砂混シルト（第2層）、約45cmの青灰褐色シルト混粗砂（第3層）、約20cm以上の黄褐色シルト混粗砂（第4層）が堆積する（第4図）。第2層から、奈良時代の須恵器甕、土師器甕などが出土した。第3層以下は遺物を含まず自然堆積層であると考えられる。

遺構は第3層上面で、幅約1.0m、深さ50cmの溝を1条（SD-1）検出した（第4図）。溝からは奈良時代の須恵器・土師器甕・カマドが出土した。

遺物は、須恵器、土師器、カマドなどコンテナ1箱が出土した。そのうち、器種判定が可能なものについて一部図化を行った（第5図）。

1・2は把手付きの土師器甕である。外面をハケ調整、把手は全体をユビオサエとナデ調整を施す。1は口径30cmを測り、厚手の把手をもつ。2は幅広で薄手の把手をもつ。

3は土師器高杯で、口縁部がやや外反する。口径14.0cmを測る。

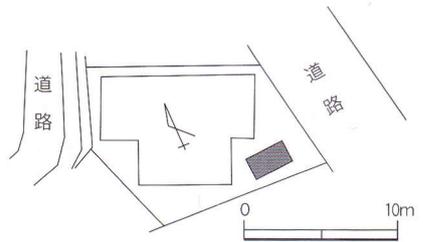
4はカマドである。釜口・庇・焚口・裾部分が残存する。釜口の口径は21.6cm、器高は推定で33.6cmを測る。体部上半部には貼り付け突帯をやや斜め上方向にめぐらせる。突帯貼り付け後、焚口を一周すると推定されるアーチ形の庇を取り付ける。庇の内側には庇接



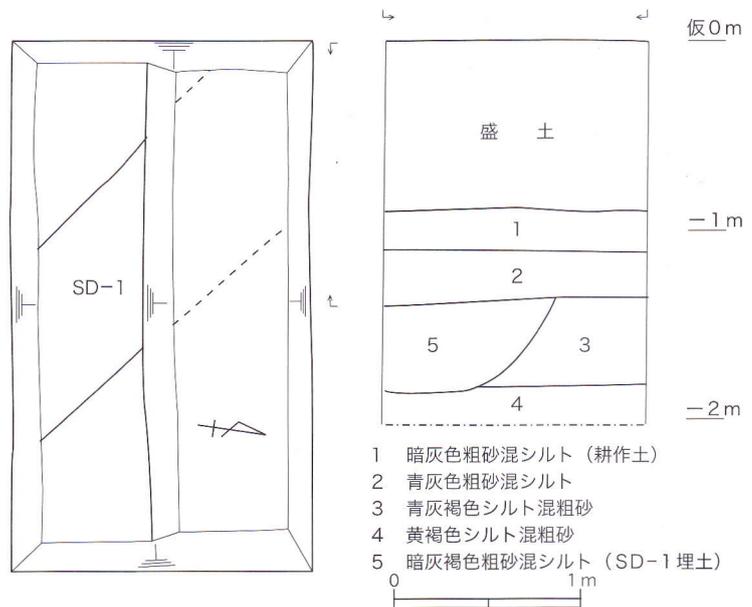
第1図 位置図



第2図 調査対象地

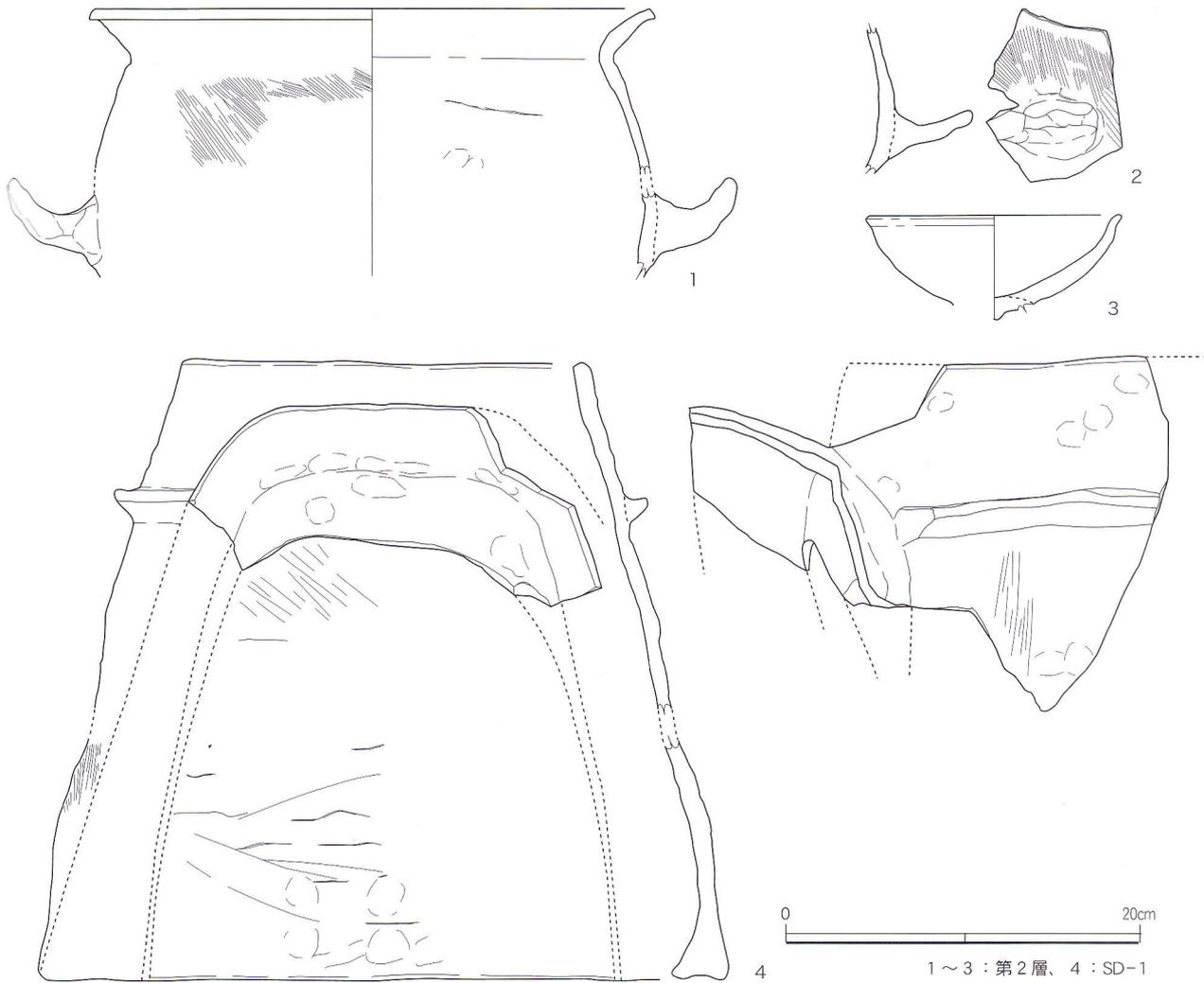


第3図 調査場所



第4図 遺構平面図・土層断面図

- 1 暗灰色粗砂混シルト（耕作土）
- 2 青灰色粗砂混シルト
- 3 青灰褐色シルト混粗砂
- 4 黄褐色シルト混粗砂
- 5 暗灰褐色粗砂混シルト（SD-1埋土）



第5図 出土遺物実測図

合時のユビオサエが多く認められた。庇及び焚口の端部は面をもっておりヘラ状工具などにより切り取っているものと考えられる。裾部分は内側に肥厚し中央が窪んでいる。釜口外面にはユビオサエ、体部下半外面はハケ調整、体部内面上半部は粗いハケ調整、下半部はユビオサエ、板ナデが施され、粘土接合痕が残存する。1・3は飛鳥Ⅱ～Ⅲ期、2は奈良時代、4は飛鳥時代に位置付けられる。

1～3は第2層、4はSD-1として取り上げたが、カマドの破片が第2層からも出土していることから、第2層の遺物もSD-1から出土した遺物の可能性も考えられる。また、1と4は胎土・色調が類似しており、セットで使用されていたものの可能性が考えられる。

浄化槽の立会調査という小規模な調査であったが、飛鳥時代のカマド・甕などを含む溝を確認した。今回の調査区からは多量の遺物が出土しており、対象地周辺に遺構が展開している可能性が想定できる。

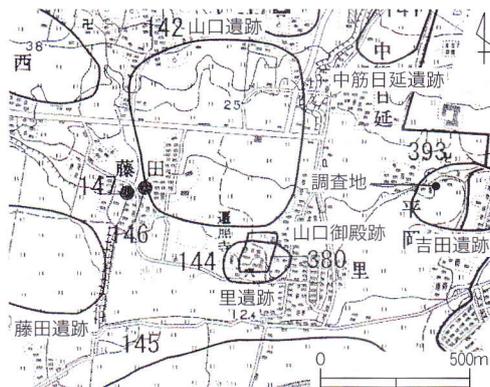
②吉田遺跡（調査一覧115）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市平岡字オノ神5番・6番2・7番2

〔面積〕 9.68㎡（敷地面積616.97㎡）

〔概要〕 吉田遺跡（遺跡番号393）は、南北約550m、東西約600mの規模をもつ沖積低地に立地する弥生時代から奈良時代にかけての集落遺跡である（第1図）。今回の調査は、遺跡の中央北寄りの位置で個人住宅建設が計画されたため、確認調査を実施した（第2・3図）。



第1図 位置図

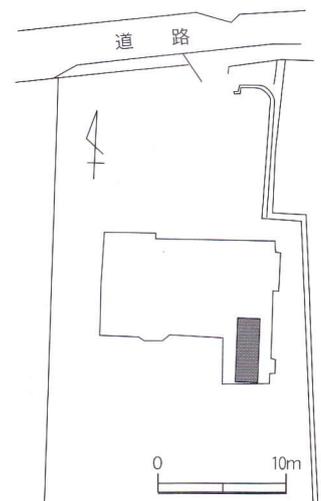
現地表面下、約15cmの造成土があり、その下に約10cmの茶褐色シルト混粗砂（第1層）、約10cmの灰色シルト混粗砂（第2層）、約10cmの黄灰色シルト混粗砂（第3層）、約35cmの黄灰色粗砂（第4層）、約35cmの灰黄色粗砂混シルト（第5層）、約15cm以上の黄褐色粗砂混シルト（第6層）が堆積する（第4図）。第3～5層で摩滅の著しい土師器の細片少量を含む希薄な包含層を確認した。第4層以下については、自然流路の堆積の可能性も想定できる。

対象地の北側に自然流路が形成したと考えられる段丘崖が存在する

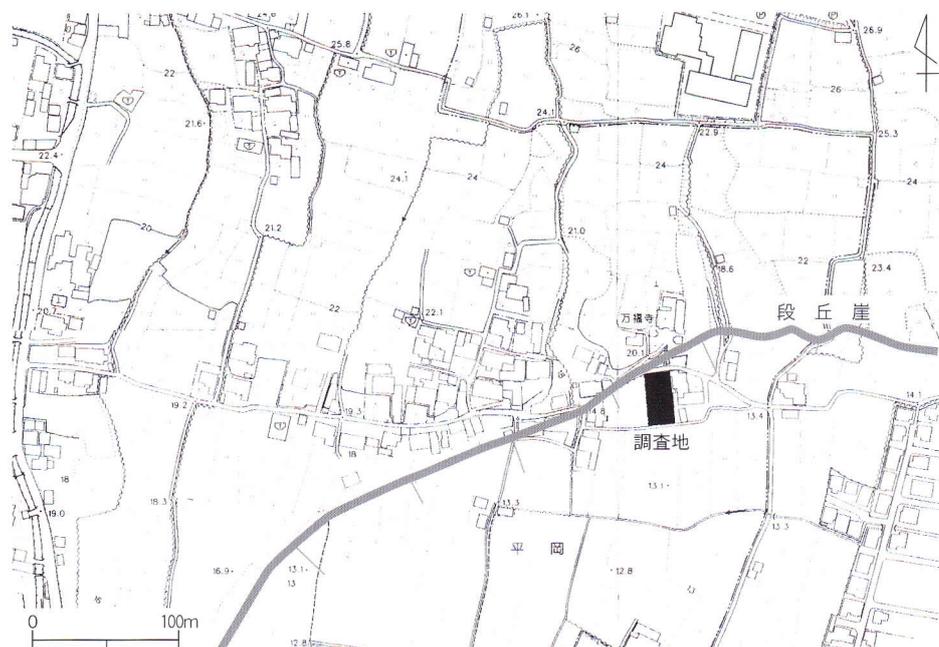
（第2図）。堆積状況を踏まえると、対象地は自然流路内に含まれる可能性が高いと考えられる。そのため、対象地周辺に遺構が展開している可能性は低いと考えられる。



第4図 土層断面図



第3図 調査場所



第2図 調査対象地

④神前遺跡（調査一覧116）

〔経緯〕 個人住宅建設に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市神前字佃67-11

〔面積〕 8.40㎡（敷地面積165.29㎡）

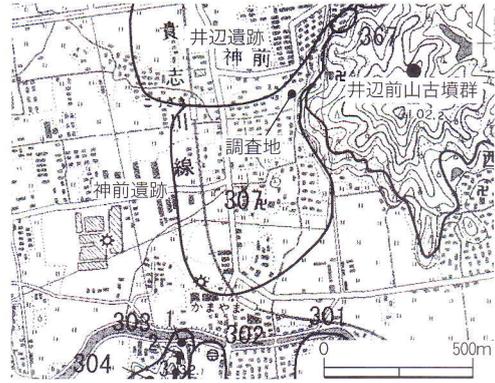
〔概要〕 神前遺跡（遺跡番号307）は、標高1～2mの沖積低地に立地する。遺跡は東西約500m、南北約600mの規模の集落遺跡である（第1図）。今回は、遺跡の北東隅の位置で個人住宅建設が計画されたため、確認調査を実施した（第2・3図）。

現地表面下、約95cmの造成土があり、その下に約15cmの現代耕作土（第1層）、その床土と考えられる約10cmの灰黄オリーブ色粗砂混シルト（第2層）、約10cmの灰オリーブ色粗砂混シルト

（第3層）、約20cmの灰黄褐色シルト（第4層）、約20cmの灰色粘土（第5層）、約10cm以上の灰色シルト混粗砂（第6層）が堆積する（第4図）。第

3層は土師器の小片をごく少量含む希薄な包含層である。第4層以下は遺物を含まず湿地状の自然堆積層であると考える。

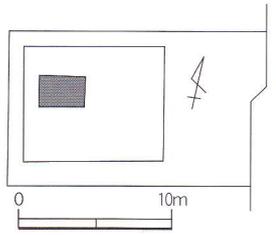
確認調査の結果、遺構はなく、第3層で摩滅の著しい土師器の細片をごく少量含む希薄な包含層を確認した。第4層以下は、自然木を含むような湿地状の堆積を呈している。そのため、対象地周辺に遺構が展開している可能性は低いと考える。



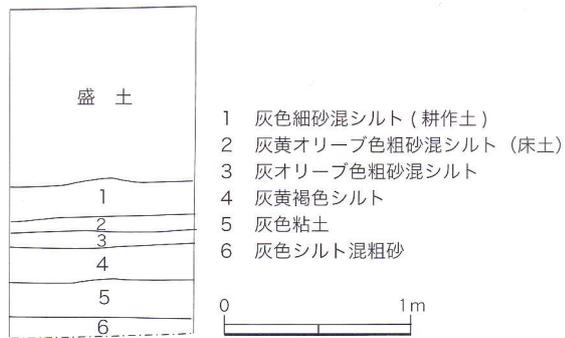
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図

㊥木ノ本Ⅰ遺跡（調査一覧123）

〔経緯〕 宅地造成に伴う事前確認調査

〔場所〕 和歌山市西庄字東池ノ内82番他

〔面積〕 14.50m²（敷地面積4302.33m²）

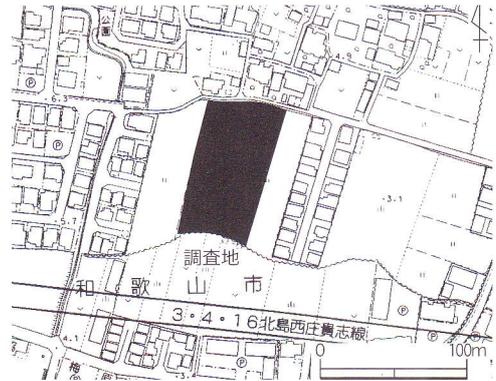
〔概要〕 木ノ本Ⅰ遺跡（遺跡番号40）は、和泉山脈南麓の扇状地及び沖積低地に立地する。遺跡は東西約450m、南北約350mの規模をもつ遺跡として周知されている（第1図）。今回の調査は、遺跡の南端の位置において、宅地造成が計画されたため、事前の確認調査を実施したものである（第2・3図）。

現地表面下、約10～40cmが現代耕作土（第1層）、その床土と考えられる約5～10cmの暗灰黄褐色シルト混粗砂（第2層）、約15cmの青灰色シルト混粗砂（第3層）、約15～30cmの灰色粗砂混シルト（第4層）、約15～25cmの黄灰色粗砂混シルト（第5層）、約15cmの黄灰色シルト混粗砂（第6層）、約15cmの黄褐色灰色シルト（第7層）、約20～30cmの褐灰色シルト（第8層）、約15cm以上の暗灰色粗砂（第9層）が堆積する（第4図）。第3～8層から土師器・瓦器小片が出土した。第9層からは自然木などが入るが遺物は出土せず、自然堆積層であると考えられる。

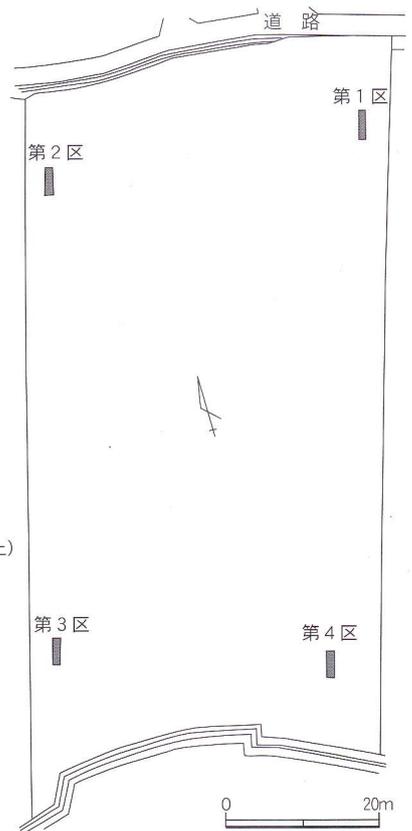
対象地は湿地状の堆積を呈している。現在もレンコン畑として使用されており、水はけが良くない状況である。対象地から出土した遺物は中世の遺物が主である。周辺では木ノ本Ⅱ遺跡で中世の遺構を確認している。中世の遺構を確認した地点は、いずれも対象地より北寄りの標高が高い部分にあたる。そのため、対象地から出土した遺物は北側の扇状地の集落より流入した可能性が想定できる。



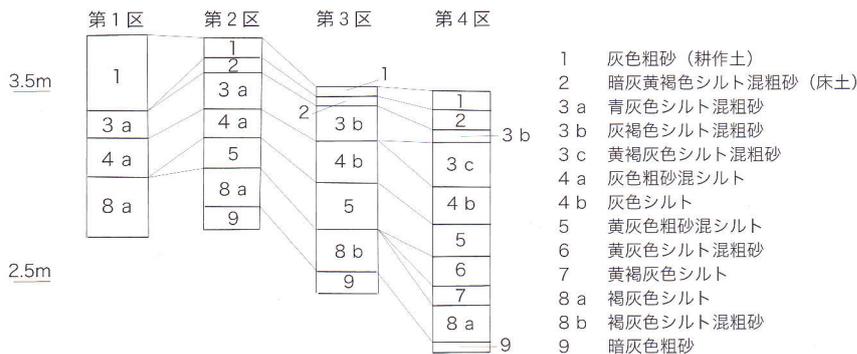
第1図 位置図



第2図 調査対象地



第3図 調査場所



第4図 土層断面図

- 1 灰色粗砂（耕作土）
- 2 暗灰黄褐色シルト混粗砂（床土）
- 3 a 青灰色シルト混粗砂
- 3 b 灰褐色シルト混粗砂
- 3 c 黄褐色灰色シルト混粗砂
- 4 a 灰色粗砂混シルト
- 4 b 灰色シルト
- 5 黄灰色粗砂混シルト
- 6 黄灰色シルト混粗砂
- 7 黄褐色灰色シルト
- 8 a 褐灰色シルト
- 8 b 褐灰色シルト混粗砂
- 9 暗灰色粗砂

②立会・不時発見等出土遺物

宇田森遺跡

〔経緯〕埋蔵文化財包蔵地外での不時発見遺物

〔場所〕和歌山市宇田森123-17

〔概要〕浄化槽設置業者より土器出土の連絡を受け、現地確認を行った。対象地は宇田森遺跡の東側に位置する(第1図)。浄化槽設置用の掘削穴より弥生土器、中世土師器が出土した(事業者により採集)。事業者への聞き取りから地表面より約180cm下の暗茶褐色シルト混粘土層から出土したことがわかった。

出土した遺物を第2図に示した。1～6が弥生土器、7が中世土師器である。1・2は広口壺の口縁垂下部である。1は凹線文を6条巡らせ、その上に円形浮文を貼り付ける。2は5条以上の凹線文を巡らせ、その後ヘラ状工具により縦方向に線を入れ格子目状の文様を施す。3～5は鉢あるいは高杯の脚台部である。3は端部を丸く収め、3条の凹線文を巡らせる。4は端部を丸く収め、下端に1条の凹線文を巡らせる。さらに径6mm程度の円孔を穿つ。5は端部を上方に拡張する。6は甕の底部で上底状を呈する。7は土師器皿で、口縁端部を丸く収め、丸みを帯びた形態を呈する。1～6は弥生時代中期後半に位置付けられる。これらの遺物内容は、宇田森遺跡の内容とも一致する。

以上の状況から、今回の遺物出土地周辺に弥生時代中期後半を中心とする遺物を含む包含層・遺構が展開する蓋然性は高いと考える。

北野遺跡(調査一覧28)

〔経緯〕宅地造成に伴う擁壁部分の立会調査

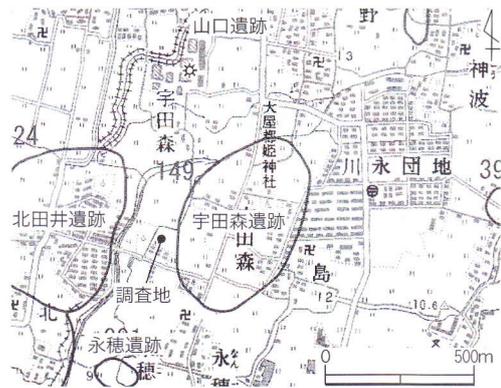
〔場所〕和歌山市北野字古屋399・400

〔概要〕北野遺跡(遺跡番号154)は紀ノ川の北岸の低位段丘上に位置し、南北約100m、東西約250mの規模をもつ遺物散布地として周知されている(第3図)。今回の調査は、遺跡中央南側の位置において、宅地造成が計画されたため、擁壁部分の立会調査を行った。

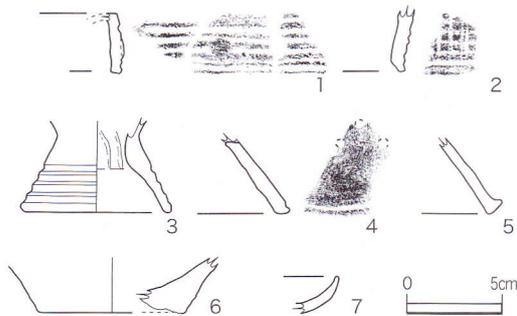
立会調査では遺構は確認できなかったが、土師器・須恵器が出土した。出土した遺物のうち、形が復元できたものについて実測を行った(第4図)。

第4図に示したものは、薬壺形の須恵器壺で口径10.0cmを測る。奈良時代に位置づけられる。

北野遺跡における埋蔵文化財の調査例は少なく、遺跡の時期に関しても不明とされている。今回の立会調査成果により、少なくとも北野遺跡内において奈良時代の遺構・遺物が存在する可能性が高まった。



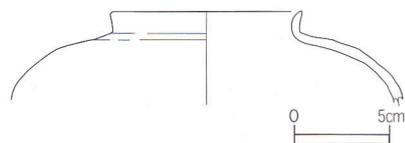
第1図 位置図



第2図 出土遺物実測図



第3図 位置図



第4図 出土遺物実測図

(4) 財団法人和歌山市都市整備公社実施の発掘調査概要

①六十谷遺跡発掘調査（調査一覧7）

1. 調査の経緯と経過

今回の調査地は、紀ノ川の北岸部、県道粉河・加太線とJR阪和線が交差する北側約50m、JR六十谷駅西口の西南約50mに位置し、駅前周辺の住宅密集地内に位置する（第1図）。

六十谷遺跡は、和泉山脈から南流する千手川によって形成された扇状地の南端部に立地し、南北360m、東西550mの範囲に広がる遺跡である。遺跡が立地する扇状地上の標高は、扇状地末端部にあたる県道粉河・加太線付近で8.0m前後、調査地周辺では14.0m前後、JR六十谷駅西口部分では15.5m前後を測り、東は千手川に南は県道粉河・加太線に向かって断崖面となり、西へは緩傾斜地となる。よって調査地周辺は、扇状地内でも高所に位置し、県道粉河・加太線に向かって落ち込む断崖端部の傾斜地となる。

本遺跡はこれまで本格的な発掘調査が行われたことがなく、遺跡の存続時期や内容についての詳細は明らかとなっていない。しかしながら遺跡内部の地表面踏査において、千手川の堤防から縄文時代晩期の土器や石棒の頭部が見つかっており、また射矢止神社の東及び北側では、弥生時代中期のものを主体とする前期から後期の弥生土器の他、石庖丁やサヌカイト製の石鏃及び石錐などの石器が多数表採されている。これらの弥生時代遺物の散布状況が射矢止神社周辺に集中することから、この付近に弥生集落の中心が想定されている。また古墳時代では、朝鮮半島から持ち運ばれたと考えられる家形甕が本遺跡から出土したものととして東京国立博物館に収蔵されている。

これらの遺物からみて六十谷遺跡は、縄文時代晩期から弥生時代にかけての集落遺跡であり、さらに古墳時代では朝鮮半島系の遺物が副葬された古墳が存在すると考えられている。六十谷遺跡内にはこの他、遺跡の北半部、調査地の北約200mを古代南海道が東西に横断しており、さらに遺跡の



第1図 調査位置図

南限である県道粉河・加太線は淡路街道（淡島街道）であり、遺跡の性格を特色づけると考えられる街道を含んでいる。

周辺の遺跡では、和泉山脈から南に派生する丘陵上部南端に立地する集落遺跡として、有功遺跡や直川遺跡、高井遺跡、府中Ⅳ遺跡などがあり、平野部に立地するものとして田屋遺跡や鳥井遺跡がある。

そのうち丘陵上部南端に立地する集落遺跡では、直川遺跡や高井遺跡において縄文時代の遺物が確認されており、府中Ⅳ遺跡では弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけての竪穴建物が多数検出されている。また古墳時代では、前期及び中期の竪穴建物や後期のピットなどが検出された高井遺跡や初期須恵器などが出土した有功遺跡がある。その他、古墳では和泉山脈から派生する丘陵上に鳴滝古墳群や園部円山古墳、北山古墳群、直川八幡山古墳群などが立地する。奈良時代以降では、古代南海道が丘陵上部を東西に延び、各遺跡はその沿線に立地している。そのうち、府中Ⅳ遺跡では奈良時代の掘立柱建物2棟及び土坑、また高井遺跡では平安時代の掘立柱建物8棟などが検出されている。その他、複弁八葉蓮花文軒丸瓦が出土した直川廃寺跡、平安時代の墳墓として大同寺墳墓がある。鎌倉時代では、高井遺跡で掘立柱建物や土葬墓及び集石遺構、府中Ⅳ遺跡で掘立柱建物2棟などが検出されている。これらの奈良時代以降の遺構群は、出土遺物などから古代南海道との密接な関連を想起させるものであり注目される。

さらに平野部のものでは、田屋遺跡において弥生時代後期から古墳時代後期の竪穴建物が多数検出されている他、鳥井遺跡において鎌倉時代を中心とした溝や土坑及びピットなどが確認されている。

このような歴史的環境のなか、今回の調査は和歌山市六十谷357-3番地内における自家用倉庫建築に伴う開発計画に起因し、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である六十谷遺跡（遺跡番号84）の範囲内であったため、遺跡の記録保存を目的として行ったものである。

現地における調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと財団法人和歌山市都市整備公社が委託を受けて行った。また調査期間は、平成21年4月16日～平成21年5月11日までの約1ヶ月間で行った。

2. 調査の方法と概要

（1）調査の方法

今回の調査は、自家用車庫の建築が計画されている範囲を対象としたもので、土置き場等を考慮し東西8.6m×南北5.0mの調査区を設定した。調査面積は合計43㎡である。調査は、調査対象地の敷地面積が狭小なことから、土置き場等を確保するため調査区を2分割し反転掘りによって行った。よって便宜上、西側を第1区、東側を第2区としたが、本報告では煩雑さを避けるため第1・2区をまとめて図示し報告する。

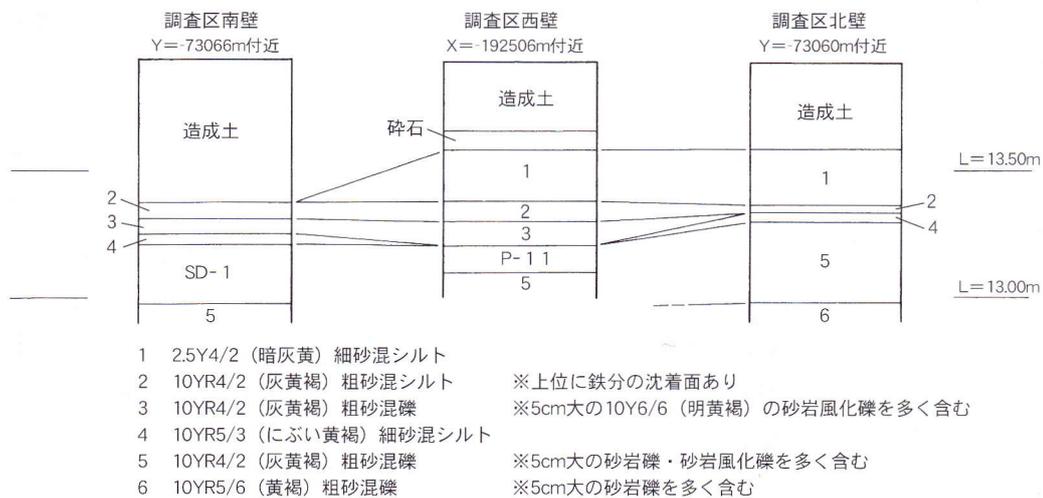
重機による掘削は、和歌山市教育委員会確認調査の調査成果をもとに第2層上面まで慎重に行い、検出した第2層以下の遺物包含層及び遺構、並びに下層調査のため適宜設定したサブトレンチの掘削を人力によって行った。

図面による記録は、調査区の両端に仮原点を設置して遺構平面図及び壁面土層断面図（ともに縮尺1/20）作成の基準とした。この仮原点には、既存の3級基準点から基準点測量を行い国土座標

(世界測地系)の数値を付した。その他、溝や土坑のうち遺構覆土に2層以上の堆積が認められるものについては、直交する位置に土層堆積状況を観察するためのセクションベルトを設定し、土層断面図(縮尺1/20)及び写真撮影による記録を行った。堆積土の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。そのほか、水準値は国家水準点(T. P. 値)を基準とし、既存の3級基準点から水準測量を行った。

(2) 基本層序

調査地の現況は、造成地である(図版1上)。調査地における基本層序は、まず現表土として調査地全面に厚さ26~66cmを測る造成土が堆積しており、この造成土を除去した下面が現代の耕作土(第1層)である(第2図、図版1下)。第2層は、厚さ2~10cmを測る灰黄褐色の粗砂混シルトであり、上位には鉄分の沈着面がある。この第2層は、包含される遺物から江戸時代の耕作土と考えられるものである。第3層は、厚さ最大10cmを測る灰黄褐色の粗砂混礫であり、5cm大の明黄褐色の砂岩風化礫を多く含むものである。この第3層は調査区の西端部においてのみ確認できるもので、やや堅く叩き締められていることから整地層と判断した(第3図)。また第3層に多く含まれる砂岩風化礫は、後述する第5層に含まれる砂岩風化礫と類似するものであり、整地の過程において第5層を削り、地形として緩やかに低くなる調査地の西側へ盛土を行ったものと考えられる。整地の時期は、第3層に包含される遺物から鎌倉時代の範疇と考える。この第3層上面では遺構を確認することができなかった。第4層は、部分的に薄く堆積するにぶい黄褐色の細砂混シルトであり、第2層及び第3層と砂礫層である第5層上面との間に堆積した間層と考えられる。第5層は、厚さ22~30cmを測る灰黄褐色の粗砂混礫であり、5cm大の砂岩礫や明黄褐色の砂岩風化礫を多く含むものである。この第5層は、遺物の包含を確認することができなかったものの、後述する第6層と土色及び土質を比較した結果から判断して遺物包含層である可能性が高い。また第5層上面は、弥生時代から江戸時代にかけての遺構を検出した遺構検出面である。さらにサブトレンチによる下層調査において確認した第6層は、5cm大の砂岩礫を多く含む黄褐色の粗砂混礫である。この第6層は、遺物を含まないことや土質等から判断して、遺跡が立地する扇状地を形成する基盤層と考えられる。



第2図 調査地土層柱状模式図

3. 遺構

遺構は、第5層上面において弥生時代前期から江戸時代にかけての溝及びピット、また掘方を伴う溜枡状遺構を検出した(第3図、図版1上)。遺構検出面の標高は13.30m前後を測り、緩やかに東から西に向かって低く傾斜し、南北の傾斜は認められなかった。検出した遺構のうち弥生時代のものでは、前期のピット(P-13)、中期のピット(P-2)の他、ピット(P-17)がある。また古墳時代では前期のピット(P-7・12)、中期以前の溝(SD-2)、中期のピット(P-22)の他、ピット(P-1・4・19・20)などがある。さらに平安時代の遺構では後期の溝(SD-1)があり、鎌倉時代のものでは前期の溝(SD-3)などがある。その他、江戸時代のものでは溜枡状遺構(SX-1)がある。以下、主な遺構についてその概要を記述する。

弥生時代の遺構

[P-13]

調査区の南西隅部で検出したP-13は、長径70cm以上、短径54cm、深さ11cmを測るもので、遺構覆土は砂岩風化礫を含む黒褐色の粗砂混シルトである。遺構の時期は、覆土内から紀伊第I様式に位置づけられる弥生土器の壺が出土したことから弥生時代前期のものと考えられる。

[P-2]

P-13の北側に位置するP-2は、直径30cm前後、深さ33cmを測るもので、遺構覆土は黒褐色の粗砂混シルトである。遺構の時期は、覆土内から紀伊第IV様式の凹線文を施す弥生土器の広口壺などが出土したことから弥生時代中期のものと考えられる。

古墳時代の遺構

[P-7]

調査区の北西部で検出したP-7は、長径70cm、短径40cm、深さ31cmを測るもので、遺構覆土は砂岩風化礫を含む黒褐色の粗砂混シルトである。遺構の時期は、覆土内から古墳時代前期のものと考えられる土師器などが出土したことや、後述する古墳時代中期以前とみられる溝(SD-2)の底面において検出したことから古墳時代前期のものと考えられる。

[SD-2]

調査区の西半部で検出したSD-2は、検出長4.9m、幅0.9~1.4m、深さ5cm前後を測るもので、その方向性はN-9°-Eである。遺構覆土は2単位に細分でき、第1層が暗灰黄色の粗砂混シルト、第2層が黒褐色の粗砂混シルトである。遺構の時期は、覆土内から古墳時代の土師器が出土したことや遺構の重複関係などから古墳時代中期以前と考えられる。

[P-22]

調査区の北東隅部で検出したP-22は、長径58cm、短径50cm、深さ33cmを測るもので、遺構覆土は砂岩風化礫を含む黒褐色の粗砂混シルトであり、特筆すべきこととして丸底I式の製塩土器を多数(22片)含むものである。遺構の時期は、覆土内から古墳時代中期の土師器杯や高杯脚部の他、丸底I式の製塩土器が出土したことから古墳時代中期のものと考えられる(第6図)。今回の調査において製塩土器が出土した遺構はこのピットのみである。

平安時代の遺構

[SD-1] (図版1上)

調査区の西壁際において東側肩部を検出したSD-1は、検出長4.6m、検出幅1.3m、深さ16~30cmを測るもので、その方向性はN-14°-Eである。遺構底面の標高は、北端部で13.0m、南端部で12.9m

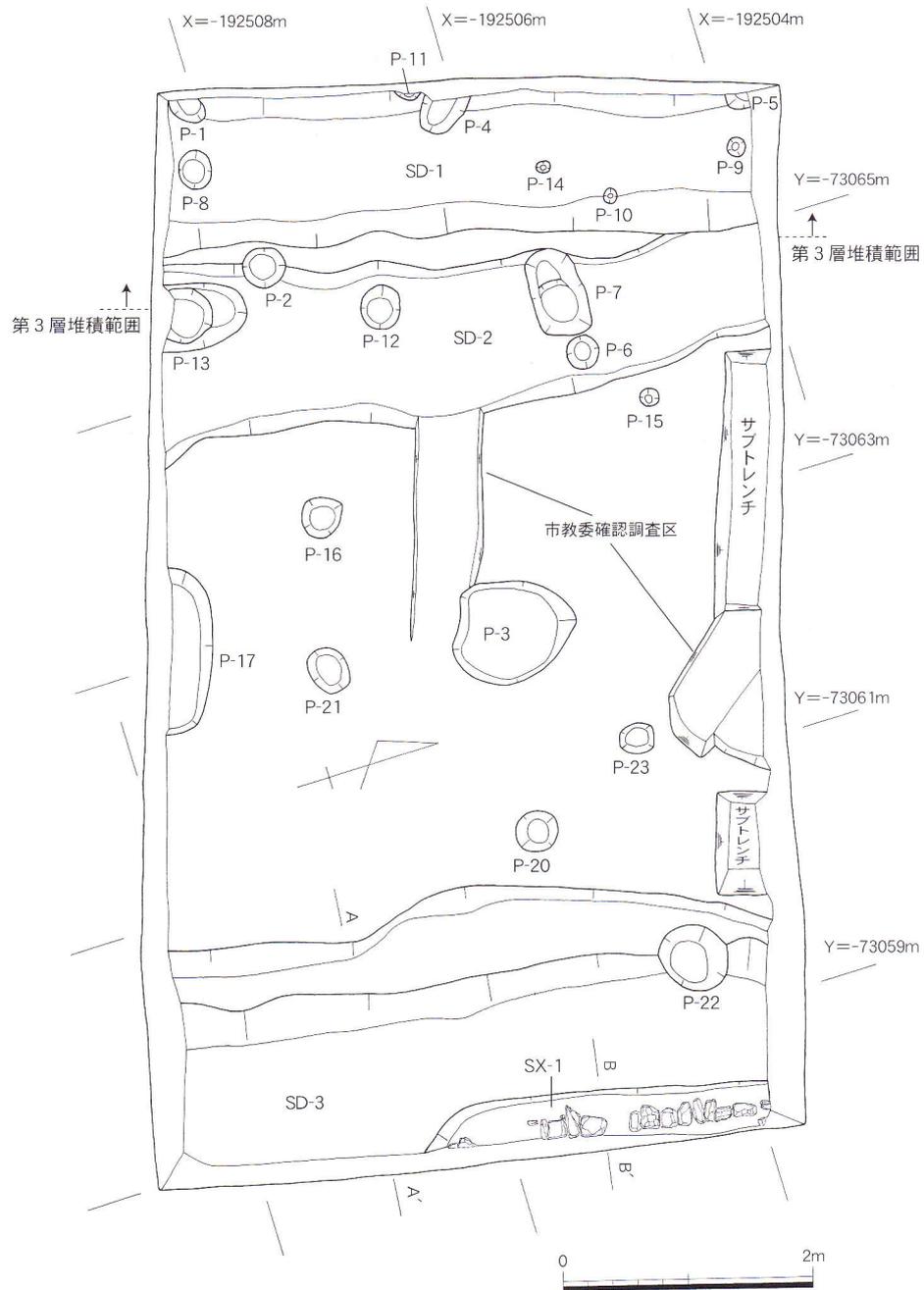
を測ることから、北から南に向かって約10cmの比高差で低く傾斜する。

遺構覆土は黒褐色粗砂混シルトの単一層であり、覆土内から平安時代後期のものとみられる土師器皿や瓦器椀、中国製白磁碗などが一定量出土した他、平安時代前期のものとみられる緑釉陶器の椀なども出土した(第7図)。よってこの溝は、遺構覆土が単一層であることや覆土内から出土した遺物の時期などから判断して、平安時代後期にあまり時間を経ず埋没したものと考えられる。また掘削時期については同じく平安時代の範疇と考えられる。

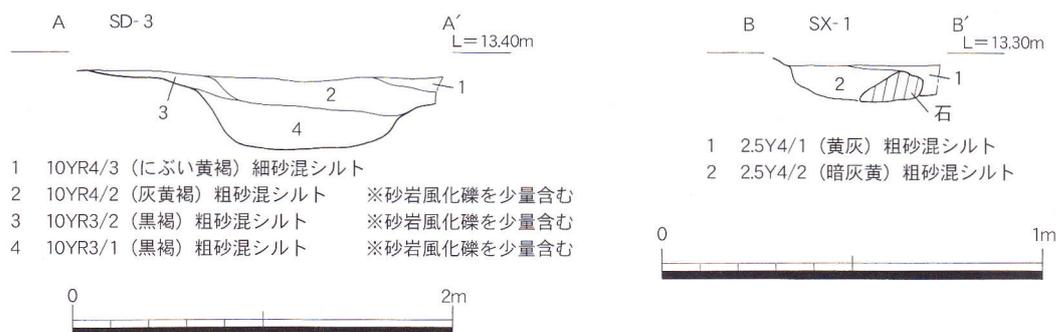
鎌倉時代の遺構

[SD-3] (第4図、図版1下)

調査区の東壁際において西側肩部を検出したSD-3は、検出長4.7m、検出幅2.0m、深さ27~43cm



第3図 第5層上面遺構全体平面図



第4図 SD-3・SX-1土層断面図

を測るもので、その方向性はN-14°-Eである。この溝の横断面の形状は、肩部から浅く緩やかに傾斜した後、さらに急傾斜で落ち込むものである。また遺構底面の標高は、北端部で13.0m、南端部で12.9mを測ることから、北から南に向かって約10cmの比高差で低く傾斜する。

遺構覆土は4単位に細分が可能であり、土層断面観察では各堆積層がレンズ状に堆積している。また遺構覆土の上位層から、平安時代後期の中国製白磁碗及び鎌倉時代前期の土師器、瓦器碗（第7図）の他、中国製青磁碗及び皿などが出土した。よってこの溝は、鎌倉時代前期に最終埋没したものとみられ、土層堆積状況から掘削後ある程度時間をかけて埋没したと考えられることから、掘削時期は平安時代後期に遡る可能性がある。

江戸時代の遺構

[SX-1] (第4図、図版1下)

調査区北東隅部の東壁際において検出したSX-1は、掘方内部に石積みを行った溜枡状遺構とみられるもので、直線的に延びる西側肩部のみを検出した。その規模は検出長2.8m、幅40cm以上を測り、遺構の大部分は調査区外となる。石積みは掘方肩部から約30~35cm内側において、東側に面を持つように並べられており、最下段しか遺存していなかった。また石積みに使用されている石材は、長さ15~25cm、幅10~15cmを測る砂岩礫である。

遺構の時期は、石積み内部に堆積した第1層から近世瓦が出土しており、江戸時代のものと考えられる。

4. 遺物

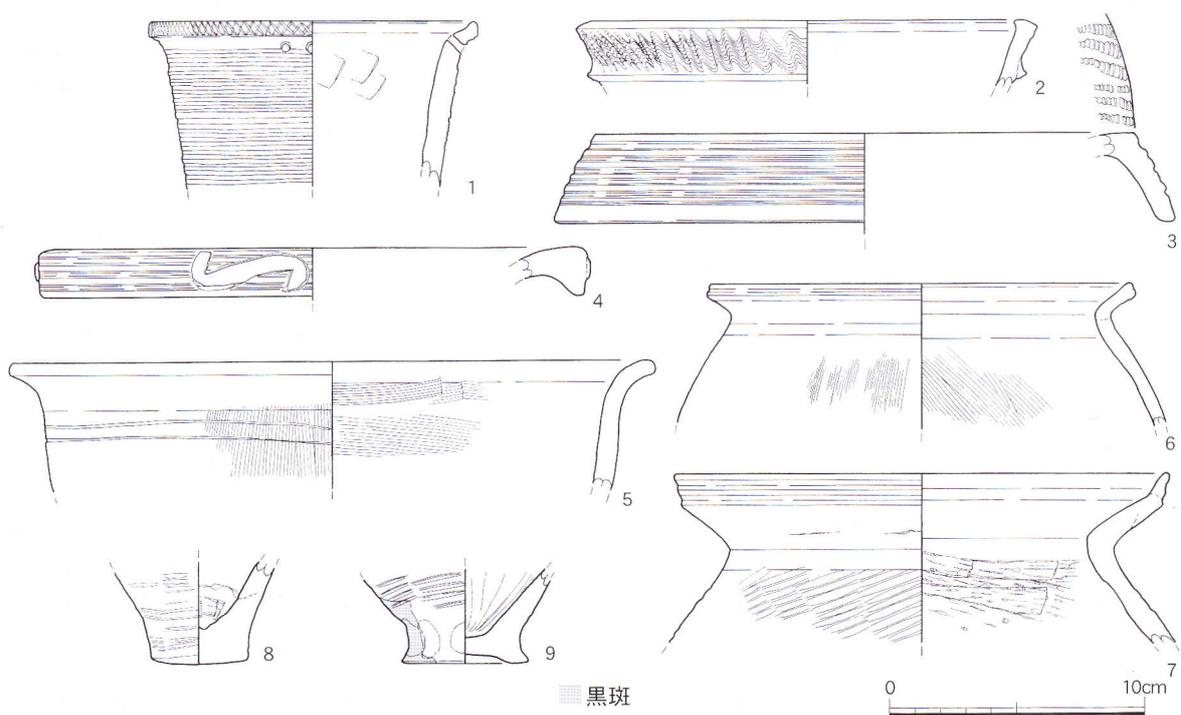
遺物は、各時代の遺構覆土や第2~4層の遺物包含層から収納コンテナに3箱分が出土した。これらの遺物には、弥生土器・土師器・須恵器・製塩土器・黒色土器・緑釉陶器・瓦器・中世土師器・中国製陶磁器・近世土師器・国産陶磁器・瓦・土製品・石器・銭貨がある（第5~8図）。以下、主な遺物のうち古い時期のものから説明する。また、遺構一括遺物及び石器についてはまとめて記述する。

弥生時代の遺物（第5図、図版2上）

1~4は壺である。1・2は直口壺とみられるものであり、1は直立する口縁部の端部をつまみ撫でることによって受け口状に仕上げるもので、口径12.6cmを測る。口縁端部側面には斜格子状の刻目が施されており、さらに口縁部外面には幅2.6cm間隔で数段に分割された文様帯を櫛描直線文で充填している。その他、口縁端部には直径3.0mm程度の紐通し穴が2孔認められる。内外面の調整は、ヨコ方向のナデを主体としたものであり、内面の調整として口縁部付近に板ナデの痕跡と考え

られる工具痕が認められる。色調は淡褐色であり、胎土はやや粗く、結晶片岩の他、石英・チャートを含む。1はその形態から他地域からの搬入品またはその影響を受けたものの可能性がある。2は外面の口縁端部直下に断面形が三角形状の突帯をもつもので、突帯から口縁端部の間に櫛描波状文が施されている。口径は16.8cmを測る。内外面の調整にはヨコ方向のナデが施されている。3・4は広口壺である。3は垂下口縁の垂下部で、口径21.2cmを測るものである。垂下部外面には凹線文が施され、また口縁上端面には櫛歯状工具による列点文が連続して施されている。4は水平方向へひらく口縁部の端部を上下に肥厚させるもので、口径21.0cmを測る。口縁端部外面には沈線を3条施した後、S字状浮文を貼り付けている。色調は明黄褐色から明褐色である。これらの遺物の時期については、1が弥生時代中期前葉、2が中期中葉、3が中期後葉、4が後期のものと考えられる。

5～8は甕である。5は口縁部直下に2条のヘラ描き沈線を施すもので、口径25.0cmを測る。内外面の調整は摩滅しているものの、外面の調整として体部にタテ方向のハケが施されており、内面の調整には体部から口縁部にかけてヨコ方向のハケが観察できる。色調は淡褐色から暗灰黄色である。6は、体部から「く」の字状に屈曲してのびる口縁部をもつもので、口径16.4cmを測る。内外面の調整は、摩滅によって不明瞭ではあるものの、外面の調整として体部にタテ方向のハケが認められ、内面の調整にはナナメ方向のハケが施されている。7は、口縁端部が受け口状を呈するもので、端部外面には2条の沈線が認められる。口径は19.0cmを測る。内外面の調整は、外面に成型時のタタキが認められ、内面の調整にはヨコ方向のヘラケズリが施されている。色調は褐色であり、胎土には赤色軟質粒を含む。8は甕の底部である。底面は平底のもので、底径3.8cmを測る。内外面の調整は、外面に成形時のタタキが認められ、内面の調整として板ナデの痕跡が確認できる。これらの遺物の時期については、5が弥生時代前期、6が中期中葉、8が後期、7が弥生時代末から古墳時代初頭のものと考えられる。



第5図 遺物実測図1

9は甕もしくは鉢の底部と考えられるもので、底径6.9cmを測る。内外面の調整は、外面に指頭圧痕の他、成形時のタタキが認められ、内面の調整として指ナデとみられるタテ方向の条線が観察できる。時期については、弥生時代末から古墳時代初頭と考えられる。

これらの遺物の出土位置は、1・3がSD-2第1層、2が第3層、4・8が排土、5・9がSD-3、6がSD-1、7が第2層である。

古墳時代の遺物

[P-22出土土器] (第6図、図版2下)

10・11は、土師器である。10は体部から口縁部にかけて緩やかに内彎する杯で、口径12.0cmを測る。11は脚柱部から外方へ屈曲し「ハ」の字形に開く高杯の脚部で、脚部径10.7cmを測るものである。

内外面の調整は、11が摩滅のため不明瞭であるものの、10では口縁部及び内面の調整としてヨコナデが施されている。色調及び胎土はともに褐色で、1～3mm大の赤色軟質粒を含むなど類似することから、10が高杯の杯部となり同一個体となる可能性もある。これらの時期については、古墳時代中期のものと考えられる。

3は、丸底I式の製塩土器で口径4.6cm、器壁厚2mmを測るものである。内外面の調整は、外面の調整としてナデが施されており、内面の調整には不明瞭ながら貝殻条痕及びヘラケズリが認められる。また口縁端部にはヨコナデが施されている。色調は乳褐色から淡赤褐色である。時期については古墳時代中期以降のものと考えられる。

平安時代の遺物

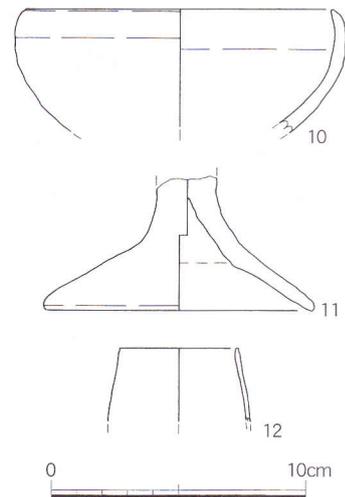
[SD-1出土土器] (第7図13～25、図版3)

13・14は、緑釉陶器である。13は土師質焼成の椀で高台径8.2cm、器高2.4cmを測り、内外面の全面に施釉を行うものである。高台は削り出しによって成形された輪高台で、内面の見込み部には一条の沈線がめぐる。色調は淡緑色である。14は須恵質焼成の皿で口径15.0cm、器高1.9cmを測る。口縁部は強いヨコナデによって少し外反させ、端部を丸くおさめている。内外面の調整はヨコナデである。施釉は内外面ともに認められ、色調は淡黄緑色である。

15・16は、土師器の小皿である。15は口径8.5cm、底径5.3cm、器高1.4cm、16は口径8.7cm、底径5.4cm、器高1.8cmを測り、内外面の調整はともにヨコナデが施されており、底面には回転糸切り痕が観察できる。色調は、淡黄褐色から淡赤褐色である。

17～24は瓦器である。そのうち17～23は椀であり、24は皿である。また椀には、内底面に平行線暗文を施すもの(17・18)と連結輪状文を施すもの(19～22)の他、不明(23)がある。

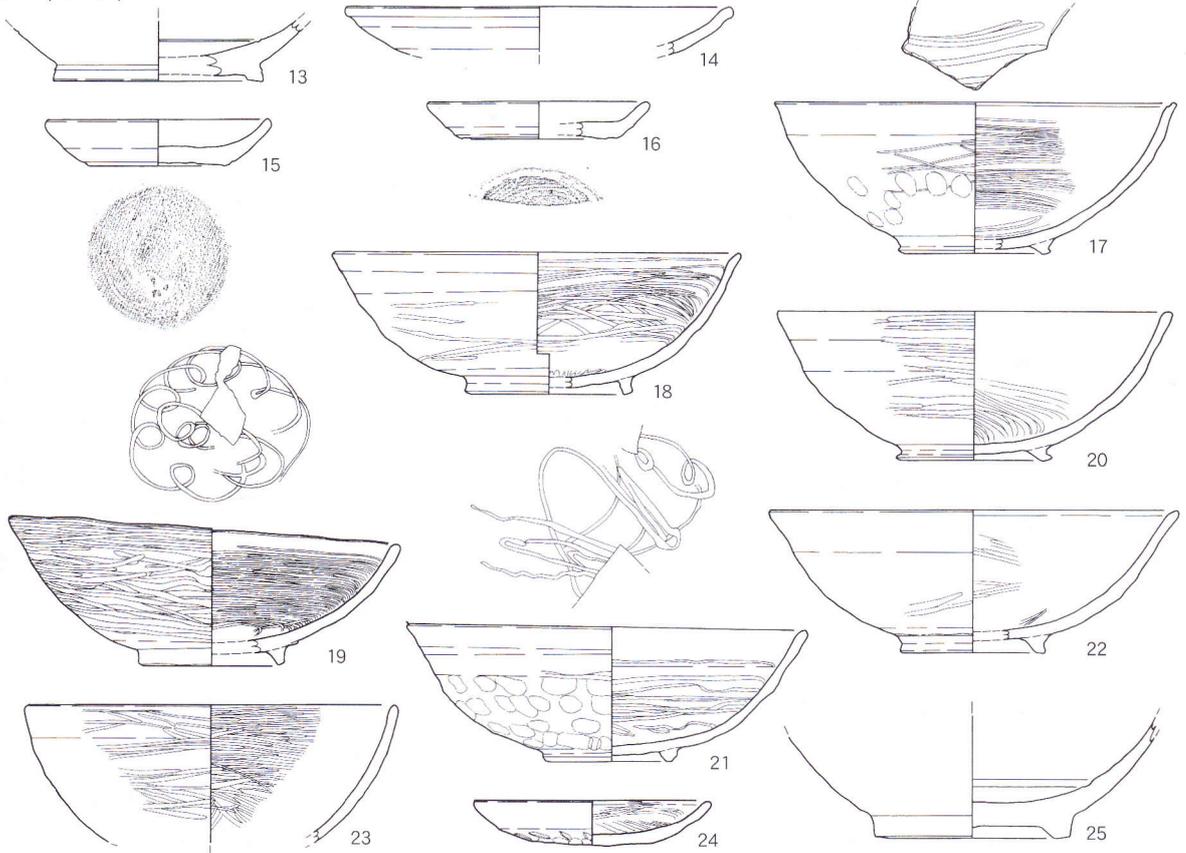
17は口縁端部内面に沈線が一条みられるもので、口径15.8cm、高台径5.4cm、器高6.0cmを測る。内外面の調整は、外面の調整として体部下半に指頭圧痕及び体部中位に粗いヘラミガキが施されている。それに対し内面の調整は、幅1mm程度のヘラミガキが密に施されている。高台の断面形は台形状を呈し、外端部がやや外側へ張り出す形態である。18は口径16.0cm、高台径6.1cm、器高5.6cmを測るものである。内外面の調整は、外面の調整として体部下半から体部中位にかけてヘラミガキが粗く施され、内面には幅2mm程度のヘラミガキが密に施されている。高台の断面形は方形状を呈する。また破断面の観察では、胎土は黄褐色であり、内面の約1/2は炭素の吸着が不十分であることから、焼成不良品と考えられる。



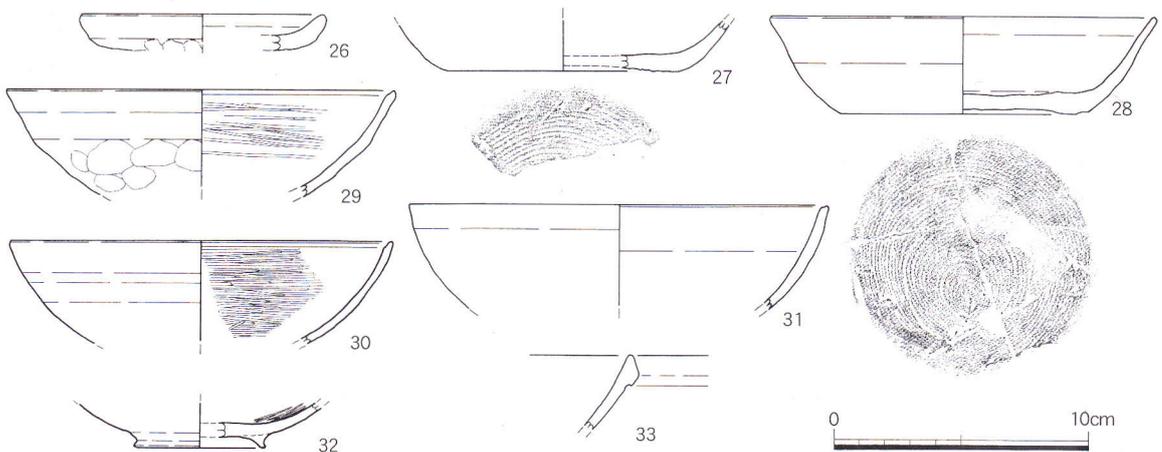
第6図 遺物実測図2

19は口径15.3cm、高台径5.8cm、器高4.8~5.9cmを測るものである。内外面の調整は、外面の調整として口縁端部から高台脇にかけて幅3mm程度のヘラミガキを4分割して密に施すもので、内面には幅2mm程度のヘラミガキがきわめて密に施されている。また高台の断面形は精美的な台形状を呈する。20は口径15.5cm、高台径5.6cm、器高5.8cmを測る。内外面の調整は、外面の調整として幅3mm程度のヘラミガキがやや密に施され、内面は摩滅しており不明瞭である。高台は断面形が台形状を呈し、外端部が外側へ張り出す形態である。21は内底面に簡略化された連結輪状文または渦文が施されるもので、口径15.6cm、高台径4.7cm、器高5.2~5.5cmを測る。内外面の調整は、外面の調整として

SD-1 (13~25)



SD-3 (26~33)



第7図 遺物実測図3

体部下半に指頭圧痕が顕著にみられ、体部中位にヘラミガキが数条施されている。また内面には幅2mm程度のヘラミガキがやや密に施されている。高台は断面形が丸味を帯びた三角形状を呈するものである。22は口径16.0cm、高台径5.6cm、器高5.6cmを測るものである。内外面の調整は、摩滅のため不明瞭であるもののヘラミガキが認められる。高台は断面形が台形状を呈し、外端部がやや外側へ張り出す形態である。

23は口径14.5cmを測るものである。内外面の調整は、外面の調整として幅2mm程度のヘラミガキがやや密に施されており、内面は口縁端部付近にまでヘラミガキが密に施されている。

24は口径9.3cm、器高1.7cmを測るものである。内外面の調整は、底部外面に放射状にひろがる爪形状の圧痕及び指頭圧痕がみられ、内面にはヘラミガキ及び内底面には平行線暗文が施されている。

25は中国製の白磁碗で、高台径7.6cm、器高4.8cmを測る。施釉は、内面及び外面の高台脇付近まで行き、高台畳付け及び高台内底面は露胎である。高台内底面及び高台は削り出しによって成形されており、内面の見込み部には一条の沈線が認められる。

これらの遺物の時期は、13が平安時代前期、14が平安時代中期、15～25が平安時代後期のものと考えられる。

鎌倉時代の遺物

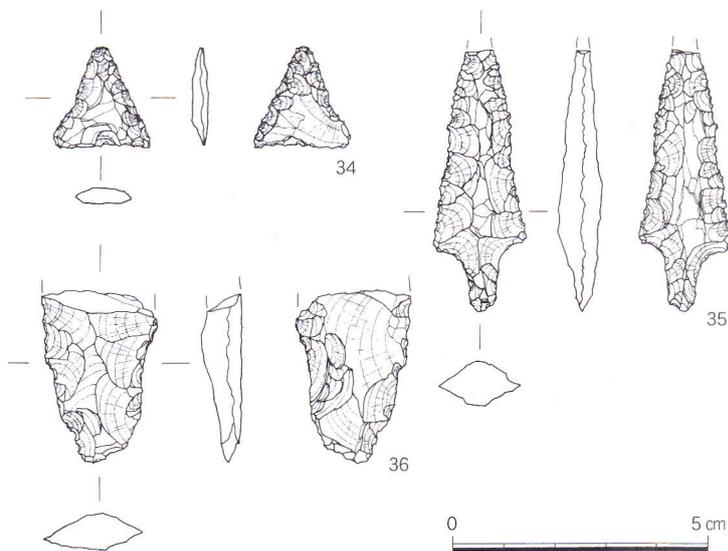
[SD-3 出土土器] (第7図26～33、図版4上・中)

26～28は土師器皿である。26は小皿で口径9.6cm、器高1.4cmを測り、器壁はやや肉厚で6mm前後を測る。内外面の調整はヨコナデまたはナデによって仕上げるもので、底部外面には指オサエが認められる。27・28は底面に回転糸切り痕が残る大皿であり、27は底径9.0cmを測り、28は口径15.0cm、底径9.6cm、器高3.7cmを測る。28の内外面の調整は、口縁部及び体部にヨコナデが施されており、底部内面は板状工具による回転ナデによって仕上げている。色調は淡黄褐色であり、底部外面には黒斑とみられる黒褐色部分が認められる。

29～32は瓦器碗で、すべて口縁端部内面に不明瞭な沈線が一条めぐるものである。そのうち29は口径15.2cm、30は口径15.0cmを測るもので、これらの内外面の調整は、外面の調整として口縁部に2単位のヨコナデが施されており、体部下半には指オサエの痕跡が明瞭に認められるものである。また内面の調整は、体部から口縁部にかけてヘラミガキが密に施されている。31は口径16.4cmを測るもので、内外面の調整は摩滅のため不明瞭であるものの、口縁部にヨコナデが施されている。32は底部であり、高台径5.0cmを測る。高台は断面形が三角形状を呈するもので、内外面の調整には外面に指オサエがみられ、内面には平行するヘラミガキが施されている。

33は中国製の白磁碗であり、玉縁状口縁をもつものである。

これらの時期は26～32が鎌倉時代前期、33が平安時代後期である。



第8図 遺物実測図4

その他

[石器] (第8図、図版4中・下)

34・35は石鏃である。34は平基式石鏃で全長2.0cm、最大幅1.9cm、最大厚さ3mmを測り、重量は1.1gである。表面刃部の調整剥離は反時計回りに施され、裏面は大剥離面を残し、刃部の調整剥離は不定方向である。35は凸基有茎式石鏃であり、先端部を欠失する。法量は、残存長5.2cm、最大幅1.8cm、最大厚さ9mmを測り、重量は5.5gである。刃部は鋸歯状を呈し、調整剥離は不定方向である。

36は石槍の基部もしくは尖頭器と考えられるもので、残存長3.4cm、最大幅2.3cm、最大厚さ8mmを測り、重量は5.7gである。表面刃部の調整剥離は大振りであり、その方向性は不定方向である。また裏面には大剥離面が顕著に残り、刃部の調整剥離は部分的である。

これらの遺物は、すべてSD-1から出土した。また時期については34が縄文時代、35・36が弥生時代のものと考えられる。

5. まとめ

今回の調査では、鎌倉時代に行われた整地の痕跡を検出し、また第5層上面において弥生時代前期から江戸時代までの遺構及び遺物を多数確認した。

まず鎌倉時代の整地層と考えられる第3層は、その堆積範囲がほぼSD-1の上部と重なり、調査区北壁面におけるSD-1周辺の土層堆積状況の観察では、SD-1埋没後にみられるレンズ状の凹みの上部に堆積している。そして、遺構検出面である第5層上面が東から西に傾斜するのに対し、第3層堆積後の地表面の標高が13.30mを測りほぼ水平であることは、第3層がSD-1埋没後の凹みと扇状地上部という旧地形の傾斜を緩和する目的で行われた整地に伴う堆積層であることを示していると考えられる。また、その時期については第3層からの出土遺物が少なく詳細な時期決定はできないものの、SD-1埋没後に堆積していることから鎌倉時代の範疇と考えられる。この時期に併行する遺構としては、調査区東端で検出したSD-3があり、整地範囲の東端ラインとSD-3がほぼ同じ方向性を示す。以上の調査結果から、第3層は調査区の西側に広がるとみられる屋敷地の整地に伴うものと考えられ、SD-3は屋敷地の東限を区画する溝であった可能性を指摘することができる。

次に第3層の下面で検出したSD-1は、SD-3と比較してその方向性や遺構底面の標高及び傾斜方向など多くの共通する要素をもつ溝である。また出土遺物の検討から、SD-1の埋没時期は平安時代後期であり、SD-3の掘削時期が土層堆積状況から平安時代後期に遡る可能性がある。これらの調査結果から、SD-1はSD-3が掘削される以前に屋敷地の東限を区画する溝として機能していたものである可能性が高い。またSD-3はSD-1の東約7m西側で検出したことから、屋敷地が東に移動したか、または拡張された可能性が考えられる。

よって、今回の調査地は古代から中世前期にかけての屋敷地の東端に位置するものと考えられる。またその存続時期は、SD-1の掘削時期が平安時代に遡り、SD-3の埋没時期が鎌倉時代前期であることから、平安時代から鎌倉時代前期にかけてのものとみられる。さらに、この屋敷地は平安時代後期に東へ移動または拡張が行われたと考えられる。

今回の調査で出土した遺物は、弥生時代前期から江戸時代までの長期にわたるもので、六十谷遺跡が複合遺跡であることを示している。そのうち弥生土器では、前期から後期までのものが一定量出土した他、サヌカイト製の打製石鏃及び剥片が多数出土した。これについては、過去に採集され

た遺物の中心時期が弥生時代であることと矛盾しない。また今回の調査では、弥生時代前期から中期の遺構を確認した。これらの遺構及び遺物は、調査地周辺が弥生時代集落の範囲内にあったことを示すものである。

さらに今回の調査成果として、平安時代から鎌倉時代にかけての緑釉陶器や中国製磁器が比較的多く出土した。これらの遺物は、その大半が屋敷地の区画溝と考えられるSD-1・3の覆土内から出土したものである。本遺跡の東に位置する高井遺跡や府中Ⅳ遺跡の調査では、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物などの遺構の他、緑釉陶器や灰釉陶器、中国製磁器などの遺物が比較的多く出土しており、今回の調査で確認した古代から中世にかけての遺構及び遺物の様相と類似する成果が得られている。これらの扇状地上部に立地する古代から中世にかけての集落遺跡の性格については、古代南海道など古代交通との関わりのなかで位置づけていく必要があると思われる。

(藤藪勝則)

【参考文献】

和歌山県教育委員会 1980『歴史の道調査報告書(Ⅱ) - 南海道・大和街道他 -』

和歌山市史編纂委員会 1991『和歌山市史』第1巻

前田敬彦 2007「吉備慶三郎氏採集考古資料について(その1)」『研究紀要』第21号 和歌山市立博物館

②川辺遺跡 第14次確認調査（調査一覧56）

1. 調査の経緯と経過

和歌山市域の東端部にあたる和歌山市川辺及び里周辺に所在する川辺遺跡は、紀ノ川北岸の標高11.50m前後の沖積平野に立地する遺跡である。この遺跡は東西約1km、南北約650mの範囲をもち、縄文時代から中世にかけての大規模な集落遺跡として知られている。

当遺跡の過去の調査には、昭和62・63年度及び平成3・4年度に財団法人和歌山県文化財センター（以下、「県センター」という。）が行った一般国道24号バイパス建設に伴う事前調査（調査面積30,641㎡）及び、平成9・12・13年度に同じく県センターが行った県道和歌山貝塚線道路改良工事に伴う発掘調査（調査面積約7,400㎡）がある。また、平成13年度には財団法人和歌山市文化体育振興事業団（以下、「市事業団」という。）が遺跡の実態解明を目的とした発掘調査（市第1次・調査面積192㎡）を実施している。そして、平成18年度には一般国道24号線西側における大規模開発の事前調査として財団法人和歌山市都市整備公社（以下、「市公社」という。）が確認調査（市第2・3次）を行い、その成果をもとに平成18・19年度に開発計画に対処する本発掘調査（市第4～6次）を実施し、さらに平成20年度には同国道東側における大規模開発の事前調査として市公社が確認調査（市第9次）を行い、その成果をもとに平成20・21年度に開発計画に対処する本発掘調査（市第10～13次）を実施している（第1図）。以上の調査成果から川辺遺跡の様相がかなり明確となりつつある。これらの調査では、縄文時代晩期の土器棺墓や弥生時代中期の竪穴建物や方形周溝墓、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての竪穴建物や古墳時代後期末から飛鳥時代にかけての竪穴建物や掘立柱建物、中世の掘立柱建物や土坑墓など多数の遺構を検出した他、遮光器土偶などを含む多量の遺物が出土している。



第1図 調査対象地位置図

今回の調査は、遺跡の北東端部における宅地造成を目的とする開発計画を起因とするものである。この開発用地が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記された川辺遺跡（遺跡番号145）の範囲内であったため、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て実施することとなった。調査は、和歌山市教育委員会文化振興課指導のもと市公社が和歌山市から委託を受けて実施した。今回の調査地は、開発計画範囲の中でも擁壁工事計画路線にあたる地点と防火水槽設置予定箇所を中心に設定し、近隣の調査事例が存在しなかったことから、県センターの国道バイパス線建設に伴う調査区の調査成果を参考に調査を進めた。

現地における調査は、平成21年10月19日から同年11月20日までの1ヶ月間の期間を要した。

2. 調査の方法と概要

(1) 調査の方法

今回の調査は、開発計画範囲約3350m²の内、擁壁工事路線及び防火水槽設置予定部分を対象に幅2m、調査区長5mの調査区を5ヶ所設定して行った（第2図）。調査面積の合計は約50m²である。

重機による掘削は、進入路の制約から搬入が困難と考えられたため、現況が水田である第1層（水田耕作土）から人力による掘削を進めた（図版5上）。また当初の計画で遺構面までの掘削予定深度が45cmであったものが、予定深度を超える掘削深と

なったため契約変更を行い当初計画していた遺構面の確認と遺構の有無及びサブトレンチによる下層調査を人力掘削によって行った。また、遺構掘削は、基本的に実施しないものとして計画していたが、遺構の時期など最小限の情報を得るため文化振興課担当者と協議し、検出した部分の掘削を行うこととなった。

図面による記録は、各調査区に仮原点を設置して遺構平面図及び壁面土層断面図（縮尺1/20）の作成を行った。各調査区の仮原点は、基準点測量を行い旧国土座標（日本測地系）の数値とした。土層の色調及び土質の観察については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、水準値は国家水準点（T. P. 値）を基準とした。

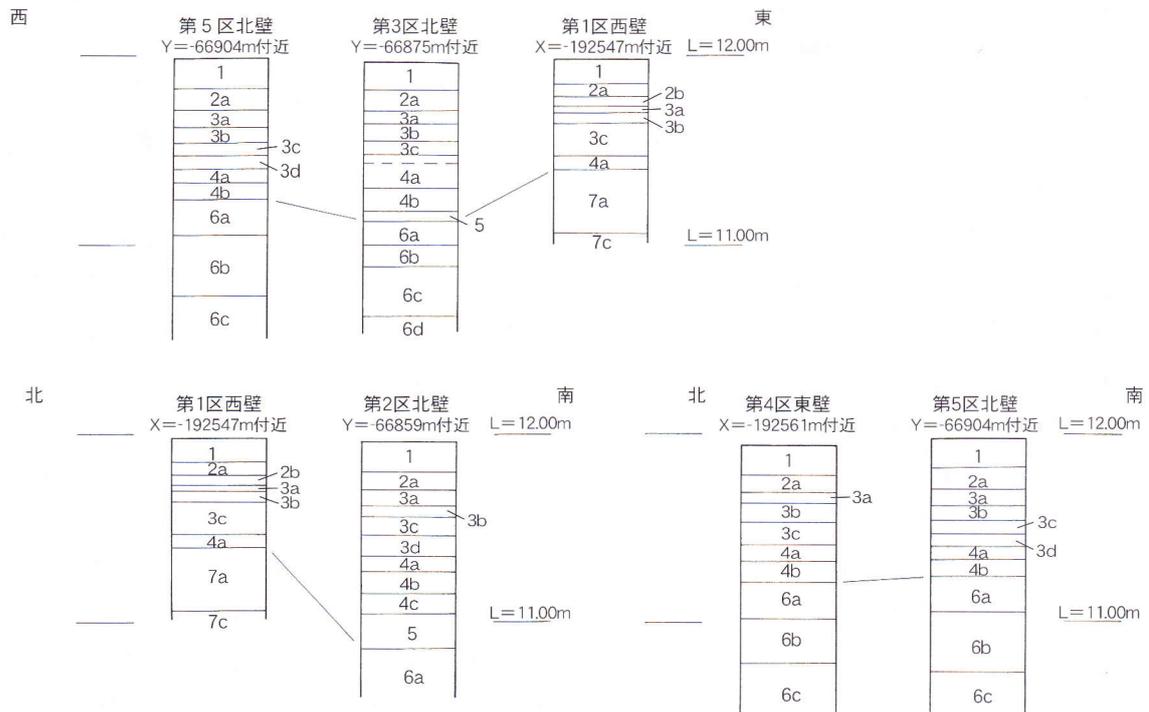


第2図 調査地区割図

(2) 基本層序

調査地の基本層序については、市公社が行った第2～13次調査と類似する状況であったため、これらの層序を参考として褐色粒を多く含む鎌倉時代の堆積層（第4層）と古墳時代から奈良時代を中心とする遺構面のベース層（第6層）を基準層ととらえてこれらの層位関係から堆積した時代を考慮し、各調査区の対応関係を考えて層位番号を付した。なお、各層位の堆積時期は、上位から現代の水田耕作土（第1層）、江戸時代の耕作土（第2層）、室町時代から江戸時代にかけての耕作土（第3層）、鎌倉時代の堆積と考えられる褐色の鉄分粒を多量に含むことを特徴とするにぶい黄褐色系の粗砂混シルト（第4層）、奈良時代から鎌倉時代にかけての堆積土（第5層）、黄褐色系のシルト質土である縄文時代後期から弥生時代中期と考えられる堆積土（第6層）の他、部分的に確認した無遺物層と考えられる褐色系の円礫を含む粗砂層（第7層）に分けられる。ただし、第1・5層を除く各層位は2～4単位に細分できる。これらの土層対応関係を東西方向及び南北方向に分けて柱状模式図（第3図）に示した。なお、土色及び土質に関しては、各調査区によって多少の違いがみられるため、各調査区の壁面土層堆積状況図に示した。

また明瞭な遺構が検出できた調査区は第3・4区であり、その遺構面の対応も同図に示した。この状況から調査対象地を縦断する南北方向では、対象地東部においては第1区から第5区にかけて50cm程度下降し、南側に谷状の地形が展開していることが分かり、対象地西部においては標高11.20m程度で比較的安定した遺構面を形成している。また対象地中央部の第1・3・5区による東西方向横断図では中央部にあたる第3区で20cm程度落ち込む状況がみられるものの、比較的安定した遺構面を形成している。



第3図 調査地土層柱状模式図

3. 遺構

今回の調査では対象地西半部にあたる第1・3区において遺構を検出した。なお、遺構が検出されなかった調査区についても遺構面の状況等調査区ごとに概略を説明する。

〔第1区〕（第4図、図版5下）

第1区は、対象地の北東隅部に設定した調査区である。この調査区では西端部を除く大半が第1層の下面から掘削された大規模な粘土採掘坑とみられる攪乱が存在し、この攪乱を掘削した後、西端部にのみ残る第2・3層と比較的薄く堆積する第4層の掘削を行い、遺構面と考えられる第7層を検出した。第7層の上面は、標高約11.40mで中央部から西側は直上層である第4a層が西側に向かってやや落ち込む状況を確認した。この第7層の上面での遺構検出の結果、遺構は確認されず、北東隅部と西壁直下にサブトレンチを設定して下層の状況確認を行った。しかし、遺物は出土せず円礫を含む粗砂層が3単位に細分できることを確認したに過ぎない。

なお、この調査区は遺構面である第7層の標高が最も高く、他の調査区で確認した第5層及び第6層の堆積が存在しない地点である。また第7層がこれまでの調査で検出していた扇状地の堆積に類似する層位とみられたことから北側和泉山脈の雄ノ山峠から派生する扇状地の末端部と考えられる。

〔第2区〕（第4図、図版6上）

第2区は、対象地の南東隅部に設定した調査区である。遺構面と考えられる第6層上面は標高約10.90mでほぼ水平に堆積し、他の調査区に比べ遺構面の標高が最も低くなる。また直上層である第5層も20cm程度と比較的厚く堆積し、下位層ほど粘質が強くなる傾向である。このことは、当調査区周辺が低湿地であることを示すものと考えられる。また第6層上面の遺構検出の結果、遺構は確認できず、北壁面直下に設定したサブトレンチ内からも遺物は出土していない。

〔第3区〕（第4図、図版6下）

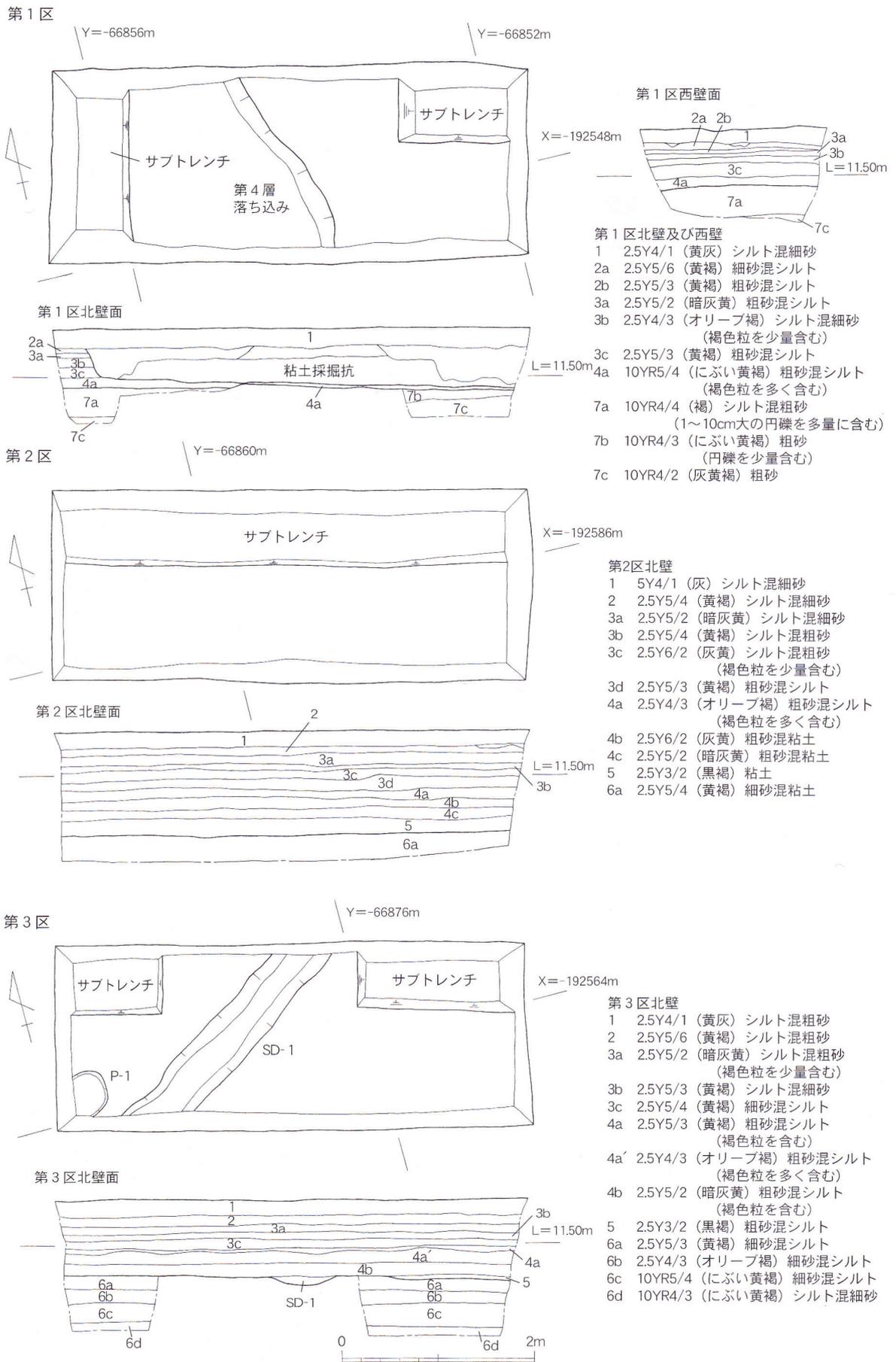
第3区は、対象地の中央部に設定した調査区である。この調査区では、第6層上面（標高約11.10～11.20m）において溝1条（SD-1）とピット1基（P-1）を検出した。

SD-1は調査区の中央部をN-55°-Eの方向性で縦断する溝で、幅50cm、深さ5cm程度のものである。その流路方向は、底面の比高差がほとんどなく不明である。またP-1は南西隅部で検出した直径45cm程度の円形のもので、深さは5cmと比較的浅いものである。これらの覆土はともに単層で、SD-1が黒褐色系の粗砂混粘土、P-1が灰黄褐色系の粗砂混シルトである。またSD-1の南東側にのみ第5層の堆積があり、南東方向に緩やかに落ち込む。サブトレンチはSD-1を避けた北壁直下に設定し、標高10.50mまで掘削を行った。この結果、第6層が4単位に細分できる状況を確認し、上位層内に微量の遺物が含まれていることを確認した。

〔第4区〕（第5図、図版7上）

第4区は、対象地西部の防火水槽設置予定部分に設定した調査区である。この調査区では、第6層上面（標高約11.20m）において溝2条（SD-2・3）を検出した。

SD-2は調査区の南壁面下において検出した東西方向の溝で、N-78°-Eの方向性をもつ。またSD-3は南壁際で検出したSD-2に切られる溝状の遺構である。検出した範囲内での覆土はともに単層で、SD-2が灰黄褐色系の粗砂混シルト、SD-3がにぶい黄褐色系の粗砂混シルトである。これらの遺構を避け、東壁直下にサブトレンチを設定し、標高10.50mまで掘削を行い、ベース層である第6層が4単位に細分できることを確認した。しかし、この調査区では遺物の出土は認められ

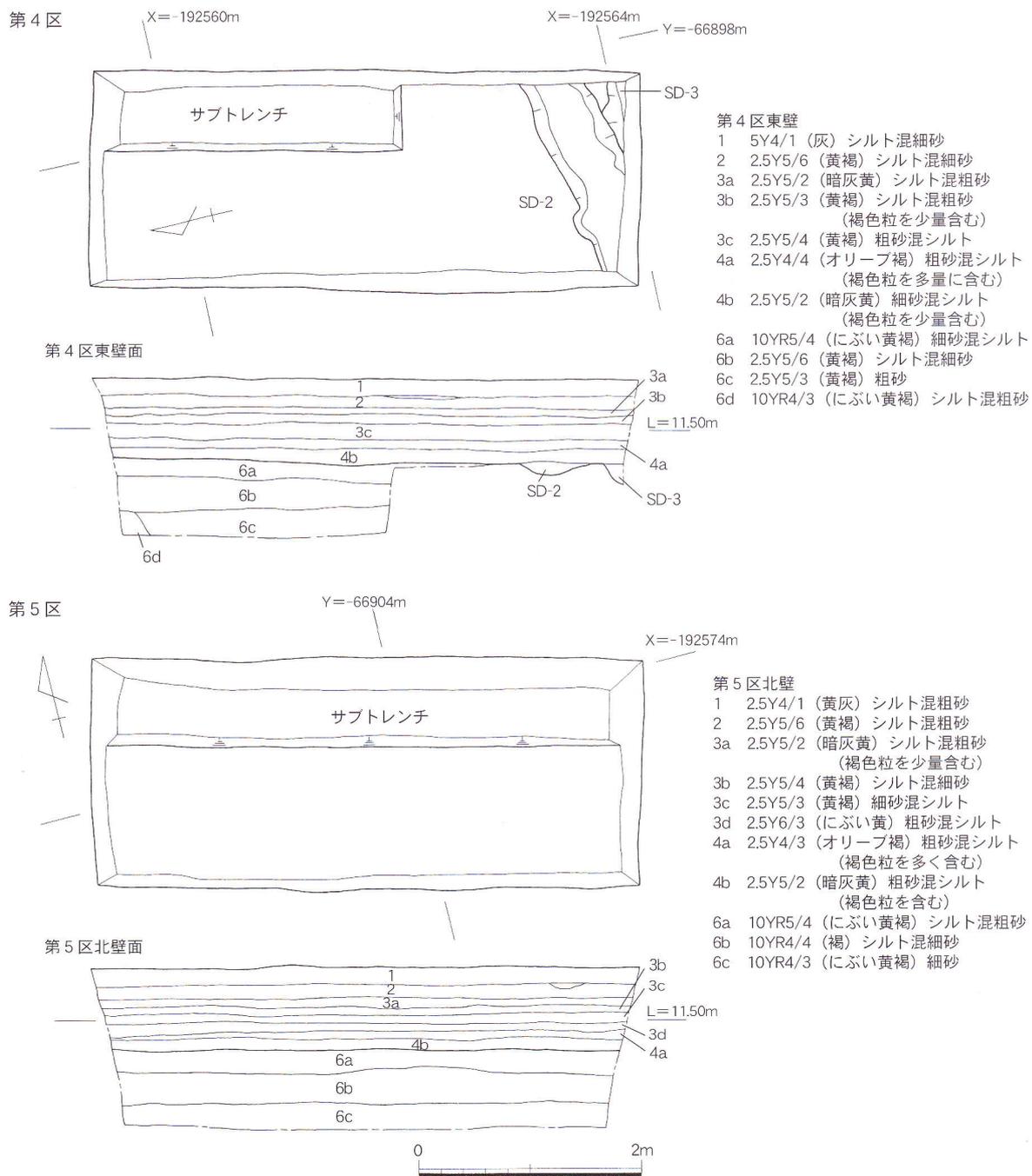


第4図 第1～3区遺構平面図及び土層断面図

なかった。

〔第5区〕（第5図、図版7下）

第5区は、対象地の南西隅部に設定した調査区である。遺構面と考えられる第6層上面は標高約11.20mでほぼ水平に堆積し、遺構検出の結果、遺構は確認できなかった。また第2・3区において確認した第5層の堆積もなく比較的安定したベース面を形成している。サブトレンチは北壁直下に設定し、標高10.50mまで掘削を行った。この結果、第6層が3単位に細分できることを確認し、地表面から1.45mの深さ（標高10.55m）の第6c層まで遺物が含まれていることを確認した。出土した遺物は縄文土器細片でこの層位の堆積時期が縄文時代であるものとみられる。



第5図 第4・5区遺構平面図及び土層断面図

4. 遺物

今回の調査で出土した遺物は、遺物収納コンテナ2箱分である。出土した遺物の種類には、縄文土器、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、中世土師器、輸入陶磁器、国産陶磁器、瓦、石器、金属器などがある。これらの遺物は、各調査区の遺物包含層や遺構覆土から出土したものである。

縄文土器の出土傾向としては、第3区の第6a層から突帯文系の土器が出土した他、第5区の第6c層に微量の土器が含まれていた。縄文時代以降の土器の出土は、全地区の堆積層に散在し出土している。瓦は、第4区の第4a層から古代に遡る平瓦が2点出土し、石器は、第2区の第4b層から凹基式石鏃が、第4区の第4b層から有茎式石鏃がそれぞれ出土した。この他、自然遺物として馬歯が第3区の第4b層と第4区の第4a層から出土している。

次に、今回出土した遺物の中で図示できたものについて説明する。

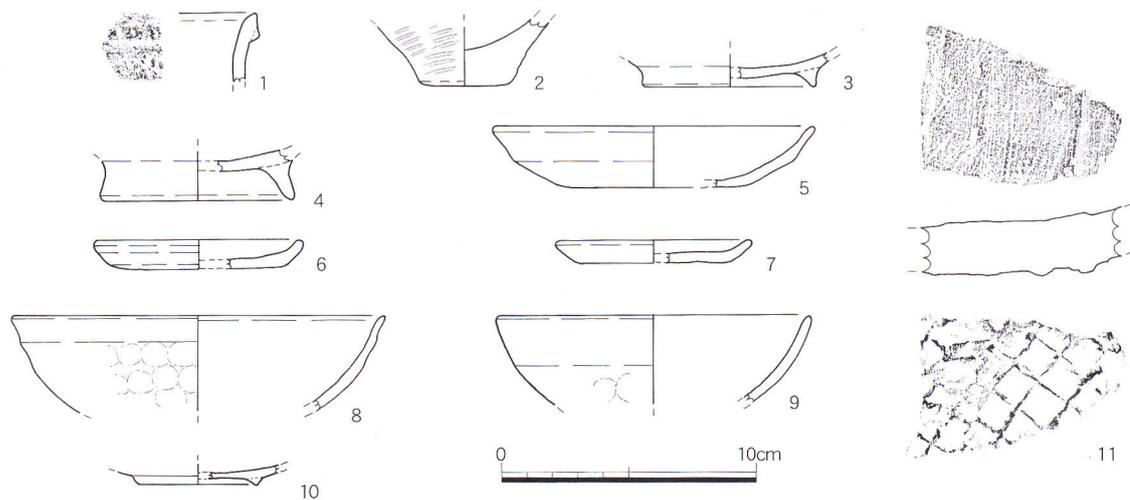
(1) 土器類 (第6図、図版9)

1は縄文土器口縁部の細片である。外端面に突帯を廻らし上部に刻み目を施している。胎土には結晶片岩が目立つ。2は土師器の底部である。外面には平行タタキを施し、内面はナデ調整によって仕上げている。3は黒色土器A類碗の底部である。4～7は中世土師器である。4は足高の高台をもつ碗もしくは皿の底部である。5は口径12.5cmの皿で、口縁部は強いヨコナデによって仕上げている。6・7は口径7.5cm前後の皿で、ともに浅い形状のものである。8～10は瓦器碗である。8・9は口縁部で、外反気味に立ち上がる形状のもの(8)や内湾気味に立ち上がるもの(9)がある。10は底部で、断面形が三角形状の高台が貼付されている。ともに摩滅が著しく内面の暗文等は不明である。

これらの出土位置は、1が第3区の第6a層、2が第3区の第4b層、3が第4区の第4b層、4・7が第5区の第4a層、5・6が第5区の第3c層、8が第2区の第4a層、9が第3区の第4a層、10が第2区の第4b層である。

(2) 瓦 (第6図、図版9)

11は凸面に格子目タタキを残す平瓦である。凹面には布目が明瞭に観察できる他、模骨痕とみられる圧痕も残る。焼成はやや軟質で乳褐色に発色する。この瓦は第4区の第4b層から出土した。



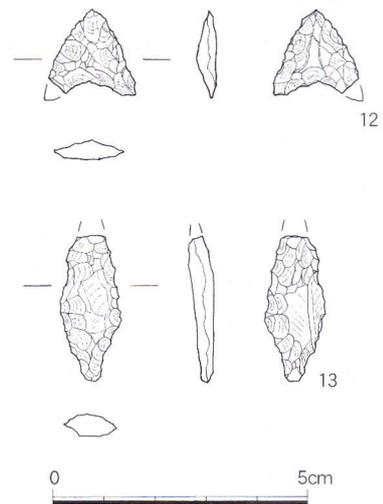
第6図 遺物実測図1

(3) 石器 (第7図、図版9)

今回の調査で出土した石器はサヌカイト製の石鏃2点である。12は基部の一部が欠失した凹基式石鏃で、細部調整は不明瞭なものである。13は先端部が欠失した有茎式石鏃で裏面には大剥離面を残し、細部調整は主に基部から先端に向かって行われている。これらの出土位置は、12が第2区の第4b層、13が第4区の第4b層である。

(4) 自然遺物 (図版9)

自然遺物としては、馬歯や種子などが出土している。14は第3区の第4b層から出土した馬臼歯の一部である。



第7図 遺物実測図2

5. まとめ

今回の調査目的は、工事計画範囲における遺構の有無等を確認するために実施した確認調査であり、これまで調査例のなかった川辺遺跡北東部の状況の一端を明らかにすることができたものと思われる。今回の調査では、既往の調査地と類似する堆積があり、ベース層である第6層も比較的安定した状況であることも確認できた。この第6層上面では、対象地中央部の第3区とその西側の第4区において溝を主体とする遺構を検出し、確実に当該対象地まで遺跡が広がっていることが確認できた。また第1区で確認した第7層は、第4～8次調査で確認していた和泉山脈からの扇状地末端部の堆積と類似し、当該調査地から北側に向け地表面の上昇する傾向からみても確実なものと考えられる。また第2区では第6層上面が30～50cm程度落ち込み、土質からみても低湿地になるものとみられる。この状況は、第4～6次調査と類似する扇状地末端部に形成された微低地部の様相と考えられ、南側に位置する県センターが行った国道24号バイパス地点で確認されている微高地部との範囲に収まる微低地であることが考えられる。また微量ではあるものの第6層内から出土した縄文土器は、川辺遺跡の特徴のひとつである縄文土器の分布範囲の広がりを示すものであり、対象地周辺にもこの時代の遺構が存在する可能性も考えられる。

以上の成果は、これまで調査例のなかった北東部の様相を知る重要な成果であり、当該調査地も含め比較的開発が進んでいない周辺部の開発について注意する必要性が考えられる。(井馬好英)

【参考文献】

- 財団法人和歌山県文化財センター 1995『川辺遺跡発掘調査報告書』
- 和歌山市教育委員会 2003『川辺遺跡発掘調査』『和歌山市内遺跡発掘調査概報-平成13年度-』
- 財団法人和歌山県文化財センター 2005『山口遺跡・川辺遺跡発掘調査報告書-県道和歌山貝塚線・県道粉河加太線道路改良事業に伴う発掘調査-』
- 財団法人和歌山市都市整備公社 2008『川辺遺跡第4・5・6次発掘調査報告書』

③田屋遺跡 第3次確認調査（調査一覧64）

1. 調査の経緯と経過

田屋遺跡は、標高5.0m前後の沖積平野に立地する集落遺跡である。

今回の調査対象地は、阪和自動車道と紀ノ川が交差する地点の北東約700m、阪和自動車道の西側下に位置する（第1図）。現在の調査地周辺は、和歌山北インターチェンジ建設に伴う大規模な造成工事のため旧状が失われつつあるものの、紀ノ川北岸堤防下の広大な水田地帯である。

調査地周辺における過去の調査では、昭和56～61年に調査地の東約1km地点において財団法人和歌山県文化財センターが行った一般国道24号バイパス建設に伴う調査があり、この調査では弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴建物約50棟の他、掘立柱建物や溝、旧河道、平安時代の掘立柱建物などが検出され、田屋遺跡が当該期の集落遺跡であることが明らかとなった。また、平成17年には阪和自動車道の西側において財団法人和歌山市文化体育振興事業団が六箇井用水の北及び南側両地域を対象として埋蔵文化財の有無を確認するための試掘調査を行った。その結果、六箇井用水の南側一帯は紀ノ川の氾濫原であったものの、北側では直川用地内において奈良時代から平安時代の溝や自然流路が検出されている。この調査結果を受けて、和歌山県教育委員会は田屋遺跡西端の一部範囲拡張を行い、現在調査地周辺は田屋遺跡の範囲内にあたる。その後、平成20年に和歌山市教育委員会が直川用地内において公共施設建設に伴う確認調査を行い古墳時代の溝などを検出したことから、同21年に財団法人和歌山市都市整備公社が第2次発掘調査（以下、第2次調査）を実施している（第2図）。この調査では、第1・3区において安定した沖積層（明黄褐色のシルト質土）を検出し、その上面において古墳時代前期のものと思われる溝及び土坑、古墳時代中期の掘立柱建物、古墳時代後期に埋没した溝の他、平安時代前期に埋没した大溝、遺構の重複関係から奈良時代から平安時代のものと思われるピットなど多数の遺構が検出され、第2次調査地周辺に古墳時代から平安時代の遺構が高密度に展開している状況が明らかとなった。また第2区周辺は粘質土の堆積が厚く認められ、直川用地の北半部には沼地または湿地が存在すると考えられている。



第1図 調査位置図

調査地周辺における遺跡を概観すると、北東約700mの標高25m前後を測る丘陵上には、弥生時代後期から古墳時代前期の集落遺跡である府中Ⅳ遺跡が立地し、また北西約600mの段丘上に立地する高井遺跡は同じく集落遺跡であり、古墳時代の竪穴建物の他、平安時代から鎌倉時代にかけての掘立柱建物、北宋銭15枚が副葬された土葬墓などが検出されている。その他、北東約1.6kmに鎮座する府守神社を中心とした一帯は府中遺跡であり、紀伊国府跡と推定されている。また、北約400mに位置する鳥井遺跡では鎌倉時代の溝及び土坑などが検出されている。

今回の調査は、このような歴史的環境のなか、和歌山市直川字須井田377番地における道路建設に伴う開発計画に起因し、この場所が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された周知の遺跡である田屋遺跡（遺跡番号93）の範囲内であったため、遺跡確認を目的として行ったものである。

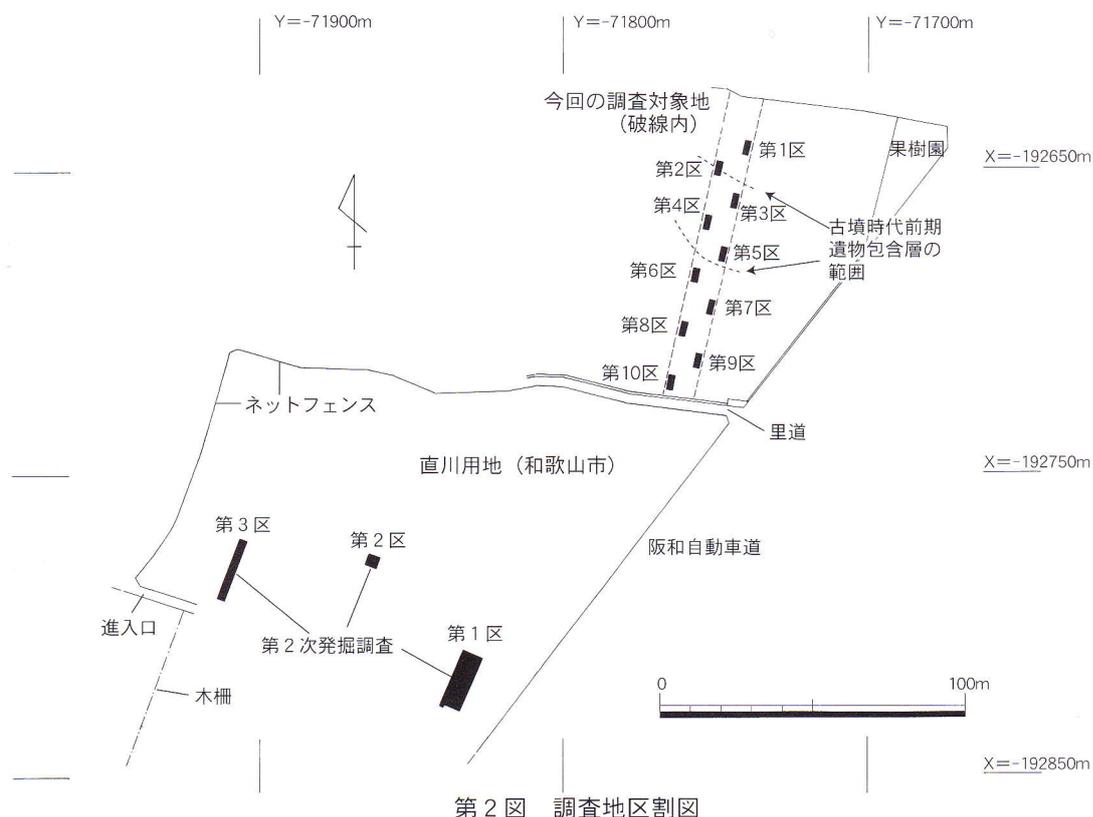
調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山市都市整備公社が委託を受けて行った。また調査期間は、平成21年11月19日～平成21年12月22日までの約1ヶ月間で行った。

2. 調査方法と概要

(1) 調査の方法

今回の調査は、道路計画範囲内に南北長5.0m×東西幅2.0mの調査区を10ヶ所設け、北から第1～10区とし行った。調査面積は合計100㎡である（第2図）。

重機による掘削は、第2次調査第1区の調査成果及び和歌山市教育委員会の確認調査において検出された遺構検出面である明黄褐色シルト（今回の調査における第6層と対応）の直上層までとした。人力による掘削は、遺構検出面までの遺物包含層及び、各調査区において下層調査のため適宜設定したサブトレンチについて行った。また遺構掘削については原則として行っていない。ただし、和歌山市教育委員会文化振興課と協議し、遺構の残存深を確認する目的で一部の遺構については部分的に掘削を行った。



図面による記録は、各調査区の両端に仮原点を設置して遺構平面図及び壁面土層断面図（縮尺1/20）の作成を行った。各調査区の仮原点には、既存の3級基準点から基準点測量を行い国土座標（世界測地系）の数値を付した。その他、検出した遺構のうち一部掘削を行ったものについては、土層断面図（縮尺1/20）または写真による記録を行った。土層の色調及び土質の観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、水準値は国家水準点（T. P. 値）を基準とした。

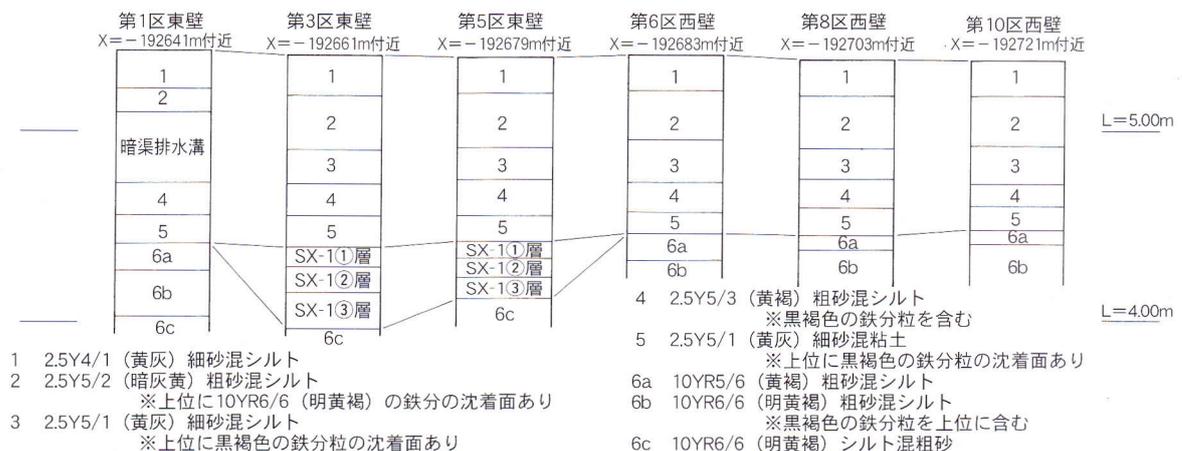
（2）基本層序

調査地の現況は、水田である（図版10上）。現水田面の標高は第1区北端部で5.50m、第10区南端部で5.40mを測り、北から南に向かって僅かに低く傾斜する。調査地の基本層序は、包含される遺物の時期及び土質から大きく1～6層に分層した（第3図、図版11）。

第1層は黄灰色細砂混シルトであり、現在の水田耕土である。第2層は暗灰黄色粗砂混シルトであり、江戸時代から近代にかけての耕作土とみられるものである。この第2層は、上位にみられる明黄褐色の鉄分の沈着面によって4～6単位に細分が可能である。第1区では、この第2層の中間層上面から暗渠排水溝が掘削されている。

第3層は黄灰色細砂混シルトであり、室町時代から江戸時代にかけての耕作土とみられるものである。この第3層は、上位に黒褐色の鉄分粒の沈着面があり2～3単位に細分が可能である。第4層は黄褐色粗砂混シルトであり、鎌倉時代の耕作土と考えられるものである。この第4層は、黒褐色の鉄分粒を含むことを特徴とし、その沈着面によって1～3単位に細分が可能である。第5層は黄灰色細砂混粘土であり、平安時代の耕作土とみられるものである。この第5層についても鉄分粒の沈着面によって1～2単位に細分が可能である。

第6層は、明黄褐色系の粗砂混シルトであり、各調査区において下層確認を目的としてサブトレンチを設定し掘削を行った結果、少なくとも3単位（第6a～6c層）の堆積を確認することができる。この第6層は無遺物層であり、その土色及び土質から判断して、紀ノ川の沖積作用によって自然堆積したシルト質土と考えられる。またその上面は、古墳時代の堅穴建物や溝、土坑及びピット、落ち込みを検出した遺構検出面である。遺構検出面の標高は、第1区で4.40m前後、第10区で4.50m前後を測り、現水田面とは逆に南から北に向かって僅かに低く傾斜する。



第3図 調査地土層柱状模式図

3. 遺構

遺構は、第1・2・4・6～10区の各調査区において、古墳時代のものと考えられる竪穴建物や溝、土坑及びピットを多数検出した。また第3・5区では第6層上面の落ち込みと、その上部に堆積した古墳時代前期の遺物を一定量含む遺物包含層を確認した。遺構検出面は、第6層上面の1面のみである。以下、各調査区で検出した主な遺構についてその概略を記述する。

第1区検出の遺構（第5図、図版10上）

第1区では、第6層上面において溝（SD-8）、土坑（SK-5）の他、ピット2基を検出した。遺構検出面の標高は、4.40m前後を測る。

SD-8は、調査区の南東隅部において検出したもので、東半部について掘削を行った。その結果、遺構覆土は黄灰色細砂混シルトであり、遺構の残存深は最深部で約10cmを測る。この遺構の時期は、出土遺物から古墳時代のものと考えられる。

第2区検出の遺構（第4・5図、図版10上）

第2区では、第6層上面において溝（SD-7）、土坑（SK-4）の他、ピット1基を検出した。遺構検出面の標高は、4.45m前後を測る。またサブトレンチにおいて、第6a層の下位層として黒褐色の鉄分粒が上位に沈着する比較的安定した堆積土（第6b層）を確認した。この第6b層上面において遺構の有無を確認する目的で、調査区の南半部について第6a層を掘削し遺構検出を行った。その結果、遺構は認められなかった。

その他、調査区西壁の観察では、調査区北端から南へ約2.0m地点の第6層上面において、後述する第3区で検出した古墳時代前期の遺物を一定量含む灰黄褐色細砂混シルトの落ち込み（SX-1）の北側肩部を検出した。この落ち込みは、南に向かって厚く堆積するもので、最深部で厚さ約20cmを測る。

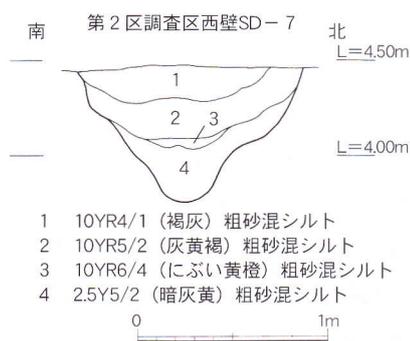
SD-7は、調査区の北端部においてほぼ東西に検出したもので、検出長2.0m以上、幅1.2～1.5m、深さ71cmを測る。遺構覆土は、調査区西壁面の観察において4単位に細分が可能であり、第1層は褐灰色粗砂混シルト、第2層は灰黄褐色粗砂混シルト、第3層はにぶい黄橙色粗砂混シルト、第4層が暗灰黄色粗砂混シルトである。この溝の断面形状は、V字状を呈するものである。遺構の時期については、覆土に含まれる遺物から古墳時代前期のものと考えられる。

第3区検出の遺構（第3・5図）

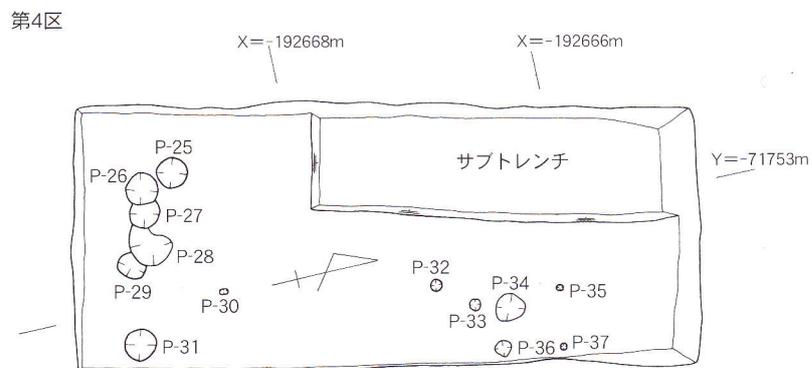
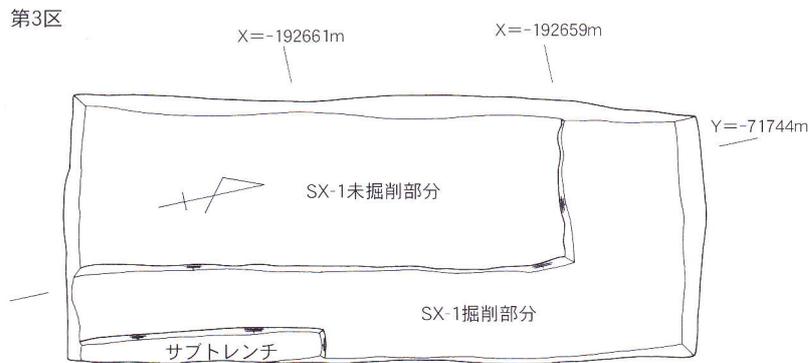
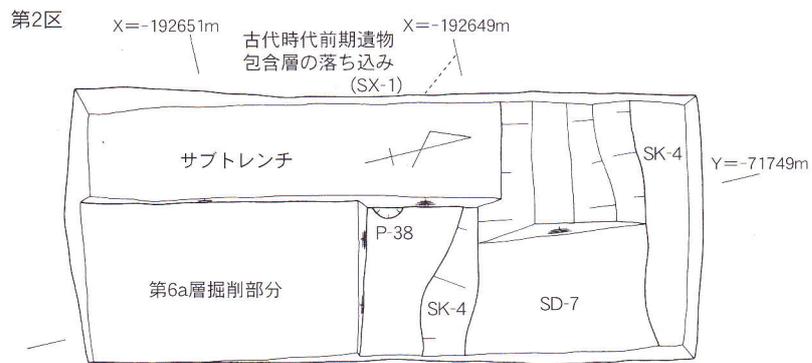
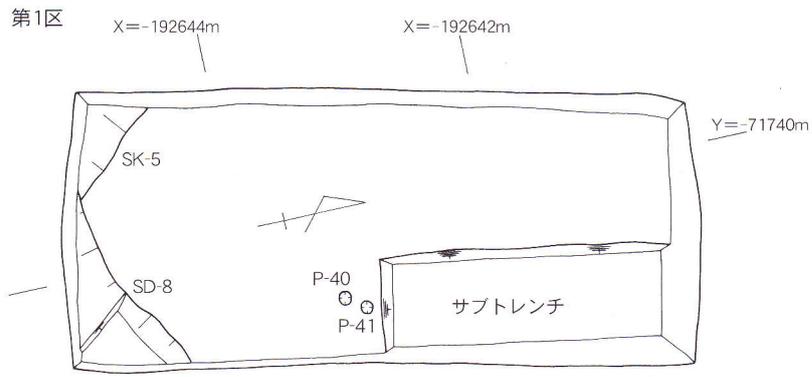
第3区では、第5層掘削後の標高4.40m前後において、厚さ約40cmを測る灰黄褐色系の細砂混シルト（SX-1）が調査区全面に堆積していることを確認した。この堆積土については、調査区の北及び東壁際において掘削を行った結果、土色及び土質から3単位に細分が可能であり、第1・2層が灰黄褐色細砂混シルト、第3層が褐灰色細砂混シルトである。また、底面である第6c層上面の標高は4.00m前後を測る。この堆積土には、細片ではあるが古墳時代前期の土器が一定量含まれている。

第4区検出の遺構（第5図、図版10下）

第4区では、第6層上面においてピット13基（P-25～37）を検出した。遺構検出面の標高は、4.40m前後を測る。さらに第5層の下位層として、調査区の全面に第3区において検出した古墳時代前期の遺物を一定量含む灰黄褐色細砂混シルト（SX-1）が4～13cmの厚さで堆積していることを確認した。



第4図 SD-7土層断面図



第5図 第1～4区遺構全体平面図

第5区検出の遺構（第3・6図）

第5区では、第5層除去後の標高4.45m前後において、第3区で検出した古墳時代前期の遺物を一定量含む灰黄褐色系の細砂混シルト（SX-1）が調査区の全面に堆積していることを確認した。第5区では、この堆積土についてすべて掘削を行った。その結果、第3区と同様に3単位に細分が可能であり、また底面である第6c層上面は調査区の南西から北東に向かって低く傾斜し、その標高は調査区南西隅部で4.29m、北東隅部で4.09mを測る。

第2～5区で検出したこの古墳時代前期の遺物を一定量含む堆積土（SX-1）は、第2区で検出した北側肩部及び各調査区における検出状況から判断して、第6層が落ち込む微低地に堆積した遺物包含層と考えられる。また落ち込みの範囲は、第1区及び後述する第6・7区では認められないことから、第2～5区周辺に限られるとみられ、その傾斜は第2・4・5区を結ぶライン周辺から、落ち込み底面である第6c層上面の標高が最深部となる第3区に向かって低く落ち込むものと考えられる（第2・3図）。

第6区検出の遺構（第6図、図版10下）

第6区では、第6層上面において堅穴建物（SB-2）、溝（SD-6）、土坑（SK-3）の他、ピット（P-24）を検出した。遺構検出面の標高は、4.45m前後を測る。

SB-2は、調査区のほぼ全面において検出した方形の堅穴建物とみられるもので、建物の北西隅部を検出した。遺構覆土は、にぶい黄褐色粗砂混シルトである。SD-6は、調査区の中央部において南東から北西方向に検出したもので、SB-2埋没後に掘削されたやや蛇行する溝と考えられる。その規模は、検出長2.0m以上、幅1.2～1.8mを測る。遺構覆土はにぶい黄褐色粗砂混シルトである。ピット24は、調査区西壁際の南西隅部において検出したものである。この遺構の時期については、遺構覆土が暗灰黄色細砂混シルトであり、第5層と類似するものであることから、古墳時代以降のものとなる可能性がある。

第7区検出の遺構（第6図、図版10下）

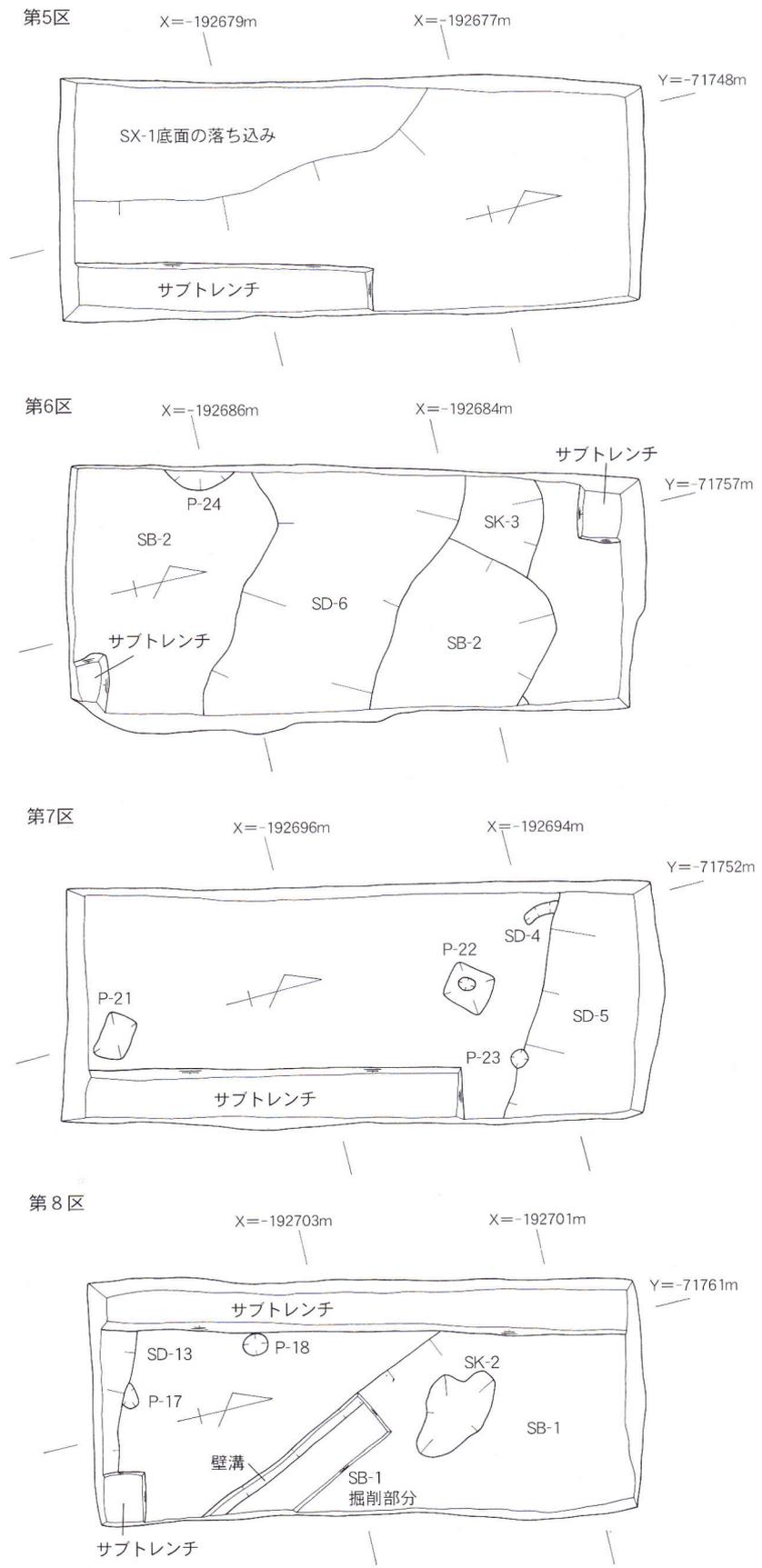
第7区では、第6層上面において溝（SD-5）、ピット（P-21・22）の他、小溝1条及びピット1基を検出した。遺構検出面の標高は、4.45m前後を測る。

SD-5は、調査区の北端部においてほぼ東西方向に延びる南側肩部を検出したもので、検出長2.1m以上、幅1.0m以上を測る。遺構覆土は灰黄褐色粗砂混シルトである。P-21・22は柱穴と考えられるもので、そのうちP-22は、一辺35cm前後を測る隅丸方形のホリカタ内に直径10cm前後の柱痕が確認できるものである。遺構覆土は、ホリカタ内がにぶい黄褐色粗砂混シルトであり、柱痕が灰黄褐色粗砂混シルトである。

第8区検出の遺構（第6図、図版10下）

第8区では、第6層上面において堅穴建物（SB-1）、溝（SD-3）、土坑（SK-2）の他、ピット2基を検出した。遺構検出面の標高は、4.45m前後を測る。

SB-1は、調査区の中央部において北西から南東方向に西側肩部を検出した方形の堅穴建物と考えられるもので、遺構の性格及び残存深を確認する目的で西側肩部に沿って一部掘削を行った。その結果、遺構覆土は厚さ約5cm前後を測る灰黄褐色粗砂混シルトの単一層であり、遺構底面が水平で西辺に沿って幅約10cmの壁溝を検出したことから堅穴建物と判断した。この建物の時期については、覆土に含まれる遺物から古墳時代のものと考えられる。SD-3は、調査区の南壁際において検出したもので、遺構覆土は灰黄褐色粗砂混シルトである。またSK-2は、調査区の北半部中央に

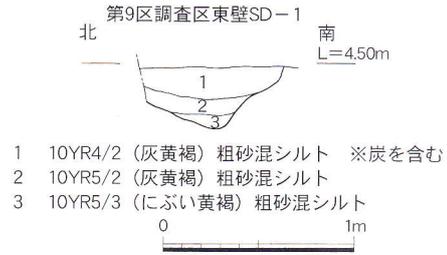


第6図 第5～8区遺構全体平面図

において検出した不定形の土坑で、遺構覆土は黒褐色粗砂混シルトに炭及び焼土が混じるものである。

第9区検出の遺構（第7・8図、図版11上）

第9区では、第6層上面において溝（SD-1・2）、土坑（SK-1）、ピット13基（P-2～14）を検出した。遺構検出面の標高は、4.45～4.55mを測り、西から東にかけて低く傾斜する。



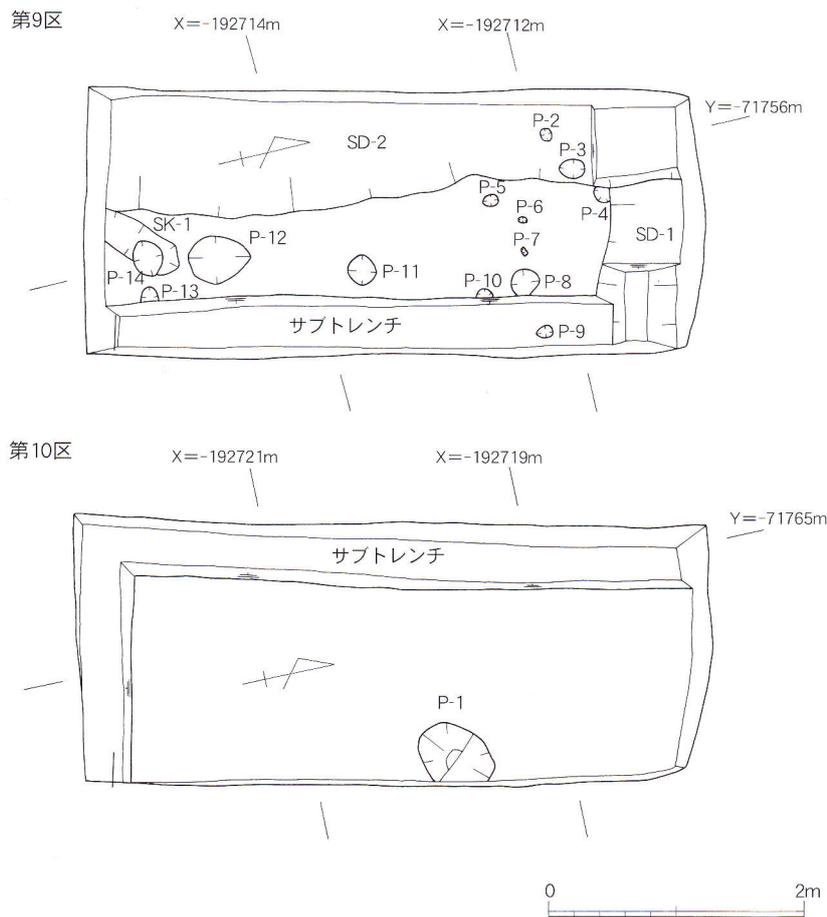
- 1 10YR4/2 (灰黄褐) 粗砂混シルト ※炭を含む
- 2 10YR5/2 (灰黄褐) 粗砂混シルト
- 3 10YR5/3 (にぶい黄褐) 粗砂混シルト

第7図 SD-1土層断面図

SD-1は、調査区の北壁際をほぼ東西方向に延びる南側肩部を検出したもので、検出長1.8m以上、幅60cm以上、深さ32cmを測る。遺構の残存深を確認する目的で、調査区東壁際において一部掘削を行った。その結果、遺構覆土は3単位に細分が可能であり、第1層が灰黄褐色粗砂混シルト、第2層が同じく灰黄褐色粗砂混シルト、第3層がにぶい黄褐色粗砂混シルトである。この遺構の時期については、覆土に含まれる遺物から古墳時代前期と考えられる。SD-2は、調査区の西壁際をほぼ南北に延びる東側肩部を検出したもので、検出長4.4m以上、幅90cm以上、深さ18cmを測る。SD-1と同じく遺構の残存深を確認する目的で調査区北壁際において一部掘削を行った。その結果、遺構覆土は褐灰色粗砂混シルトの単一層である。この遺構の時期については、遺構の重複関係からSD-1に後出するものの、覆土に含まれる遺物から古墳時代前期の範疇におさまるものと考えられる。

第10区検出の遺構（第8図、図版11上）

第10区では第6層上面でピット（P-1）を検出した。遺構検出面の標高は、4.45～4.50mを測る。



第8図 第9・10区遺構全体平面図

P-1は、調査区の中央部東壁際において検出した楕円形を呈するもので、遺構の残存深を確認する目的で西半部について掘削を行った。その結果、遺構覆土は2単位に細分が可能であり、第1層が黒褐色粗砂混シルト、第2層が灰黄褐色粗砂混シルトである。遺構の時期は、古墳時代のものと考えられる。

4. 遺物

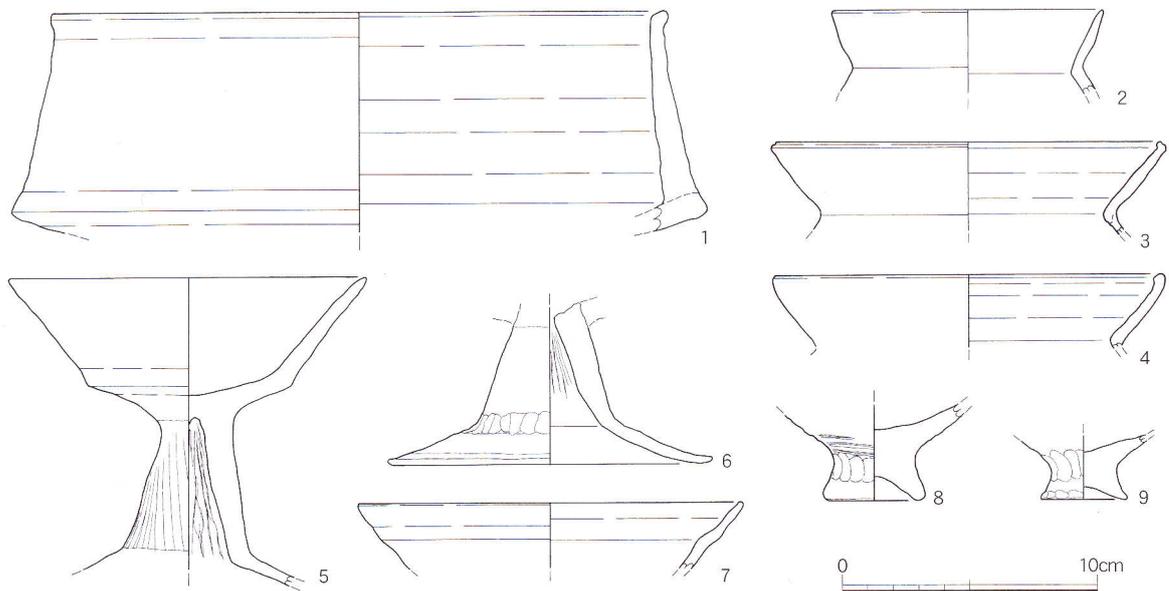
遺物は、各遺構の遺構覆土や遺物包含層（第2～5層・SX-1）から遺物収納コンテナに2箱分が出土した。これらの遺物には、弥生土器・土師器・製塩土器・須恵器・瓦器・中世須恵器・中世土師器・国産陶磁器・瓦・石器がある。また遺物の種別からみた出土傾向としては、古墳時代前期の土師器が主体となり、弥生土器（2点）や須恵器（6点）の出土量が極端に少ないことを指摘することができる。また、古墳時代初頭から前期にかけての脚台皿式を主体とする製塩土器（24点）が比較的多く出土していることが注目される。以下主な遺物について説明する。

1～7は土師器であり、8・9は製塩土器である（第9図、図版12）。

1・2は壺である。1は複合口縁壺であり、屈曲部からやや内傾し直線的に立ち上がる口縁部が特徴である。また、口縁端部はヨコナデによって外方へ少し肥厚させている。口径は24.0cmを測る。内外面の調整にはヨコナデが施されている。色調は淡褐色であり、胎土は精良で赤色軟質粒及び砂粒を少量含む。2は小型の丸底壺または鉢と考えられるもので、口径10.6cmを測る。内外面の調整は摩滅のため観察できない。

3・4は甕である。3は庄内系甕であり、体部から直線的にのびる口縁部を特徴とし、その端部はつまみ上げることによって内側に肥厚させている。色調は黄褐色から黄灰色であり、胎土には砂粒を多く含む結晶片岩は確認できなかった。4は布留系甕であり、内彎する口縁部を特徴とし、その端部は内側にやや肥厚させている。色調は黄褐色から灰黄褐色であり、胎土には砂粒が多く含まれている。これらの口径はともに15.0cmを測る。

5・6は高杯である。5は杯部及び脚柱部が遺存するもので、口径は14.0cmを測る。内外面の調整は摩滅のため不明瞭ではあるが、脚柱部外面に縦方向のヘラミガキが施されており、内面には絞り目が認められる。色調は褐色であり、胎土には結晶片岩が含まれている。6は脚柱部及び脚部が遺



第9図 遺物実測図1

存するもので、脚部径は12.7cmを測る。内外面の調整は摩滅が著しく不明である。色調は明褐色から褐色であり、胎土には結晶片岩が含まれている。7は有段口縁の丸底鉢と考えられるもので、口径は14.9cmを測る。内外面の調整は摩滅のため不明である。色調は暗褐色であり、胎土は精良で赤色軟質粒及び砂粒を含む。

8・9は脚台Ⅲ式の脚部である。脚部径は8が3.6cm、9が3.4cmを測る。これらの器表面は著しく摩滅しており、内外面の調整については不明瞭であるものの、ともに脚部から体部への屈曲部には指オサエが認められる。また8の体部下半外面には平行タタキが施されており、内面には灰色または白色の付着物が認められる。色調は淡赤褐色から赤褐色である。

これらの出土位置は、1が第5区SX-1、2・9が第3区SX-1、3・6が第9区SD-1、4・5が第9区SD-2、7・8が第9区面調整時である。またその時期は、庄内式併行期から布留式併行期にかけてのものであり、古墳時代初頭から前期にかけてのものと考えられる。

5. まとめ

今回の調査では、第6層上面において古墳時代初頭から前期を主体とする遺構群を確認することができた。これらの遺構群は、竪穴建物や溝の他、土坑などの居住を示す遺構が主体となる状況から、調査地周辺には当概期の集落が展開しているものと考えられる。また出土遺物の種別として、弥生土器や須恵器の出土が極端に少ないことが指摘できる。このことは、今回確認した古墳時代集落の存続時期が弥生時代までは遡らず、古墳時代中期までは降らない可能性を示していると考えられる。

集落の範囲については、すべての調査区において第6層の堆積が安定して認められることから、調査対象地外へと展開している可能性が考えられる。それを示すものとして、調査対象地の南に隣接する直川用地内で行った第2次調査では、東端の第1区において古墳時代前期から平安時代前期にかけての掘建柱建物や土坑及び溝などを多数検出している。ただし、第2次調査と今回の調査成果を比較した場合、第2次調査では古墳時代後期の遺構や須恵器をはじめとする遺物の他、平安時代の遺構及び遺物も一定量確認されていることが相違点としてあげられる。つまり、今回検出した遺構群及び出土遺物は、古墳時代前期に偏在していると言える。これについては、今回の調査における遺構検出面の標高が4.40~4.45mであり、第2次調査第1区周辺の遺構検出面の標高が4.80mを測ることから、比較的高地となる第2次調査第1区周辺に長期にわたり集落が営まれた結果であると理解したい。またこの遺構検出面の標高差は、古墳時代以前に第2次調査地周辺に紀ノ川の自然堤防が形成されていたことを示しており、今回の調査地周辺はその北側において検出した第6層上面の落ち込み(SX-1)などから後背湿地であった可能性が考えられる。

今回の調査成果は、弥生時代から古墳時代にかけての集落の中心地のひとつとみられる一般国道24号バイパス関連の調査地点や、第2次調査地点における遺構及び遺物の種別と少し様相が異なるものと考えられる。このことは、田屋遺跡という紀ノ川に隣接し洪水など絶えず自然災害と隣り合わせの環境のなかで形成された遺跡内部では、各時代によって自然地形に適応し集落の占地を変化させていった状況を示していると考えられる。(藤藪)

【参考文献】

- 財団法人和歌山市文化財センター 1990『田屋遺跡発掘調査報告書』
- 財団法人和歌山市文化体育振興事業団 2005『田屋遺跡発掘調査概報』
- 和歌山市教育委員会2006『和歌山市内遺跡発掘調査概報-平成16年度-』

④雑賀崎台場跡第2次確認調査（調査一覧84）

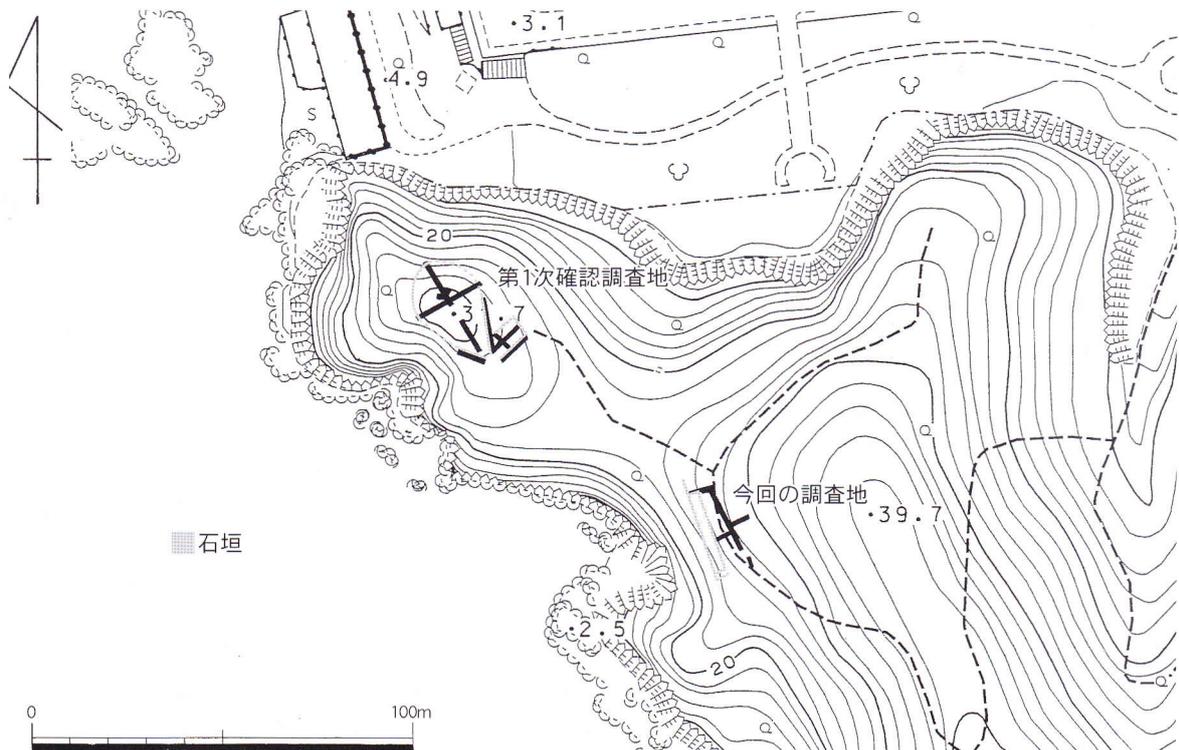
1. 調査の経緯と経過

雑賀崎台場跡は、和歌山市雑賀崎の北端部、紀伊水道に突出した俗称「トンガ」の鼻または「台場」の鼻と呼ばれる岬の先端部分に位置する（第1図）。周辺の遺跡を概観すると、弥生時代から古墳時代及び鎌倉時代にかけての集落遺跡である関戸遺跡及び、古墳時代後期の横穴式石室をもつ関戸古墳、その他天神山古墳や高津子山古墳などが立地している。さらに紀ノ川河口には、寛永年間（1624～1644）、初代紀州藩主徳川頼宣の時代に朝比奈段右衛門が約13年間かけて築造した県史跡水軒堤防がある。

雑賀崎台場跡は、通称「カゴバ」台場遺跡と呼ばれ、江戸時代末の砲台跡として知られてきた遺跡であり、昭和7年刊行「和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告」第11輯には「東西ノ両側面及び北ノ前面ニハ三尺乃至八尺ノ高サニ石垣ヲ設ケ其ノ上ニ土塁ヲ繞シ・土塁ノ厚サハ其ノ下部ニ於テ約四尺高サ二尺五寸乃至四尺五寸・」と記され、台場を廻る石垣及び土塁の平面図と遺跡の構造が報告されている。

本遺跡における過去の調査では、平成19年に和歌山市教育委員会の委託を受け財団法人和歌山市都市整備公社が遺跡確認を目的として第1次確認調査を実施している。この調査では、台場の本体部分である岬先端部に構築された馬蹄形に廻る石垣とその上部に盛られた土塁及び、土塁に囲まれた平坦面の他、台場南東部に取り付く方形壇を廻る石垣及び、その上部平坦面について調査を行い、台場構築に際して行われた大規模な整地と、石垣及び土塁の構築方法が明らかとなり、台場上部平坦面では、先端部を紀ノ川河口に向けたV字状石積遺構を検出している。また方形壇の上部平坦面では礎石や柱穴を確認することはできなかったものの、方形壇の構築に伴う整地土を確認し、台場に付属する建物の存在を想定する成果が得られている。さらに遺跡の形成時期は、台場構築の際に持ち込まれた整地土に含まれていた遺物などから18世紀後半以降のものと考えられている。

今回の調査は、台場本体から南東約90mに位置する岬の西斜面に構築された石垣及びその上部に



第1図 調査位置図

盛られた土塁の他、その東側に広がる平坦面について、石垣及び土塁の所属時期ならびに建物等の有無を確認する目的で行った。調査対象である石垣及び土塁には、調査前の現状確認において樹木等が生い茂り、また西側が海に面する断崖となることから崩落箇所が所々に認められた。特に、石垣南端の南西隅角部は断崖崩落によって石垣下部自体も崩落しており、遺跡の記録保存が急務と思われた。このような遺跡の現状から、調査は『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記された周知の遺跡である雑賀崎台場跡（遺跡番号425）について、和歌山市教育委員会が国庫補助金を得て確認調査を行うこととなった。

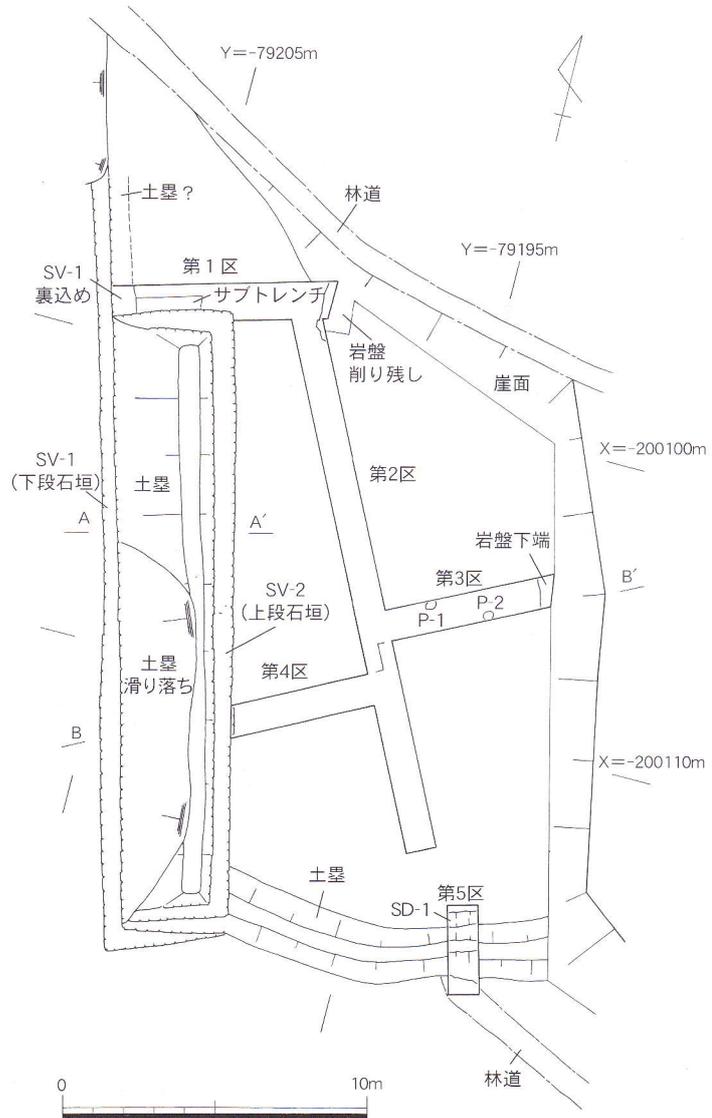
調査は、和歌山市教育委員会の指導のもと、財団法人和歌山市都市整備公社が委託を受けて実施した。現地における調査は、平成22年1月13日から平成22年2月5日までの期間を要した。

2. 調査の方法と概要

(1) 調査の方法

今回の調査対象地は、調査開始前の現状確認において、平坦面の東側に結晶片岩の岩盤を急傾斜に削り込んだ崖面を確認したことから、岬の南斜面をL字状に削り込み平坦面を造り出していることが想定された。また石垣及び土塁は、平坦面造成範囲の西端に構築された下段石垣（SV-1）と、その上部に構築された土塁及び上段石垣（SV-2）の異なる2種の石垣を確認した（第2図）。さらに、平坦面の南端にはほぼ東西方向に土塁状の低い高まりが認められた。このような遺跡の現状に基づき、平坦面の成形及び造成状況、さらに上段及び下段石垣の構築状況を確認する目的で第1区を設定した。また第2～4区は、平坦面の成形状況及び建物の有無を確認するため設定したもので、第5区は平坦面南端に遺存する土塁状の高まりと敷地内への進入路の有無を確認する目的で設定したものである。調査面積は合計39.3㎡である。

今回の調査は、現地表面からすべて人力による掘削を行った。人力掘削は、現表土である腐葉土（第1層）及び近代から現代の耕作土（第2層）までとし、検出した平坦面の造成に伴う整地土及び遺構の掘削は原則として行っていない。ただし、第1区では上段石垣と下段石垣の構築状況を確認する目的で上段石垣



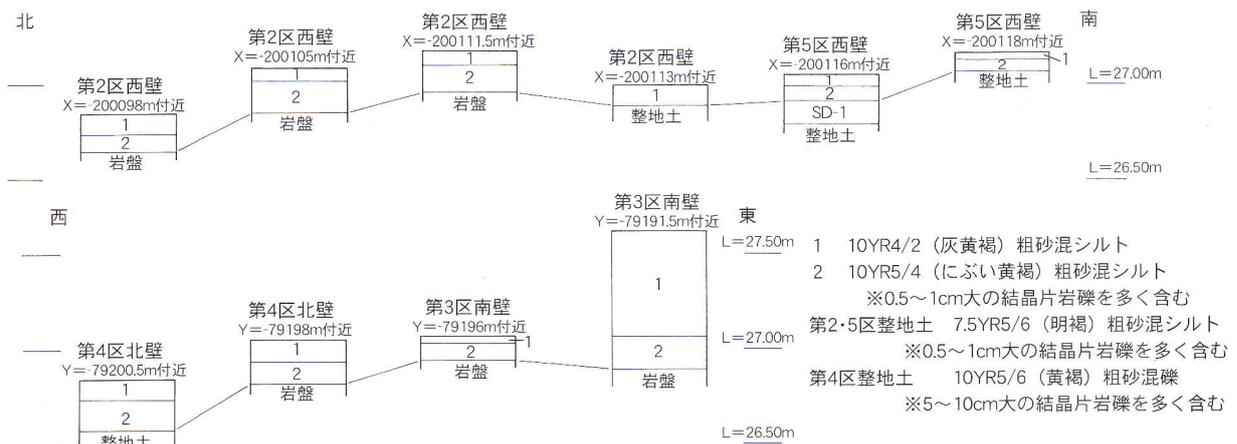
第2図 調査地区割図及び遺構全体平面図

際にサブトレンチを設け整地土の掘削を行った。また第3区で検出したピット（P-1・2）及び、第5区で検出した溝（SD-1）の西半部については、和歌山市教育委員会と協議し、その残存深及び構造を確認する目的で掘削を行った。図面による記録は、調査地周辺に国土座標（世界測地系）による3級基準点及び4級基準点をそれぞれ2点設置し、この基準点から各調査区の両端に設置した仮原点に国土座標を付した。遺構全体平面図及び土層堆積状況図（S=1/20）の作成は、この仮原点を用いて手実測で行った。個別図面は、第1・4区において検出した土塁及び上段石垣の立面図（S=1/20）、また調査対象地の東西断面図（S=1/20）の作成を手実測で行った。その他、調査地区割図及び遺構全体配置図を作成するため調査地の平板測量（S=1/100）を行った。土層の色調及び土質の観察は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用い、水準値は4級水準点測量を行い国家水準点（T. P. 値）を基準とした。

（2）基本層序

調査対象地は、遺跡が立地する結晶片岩によって形成された岬の西斜面に位置する。調査地の現況は樹木が茂る雑木林であり、その標高は27.00m前後を測る（第3図、図版13）。よって調査地の現地表面の標高は、南北方向では第5区南端部で27.15m、第2区北端部で26.82mを測り、南から北に向かって低く傾斜する。また東西方向では、第3区東端部で27.73m、第4区西端部で26.84mを測り、東から西に向かって低く傾斜する。この現地表面の高低差は、基本的に今回の遺構検出面である岩盤上面の高低差と対応する。

調査地の基本層序については、調査地全体に腐葉土である灰黄褐色粗砂混シルト（第1層）が堆積している（図版18）。この第1層を除去した下位層が近代から現代の耕作土とみられるにぶい黄褐色粗砂混シルト（第2層）である。この第2層を除去したところ、調査範囲のほぼ全面において岬を形成する結晶片岩の岩盤を検出した。ただし、第2区南端部及び第5区では、岩盤は認められず0.5～1cm大の結晶片岩礫を多く含む明褐色粗砂混シルトが堆積しており、さらに第4区西端部では5～10cm大の結晶片岩礫を多く含む黄褐色粗砂混礫が堆積している。これらの堆積土は、第4区西端において検出した上段石垣（SV-2）の基底石がその直上に据えられていること、また第5区では溝（SD-1）がこの上面から掘削されていることからともに整地土と考えられ、前者が平坦面の西端で検出され比較的大きな礫を含むことから、岩盤を削り込み平坦面西端に押し出された造成に伴う整地土であり、後者が自然地形として残る岩盤上の凹凸を水平にならすために調査地周辺から持ち込まれた整地土と判断した。さらに第1区西端では、上段及び下段石垣構築状況を確認するために設定したサブトレンチにおいて平坦面造成に伴う整地土を確認した（第3・6図）。この整地土



第3図 調査地土層柱状模式図

は、3単位に細分が可能であり、にぶい赤褐色粗砂混シルトの上下に0.5～1cm大の結晶片岩礫を多く含む褐色粗砂混シルトが2単位堆積するもので、上部に上段石垣(SV-2)を構築することを想定し強固な地盤を形成しようとする意図が感じられるものである。

以上の基本層序及び上段石垣(SV-2)及び遺構の検出状況から、下段石垣(SV-1)によって西端を区画された平坦面は遺跡形成時に岩盤成形によって造り出されたものと判断でき、遺構検出面は岬を形成する岩盤直上及び前述した整地土の上面と考えられる。またその標高は、南北方向では第5区南端部で27.03m、第2区北端部で26.73mを測り、南から北に向かって低く傾斜する。また東西方向では、第3区東端部で26.87m、第3区西端で26.92m、第4区西端部で26.54mを測り第2区周辺を頂点として東西に向かって低く傾斜する(第5図)。

3. 遺構

調査では、平坦面の西端に構築された下段石垣(SV-1)、またその上部に構築された土塁及び上段石垣(SV-2)の他、第1区ではピット(P-3)、第3区ではピット(P-1・2)、第5区では土塁及び溝(SD-1)を検出した。以下、遺構を検出した調査区についてその概要を記述する。

第1区検出の遺構(第2・4・6図、図版14上)

第1区では、調査区の西端部において平坦面の造成に伴う整地土及び下段石垣(SV-1)とその裏込め、さらに土塁及び上段石垣(SV-2)の他、調査区の中央部東側においてピット(P-3)を検出した。遺構検出面である岩盤及び整地土上面の標高は、調査区の東端部で26.95m、西端部で26.37mを測り、東から西に向かって低く傾斜する。

SV-1は、調査区の西端部において検出したもので、石垣の天端石及びその裏込めを検出した。またSV-2は、SV-1の裏込め石材の直上にその基底石が据えられていることを確認した(第6図)。よって、これらの石垣の構築順序としては、まず平坦面の西端を限る石垣であるSV-1を構築したのち、その上部にSV-2を積み上げていることが分かる。さらにSV-2の基底石がSV-1の天端石ではなく裏込石材の直上に据えられていることから、SV-2とSV-1は同時期に構築されたものと考えられる(図版16下)。次に、サブトレンチの調査成果として、SV-1の裏込めが平坦面の造成に伴う整地土を切り込み施工された痕跡を確認することができなかった。よって、SV-1の構築は平坦面の造成と併行して行われたと考えられる。また、SV-2の基底石は東端部及び西端部は岩盤またはSV-1の裏込め上部に据えられているものの、中央部については整地土の上部に直接設置されているため自重によって沈下している。さらに、基底石の下部構造として胴木等は存在しなかった。

SV-1の規模については、平板測量の結果、その北端部は崩落しているものの、南北の残存長24.5m、南端部で東西幅4mを測るもので、南端部は約83°の角度で東へ屈曲して延びる。またその高さは、基底部に樹木が生い茂り基底石が断崖へと続くため確認できていないが、現状で0.9～1.2mを測る。石垣の構造は、長さ40～90cmを測る結晶片岩の板石を使用し、小口面及び石材の長側辺を法面に向けて積み上げる野面積みで、基底石及び天端石には比較的大きな石材が使用されている。また石垣法面の傾斜角は、約60°である。さらに、SV-1南西隅角部は算木積みとなる。第1区において検出したこの石垣に伴う裏込石材は、15～30cm大の結晶片岩の割石である。

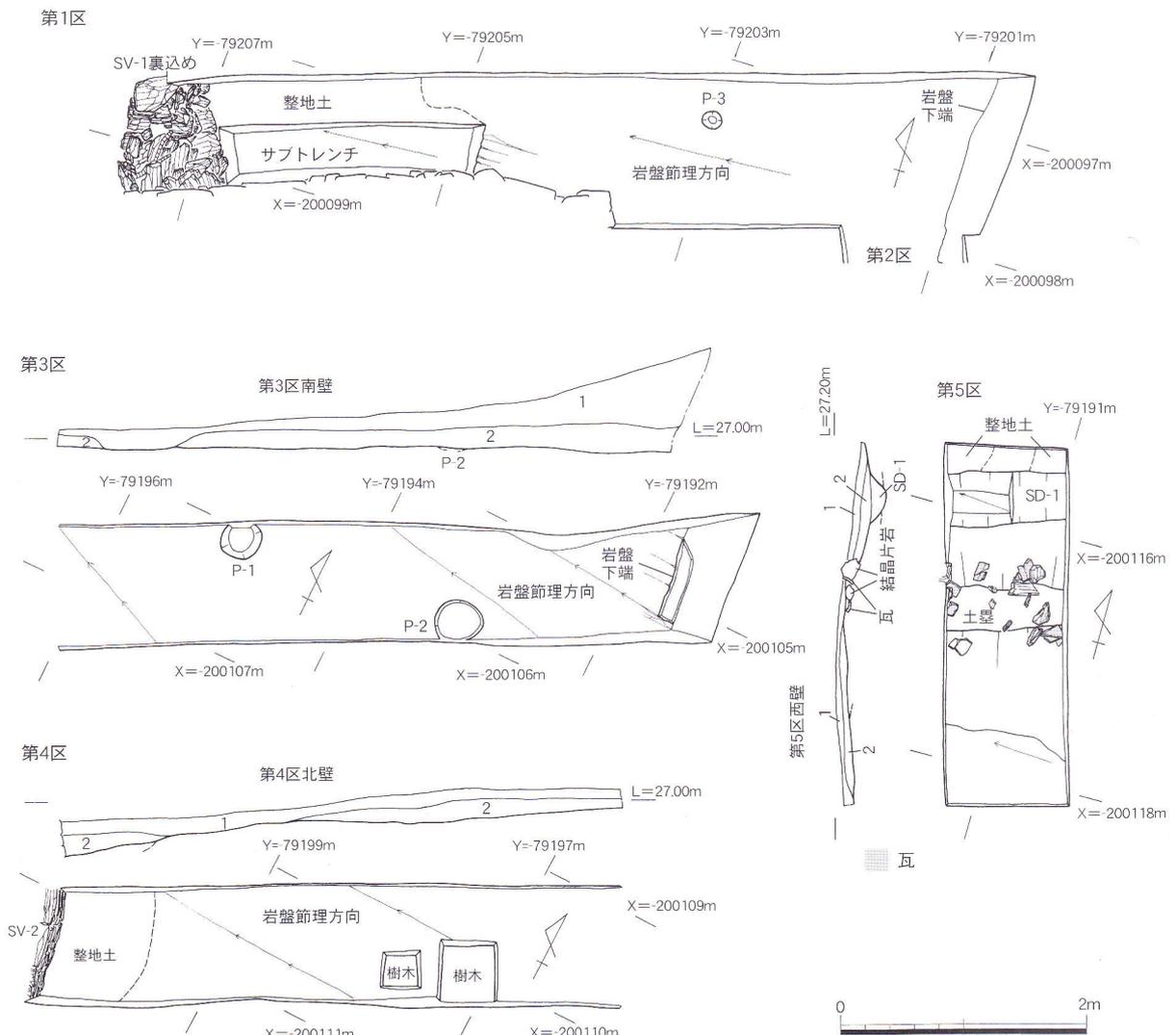
SV-2については、調査前の現状確認においてその西側(海側)に石積みを確認できなかったことから、ピンポールによる石垣石材の有無について確認を行った。その結果、やはり石材は存在せ

ず土盛りのみであることが明らかとなった。よって、SV-2は、土塁の北及び東面、さらに南面にのみ「コ」の字形に石垣をめぐらせた構造物であると考えられる。その規模は、南北長20.0m、東西幅3.8m、石垣の高さ1.4m、土塁の高さ33~52cm、総高は1.7~2.0mを測る。またこのSV-2の南端部はSV-1南端ラインには合致せず、その上端から30~50cm北側に基底石が設置されている(第2図、図版16上)。石垣の構造は、長さ40~90cmを測る結晶片岩の板石を使用し、小口面及び石材の長側辺を法面に向けて積み上げる野面積みで、基底石及び天端石には比較的大きな石材が使用されている。石垣法面の傾斜角は、SV-1と同様に約60°であり、SV-1との規格性を感じさせる。さらに、SV-2の北東及び南東隅角部は算木積みとなる。最後に土塁の傾斜角は約45°であり、石垣の傾斜角と比較してやや緩やかとなる。また土塁の南半部は、現状の地表面観察において西側へ滑り落ち傾斜が乱れている。

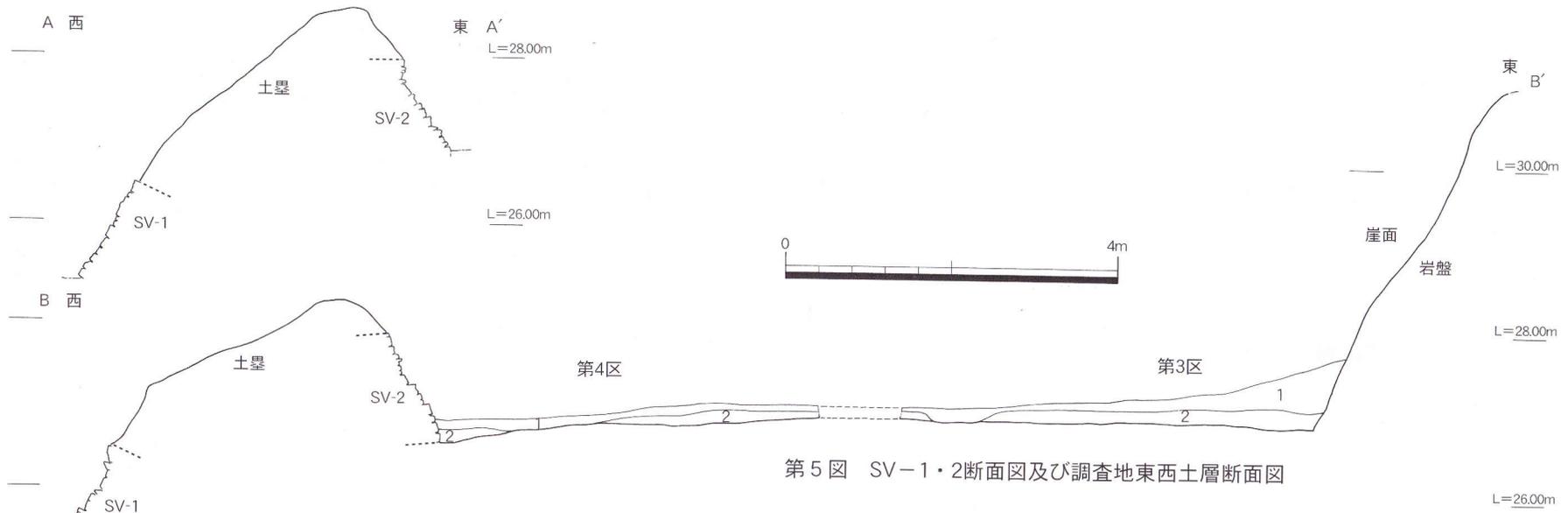
第3区検出の遺構(第4・5図、図版14下)

第3区では、調査区の中央部においてピット(P-1・2)を検出した。遺構検出面である岩盤上面の標高は、調査区の東端部で26.87m、西端部で26.92mを測り、西から東に向かって僅かに低く傾斜する。

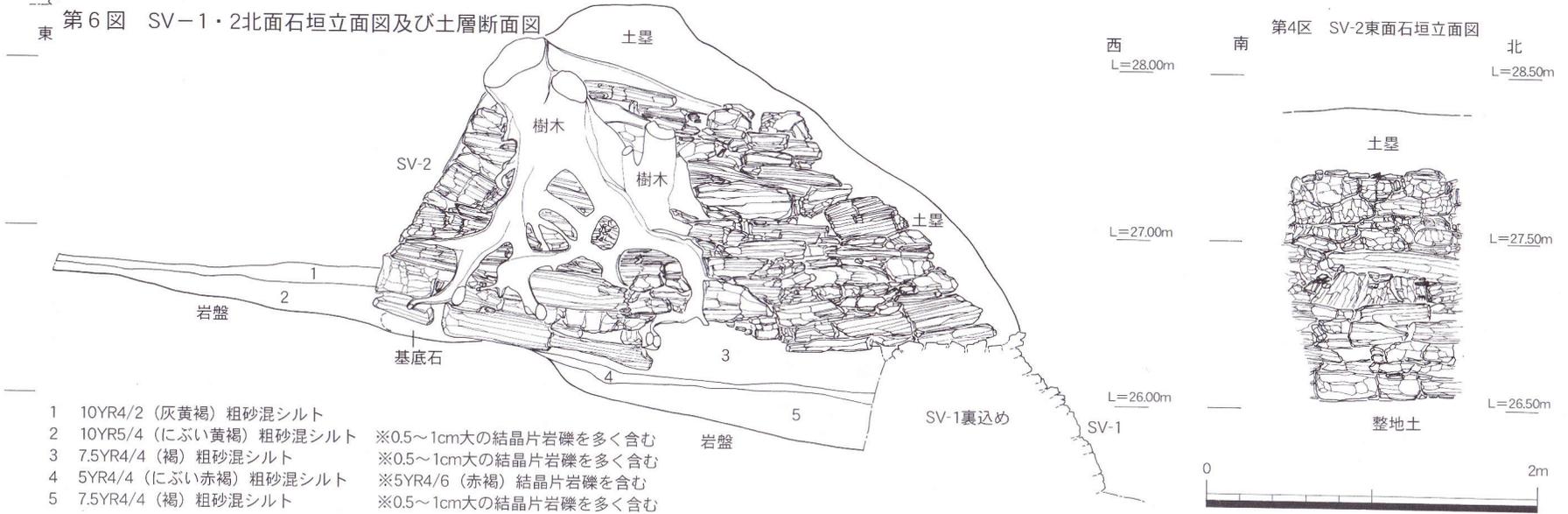
P-1・2は、岩盤を円形に掘り込んだピットであり、直径35~40cm、深さはP-1が20.3cm、P



第4図 第1~5区遺構全体平面図



第5図 SV-1・2断面図及び調査地東西土層断面図



第6図 SV-1・2北面石垣立面図及び土層断面図

第4区 SV-2東面石垣立面図

- | | | |
|---|------------------------|-----------------------|
| 1 | 10YR4/2 (灰黄褐) 粗砂混シルト | ※0.5~1cm大の結晶片岩礫を多く含む |
| 2 | 10YR5/4 (にぶい黄褐) 粗砂混シルト | ※0.5~1cm大の結晶片岩礫を多く含む |
| 3 | 7.5YR4/4 (褐) 粗砂混シルト | ※5YR4/6 (赤褐) 結晶片岩礫を含む |
| 4 | 5YR4/4 (にぶい赤褐) 粗砂混シルト | ※0.5~1cm大の結晶片岩礫を多く含む |
| 5 | 7.5YR4/4 (褐) 粗砂混シルト | |

- 2が11.3cmである(図版17上)。またこれらのピットは、その中心間の距離が1.9m(約1間)を測ることから建物の柱穴になるものと考えられる。遺構覆土はともに単一で、1cm大の結晶片岩礫を含むにぶい黄褐色粗砂混シルトである。その他、調査区の東端部は、結晶片岩の岩盤を削り込み成形した崖面であり、その高さは4.1mを測り、傾斜角は約65°である。

第4区検出の遺構(第4～6図、図版14下)

第4区では、調査区の西端部において平坦面の造成に伴う整地土とその上部に構築されたSV-2を検出した。遺構検出面である岩盤及び整地土上面の標高は、調査区の東端部で26.94m、西端部で26.54mを測り、東から西に向かって低く傾斜する。

SV-2は、調査区の西端部で現地表面から基底石までの3段分を確認したもので、その高さは1.4mを測り、また上部に盛られた土塁は高さ33～39cmを測る。総高は、1.73～1.79mである。SV-2の基底石は、整地土の上部に据えられており、第3区西端が低く傾斜するのはSV-2が岩盤の上ではなく、比較的軟弱な整地土上に据えられているためその自重によって沈下した可能性が考えられる。さらに、基底石の下部構造として胴木等は存在しなかった。

第5区検出の遺構(第2・4図、図版15上)

第5区では、調査区の中央部において土塁を検出した他、その北側裾部に沿って掘削された溝(SD-1)を検出した。遺構検出面の標高は調査区の南端部で27.03m、北端部で26.88mを測る。

SD-1は、調査区の北端部において土塁の北側裾部に沿うように検出したもので、検出長0.9m、幅38～47cm、深さ12cmを測るものである(図版17上)。また遺構覆土は単一で、にぶい黄褐色粗砂混シルトである。遺構の時期については、覆土内からオランダ呉須を用いた瀬戸・美濃系磁器染付の端反碗(第7図2)が出土したことから19世紀中頃のものと考えられる。

土塁は、調査区の中央部においてほぼ東西方向に検出したもので、今回の調査対象地である平坦面の南端を区画するものと考えられる(図版17下)。その構造は、褐色粗砂混シルト内に10～20cmを測る結晶片岩の割石及び棧瓦を無造作に混ぜ積み上げたものである。またその規模は上端幅が37cm、下端幅が1.6～2.0m、残存高23cmを測る。この土塁は、平板測量の結果、さらに調査区の東西に延び、東は岩盤成形による崖面まで、西はSV-2の南東隅角部にまでおよぶことを確認した。その総延長は10.6mを測る。

今回の調査では、この土塁及びSD-1の存在からこの周辺に敷地内への進入路は想定できない。

4. 遺物

今回の調査で出土した遺物には、近世土師器、近世瓦質土器、肥前系磁器染付碗、瀬戸・美濃系磁器染付碗の他、国産陶磁器、瓦、土製品、石器、金属器がある。これらの遺物は、すべて江戸時代から近代にかけてのものであり、各調査区の遺構覆土及び整地土、また遺物包含層から出土した。その出土量は、遺物収納コンテナに2箱を数える。以下、主な遺物について説明する。

土器(第7図、図版19上)

1は、産地不明の陶器であり、急須の蓋と考えられるものである。口径は8.8cmを測る。内外面は一部施釉されており、天井部外面中位に薄い褐釉が帯状に施され、また内面全体に透明釉が施されている。胎土は黄灰色のやや粗いもので、砂粒が含まれている。

2～4は磁器染付碗である。そのうち、2・3は瀬戸・美濃系磁器染付碗である。2は端反碗であり、口径は10.0cmを測る。体部外面にはオランダ呉須で草花文が描かれている。3は碗であり、

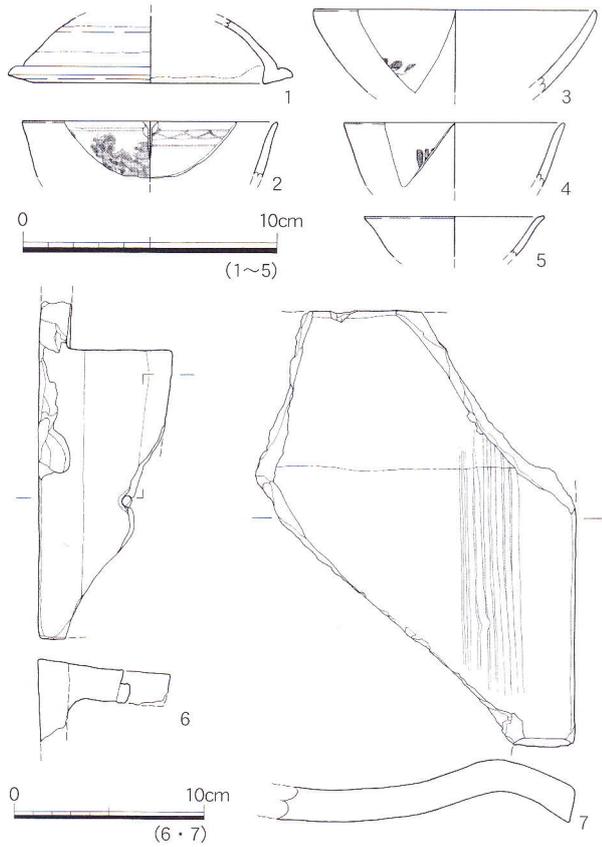
口径は10.9cmを測る。4は肥前系磁器の端反碗である。口径は8.6cmを測る。

5は瀬戸・美濃系磁器の白磁小杯である。口径は7.0cmを測る。

これらの出土位置は、1が第3区第1層、2が第5区SD-1、3・4が第5区第1層、5が第2区第1層であり、時期については江戸時代末期（19世紀中頃）のものと考えられる。

瓦（第7図、図版19上）

6は棧瓦葺きの建物妻側に使用された軒先瓦と考えられるもので、全長17.8cm、最大幅7.0cm、厚さ1.7cmを測る。器面の調整にはナデ調整が施されており、全面にキラコが付着している。また直径7.0mm前後を測る釘穴が一カ所認められるものの、断面観察では貫通していない。7は棧瓦であり、残存長16.0cm、残存幅15.6cm、厚さ1.7cmを測る。器面の調整は、ナデ調整を主体とし、一部にタテ方向のヘラミガキが施されている。



第7図 遺物実測図1

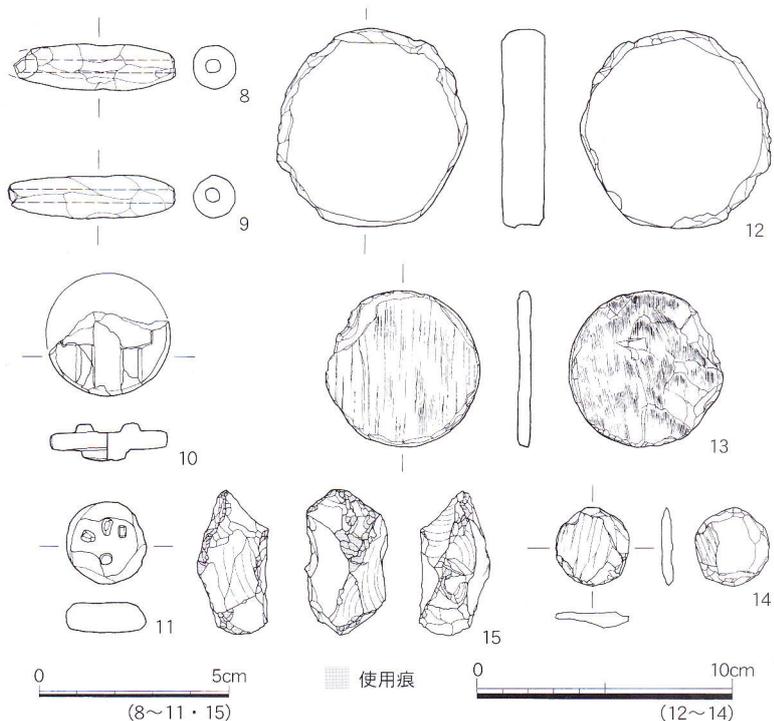
これらの出土位置は、6が第5区土塁内部、7が第5区第1層である。

土製品（第8図、図版19下）

8・9は管状土錘である。これらはともに手づくね成形されたもので、表面に指頭圧痕及び掌文が顕著に認められ、また自然釉が付着する。色調は黄褐色から暗褐色であり、胎土は精良で砂粒を少し含む。8は全長4.2cm、直径1.1cmを測り、重量5.2gである。また9は全長4.3cm、直径1.1cm、重量5.5gである。

10は土人形の釜蓋である。全体の約1/2を欠失するものの、復元すると直径は3.3cmを測り、重量は10.0g前後となる。また表面には褐釉が施されており、裏面は露胎となる。11は泥面子であり、直径2.1cmを測り、重量は3.6gである。

これらの出土位置は8が第5区第2層、9が第1区第6層、10



第8図 遺物実測図2

が第3区第2層、11が第2区第1層である。

円板状製品（第8図、図版19下）

12は平瓦または棧瓦の周囲を打ち欠き、また一部研磨し円板状に成形したもので、直径7.8cm、厚さ1.6cmを測り、重量は121.2gを量る。13・14は結晶片岩の板石の周囲を打ち欠き、周囲を研磨し円板状に成形したものである。そのうち13は直径6.1cm、厚さ5.0mmを測り、重量29.2gを量るもので、表裏面にも研磨痕が顕著に認められる。さらに14は直径3.1cm、厚さ5.0mmを測り、重量6.7gを量る小円板である。

これらの出土位置は、12が第1区第1層、13が第4区第1層、14が第4区第2層である。

石製品（第8図、図版19下）

15は緑灰色のチャートを用いた火打石であり、全長は3.8cm、最大幅2.1cm、厚さ1.8cmを測り、重量は18.2gである。この火打石は、その断面形状が歪な四角形を呈するもので、稜線部分に敲打による潰れが認められた。出土位置は、第2区第1層である。

3. まとめ

今回の調査では、岩盤成形による平坦面の西端に構築されたSV-1、またその上部に構築された土塁及びSV-2、さらにSV-2背後の平坦面では柱穴と考えられるP-1～3の他、平坦面の南端を区画する土塁及びSD-1を検出した。

遺跡の形成過程及び時期としては、結晶片岩で形成された岬の南斜面をL字状に削り込み、岩盤成形によって平坦面を削り出している。その際、自然地形として西側に向かって岩盤が傾斜することから、予定された敷地面積を得るため低くなる調査地の西端部には整地を行っている。またこの整地作業と併行してSV-1が構築されている。そして、SV-1によって西端部を区画された平坦面が造成された段階で、敷地西端に土塁及びSV-2の構築が行われ、敷地の南端部には土塁及びその北側裾部に溝（SD-1）が掘削されると考える。これらの遺構群の時期については、平坦面造成に伴う整地土に含まれる遺物がその上限を示すものと考えられるものの、今回の調査では時期判定できる資料は得られなかった。しかしながら、第5区において検出したSD-1の覆土に含まれていた瀬戸・美濃系磁器染付碗が19世紀代中頃のものであること、また土塁の構築に際し廃棄され積み上げられた瓦が棧瓦を主体とするものであることから、江戸時代後期まで遡る可能性は低いと考える。よって、江戸時代末期とするのが妥当と考える。

さらに、第1次確認調査において明らかとなった台場本体を構成する遺構群との関係については、石垣の上部に土塁を盛り上げるという構築方法やSV-1・2の石積み技術が、台場本体及び付属する方形壇の石垣の構築技術と類似するものであることから、これらは時期的に併行関係にあるものとする。これは第1次確認調査において得られた台場本体の構築時期として18世紀後半以降としたことと矛盾しない。よって、雑賀崎台場跡としては、第1・2次調査地を含めた範囲をひとつの遺跡として認識する必要があると考える。

次に、今回調査を行った石垣等の性格については、SV-2の構造として海に面する西側に石垣が構築されず土盛りのみであることがその特徴として注目される。つまり、海を意識して構築されていることは明らかであり、石垣でなく可塑性がある土盛りであることは、海からの攻撃に対し衝撃を緩和するためとみられ防御の意識の現れであると考えられる。よって、これらの遺構群は台場本体と同様に、海からの攻撃に備え構築された防御施設であると考えられる。また敷地の内側にのみ石垣を廻

らしているのは、敷地内部への土塁の崩落を防ぐとともに海からの攻撃に対し土塁自体を強固なものにするためであると考えられる。

その他、第3区において検出したP-1・2は、岩盤を円形に掘り込んだ柱穴と考えられるもので、石垣及び土塁で囲まれた敷地内部に存在した建物跡として注目される。また第5区で検出した土塁とSD-1は、敷地の南端を区画するものとみられ、これらの遺構が調査区外の東西方向にさらに延びていることから判断して、この部分に敷地内部への進入路を想定することは困難と考える。敷地内部への進入路については、第1区の東端部において、南方に突出するように方形に岩盤を削り残した部分を確認したことから、この部分が敷地内部への入り口を示す遺構とみられ、敷地北端部にその進入路を想定することができるものと思われる（第2図、図版17下）。

次に、和歌山藩が異国船への警戒及び海岸防御のために設置した台場等については、武内善信（和歌山市立博物館）が絵図（「海防図」）等の文献史料を精査し、その設置時期及び変遷過程を明らかにしている。それによると、江戸時代末期、19世紀中頃の和歌山藩では、嘉永六年（1853）のペリー艦隊の来航にともない海岸部の防御計画が策定されていたが、この計画が実施されたのは、嘉永七年（1854）9・10月に紀州沖に現れたロシアの黒船ディアナ号の来航以降である。このディアナ号の来航にともない和歌山藩が異国船を警戒し海岸防御の施設として構築した台場については、その位置や砲術家としての「打人」、また配備された大砲の種類及びその数量について、嘉永七年9月頃に描かれた『異船記』に記載がある。しかしながら、この『異船記』には本遺跡が所在する岬の名称として「カゴバ」という地名表記はあるものの、本遺跡の構造及び「打人」等の記載がない。「カゴバ」が台場として「海防図」に現れるのは、嘉永七年10月から万延元年（1860）7月頃までに描かれたいくつかの「海防図」である。これらの「海防図」においても「打人」の記載がない（張紙が剥がれた可能性あり）ものの、台場としての位置を示す張紙やその痕跡が認められるということである。そして、これら絵図等の文献史料から判明する雑賀崎（カゴバ）台場の設置時期は、嘉永七年（1854）10月から安政2年（1855）10月までの間ということである。

最後に、前述したように絵図等の文献史料から雑賀崎（カゴバ）台場の構造等を復元することは困難であるものの、これまでの2次にわたる発掘調査によってその具体的な構造が少なからず明らかになってきた。これらの遺構の評価については、今後比較検討を行うために和歌山藩が築造した未だ見ぬ台場の調査を待たなければならないと考える。またその構築時期については、発掘調査によって得られた考古資料のなかに18世紀後半代に遡る遺物が少なからず確認できるものの、今回の調査によって19世紀中頃を中心とする遺物が遺構に伴って出土したことから、絵図等の文献史料が示す年代観と大きな矛盾はないと考える。

雑賀崎台場跡は、幕末という日本社会が大きく変革するその契機となった異国船の来航に関わる遺跡として、また言い換えれば時代の大きな変革を示す遺跡として歴史的に重要なものと考えられる。

（藤藪）

【参考文献】

- 岩西忠一 1932「雑賀崎ノ臺場跡」『和歌山県史蹟名勝天然記念物調査会報告』第11輯
- 武内善信 1987「幕末の動乱と紀州－藩政の動向を中心に－」『春季特別展 幕末の動乱と紀州』和歌山市立博物館
- 武内善信 1988「『海防図』を読む－幕末和歌山藩の御台場と海防－」『研究紀要3』和歌山市立博物館
- 和歌山市教育委員会 2009『和歌山市内遺跡発掘調査概報』

版 圖



調査前の状況 (東から)



第1区 全景 (東から)



第2区 全景 (西から)



第1区 SD-1・2 (北から)



第2区 SD-3・SX-1 (北から)



第2区 SD-3土層堆積状況 (南から)



調査区西壁 土層堆積状況 (東から)

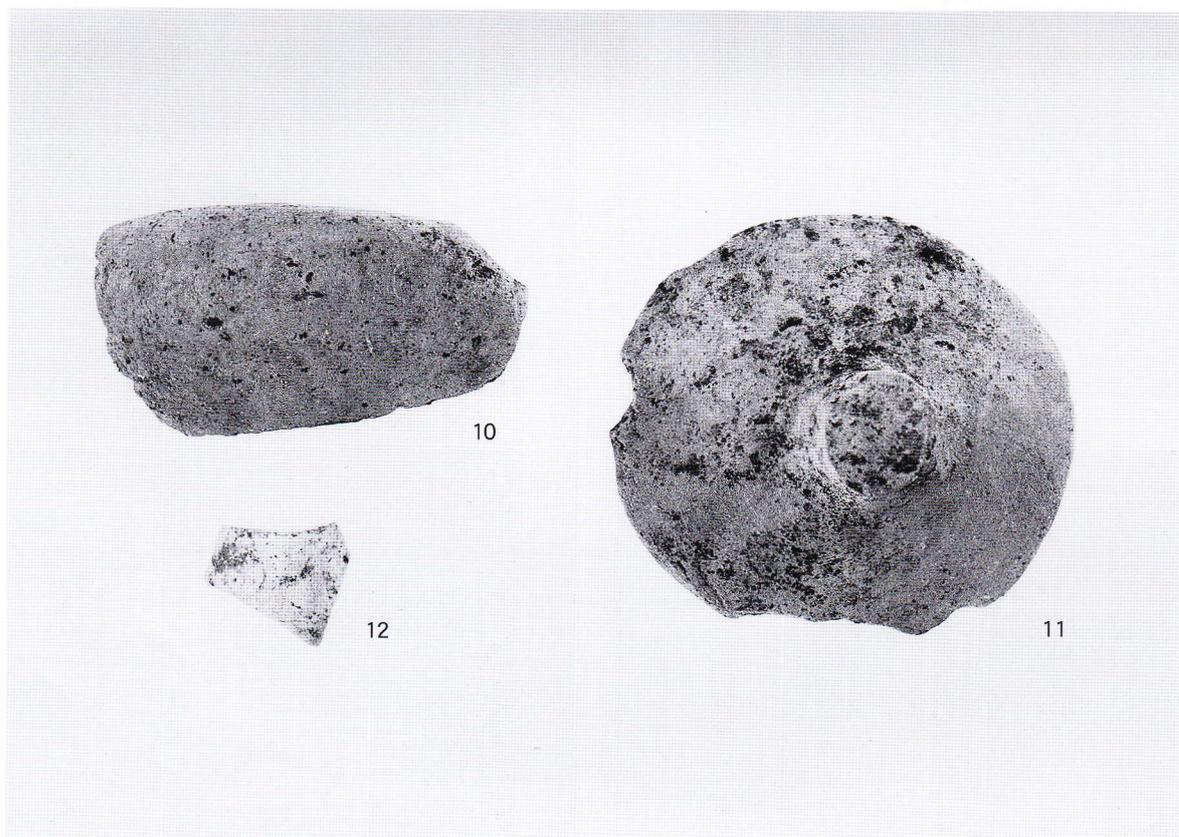


調査区北壁 Y=-73062m付近土層堆積状況(南から)

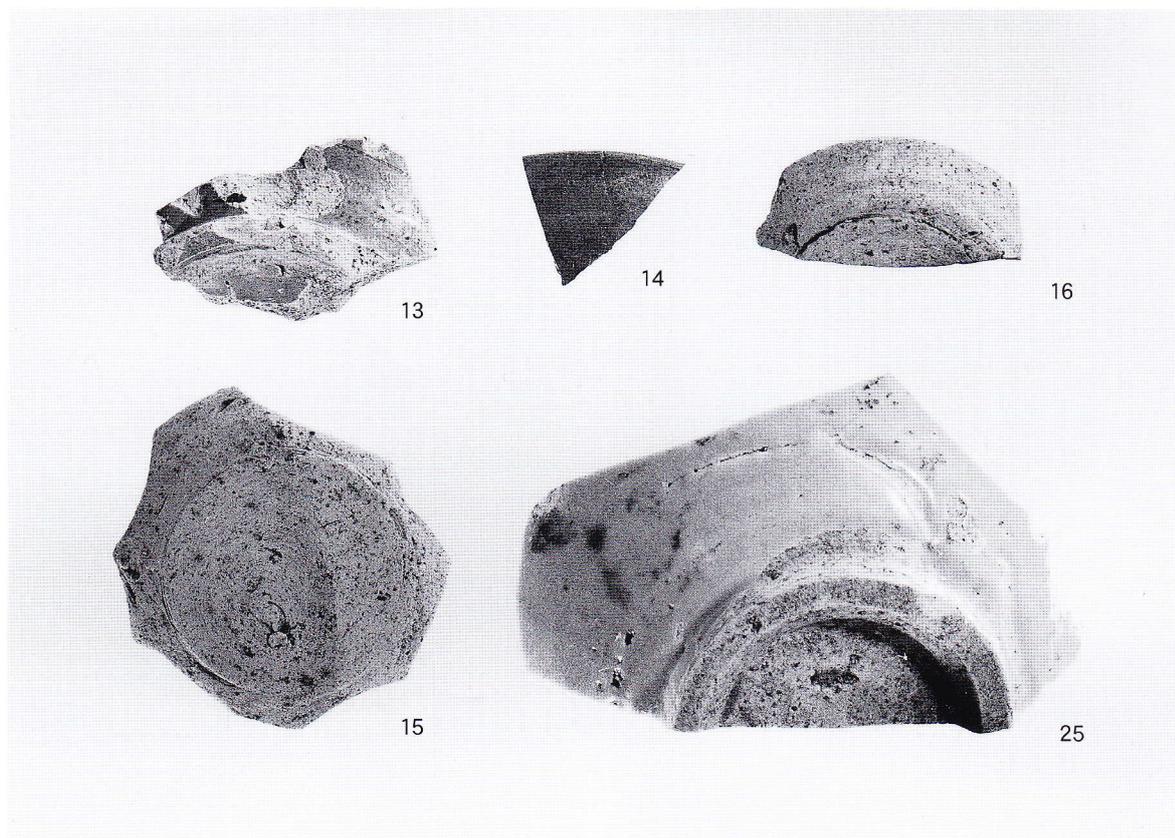
図版2
六十谷遺跡発掘調査



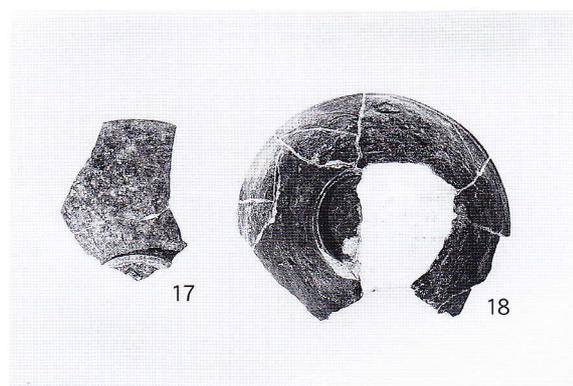
弥生土器（壺1～4、甕5・7～9）



土師器（杯10、高杯11）、製塩土器（丸底I式12）



緑釉陶器 (椀13・14)、土師器 (皿15・16)、中国製白磁 (碗25)



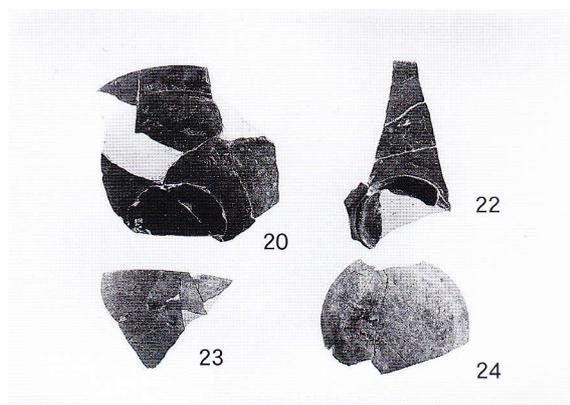
瓦器 (椀17・18)



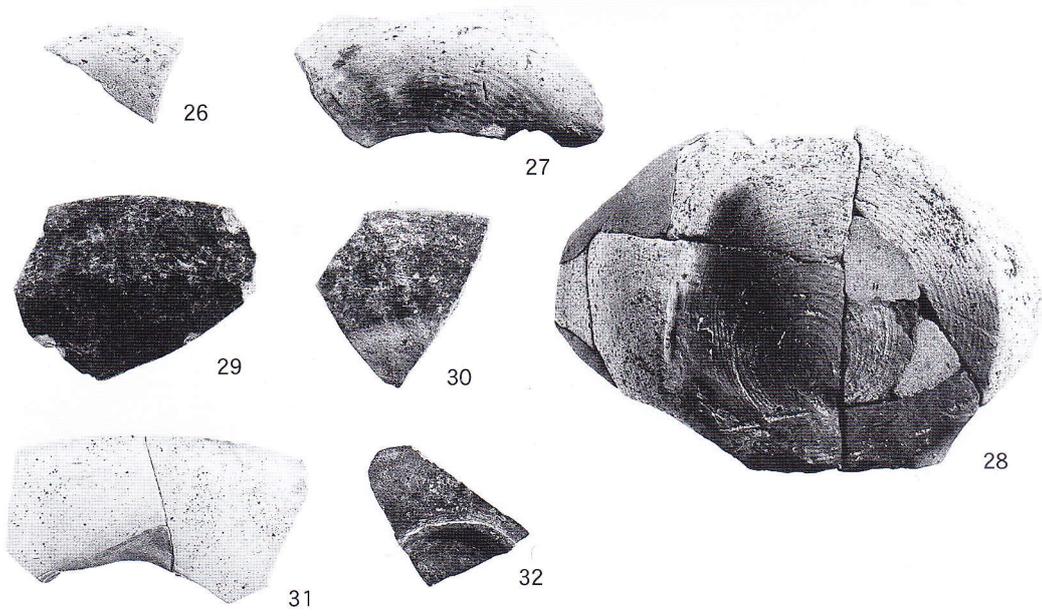
瓦器 (椀19)



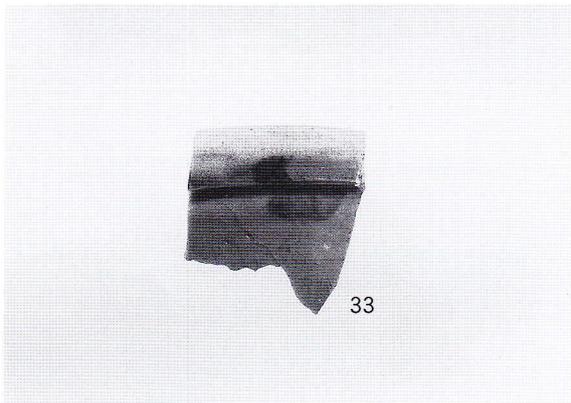
瓦器 (椀21)



瓦器 (椀20・22~24)



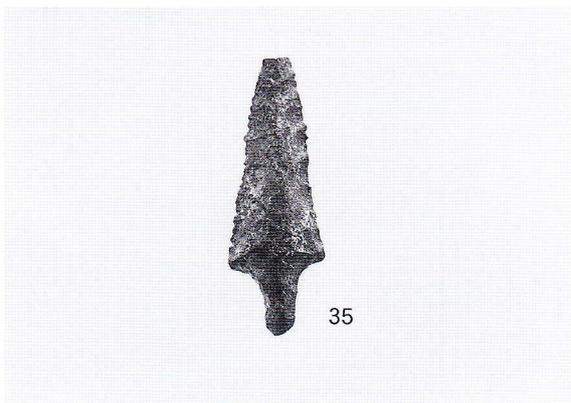
土師器（皿26～28）、瓦器（碗29～32）



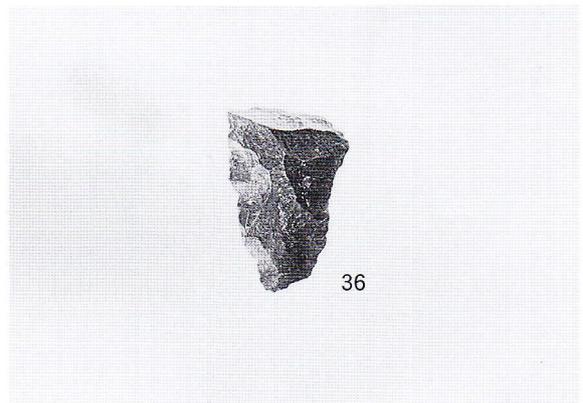
中国製白磁（碗33）



石器（サヌカイト製石鏃34）



石器（サヌカイト製石鏃35）



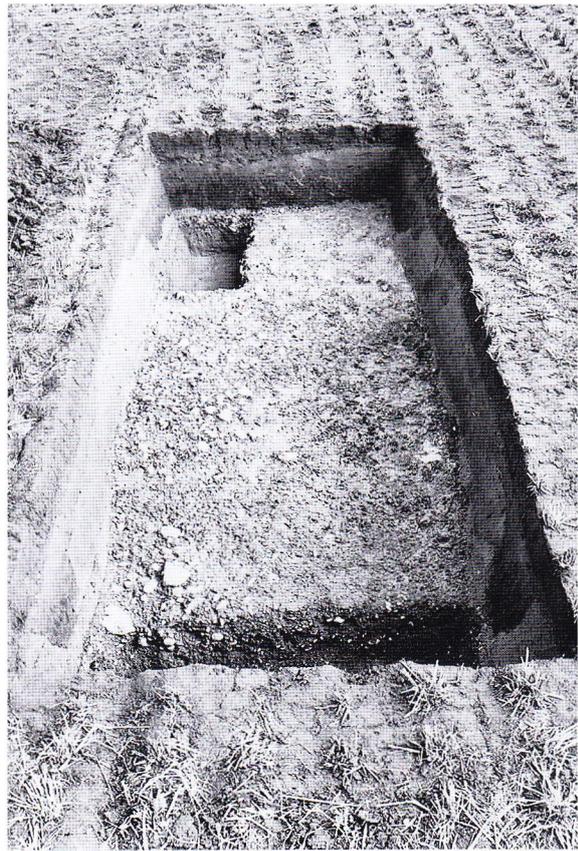
石器（サヌカイト製石槍36）



調査前の状況（北西から）



第1区 全景（東から）

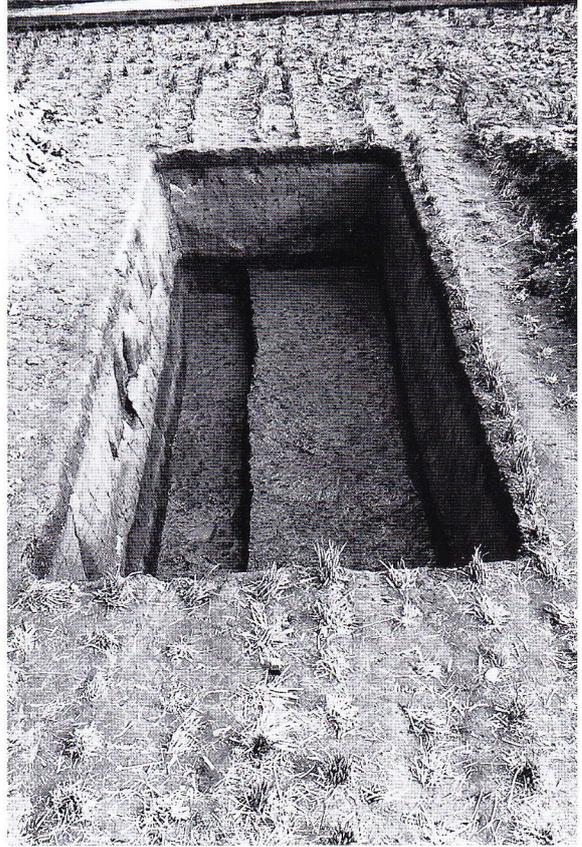


第1区 全景（西から）

図版 6
川辺遺跡第14次確認調査



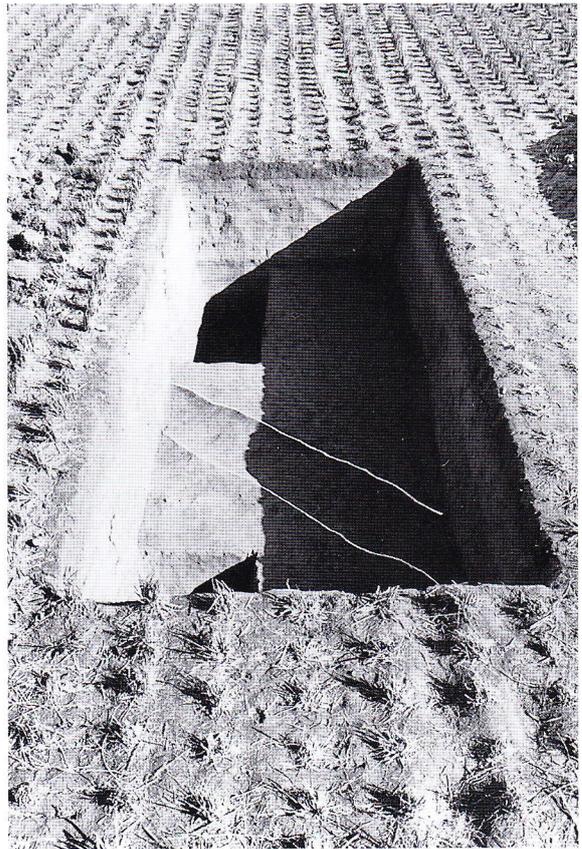
第2区 全景 (東から)



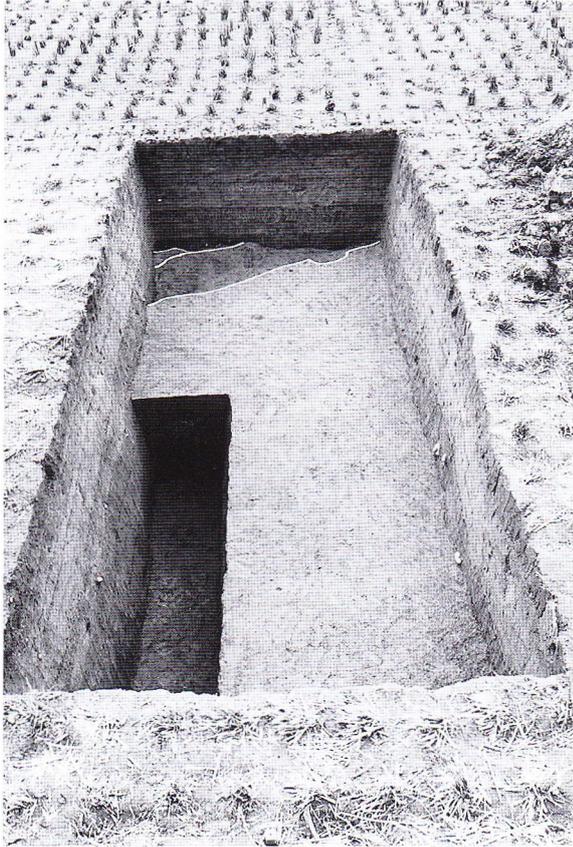
第2区 全景 (西から)



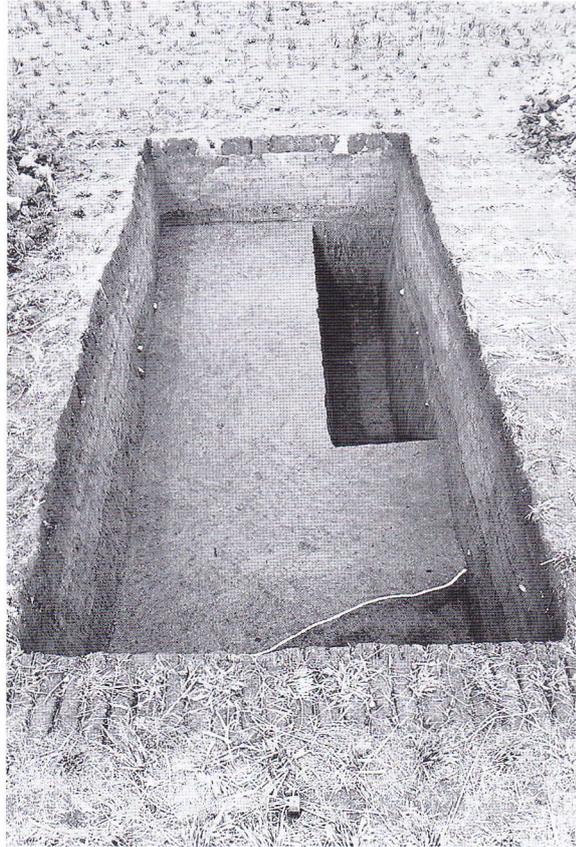
第3区 全景 (東から)



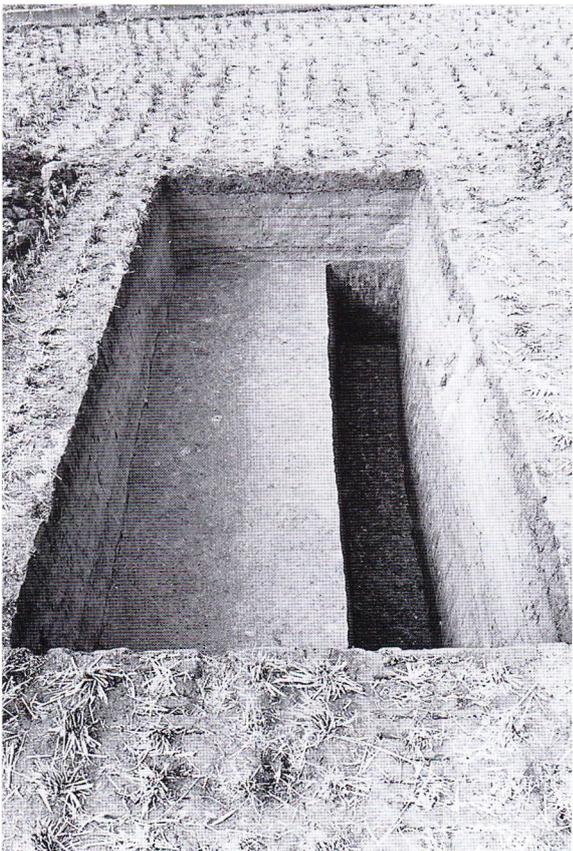
第3区 全景 (西から)



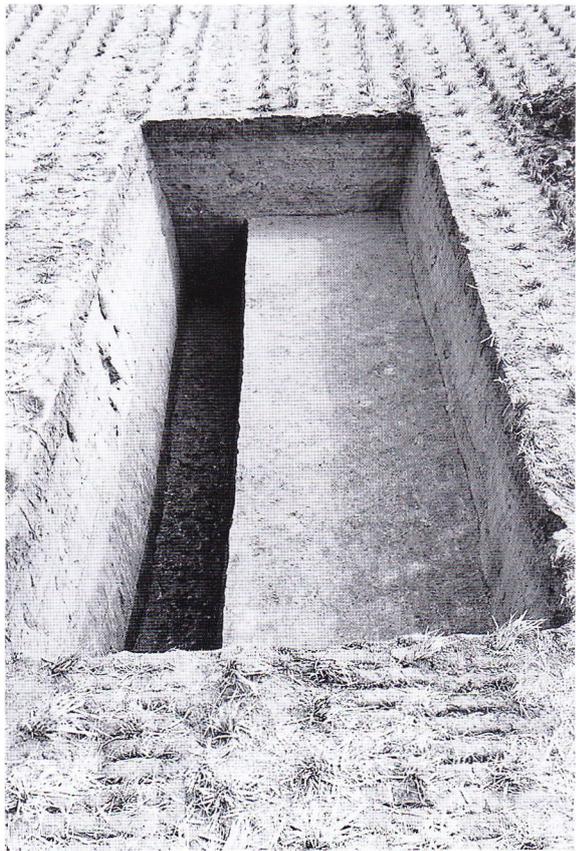
第4区 全景 (北から)



第4区 全景 (南から)

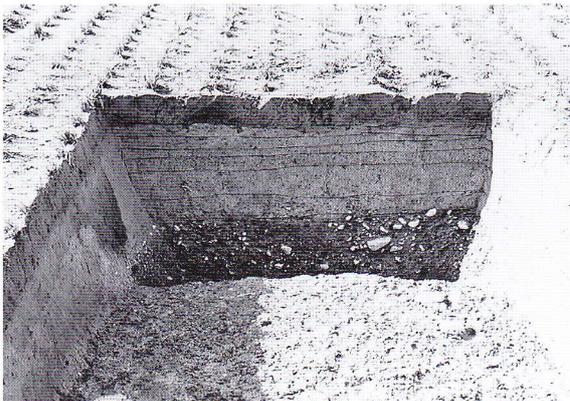


第5区 全景 (東から)

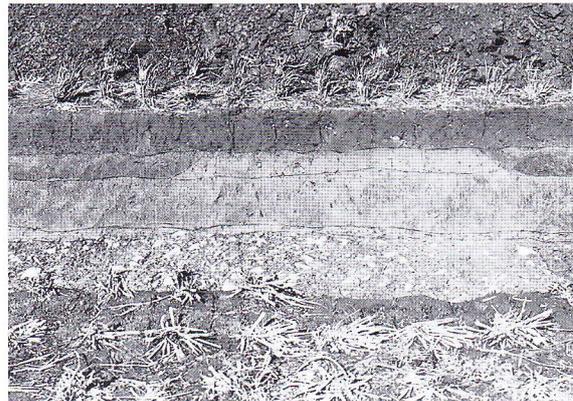


第5区 全景 (西から)

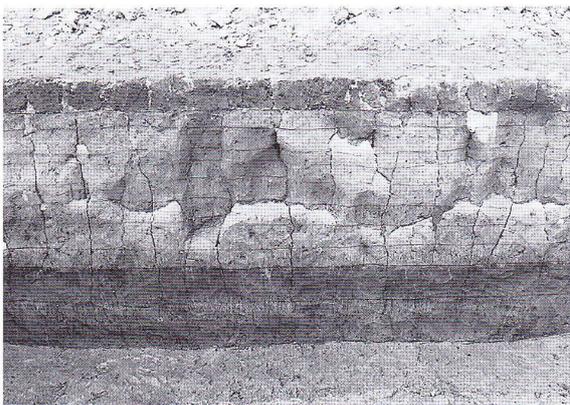
図版 8
川辺遺跡第14次確認調査



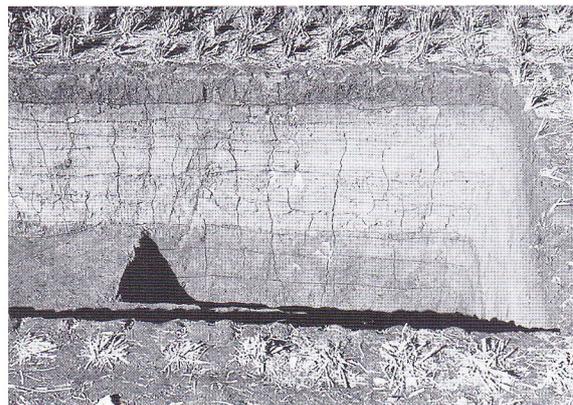
第1区 西壁土層堆積状況（東から）



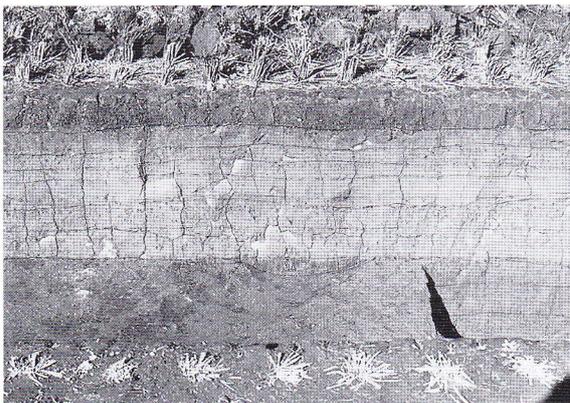
第1区 北壁中央部土層堆積状況（南から）



第2区 北壁中央部土層堆積状況（南から）



第3区 北壁東端部土層堆積状況（南から）



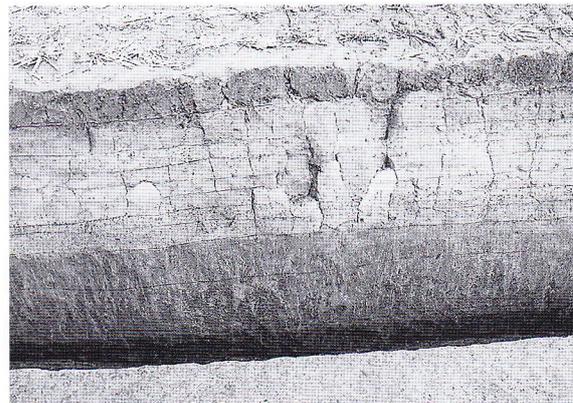
第3区 北壁中央部土層堆積状況（南から）



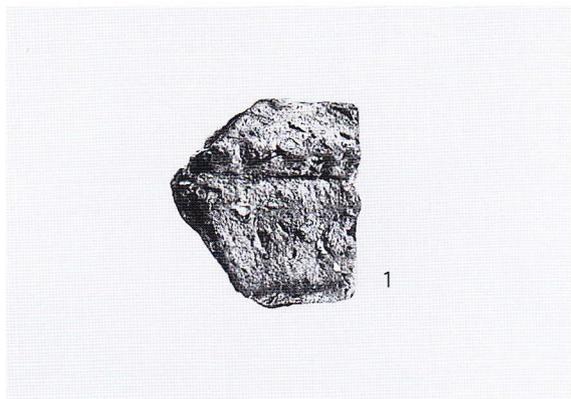
第4区 東壁北端部土層堆積状況（西から）



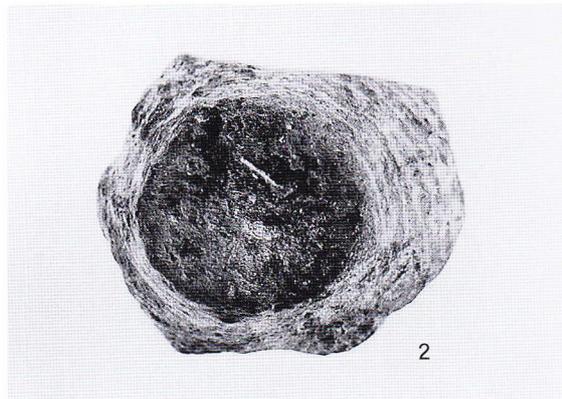
第4区 東壁南端部土層堆積状況（西から）



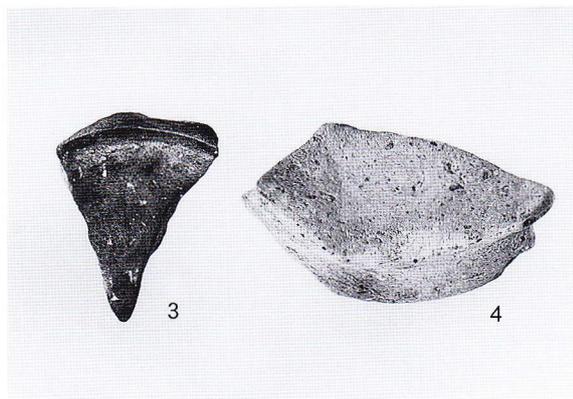
第5区 北壁中央部土層堆積状況（南から）



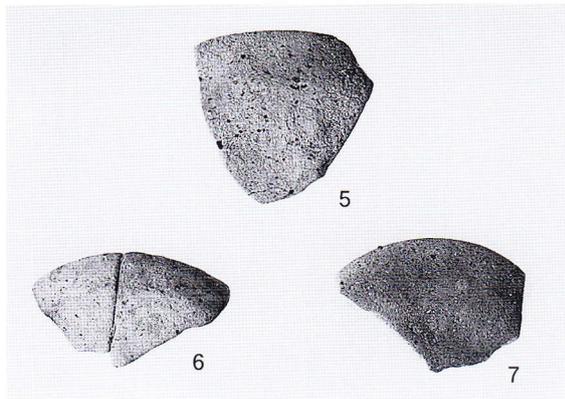
縄文土器 (1 深鉢)



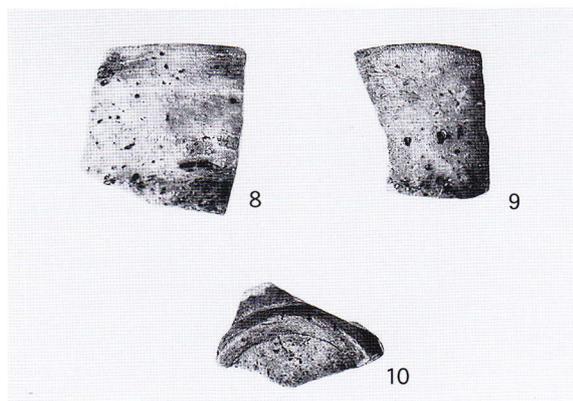
土師器 (2 底部)



黒色土器 (3 椀)、中世土師器 (4 椀?)



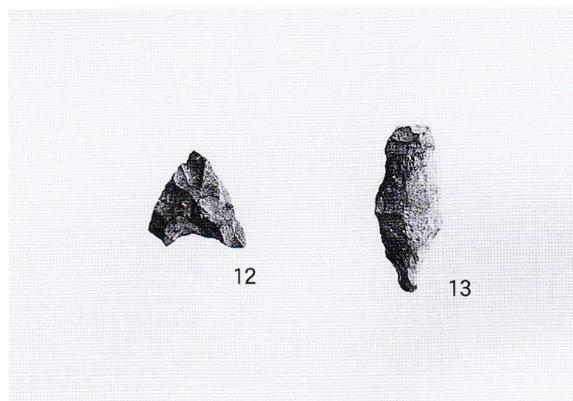
中世土師器 (5~7 皿)



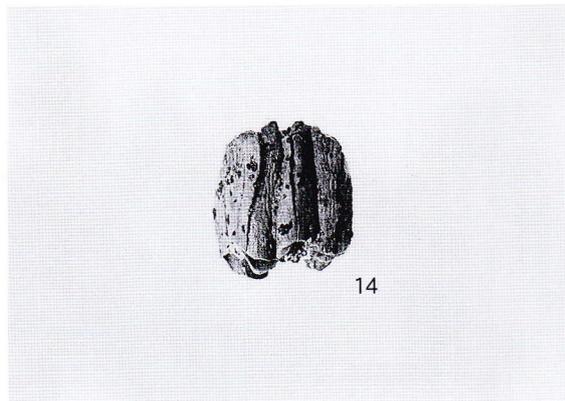
瓦器 (8~10 椀)



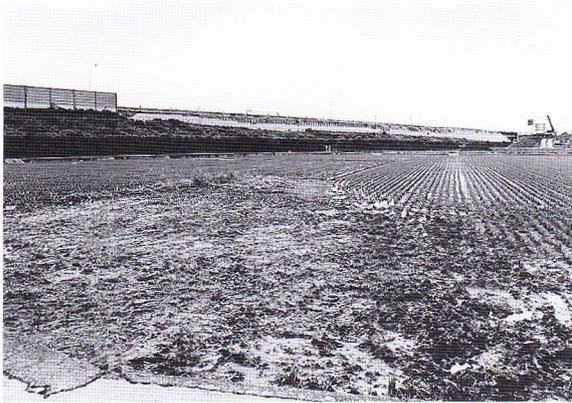
瓦 (11 平瓦凸面)



石器 (12・13 石鎌)



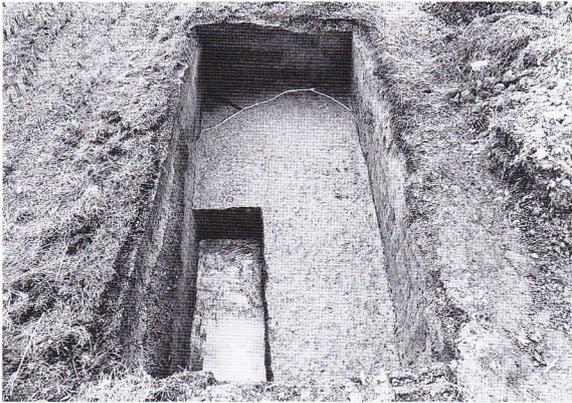
自然遺物 (14 馬歯)



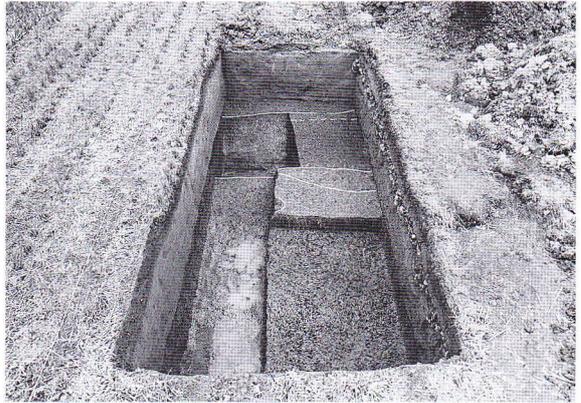
調査前の状況（北から）



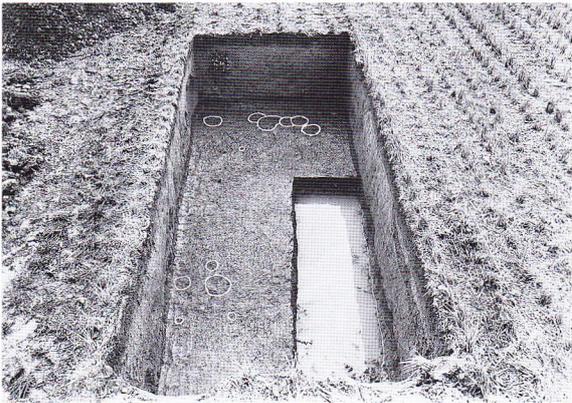
調査前の状況（南から）



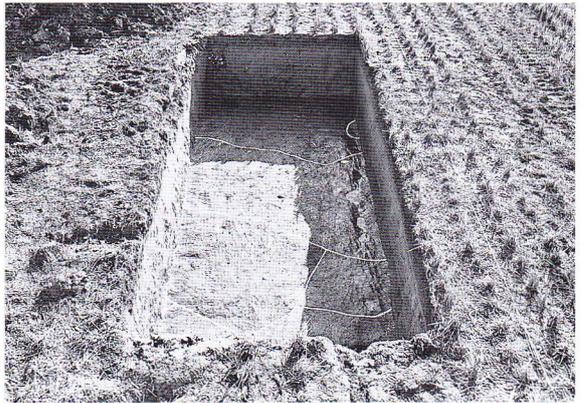
第1区 全景（北から）



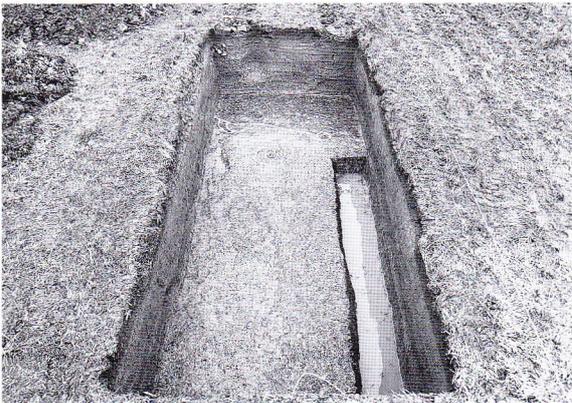
第2区 全景（南から）



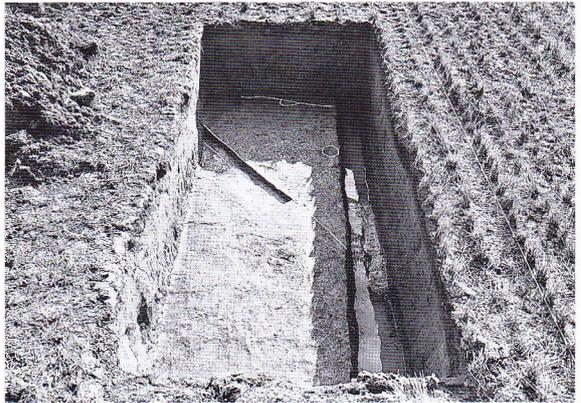
第4区 全景（北から）



第6区 全景（北から）



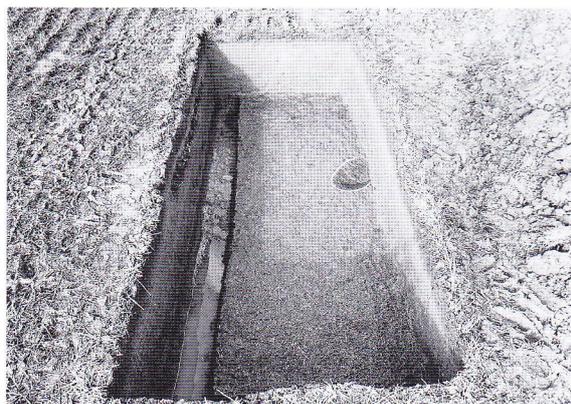
第7区 全景（南から）



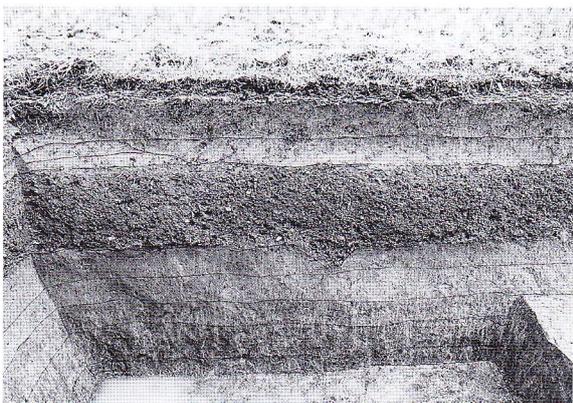
第8区 全景（北から）



第9区 全景 (北から)



第10区 全景 (南から)



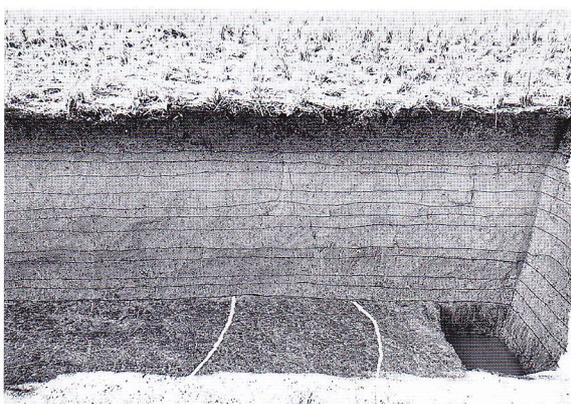
第1区東壁X=-192642m付近土層堆積状況(西から)



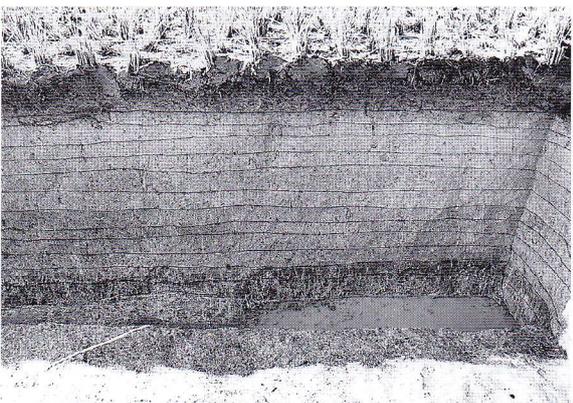
第3区東壁X=-192659m付近土層堆積状況(西から)



第5区東壁X=-192677m付近土層堆積状況(西から)



第6区西壁X=-192683m付近土層堆積状況(東から)



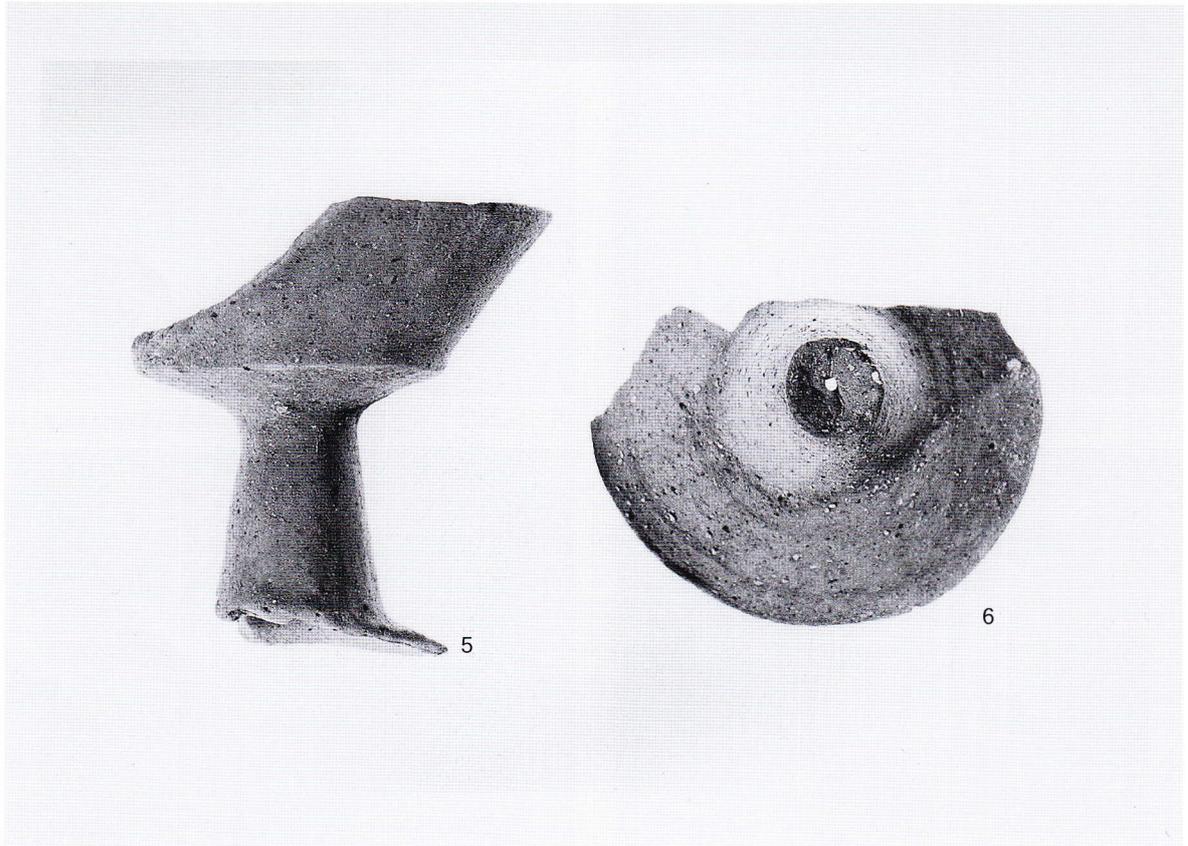
第8区西壁X=-192701m付近土層堆積状況(東から)



第10区西壁X=-192719m付近土層堆積状況(東から)



土師器（壺1・2、甕3・4、鉢7）、製塩土器（脚台Ⅲ式8・9）



土師器（高杯5・6）



調査地遠景 (南から)



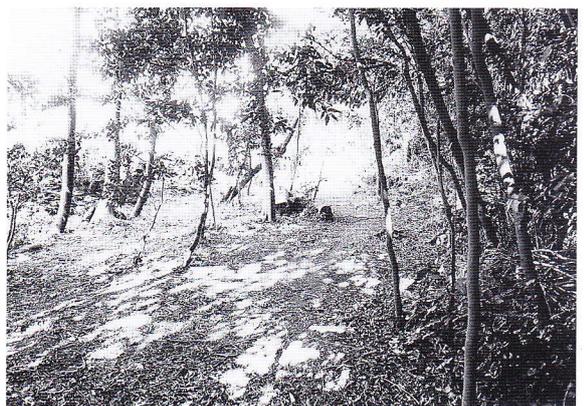
調査前の状況 (SV-1・2 北西から)



調査前の状況 (SV-2 南東から)



調査前の状況 (第1～5区 北から)



調査前の状況 (第1～4区 南から)



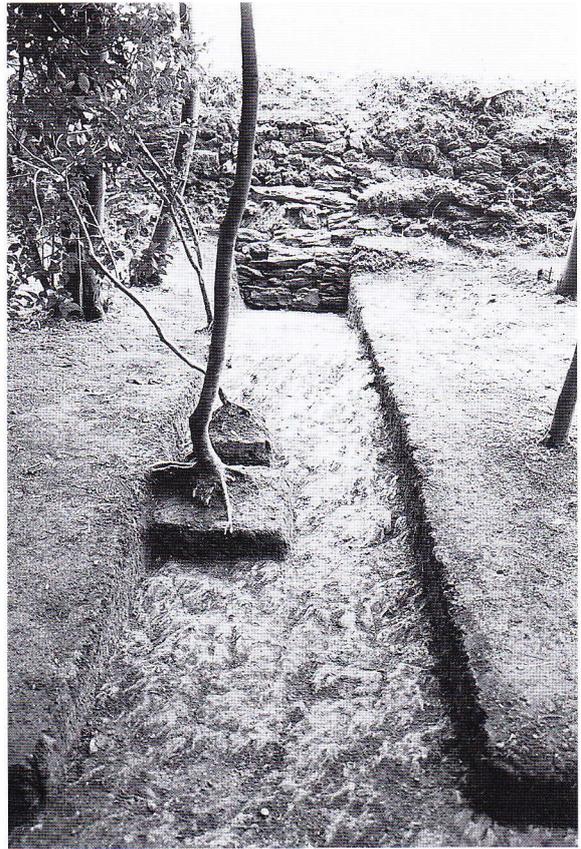
第1区 全景（東から）



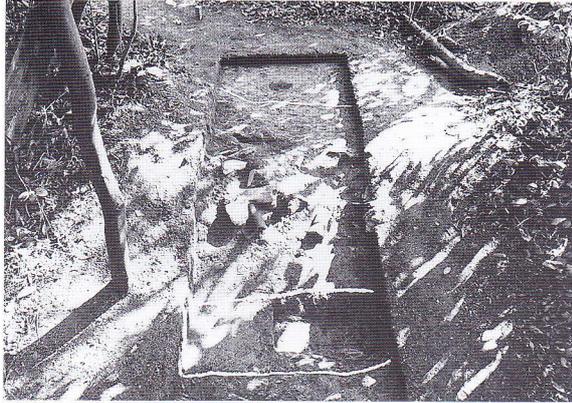
第2区 全景（北西から）



第3区 全景（南西から）



第4区 全景（北東から）



第5区 全景 (北から)



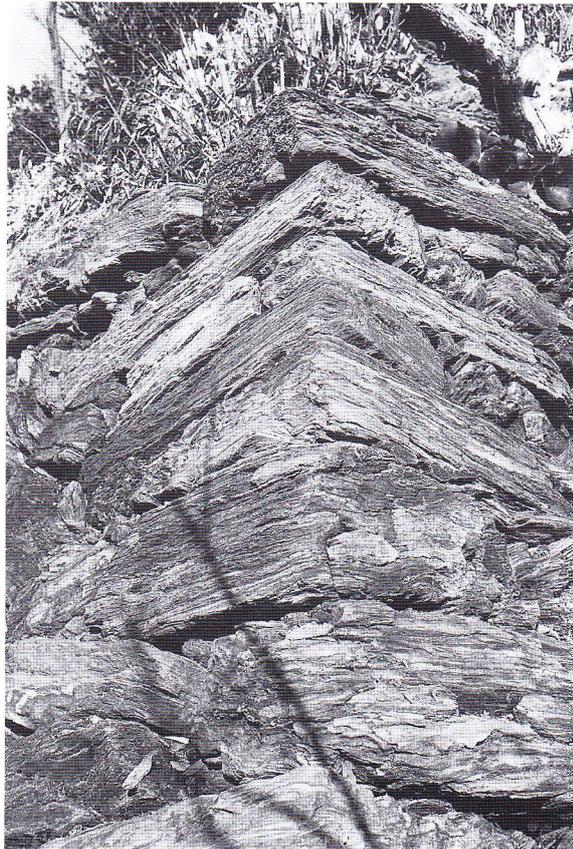
SV-1 西面石垣・SV-2 土塁 (X=-200105m以南 北西から)



SV-1 裏込め検出状況 (第1区西端 北から)



SV-1 南面石垣 南西隅角部 (南東から)



SV-1 南西隅角部 (南から)



SV-1 西面石垣 南西隅角部 (北西から)



SV-2 東面石垣・土塁 (X=-200100m以南 北から)



SV-2 東面石垣 (第4区西端、東から)



SV-2 南東隅角部 (東から)



SV-2 南面石垣・SV-1 南西隅角部 (南東から)



SV-2 北面石垣・土塁 (北から)



第3区 P-1 (南から)



第3区 P-2 (北から)



第5区 SD-1 (西から)



第5区西壁 SD-1 土層堆積状況 (東から)



第5区 土塁 (北から)



第5区西壁 土塁付近土層堆積状況 (東から)



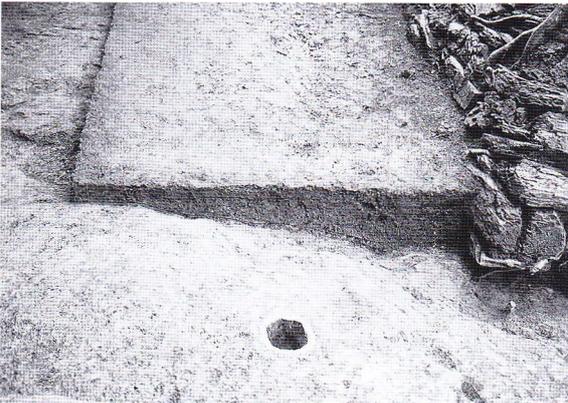
第1区東端部 岩盤成形状況 (南から)



第3区東端部 岩盤成形状況 (北から)



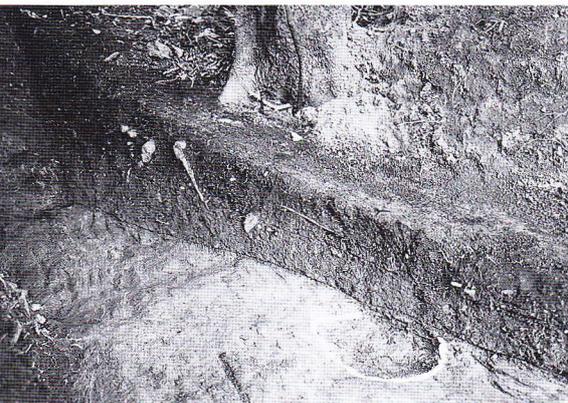
第1区 サブトレンチ南壁土層堆積状況(北から)



第1区南壁 Y=-79203m付近土層堆積状況(北から)



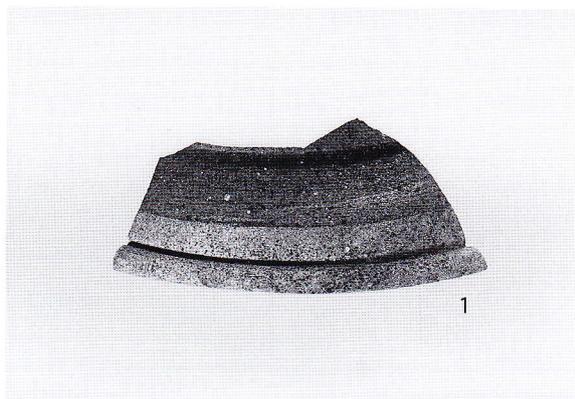
第2区西壁 X=-200108m付近土層堆積状況(東から)



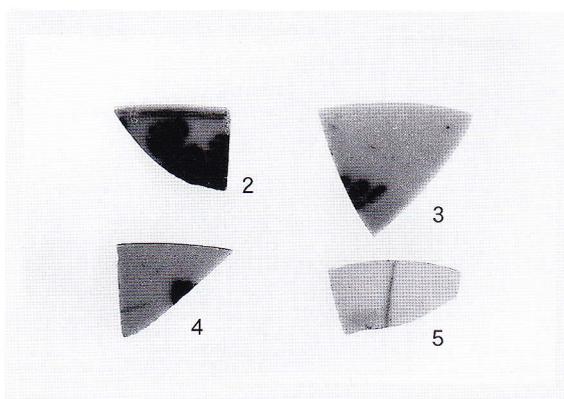
第3区南壁 Y=-79192m付近土層堆積状況(北西から)



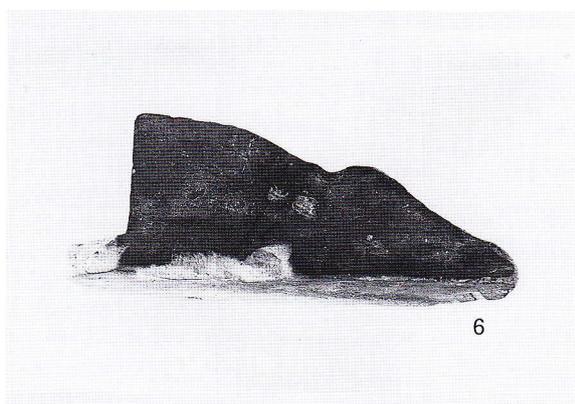
第4区北壁 Y=-79200m付近土層堆積状況(南東から)



産地不明陶器 (急須蓋 1)



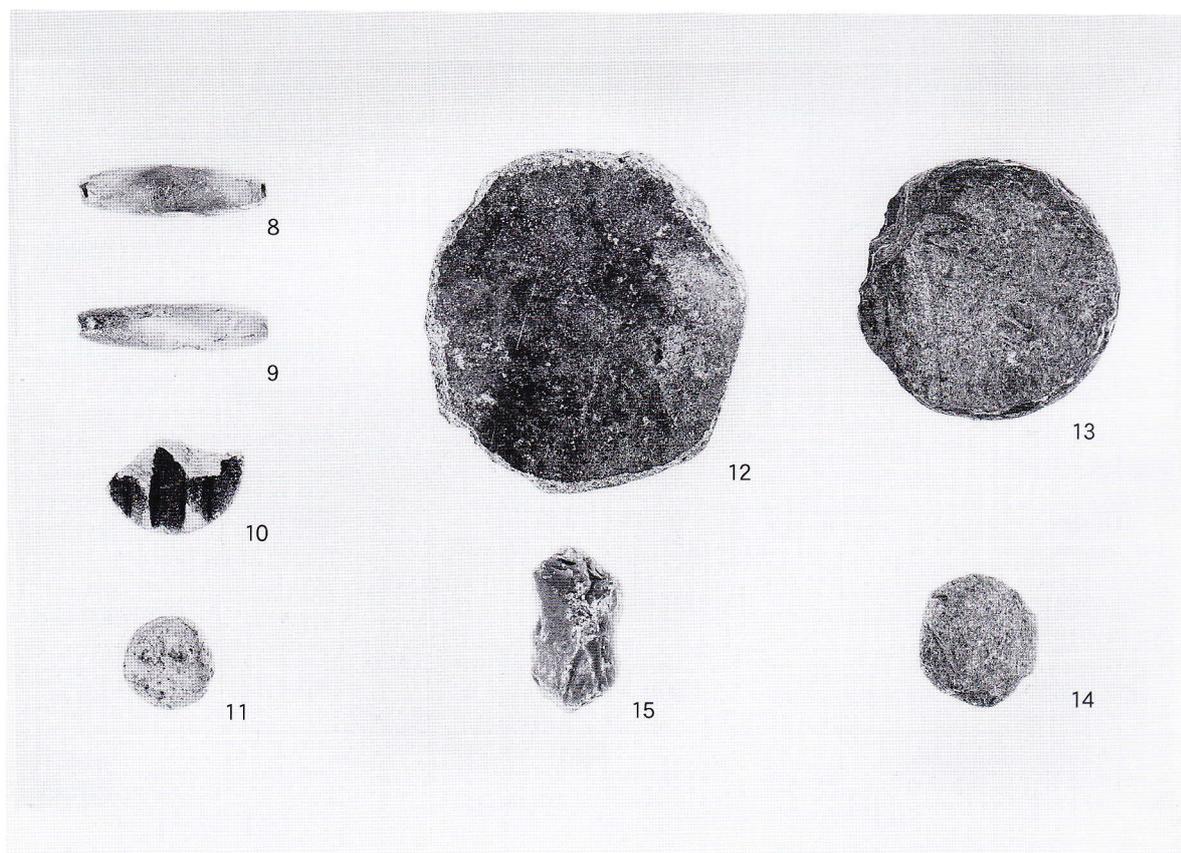
瀬戸・美濃系磁器 (染付碗 2・3、白磁小杯 5)、肥前系磁器 (染付碗 4)



瓦 (軒先瓦 6)



瓦 (棧瓦 7)



土製品 (管状土錘 8・9、土人形 10、泥面子 11)、円板状品 (瓦転用品 12、石製品 13・14)、石製品 (火打石 15)

報告書抄録

ふりがな	わかやましなしいせきはつくつちようさがいほう
書名	和歌山市内遺跡発掘調査概報
副書名	平成21年度
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	大木要 井馬好英 藤藪勝則
編集機関	和歌山市教育委員会
所在地	〒640-8511 和歌山県和歌山市七番丁23 TEL 073-432-0001
発行年月日	西暦2011年3月18日

所収遺跡名 <small>ふりがな</small>	所在地 <small>ふりがな</small>	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こうざきいせき 神前遺跡 <small>(調査一覧24、市教委①)</small>	わかやまけんわかやましこうざき 和歌山県和歌山市神前	3020150	307	34° 12′ 25″	135° 12′ 40″	20090608	51.45	開発に伴う 遺跡確認
きのもといちいせき 木ノ本Ⅰ遺跡 <small>(調査一覧31、市教委②)</small>	わかやまけんわかやましにのしょう 和歌山県和歌山市西庄	3020150	40	34° 15′ 30″	135° 07′ 18″	20090704	3	開発に伴う 遺跡確認
ふちゅうよんいせき 府中Ⅳ遺跡 <small>(調査一覧32、市教委③)</small>	わかやまけんわかやましふちゅう 和歌山県和歌山市府中	3020150	398	34° 15′ 46″	135° 13′ 39″	20090709	2.2	開発に伴う 遺跡確認
かわなべいせき 川辺遺跡 <small>(調査一覧42、市教委④)</small>	わかやまけんわかやましかわなべ 和歌山県和歌山市川辺	3020150	145	34° 15′ 30″	135° 15′ 51″	20090825	8.75	開発に伴う 遺跡確認
にしたいいせき 西田井遺跡 <small>(調査一覧43、市教委⑤)</small>	わかやまけんわかやましにしたいい 和歌山県和歌山市西田井	3020150	388	34° 15′ 10″	135° 14′ 30″	20090914	21.2	開発に伴う 遺跡確認
なるかみごいせき 鳴神Ⅴ遺跡 <small>(調査一覧46、市教委⑥)</small>	わかやまけんわかやましあきづき 和歌山県和歌山市秋月	3020150	318	34° 13′ 44″	135° 12′ 29″	20090917	24.51	開発に伴う 遺跡確認
いわせいせき 岩橋遺跡 <small>(調査一覧49、市教委⑦)</small>	わかやまけんわかやましいわせい 和歌山県和歌山市岩橋	3020150	321	34° 13′ 54″	135° 13′ 53″	20090928	7.78	開発に伴う 遺跡確認
あさひせきそうしゆつどち 朝日石槍出土地 <small>(調査一覧50、市教委⑧)</small>	わかやまけんわかやましあさひ 和歌山県和歌山市朝日	3020150	370	34° 15′ 35″	135° 07′ 22″	20091005	25.75	開発に伴う 遺跡確認
きのもといちいせき 木ノ本Ⅰ遺跡 <small>(調査一覧54、市教委⑨)</small>	わかやまけんわかやましにのしょう 和歌山県和歌山市西庄	3020150	40	34° 15′ 35″	135° 13′ 23″	20091013	30	開発に伴う 遺跡確認
いんべいせき 井辺遺跡 <small>(調査一覧57、市教委⑩)</small>	わかやまけんわかやましこうざき 和歌山県和歌山市神前	3020150	308	34° 12′ 38″	135° 12′ 20″	20091028	24.3	開発に伴う 遺跡確認
きのもとにいせき 木ノ本Ⅱ遺跡 <small>(調査一覧59、市教委⑪)</small>	わかやまけんわかやましきのもと 和歌山県和歌山市木ノ本	3020150	41	34° 13′ 36″	135° 07′ 34″	20091102	27.47	開発に伴う 遺跡確認
かわなべいせき 川辺遺跡 <small>(調査一覧60、市教委④)</small>	わかやまけんわかやましかわなべ 和歌山県和歌山市川辺	3020150	145	34° 15′ 29″	135° 15′ 50″	20091104	10	開発に伴う 遺跡確認
せきどいせき 関戸遺跡 <small>(調査一覧61、市教委⑫)</small>	わかやまけんわかやましせきど 和歌山県和歌山市関戸	3020150	334	34° 11′ 36″	135° 09′ 54″	20091105・ 20091106	14.4	開発に伴う 遺跡確認
こうざきにせき 神前Ⅱ遺跡 <small>(調査一覧63、市教委⑬)</small>	わかやまけんわかやましありえ 和歌山県和歌山市有家	3020150	383	34° 12′ 51″	135° 12′ 18″	20091112	15.75	開発に伴う 遺跡確認
いそわきいせき 磯脇遺跡 <small>(調査一覧69、市教委⑭)</small>	わかやまけんわかやましもとわき 和歌山県和歌山市本脇	3020150	37	34° 15′ 31″	135° 06′ 05″	20091202	9.24	開発に伴う 遺跡確認
いわせいせき 岩橋遺跡 <small>(調査一覧70、市教委⑯)</small>	わかやまけんわかやましいわせい 和歌山県和歌山市岩橋	3020150	321	34° 13′ 55″	135° 13′ 53″	20091204	10	遺跡確認

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なるかみごいせき 鳴神Ⅴ遺跡 (調査一覧79、市教委⑤)	わかやまけんわかやましあきづき 和歌山県和歌山市秋月	3020150	318	34° 13′ 34″	135° 12′ 30″	20091221～ 20091224	45.61	開発に伴う 遺跡確認
きのもとにいせき 木ノ本Ⅱ遺跡 (調査一覧82、市教委⑥)	わかやまけんわかやましきのもと 和歌山県和歌山市木ノ本	3020150	41	34° 15′ 39″	135° 07′ 28″	20100104	4	開発に伴う 遺跡確認
にしたいいせき 西田井遺跡 (調査一覧83、市教委⑦)	わかやまけんわかやましにした 和歌山県和歌山市西田井	3020150	388	34° 15′ 09″	135° 14′ 16″	20100107・ 20100108	47.73	開発に伴う 遺跡確認
いわせせんづかこふんぐん 岩橋千塚古墳群 (調査一覧88、市教委⑧)	わかやまけんわかやましいわせ 和歌山県和歌山市岩橋	3020150	185	34° 13′ 27″	135° 13′ 42″	20100122	15.12	開発に伴う 遺跡確認
いのくちいせき 井ノ口遺跡 (調査一覧93、市教委⑨)	わかやまけんわかやましわさせきど 和歌山県和歌山市和佐関戸	3020150	389	34° 14′ 10″	135° 15′ 24″	20100127	9.98	開発に伴う 遺跡確認
いわせいせき 岩橋遺跡 (調査一覧95、市教委⑩)	わかやまけんわかやましいわせ 和歌山県和歌山市岩橋	3020150	321	34° 13′ 55″	135° 13′ 53″	20100129	7.35	開発に伴う 遺跡確認
にしたいいせき 西田井遺跡 (調査一覧99、市教委⑪)	わかやまけんわかやましにした 和歌山県和歌山市西田井	3020150	388	34° 15′ 09″	135° 14′ 16″	20100210	26.7	開発に伴う 遺跡確認
のうがわはいじあと 直川廃寺跡 (調査一覧109、市教委⑫)	わかやまけんわかやましのうがわ 和歌山県和歌山市直川	3020150	90	34° 15′ 40″	135° 13′ 00″	20100224	6.11	開発に伴う 遺跡確認
なるかみにいせき 鳴神Ⅱ遺跡 (調査一覧114、市教委⑬)	わかやまけんわかやましなるかみ 和歌山県和歌山市鳴神	3020150	314	34° 13′ 21″	135° 12′ 58″	20100308	4.48	開発に伴う 遺跡確認
よしだいせき 吉田遺跡 (調査一覧115、市教委⑭)	わかやまけんわかやましひらおか 和歌山県和歌山市平岡	3020150	393	34° 15′ 59″	135° 16′ 41″	20100310	9.68	開発に伴う 遺跡確認
こうざきいせき 神前遺跡 (調査一覧116、市教委⑮)	わかやまけんわかやましこうざき 和歌山県和歌山市神前	3020150	307	34° 12′ 36″	135° 12′ 41″	20100311	8.4	開発に伴う 遺跡確認
きのもといちいせき 木ノ本Ⅰ遺跡 (調査一覧123、市教委⑯)	わかやまけんわかやましにのしょう 和歌山県和歌山市西庄	3020150	40	34° 15′ 36″	135° 07′ 18″	20100329	14.5	開発に伴う 遺跡確認
むそたいせき 六十谷遺跡 (調査一覧7、財団①)	わかやまけんわかやましむそた 和歌山県和歌山市六十谷	3020150	84	34° 15′ 31″	135° 12′ 33″	20090416～ 20090511	43	開発に伴う 遺跡確認
かわなべいせき 川辺遺跡 (調査一覧56、財団②)	わかやまけんわかやましなかつじひのべ 和歌山県和歌山市中筋日延	3020150	145	34° 15′ 42″	135° 16′ 24″	20091019～ 20091120	50	開発に伴う 遺跡確認
たやいせき 田屋遺跡 (調査一覧64、財団③)	わかやまけんわかやましのうがわ 和歌山県和歌山市直川	3020150	93	34° 15′ 26″	135° 13′ 26″	20091119～ 20091222	100	開発に伴う 遺跡確認
さいかざきだいはあと 雑賀崎台場跡 (調査一覧84、財団④)	わかやまけんわかやましさいかざき 和歌山県和歌山市雑賀崎	3020150	425	34° 11′ 24″	135° 08′ 33″	20100113～ 20100205	39.3	遺跡確認

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
神前遺跡 (調査一覧24、市教委①)	散布地	弥生時代	落ち込み	弥生土器	
要 約	弥生時代の落ち込みを検出。弥生時代前期～中期後半の遺物が出土。				
木ノ本Ⅰ遺跡 (調査一覧31、市教委②)	散布地		なし	中世土師器	
要 約	中世土師器小片出土。中世以前は湿地状の地形環境であった状況を確認。				
府中Ⅳ遺跡 (調査一覧32、市教委③)	集落跡	古墳時代 奈良時代 鎌倉時代	ピット・落ち込み	土師器	
要 約	古墳時代前期～鎌倉時代のピット・落ち込みを確認。				
川辺遺跡 (調査一覧42、市教委④)	集落跡		なし	中世土師器・瓦器	
要 約	中世土師器・瓦器小片出土。周辺に遺構が展開している可能性は低い。				
西田井遺跡 (調査一覧43、市教委⑤)	集落跡		落ち込み	中世土師器・瓦器	
要 約	自然流路の可能性のある落ち込みを確認。				
鳴神Ⅴ遺跡 (調査一覧46、市教委⑥)	散布地	鎌倉時代～ 近世	土坑	土師器・中世土師器・瓦器	
要 約	鎌倉時代～近世の土坑を確認。				
岩橋遺跡 (調査一覧49、市教委⑦)	散布地	古墳時代 奈良時代	なし	土師器・須恵器	
要 約	奈良時代の包含層、弥生時代後期後半から古墳時代初頭の自然流路の堆積を確認。				
朝日石榿出土地 (調査一覧50、市教委⑧)	出土地		なし	中世土師器	
要 約	出土した弥生時代の石榿は、後世の混入であった可能性を想定。				
木ノ本Ⅰ遺跡 (調査一覧54、市教委⑨)	散布地		杭跡	須恵器・中世土師器・瓦器	
要 約	時期不明の杭跡1基検出。				
井辺遺跡 (調査一覧57、市教委⑩)	散布地	奈良時代	溝	土師器・瓦器	
要 約	奈良時代の南北溝を検出。				
木ノ本Ⅱ遺跡 (調査一覧59、市教委⑪)	散布地	中世	溝・落ち込み	中世平・丸瓦	
要 約	中世の溝・落ち込みを検出。				
川辺遺跡 (調査一覧60、市教委⑫)	集落跡		なし	瓦器	
要 約	瓦器小片出土。周辺に遺構が展開している可能性は低い。				
関戸遺跡 (調査一覧61、市教委⑬)	散布地	弥生時代 奈良時代 平安時代 鎌倉時代 室町時代	ピット・溝・土坑	弥生土器・須恵器・中世土師器・黒色土器・瓦器・国産陶器・輸入陶磁器・土製品	奈良時代～室町時代の遺構面を確認。
要 約	平安時代～鎌倉時代のピット・溝・土坑を検出。				
神前Ⅱ遺跡 (調査一覧68、市教委⑭)	散布地	弥生時代	土坑	弥生土器・瓦器	
要 約	弥生時代中期後半の土坑を検出。				
磯脇遺跡 (調査一覧69、市教委⑮)	散布地		なし	須恵器・黒色土器・中世土師器・近世陶磁器	
要 約	古代・中世・近世の遺物を含む包含層を確認した。				
岩橋遺跡 (調査一覧70、市教委⑯)	散布地	古墳時代 奈良時代	なし	土師器・須恵器	
要 約	古墳時代初頭の土師器が多数出土。				

所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鳴神Ⅴ遺跡 (調査一覧79、市教委⑤)	散布地	奈良時代～ 鎌倉時代	ピット・溝・土 坑・落ち込み	須恵器・土師器・黒色土 器・瓦器・中世土師器	
要 約	奈良時代～鎌倉時代の遺構面を確認。				
木ノ本Ⅱ遺跡 (調査一覧82、市教委⑥)	散布地	中世	落ち込み	中世土師器・瓦器	
要 約	中世の落ち込みを検出。				
西田井遺跡 (調査一覧83、市教委⑦)	集落跡	古墳時代～ 中世	ピット・溝・土 坑・落ち込み	土師器・須恵器・中世土師 器・瓦器	
要 約	古墳時代～中世の遺構面を確認。				
岩橋千塚古墳群 (調査一覧88、市教委⑧)	古墳		なし	なし	
要 約	削平をうけ、遺構なし。				
井ノ口遺跡 (調査一覧93、市教委⑨)	散布地		なし	土師器	
要 約	対象地は旧流路内に含まれる可能性を想定。				
岩橋遺跡 (調査一覧95、市教委⑩)	散布地	古墳時代 弥生時代	自然流路	弥生土器・土師器・須恵器	
要 約	弥生時代後期後半から古墳時代初頭の自然流路を検出。				
西田井遺跡 (調査一覧99、市教委⑪)	集落跡		自然流路	土師器	
要 約	自然流路を2条確認。				
直川廃寺跡 (調査一覧109、市教委⑫)	寺院跡		なし	なし	
要 約	削平をうけ、遺構・遺物なし。				
鳴神Ⅱ遺跡 (調査一覧114、市教委⑬)	用水路跡	飛鳥時代 奈良時代	溝	土師器・須恵器・カマド	
要 約	飛鳥時代の溝を検出。溝内より土師器・カマドなど多量に出土。				
吉田遺跡 (調査一覧115、市教委⑭)	散布地		なし	土師器	
要 約	対象地は旧流路内に含まれる可能性を想定。				
神前遺跡 (調査一覧116、市教委⑮)	散布地		なし	土師器	
要 約	湿地状の堆積を確認。				
木ノ本Ⅰ遺跡 (調査一覧123、市教委⑯)	散布地		なし	中世土師器・瓦器	
要 約	湿地状の堆積を確認。				
六十谷遺跡 (調査一覧7、財団①)	散布地	弥生時代 古墳時代 鎌倉時代 江戸時代	落ち込み・溝・土 坑・ピット	弥生土器・土師器・須恵 器・製塩土器・黒色土器・ 緑釉陶器・瓦器・中世土師 器・中国製陶磁器・銭貨等	弥生時代前期～江戸時代 までの各時代の遺物が出 土。
要 約	弥生時代のピット、古墳時代の溝・ピット、鎌倉時代の整地層及び溝等を検出。				
川辺遺跡 (調査一覧56、財団②)	散布地	古墳時代 奈良時代	ピット・溝	縄文土器・土師器・須恵 器・黒色土器・瓦器・中世 土師器・陶磁器・石器等	遺跡の北東部において遺 構を確認。
要 約	古墳時代～奈良時代の遺構面において溝・ピットを検出。				
田屋遺跡 (調査一覧64、財団③)	集落跡	古墳時代 平安時代	堅穴建物・溝・土 坑等	弥生土器・土師器・製塩土 器・須恵器・瓦器・中世須 恵器・中世土師器・石器等	古墳時代前期を中心とす る遺構群を確認。
要 約	古墳時代前期の堅穴建物・溝・土坑、平安時代のピットを検出。				
雑賀崎台場跡 (調査一覧84、財団④)	砲台跡	江戸時代	石垣・土塁・溝・ ピット	近世土師器・近世瓦質土 器・国産陶磁器・瓦・土製 品・石器・金属器	台場跡に伴う防衛的施設 の内容を確認。
要 約	江戸時代末期の土塁・石垣で囲まれた防衛施設の調査を実施。石垣の構造や防衛施設内の敷地の様相を確認。				

平成23年3月18日

和歌山市内遺跡発掘調査概報

－平成21年度－

発行 和歌山市教育委員会

(和歌山市七番丁23)

印刷 株式会社ウイング

© 和歌山市教育委員会 2011